ブレイズソード・レックレス

陣鳴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブレイズソード・レックレス

【Ｎコード】
Ｎ３８８０Ｖ

【作者名】
陣鳴

【あらすじ】
弱きが強きを凌駕する――その瞬間は今ここに。
生粋の猪突猛進娘エリス・エーツェルは世界の支配者『モンスター』に戦いを挑む旅に出た。
剣と炎と不屈を武器に、目指すは『キング』と呼ばれるその頂点。
全九章。

序章「燃えろ！　オーバーフレア」（1）

「イカれてるぜ、この野郎！」
激戦の剣林飛び交う最中、『モンスター』のひとりが口汚く罵った。
「ぬかせ！　あたしが野郎に見えるてめぇの目のほうがイカれてんだよ！」
正面で剣を受ける少女が苛烈に言い返す。
「このイヌ野郎がっ！」
言葉に呼応するように、後方から援護の矢が飛んできた。それは彼女の前に構える『モンスター』の右目に直撃し、痛みに悶絶させる。
がら空きになった胴めがけて斬りかかる少女の剣が、その時、ごうごうたる炎を刃にまとった。
なにもないところから生み出されたかのように。
「オーバーフレア！」
炎の剣が、目の前の敵をひと断ちする。斬り裂いた箇所から火が燃え移り、たちまち『モンスター』は火だるまと化した。
断末魔が轟く。

旅人、リフィク・セントランが目撃したのはそんな光景だった。
神官然とした白いローブにマント。二十代なかばという実年齢よりも下に見られがちな童顔が、呆気に取られたように口を半開いている。
旅歩きの道中、彼は辺境の村『フィオネイラ』へと立ち寄った。
荒野と草原のはざまに位置する小じんまりとした村である。
そんな村の入り口で、着いた早々それに出くわしてしまったのだ。

人間と『モンスター』の戦いに。
様々なところを旅してきたリフィクにしてみても、それは驚きを禁じ得ない光景であった。人間がモンスターに歯向かうなどというのは。
二十人ほどの人間たちは、ざっと見る限り大人の男ばかりである。恐らくこの村の住人なのだろう。使い古された『レザーアーマー』を身に、剣や槍、弓矢を手に立ち向かっている。
どことなく山賊のようだ、とリフィクは一瞬だけ呑気に思った。対する『モンスター』たちは、全身が銀色の毛で覆われ、前方に尖った口元から牙がのぞき、頭頂の両側に三角形の耳がピンと立っているといった風貌。
ちょうど狼に似た種族のようである。
数は人間たちより少ないだろう。一様に鉄製の胸鎧をつけ、やはり剣や槍などを手にしている。
数の上では互角に見えるが、戦況は人間たちが劣勢のようだった。無理もない。一般的に人間よりも『モンスター』のほうが体も大きく力も強いからだ。現にぱっと見ただけでも、その狼族は戦っている男たちの一・五倍はある。
元々より不利な勝負。
人間たちも互いに協力し合って奮戦しているが、それもどこまで保つのかわからなかった。
「……どうしましょう……」
リフィクはつい、戸惑いを口にしてしまった。
迷っているのだ。
亜人、獣人、魔人、化け物。地域によって差異はあるものの、通俗的な呼び名は『モンスター』。彼らは、この世界の支配者なのだ。圧倒的な力を振りかざす弱肉強食の体現者たち。彼らは人間を襲い、蹂躙し、そして文字通りに食らう。
リフィクも当然、逆らおうとは考えもしなかった。
しかし目の前の人間たちは、戦っているのだ。そんな常識なども

のともしていないように。
そして敗れようとしている。
そんな彼らを、リフィクは見殺しにはできなかった。見て見ぬふりなど。決して。
だから迷っているのだ。手を出すべきか、出さざるべきかを。
その時。
「ぐあああっ！」
人間たちのあいだから、大きなうめき声が上がった。
モンスターの振るった得物が直撃し、彼らのひとりが傷を受けたのだ。しかも、かなり深い。遠くから見ているリフィクでさえもそれが致命傷だとわかった。
おびただしい量の血が地面にまき散らされる。
その凄惨さによる衝撃が、リフィクの背中を後押しした。
彼の体がほのかに輝く。
「……フラッシュジャベリン！」
そして。リフィクの周囲から、無数の光がまるで矢のように射ち出された。
それは空を駆け、モンスターの陣営へと襲いかかる。おおよそ半数を、その光が貫いた。倒れるモンスターたち。
突然の乱入による動揺か、両陣営の動きがぴたりと止まる。
そこから最も早く動いたのは、たくましい男たちの中に混ざった、ただひとりの少女だった。
年の頃は十代後半。外にハネた短い茶髪に赤いハチマキを巻いた、勇ましい顔つき。
「オーバーフレアぁっ！」
彼女の振るう剣から炎が生まれ、モンスターの一体を斬り倒した。
それが合図となったように、再び戦鐘がかき鳴らされる。
しかしモンスターたちは、リフィクの攻撃によって戦力を半減させられていた。
数での圧倒。戦況は見るまに反転していった。

「……次はこうはいかん！　覚えていろっ！」
やがて既視感にまみれた捨て台詞を吐き、わずかに残ったモンスターが誰からともなく退却していく。
それは村人側の、ひとまずの勝利を意味していた。
リフィクはほっと胸をなで下ろし、すぐさま彼らのもとへと駆け出した。

「誰が覚えててやるかっ！　顔の見分けなんかつかねぇよっ！」
律儀なのか無粋なのか、わざわざ捨て台詞に言い返す少女がいる。
名はエリス・エーツェル。
退散する『モンスター』たちをにらみつけてはいたが、
「しっかりしろ、レクト！」
という仲間の叫びを聞き、背後へ振り返った。
そして息せききるように走り出す。
モンスターの攻撃によって大ダメージを受けてしまったことは、戦闘中も目に入っていた。
胸元に真っ赤に染めた青年、レクトは仰向けに倒れている。その周りを彼やエリスと同じ『自警団』の面々が取り囲んでいた。
他のみんなも大なり小なり傷を負っているが、命に関わるほどの重傷は彼だけのようであった。
すでに顔からは血の気が引き、呼吸も弱々しくなっている。
「レクト！　死んだら承知しねぇぞ！」
「早く医者つれてこい！」
「止血だ！　止血！」
仲間たちは一様に、自分のケガなど後回しにして彼の処置に奔走していた。
とはいえ。彼は素人目に見てももう手遅れであった。いまわのきわ。血は止まらずどんどんと流れ出てきている。
しかし周囲の仲間たちの表情には、決してあきらめは浮かんでい

なかった。
そんなところへ。
「すみませんっ、通してくださいっ……」
仲間たちの野太い声に紛れて、相反する細い声がなにやら割り込んできた。
エリスは、こんな時にどこの脳天気だ、とそちらを見やる。
声の通りに割り込んできたのは、やはり声の通りに線の細そうな若い男だった。ややウェーブがかった金髪にタレ気味の目。白っぽい、旅人なのか聖職者なのかよくわからない服装をしている。
「すみませんっ……失礼します」
若い男はレクトへ駆け寄ると、大量の血を見てはっとしたように息を呑んだ。
「なんだ、あんたっ！　医者か！？」
仲間のひとりが懐疑の瞳を送る。
「いえ、残念ながら……ご希望にそえられなくて。しかし、彼は僕がなんとかしてみます」
口調はともあれ表情は真剣に、若い男はヒザを落とし、レクトの体へと手をかざした。
「ヒーリングシェア……！」
そしてなにかを呟くと、彼の手がほのかに光を帯び始める。
するとあろうことか、レクトの胸にざっくりと開いていたはずの傷が、見る見るうちに小さくなっていった。
周囲が驚きの声を上げ、どよめく。
やがてレクトの傷口がぴったりと閉じ、彼の顔から苦痛の色が消え去っていた。
「はぁ……」
安堵と疲労を混ぜ合わせたように、若い男が深い息を吐く。
「他に、ケガのある方はこちらに」
驚きのあまり呆然としていた仲間たちであったが、その言葉によって我に返り一斉に歓喜の声を響き渡らせた。

レクトの命を取りとめたことと、今の光景の神秘さを称えるように。

序章（2）

時刻は夜。

村で唯一の食堂兼酒場へ、戦いに勝利した男たちが集まっていた。

並ぶ木製のテーブルでおのおのメシを食らい酒をあおり、上調子に楽しんでいる。

祝杯なのだろう。

時折他の村民たちが顔を出し、「いつもありがとう」や「我が村の誇りだ」などとお礼の言葉を残していった。

リフィク・セントランは、そんな食堂のすみで少々ぐったりした様子でテーブルについていた。

貸してもらった二階の部屋に荷物とマントを置き、今は白いローブを羽織っただけの姿である。そうしていると本当に司祭かなにかのようだった。

そんなリフィクの対面へ、大柄な誰かが腰を下ろす。

「お前さんかい。さっき加勢してくれたのは」

低いしゃがれ声で尋ねたのは、彼らの中でも最年長とおぼしき男性だった。

白髪が頭頂部からすっかりハゲ上がり、年輪のようにシワが刻まれたいかつい顔つき。

孫がいてもおかしくないほどの年齢に見えるが、その筋骨は周囲の誰よりもたくましかった。

「オレはこの『フィアネイラ自警団』の団長、ドート・ファーバーだ。手助け感謝する。家族の命を助けてくれたこともな」

「あ、いえ、その、こちらこそ……」

なにがこちらこそなのか。リフィクは照れた様子で頬を赤らめる。

「僕はリフィク・セントランと申します。……家族と言いますと、先ほどの方はご子息で？」

仲間からレクトと呼ばれれていた青年のことだ。そういえば、居並んだ団員たちに比べてかなり若かったように見えた。

「いんや」

ドートは首を振る。

「けどここの連中はみんな家族みたいなもんだ。だから血がつながってるかどうかなんてのは細かいことなんだよ」

決して細かくはないだろうと内心思ったリフィクだったが、口には出さずあいまいな相づちを打った。

「だいたい兄ちゃんよ、そんなケツがむずがゆくなるような喋り方よせよ。もっと楽にしとけ」

「はぁ……すみません、お気になさらず。性分ですので……」

顔をしかめるドートに対し、リフィクは申し訳なさそうに頭を下げた。

いつしか、ふたりの周りには他の団員たちが集まってきていた。元々リフィクに興味を抱いてはいたが、団長が口火を切るまでは……と遠慮をしていた部分があったのだろう。

「まぁ、んなこたぁどうでもいい」

自分から言い出した口調の件は放り捨てて、ドート団長は本題を切り出す。

「お兄ちゃんよ、あんたナニモンだ？　瀕死のケガをあっというまに治しちまったり、『モンスター』共をよくわかんねぇうちにやっつけちまったり、なんだか妙な……妙なことをしやがる。ありゃなんだ？」

うまく言い表す言葉が見つからなかったのか、語尾がややもつれた。

「ナニモノと言われましても、ただ旅をしている身で。先ほど僕がやったのは……」

リフィクは気を遣うように答えながら、

「……ご存じないんですか？」

おっかなびっくり聞き返した。

「知らねぇから聞いてんだ」
当たり前である。
「そ、そうですよね。すみません」
気を取り直すようにして、リフィクを説明を語り始めた。
「僕が使ったのは『魔術』というもので……自然の中をめぐっている力を借りて、様々なことをやってしまえるという便利なものです。傷を治療したりできるのは『治癒術』と言って少し違うものなのですが、だいたいは同じものと思って頂いて結構です」
なにやら。話の行き先にかすかな不安を覚えて、ドートの眉にシワが増える。
「自然と言いますか、この大地は、人間には測り知れないほどのパワーがあるのです。なのでそんな自然と心を通わし、力を借り受けることで超常の現象を操ることができるんですよ。ただそれには……」
「いや、もういい。オレの言いかたが悪かったみてぇだ」
リフィクの説明が下手すぎたのかドートの理解力が限りなく乏しかったのかとわざわざ比較するまでもなく明らかに前者の理由から、なにを言っているのかまったくわからなかったのだ。
そもそもいきなり原理や概念を語り出す奴がいるだろうか。
「オレが聞きたかったのはな、そういうこっちゃねぇんだ。……つまり、あんたが奴らにぶっ放したアレは、いくらでも使えるもんなのか？」
「えーと、そうですねぇ……総じて体力を消費してしまいますので、アレなら……」
エネルギー体の槍を生み出し射出する術『フラッシュジャベリン』。
「威力にもよりますが十数回……万全な状態の時の話ですけど」
「じゃあ、もっと威力を高くすることはできるのか？　たとえば建物を丸ごとぶっ壊せるようには？」
ドートの様子は、興味本意で質問している範疇をかなり上回って

いた。具体的に戦力を分析するような、そんな雰囲気がただよっている。

「可能、ではありますが……。強力なものはそれだけ使うのに時間がかかりますし、体力も激しく消費してしまいます」

なんだか嫌な予感をリフィクは感じていた。

「とにかく使えるってことか。よし！　兄ちゃんを男と見込んで頼む。オレたちにもう一回だけ力ぁ貸してくれ！」

ドートは机を粉砕しそうな勢いで頭を下げた。

どうやら予感は当たっていたようだ。

「えぇっ！？　こ、困りますっ。頭を上げてくださいっ……」

リフィクはあたふたしながらもそれを断わった。

「……オレがここまでしてんのにか……？」

頭を下げたまま、ドートは地獄の底から響いてくるような低い声をうならせた。取り巻く団員たちからの視線にも険悪さが混じり始めた。

これではまるで脅しではないか。山賊っぽい雰囲気の男たちが、今や完全なる山賊のように見えた。

「だ、だって……手を貸すということは、『モンスター』と戦うってことですよね……？」

「決まってんだろ」

「できませんよっ、そんなことっ……！」

リフィクは悲痛な表情で訴えかけた。

対面するのでさえはばかられるような相手に戦いを仕掛けようなど、もっての他だ。沙汰の限り。信じられない発想である。

『モンスター』云々よりも、今この場から逃げ出したくてしょうがないリフィクであった。

「第一、どうしてあなた方は『モンスター』と戦っているんですか？　今日だってやられてしまいそうだったのに……いつか本当に死んでしまいますよ！」

なんとか説得しようと口走った言葉であるが、それはリフィクの

本心でもあった。彼らを単純に心配する気持ちは。
それを耳にして、ドート団長は重々しく顔を上げた。そして真剣にリフィクの目を見やる。
「どうしてもこうしてもねぇ。当たり前じゃねぇか、そんなこと」
彼が断言した言葉は、リフィクの既成概念をいともたやすく打ち砕いた。
リフィクにしてみれば、『モンスター』とは戦わないことが当たり前なのだ。それはリフィクのみならず世界中の常識と言ってもいい。
下手なことをして目をつけられたら、どうなるものかわからない。そういう相手なのだ。
「奴らはオレらを食いにやってくるんだ。戦うしかあるめぇ。奴らからすりゃ、この村は野菜畑みたいなもんだ。一気に刈り取りはしねぇだろうが、だからって好きにやらせとくわけにもいかねぇんだよ」
守るための戦い、というものなのだろう。自衛のための。
「でも……」
そう簡単に勝てるのなら『モンスター』が跋扈などしていない。人間と彼らとの力の差。それは歴然なのだ。
リフィクも不意打ちだからこそ撃退することができたが、とてもじゃないが正面きっては敵わない。
「わかってるさ。オレらには追っ払うのがせいぜい。ケガ人も死人も毎回出ちまう」
リフィクの言いたいことを汲み取ったかのように、ドートが言葉を継ぐ。
「けどな、兄ちゃんが力を貸してくれんのなら話は別だ。奴らをアジトごと、根こそぎぶっ倒すことができるんだ！　頼む！」
言い切る根拠は、恐らくないのだろう。
しかしドートには不思議な確信がかいま見えた。
それは自信。仲間が瀕死の状態になっとしても最後まで悲観しな

かったような、何事もあきらめない不屈の心。それがドートの中に満ちあふれているのだ。

彼だけではなく、きっと自警団の全員に。

「……わかりました」

そんな心意気に胸を打たれたからか、もしくは生来からの強く頼まれたら断われない性格からか、リフィクはおずおずと首を縦に振った。

「一度だけなら……皆さんの力になります」

序章（3）

ドートや他の団員たちの歓喜と祝福。そしてその次に振りかかってくる、様々な歓迎の表現。

酒が入っているせいかそれは苛烈で、質問責めや酌の誘いなどはまだいいほうだった。自慢話や逸話を散々聞かされ、大して面白くもない芸を見せられ、さらにはそれへの参加を強要され。

飽きたのか酔い潰れたのか、リフィクの周囲が落ち着いたのは夜もかなり深まった頃だった。

今『モンスター』たちが襲ってきたらどうするんだろうと思う余裕もなく、リフィクは酒瓶の散乱するテーブルに突っ伏していた。

元々、傷を負った団員たちに『治癒魔術』をかけて回った時点で相当疲労が溜っていたのだ。

それに加えてこのバカ騒ぎである。性分故に途中で抜け出すことができなかったが、もう限界であった。

意志とは無関係にまぶたが落ちてくる。

「よう」

「はっ、はい」

とはいえ。かけられた声に律儀に応えてしまうあたり、損なというのか殊勝なというのか。

リフィクは上体を起こして、声の主へと振り向いた。そしてやや面を食らう。

ななめ後方に立っていたのは、先の戦闘でも目立っていたあの少女だった。どうやら自警団の中で女性は彼女だけのようである。

リフィクが面を食らったのは、彼女の服装についてであった。

丈の短い袖なしのジャケットに、その下はこれまた丈の短いタンクトップ。そしてもはや下着と見まがうばかりのショートパンツ。

日中の戦闘の時から、そんな肩出しヘソ出し太もも出しといった

露出度の高い格好していたのだが、近いところで目にしリフィクは思わずドキリとしてしまったのだ。
目のやり場に困って、赤くなりながらうつむく。
「お前、名前は？」
「はい、リフィク・セントランです……」
「ならリフィク、あたしの子分になれよ」
「はい……。……えぇっ！？」
極度の疲労と照れから、よくわからない返事をしてしまったことに気付くリフィク。
「よし、忘れんなよ」
少女はあっさり流して、リフィクの隣に座り中身の残った酒瓶に手を伸ばした。
「ちょっ、ちょっとまっ、まっ、ちょっとまっ、待って、まっ……！」
リフィクは全身で動揺を表しながら、なんとか彼女に弁解を試みる。言葉が通じたかどうかは怪しいが、とりあえず少女は面倒くさそうに振り向いた。
「あー？」
「い、今なんと仰いましたか……？」
リフィクは恐る恐る尋ねる。なんだか物騒なことを言われた気がした。
「なんか、子分がどうとかって……」
「あたしの子分になれとは言った。そんで、お前はそれを引き受けた。終わり。なんも問題ねぇよ」
問題大ありである。そんなことにうっかり「はい」と言ってしまったことに対して、リフィクは自分で自分の頬をひっぱたいてやりたくてしょうがなかった。
「あのー、それはキャンセルみたいなことは……？」
「……てめー」
リフィクの取り消し宣言を耳に入れて、エリスは不機嫌そうに目

尻を上げた。
「まさか自分のその口で言ったことを撤回しようってハラじゃねぇだろうな」
勢いや弾みとはいえ、言ってしまったことには変わりない。少々乱暴ではあるが、今はエリスに理があった。一応は。
「でもっ、でもー……」
まるで子供のように反論しようとするリフィク。そんなものは無視して、
「それでも男かっ！　自分で言ったことには責任持ちやがれ、うすらバカ！」
エリスは激しく追い詰めた。まさに炎のごとし。
「そ、それはそうですけど、でもっ、嫌ですよぅ子分なんて！　せめてお友達から始めましょ、ねっ？」
くたくたですでに頭が回っていないのか、リフィクの反論は的を外しまくっていた。
「女々しいーっ！」
「それくらいにしておけ、エリス」
今にも噛みつかん勢いのエリスを制止したのは、彼女と同年代ほどの青年であった。
山賊の一歩手前のような団員たちとは雲泥の差がある、穏やかな物腰。顔立ちも思慮深そうで、なにやら場違いな雰囲気さえただよっていた。
「弟分は引っ込んでろよ！」
「まだそんな昔のことを……」
青年は横目に流してから、改めてリフィクを見て、深々と一礼した。
「レクト・レイドです。死にかけていた俺を、あなたが救ってくれたと聞きました。感謝の言葉もありません」
先ほど『モンスター』の手により大ケガを負い、リフィクが術治療を施した青年。それが彼だった。

「いえ、そんな……お気遣いなく。困った時はお互い様ですから。お元気になられたようでなによりです」
リフィクは照れたように小さくなる。青くなったり赤くなったりご苦労な奴だ。
レクトは先ほどまで団長が座っていたイスに腰かけ、再びエリスに視線を戻した。諭すような表情。
「人の迷惑を考えろといつも言ってるだろ」
「うっせぇバーカ。そんな説教をしにわざわざ起き出してきたのかよ」
対するエリスは、まったく聞く耳持たずといった態度だった。
「礼を言いに来たんだ。だが恩人に因縁をつけるな人間がいるなら見過ごすわけにはいかない」
「誰が因縁つけてるってんだよ、このボンクラ！　お前の目はガラス玉か？」
「あのー……おふたり共、仲良く」
口ゲンカに耐えかねて、リフィクが仲裁を買って出る。
「子分は黙ってろ！」
が、エリスに一蹴されてしまった。
「だからそれはぁ……もういいです」
ついに限界を越えたようだ。リフィクは観念して、再びテーブルの上に突っ伏す。
「お疲れなら、もう休んでください。エリスの言うことは気にせず」
そんな様子を見て、レクトが微笑みながらそう促した。
「はぁ。では、お言葉に甘えて……おやすみなさい……」
『待て』を解かれた犬のように、リフィクは心底ほっとして体を起こした。ふらふらと左右に揺れながら奥のほうへと消えていく。
祝いの席ももうお開きのようだ。帰ったり酔い潰れたりしていないのは、今やエリスとレクトをのぞいて数人ほどである。
「……無駄な心配かけさせやがって、バカが。あいつがいなきゃ死

んでたんだぞ、てめー」
すねるように呟くエリス。
「そうだな。……すまなかった」
レクトは心から申し訳なさそうに、それに応えた。

序章（4）

翌朝。

『フィアネイラ』の村の入り口に、完全武装を施した自警団の面々が集結していた。

前日と同じく、ないよりはマシ程度の『レザーアーマー』に、お世辞にも新しいとは言えない剣や槍、斧、弓矢。辺境の村でこれだけ集めるのは苦労しただろう。

しかしエリス・エーツェルは、やはり昨日のような露出度の多い軽装のままであった。服に対して腰に吊らした剣が妙に浮いてみえる。

「よーし！　全員いるなっ！？」

団長の気合いの号令に、地響きに勝るとも劣らないような声が返された。

「これからオレたちを苦しめてきた、あのモンスター共のアジトに乗り込む！　総力戦だ！　この村のために、フィアネイラ自警団の意地を見せつけてやろうぜっ！！」

おおおお……というやかましい意気込みに、リフィクは不調子そうな表情で耳をふさいだ。

「どうしてこんなに元気なんでしょう……」

そして力なく呟く。

昨夜だいぶ遅くまで酔いどれ騒ぎを繰り広げていた、昨日の今日である。というか朝である。翌朝。早朝。

諸事情により酒は口にしていないリフィクだったが、充分な睡眠も取れずに叩き起こされたためにまだ頭がボーっとしているのだ。

「なにもこんな早く……」

タフすぎる彼らにはついていけそうにない。

「頼むぜ、兄ちゃん。あんたにかかってるんだからな」

近くにいた男性が、激励を込めてリフィクの肩を叩く。
その衝撃にすら耐えられず、リフィクはつまずいてすっ転んでしまった。

二十人弱という大所帯が、朝焼けの残る空の下を進んでいく。周囲から草木の姿が少なくなり、大きな岩石が目立ち始めた。
皆を引き連れるようにエリス・エーツェルが先頭に立ち、リフィクはドート団長と共に集団の中央辺りに控えていた。
「奴らが住み着いたのは、もう十年以上も前のことだ」
自警団の経緯を尋ねたリフィクに、ドートがいかつい表情で語り出す。
「ここらへんは小さい村がぽつぽつとあるから、絶好の餌場だとでも思ったんだろうが……。ある日突然、オレたちの村にやってきやがったんだ」
当時の光景を思い起こしているのか、ドートの目にありありと炎が燃えさかっていた。
「最初にやられたのは、村の入り口で見張りをやってたエルネスト……あいつの親父だよ」
ドートは言いながら、仲間たちの先頭に視線を向けた。リフィクの顔がわずかにしかめられる。
「エルネストだけじゃねぇ。村の連中も自警団の連中も、数え切れねぇ人間が奴らにやられた。今の団員たちは、だいたいがそんな仇を持ってる手合いなんだよ」
仇討ち。恨み。憎しみ。そういう強い気持ちがあるからこそ、『モンスター』という強大な相手にも立ち向かっていけるのだろう。
そんな話を聞かされては、眠気もどこかに飛んで行ってしまうというものだ。先ほどよりもだいぶしっかりしてきた頭で、リフィクは彼らの意気を思い知る。
「ちっぽけな村だからな。この団どころか、村全部が家族みたいな

もんだ。黙ってらんねぇんだよ、ああいう奴らに好き勝手されんのは」

激情とは別に、共に生まれ育った村を守りたいという意志が彼らの中にはある。だから戦えるのだ。我が身を犠牲にしてでも。

リフィクはふと思う。自分の中に、彼らのような強い意志があるだろうかと。

答えはすぐに出た。ない。復讐を誓うような気概も、故郷に執着するような気持ちも。なにひとつなかった。

故にどこか憧れを感じ始めているのかもしれない。確固たる決意を胸に生きる、このがむしゃらな人間たちに対して。

「見えてきたぞ」

先のほうからそんな言葉が聞こえてきて、リフィクは顔を上げて前方を眺めた。

なだらかな荒野。岩場に囲まれた、大きな石造りの建造物がそびえ立っていた。

塔のような円柱形で、二階建てほどの高さがある。ところどころが風化して崩れている様を見ると、それはなにかの遺跡なのかもしれない。

「こんな近いところに……」

リフィクは愕然と呟いた。村を出てから、まだいくばくも経っていない。早朝から朝に変わった程度だ。

「見た目はあんなもんだが、地下が案外広くてな。どれくらいの数がいるのかわからねぇぞ」

気を引き締めるように、ドートが口を開く。

「詳しいんですね」

「ガキの遊び場だったんだよ、奴らが住み着くまではな」

近付くにつれ、団員たちからあふれ出るような気迫が感じられた。戦意は最高潮にまで達している。

「作戦はこうだ。まずオレたちがあのアジトを取り囲む。で、お兄ちゃんが派手なヤツをぶっ放して、あのアジトを崩れさせる。……できるだろ？」

ドートの確認に、リフィクは「あれくらいなら、なんとか」とうなずいた。

「そうするとグースカ眠ってる奴らは、なにごとかとアジトから慌てて飛び出してくる。そこを攻め立てるんだ」

包囲。奇襲。強襲。常套手段ではあろう。

フィアネイラ自警団はやや離れたところから散開し、素早く包囲網を完成させていく。準備完了の合図が来たのもそのすぐだった。

「最初の一発を打ってしまうと、僕はしばらく動けなくなると思いますが……」

進攻を目前にして、リフィクが念を押す。全力を出すので最初以外は戦力になれない、と。

「心配すんな。手ぇ貸してくれた礼だ、きっちりオレが守ってやるよ」

自分の身の心配をしていると取られたのか、そばにいたドートがたのもしくそう言い切った。それならそれで安心ではあるが。

「さぁ、やってくれ」

ドートに促されて、リフィクは意識と『力』を集中させていく。昨日の攻撃よりも、さらに強く、深く。

この奇襲戦、リフィクにかかっていると言っても過言ではない。最初のこの一撃で『モンスター』にどれほどの損害と混乱を与えることができるのか。

それによって結果が左右する。ひいては自分たちの死活が。

恐怖と不安で逃げ出したいリフィクだったが、彼らの手前そうするわけにもいかなかった。

自分を信じてここまで来ているのだ。ならばこちらも彼らを信じなければ。

リフィクの体の周囲に、ほのかに光が集まり始める。『魔術』を

使役する時特有の現象だ。はたから見ると、それはなんとも神々しい光景であった。

「いきます……！」

意を決して、リフィクは集中させた『魔力』を解き放った。

「フラッシュジャベリン！」

序章（5）

天から巨大な光の槍が飛来する。それが『モンスター』がアジトとしている遺跡に突き刺さった瞬間、すさまじい衝撃と轟音が周囲を支配した。

遺跡は上から叩き潰されたように崩れ落ち、大量の土砂と土煙と黒煙を巻き上げ、炎を躍らせる。その威力は半端なものではなかった。

「すげぇや……」

自警団の誰かが感嘆の声を上げる。『魔術』知識のない彼らからすれば、それはまさしく神の御業に等しかった。

しかし見取れている場合ではない。今の一撃は、戦闘開始の合図なのだ。

やがて崩落の轟音が収まってくると、アジトの中から様々な声が響いてきた。それは『モンスター』たちが上げる奇声、悲鳴、怒号、混乱。阿鼻叫喚の叫びであった。

さすがに初撃で都合良く全滅とはいかなかったようだ。

いよいよとなり、武器を握る手に力を込める団員たち。

するとその時。煙りを突っ切るようにして、一体の『モンスター』が飛び出してきた。村を襲ってきたのと同じ、狼の特徴を持つ種族。

降ってきたガレキに体を打たれ炎に焼かれたモンスターは、安全圏へ逃げ出た途端、待ち構えていた団員の剣によって胸を突き刺された。

なにが起きたのかを理解する前に、彼は絶命する。

それが口火となり、炎と煙りが舞うアジトから次々と『モンスター』が吐き出されていった。

さしもの彼らとはいえ、混乱しているところを数人がかりで攻められればひとたまりもなかった。紫色の血が吹き、死体がどんどん

と転がっていく。
　これまでの怒り。殺された仲間たちの仇。村を守ろうという決意。それらを胸に、団員たちは一心不乱に武器を振り回す。
　あれほど手強かった敵が、今はとてつもなく弱く思えた。勝てる。団員たちの心にそんな気持ちが芽生えた頃――。
　戦況に変化が現れた。
　『モンスター』たちの断末魔にまぎれて、彼らのものではない…人間たちのうめき声が混ざり始めたのだ。
　優勢と思われていた形勢が、いつのまにか膠着していた。
　理由は明快。奇襲開始から一拍が経ち、『モンスター』たちの混乱が薄れきてしまっているのだ。
　状況を把握し始めている。
　それに加えて、人間ごときが自分たちに歯向かってきている、という憤怒が彼らの心を激しく燃え上がらせていた。
　ドート団長に誤算があったとしたら、それは、『モンスター』たちの数が思っていたよりも多かったということだけであろう。
　倒される仲間を目にして逆に闘志をたぎらせながら、エリスは果敢に攻め立てていた。
「人間のっ！　それも女がっ！　生意気にっ！」
　『モンスター』は吠えながら、上段から斧を振り下ろす。エリスは剣をかざし、それを頭の上で受け止めた。
　が、やはり力負ける。上から押さえつける斧に足腰が沈みかけた。
「生意気かどうかその目でしっかり見てろっ！」
　『モンスター』に負けないほど叫び返した瞬間、エリスの剣から炎が生み出された。
　その炎が、まるで物質化したかのように『モンスター』の斧を持ち上げる。すさまじい力で。すでに剣と斧は触れ合っていなかった。
「！？」

動揺するモンスターにはかまわず。
「オーバーフレアぁっ！」
エリスは、炎をまとった剣を叩き込んだ。

「やってくれたな、人間風情……！」
ドートの前に怒り心頭で現れたのは、他の者たちと比べてひと回りもふた回りも体の大きいモンスターだった。姿形は似通っているため、それが彼らの『ボス』なのだろうか。
「我らに歯向かって、タダで済むと思ったか！」
「それはこっちの台詞ってヤツだ！」
ドートは、樹齢うん百年という木を切ろうかというほど巨大な斧をかまえ直し、一歩も引かずに言い返した。
「オレらの村に手ぇ出しといて、タダで済むと思ってたんじゃねぇだろうなぁ！　おいっ！」
鬼のような形相。並の人間ならそれだけで泣いて逃げ出してしまいそうな迫力があった。しかし相手は、並でも人間でもない。
「身のほど知らずが！」
モンスターのボス格は吠え散らして、ドートめがけてブロードソードを叩きつける。
完全に防いだはずのドートだったが、勢いと力に押されて吹き飛ばされてしまった。
単純な腕力だけなら団内一のドートでも、さすがに厳しい。モンスター相手では。
「おおぉっ！」
モンスターは気合いを叫びながら幅広の剣を振り回していく。それは技術もなにもなく、ただ力任せに振っているだけのものだった。しかしその『力』が圧倒的なぶん、脅威以外のなにものでもない。
なんとかしのいでいるドートを切り崩そうと、剣の動きが激しさを増す。

「フラッシュジャベリン……！」
そこへ、リフィクが一条の光槍を放った。
最初の全力攻撃からやや時間が経ち、ほんのわずかだけだが体力が回復したのだ。
微弱な光は上手くドートを避け、『モンスター』だけにヒットする。傷を与えるには至らなかったが、奴の動きが、麻痺したように鈍くなった。
それを好機とし、ドートが反撃に転ずる。
だが腐っても鯛。痺れても『モンスター』というわけか、ボス格は麻痺した体でもドートに引けを取らなかった。
形勢は逆転に至らず、圧倒的な差をわずかに縮めただけに終わってしまう。
リフィクも今の術を放ったので精一杯。追撃をかける余力は残っていなかった。
「いくら小細工を弄しようと、勝てぬものは勝てぬのだ」
押し負けて尻餅をつくドートを見下し、『モンスター』が勝ち誇る。
「それは今の世界が物語っている！」
一対一、一対二でも、正面からでは勝負にすらならない。人間と『モンスター』とでは。根本的に。
「心得ろ、弱者がっ！」
ドートは傷だらけの体をなんとか起こそうとするが、力が足りずにくずおれる。
ダメージを負いすぎていた。そして目の前には、強大悪鬼な敵が立ちはだかっている。
火を見るより明らかな絶体絶命な状況。
だがドートの顔には、観念や諦観といった感情はまったく浮かんでいなかった。むしろ逆。余裕の笑みさえ見受けられる。
「……人間の考えることはよくわからんな」
『モンスター』は興を失したように吐き捨てて、右手に持ったブ

ロードソードを大きく振りかぶった。
一巻の終わり……。
もはや見ていられないとリフィクが目をそらした、その時。
『モンスター』の苦悶の叫びが耳に飛び込んできた。
「!?」
なにが……とリフィクは慌てて視線を戻す。
すると狼に似たモンスター、その片目に一本の矢が突き刺さっていた。
流れ矢が、ではない。その証拠に、二射三射と二桁にも及ぶ矢が一斉に『モンスター』へと殺到する。
リフィクは振り向く。そこに、他の場所で戦っていた数人の団員が弓を手に駆けつけてきていた。
ドートの援護をしに。その中にはレクトの姿もあった。
「オーバーフレア!」
そして横手から飛び出したエリスが、ボス格のブロードソードを持つ腕をばっさりとぶった斬った。岩場に紫色の血が飛散する。
「なんだ、これはっ……!?」
ボス格は動揺を隠し切れずに、残ったほうの目だけで自分の周囲を見渡した。
馳せ参じたのは彼らだけではない。戦いに赴いた自警団の団員、そのほとんどが集い『モンスター』のボス格を取り囲んでいた。
「奴らはっ……奴らはなにをやっている!?」
誰へ向けてでもなく怒りをぶつけた『モンスター』へ、
「残ってんのはてめぇだけだよ」
言い放ったのはエリスだった。
「あたしらにたたっ斬られたかシッポ巻いて逃げ出したか、どっちにしろ残りはてめぇひとりだ」
「なにを、バカなことを……!」
ボス格の頭の中にあるのは、恐らく信じられないという思いだけであろう。

「我ら『モンスター』が人間ごときに出し抜かれるなど……！」
口ではそう言っているが、認めざるを得ない状況である。これでは。
深手を負った自分、それを取り囲む二十人弱の人間たち。仲間が残っているなら、こんな状況にはなっていないだろう。それは明白。言うまでもなく。
「そんなことが、あってはならない！」
「あるんだよっ！！」
『モンスター』は一番手近にいたエリスを片腕の爪で引き裂こうと地を蹴ったが、所詮は迷いのある動き。
「あたしらをここまで怒らしゃぁ当然っ！」
エリスはそれをたやすく剣で防いだ。
「あるっ！！」
さすがにパワー負けして弾き飛ばされる彼女だったが、それが合図となったかのように、取り巻く団員たちが一丸となって攻めかかった。

荒野の岩場に響き渡るのは、肉を斬り裂く音と奇怪な断末魔。
ドートは仰向けになったまま空を見上げ、
「言っただろ。オレたちの村に手を出して、タダで済むはずねぇって」
小さくも猛々しい声で言い捨てた。
「オレらの怒り……殺されて、食われてった連中の恨み……人間の意地ってヤツを」
彼の瞳に映るのは、命を奪われた村の人々と、志なかばで敗れていった自警団員たちの顔。そのひとりひとりを、鮮明に思い浮かべていた。
「思い知りやがれっ……！」

序章（6）

「ブレッシング・フィアネイラ！」

祝いの時の決まり文句をドート団長が高らかに言い上げ、歓喜の宴は始められた。

村で唯一の食堂兼酒場。そこに自警団の面々はおろか村人のほとんどが会し、『モンスター』を討ち取った喜びをわかち合っていた。

寿司詰め状態ではあるがひとつの店舗に全村民が収まってしまう辺りに、この『フィアネイラ』の村の小ささがよくわかる。

朝の奇襲戦。かろうじて勝利を手にしたものの、自警団は八人もの犠牲者を出してしまった。

村へ凱旋し簡単な治療を済ませたあと、団の皆はまず仲間の弔いを優先した。疲労した体もなんのその、墓をこしらえ丁重に仲間たちの遺体を葬送する。

尊い犠牲は出てしまったが、とにかくこれでこの村は救われたのだ。もう『モンスター』たちがいつやってくるのかと怯えなくてもよくなった。

文字通り命を賭して村を守った故人たちの分までと、村人たちは盛大に勝利と平和とを祝い合った。

しかし、他の者たちのように手放しで喜べない者がひとりいた。

今回の功労者である旅人、リフィク・セントランである。

「いやぁ、参った。明日から仕事なくなっちまうなー！」

団員のひとりが、酒瓶を抱えながら上機嫌に軽口を叩いた。そこここから、それに合わせた笑い声や合いの手がどっと上がる。

「……と言っても、完全に……心からの安心はできませんが」

と、そんな時。水を差すようで申し訳ないといった様子で、リフィクがおそおそと口を開いた。

盛り上がった店内でその声を耳に入れたのは、周囲にいたごく数人だけであったが。

「……どういう意味です？」

隣席の青年、レクト・レイドが不審に思って聞き返す。村を襲っていた『モンスター』たちはすべて撃退した。たしかに生き残りはいるかもしれないが、大した数ではないだろうに、と。

「たしかに、『彼ら』はなんとかやっつけることができましたが……また他の『モンスター』がやってくる可能性も」

リフィクは深刻な面持ちで言葉を続ける。

「だから、これで万事平和というわけには……」

「他の……！？」

それを聞いて、レクトは目を見開いて絶句した。

リフィクの言葉は伝言ゲームのようにしてまたたくまに他の者たちへ広がり、店内を別の意味で騒然とさせる。

それも無理からぬことだろう。決死の覚悟で挑み、さらにリフィクの助力があってなおようやく勝てた相手だ。

そんな相手がまたやってくるかもしれないと聞かされたのだから。

「おい、お兄ちゃんよ」

ざわめきを代表するように、ドートが口を開いた。

「どういうこった。あいつらの仲間がまだいるってのか？」

その疑問を耳にし、リフィクは薄々感づいていたことに確信を持った。彼らは知らないのだ。『モンスター』と呼ばれる異形の強者が、世界中にはびこっていることを。そしてこの地域だけでなく、世界中の人間たちが支配されていることを。

それらを伝えると、さすがのドートも驚きを隠し切れない様子だった。

命からがら倒した者たちが、全体のほんの一部でしかない。同じような手合いがまだまだわんさかといるともなれば、浮かれていた頭も冷静になってしまうというものだ。

さっきまでの騒ぎはナリを潜め、店内は重苦しい空気を充満させ

つつある。
そんなシリアスめいた雰囲気を打ち破ったのは、
「ならばあたしがやるっ！」
という威勢の良い少女の声であった。
「他の誰でもねぇっ、このエリス・エーツェルがやるしかあるまいっ！」
エリスはテーブルの上に飛び乗り、周囲の人間を見渡して宣言した。
「その『モンスター』って奴らがそこら中にいるなら、あたしが行って根こそぎやっつけてきてやるよ！」
大言壮語に、村人たちから「おおっ！」という声が上がる。
「無理ですよ、そんな……危険っ！　それに、いっぱいいるんですよっ？」
すかさずリフィクが制止した。
「それがひいては村を守ることにもなる！」
「聞いてくださいっ！」
数の話をするなら『いっぱい』という言葉では済まされないほど無数にいるのだが。
そしてなにより、『モンスター』を相手に渡り合っていくつもりでいるのだろうか。すぐに死ぬ。そんな無謀さでは。
「いっぱいいるのか……じゃあ親玉だ！　奴らにだっているんだろ？　そういうのは」
エリスはリフィクへと振り向き、矛先を変えた。
「それは……たしかに、『キング』と呼ばれる存在がいるとは聞いたことがありますが……」
それでも質問には答えてしまうリフィクである。エリスは、我が意を得たりと歯を見せつけた。
「ならその『キング』とやらをぶっ倒しに行く！　そうすりゃあとは烏合の衆だ。奴らだって、自分の親玉を倒した奴には迂濶に手を出せなくなるだろ」

「えぇっ！？　そっ……！？」
リフィクは圧倒される。
たしかに理屈としてはそうだが、それは屁理屈にすらなっていない。現実味が伴っていないのだ。
絵に描いたパンである。実現するはずがない。
「よし、行ってこい！」
が、しかし。無茶としか思えないエリスの提案を、ドートは立ち上がって賛同した。
「村のことはオレたちに任せて、お前は『キング』とやらの首を取ってこい！　言い出したんなら意地でもな！」
荒々しい激励に、シリアスめいた空気が吹き飛ばされていく。それが波紋するように団員や村人たちがこぞってエリスを応援し始めた。
「どうして励ますんですかっ！　止めてくださいよーっ」
リフィクはあたふたとしてドートに口答えた。彼らは『モンスター』がどういうものか、本当は理解していないのではないだろうか。
「おいお兄ちゃんよ、オレの前で『ハゲが増す』たぁ言ってくれるじゃねぇか」
「言ってませんっ……断じてっ……！」
リフィクは弁解しながら、ドートの寂しい頭に無意識に視線をやった。
「まぁたしかに。あの化け物共の、ましてや親玉に挑もうなんてのは無茶な話かもしれねぇ」
ドートは落ち着いた様子でリフィクをなだめていく。
「けどな、そういう無茶も、髪型を色々変えて楽しむのも、若いうちにしかできねぇことだ。やれることがあんならやっときゃいい。やれなくなってから後悔するよりはな」
「仰りたいことはわかりますが……」
リフィクはやはり腑に落ちない表情で、ドートの寂しい頭に無意識に視線をやった。

「それにエリス・エーツェルってのは、できもしねぇことを言う女じゃねぇ。オレはあいつを信じるぜ」
自信満々に断言してみせるドート団長。
が、信じるだけで万事うまくいくなら誰も苦労はしない。そんな現実的な考えを抱きながら、リフィクはテーブルの上で意気天を突いている彼女を困惑の目で見つめた。

翌日。村の入り口に、大多数の村民が集結していた。
昨朝と違うところと言えば、自警団以外の面々もいることとその大半が見送りであるということくらいであろう。
旅支度を整えたエリスと、そしてレクト・レイドが皆と別れや励ましの言葉を交わしていた。あのあとの話で、どうやら彼女らふたりで行くことになったらしい。
数の問題ではないかもしれないが、ふたりというのはあまりにも心許なかった。
「本当に行かれてしまうんですか……？」
リフィクは最後の忠告のような気持ちで、不安げにそう尋ねた。
「あたぼうよ。お前、昨日の話聞いてなかったのか？」
まるで迷いもなく答えるエリス。もはやなにを言っても無駄らしい。
「……わかりました。では、お気を付けて。無事でおられることを祈っています」
リフィクは観念したように悲しい声を出した。
とはいえ。冷たいことを言うようだが、祈ったところであっさりと命を落としてしまうに違いない。接していた時間は短くともこれが今生の別れとなると切ないものだ。
ひとりしんみりしているリフィクに向かって、
「なに他人事みたいなことぬかしてやがる」
エリスが叱りつけるように声を尖らせた。

「……はい？」
「お前も行くんだよ、あたしらと一緒にな」
「えっ……えぇぇーっ！？」
ハトが豆鉄砲ならぬ大砲を食ったような顔をするリフィク。いったいいつ、なぜ、そんなことになってしまったのであろうか。
「ど、どうして……？」
「どうしてもこうしてもあるか。子分がついてくるのは当たり前だろうが。拒否権も決定権もねぇよ」
エリスは至極当然とばかりに言い含めた。
「そんなっ……！」
リフィクは頭を抱える。あんな、とっさに言ってしまったたったのひとことがこんな事態にまで発展するなんて……！
彼女らについて行くということは、『モンスター』と戦うということだ。バカげている。命がいくつあっても足りないだろう。そんなことは。
「あなたに同行してもらえるのなら心強い」
せめてものなぐさめか、レクトがフォローするように言葉をかけた。
見るからに猪突猛進なエリスと違い、彼はそれなりに理知的な雰囲気をただよわせている。そんな彼がこんな暴挙を黙認し、なおかつ共に行こうとしているのもリフィクから見れば妙な話であった。
とはいえ今はそれを言及している余裕はない。
「……うぅ……わかりましたぁ。お供します」
リフィクはいじけながらも結局は首を縦に振った。
なんだかんだで、彼女らの身が心配なのだ。自分がそばにいればそれを助けられるかもしれない。そのために行くのだ。……と、自分に言い訳をしながら。
「あのぅ……お供はしますから、せめてその子分という称号は変更して頂けませんか？」
「あー？　子分ってのは称号なんかじゃねぇよ。お前の生き様だ」

「僕の生き様を勝手に決めないでくださいっ……！」
弱々しく反論するリフィクを完全に無視して、
「じゃぁみんな、行ってくる！　親玉をやっつけたら帰ってくるからなーっ！」
エリスは高らかに別れのアイサツを告げた。
呑気にも盛り上がる村人たち。その場でひとり、リフィクだけが今にも泣き出しそうな表情をしてた。

第一章「斬り裂け！　チリーストラッシュ」（1）

輝く青い空の下。豊かに緑あふれる森の中。獣道にも近しい地面の上。そんな風景に包まれながら、三人の人間が歩んでいた。

肩で風を切って先頭を行くのは、十代の後半ほどの少女、エリス・エーツェルである。

性格を表わしているかのように外側にハネた短髪に、赤いハチマキ。丈の短い肩出しのジャケットに太もも全開のショートパンツという、森を歩くのにこれ以上適さない服装はないだろうと言わんばかりの格好をしていた。

「くそ、またか」

エリスは不意に立ち止まって、面倒そうに自分の左ももに視線を落とした。

赤い線がナナメに走っている。恐らく草の葉で切ってしまったのだろう。

服装からすると当たり前の結果ではあるが。

「おい、早く治せ」

エリスはふてぶてしい態度で背後へ振り返った。

後ろを歩いていた若い男、リフィク・セントランは「またですか」と弱々しく不平をこぼした。

パッと見れば聖職者のような彼は、そのゆえんであろう白いローブとマントを身にまとっている。

旅をしていればだいたいはそんな格好に落ち着くというものだ。

マントくらいしていなければ、森や岩場を歩く時にエリスのように肌を切ってしまう。

現在は肩ももも、ついでにヘソも丸出しな彼女ではあるが、森に入る時はちゃんとマントをつけていたのだ。しかしすぐに「うっとうしい」という理由だけで脱ぎ捨ててしまい、いちいち草で肌を切り、

今に至る。
「エーツェルさん、僕のこと傷薬かなにかと勘違いされてませんか？」
リフィクは頬をふくらませながらも従順に、しゃがみ込んでエリスのももに手をかざした。
「ヒーリングシェア」
リフィクの手が光を帯びると、瞬時にエリスのすり傷が消えていった。彼が使った『治癒術』によって。
「いんや、ちゃんと『便利な奴』だと思ってるよ。子分にしてやった甲斐がちったぁあるってもんだ」
「……」
眉をひそめるリフィクをもう用無しだと言外に無視して、エリスは再び歩き出した。
しんがりをつとめている、彼女と同年代の青年レクト・レイドは。幼なじみの相変わらずの横柄さに呆れるようにため息をついた。
ちなみに彼は、自分とエリスとふたりぶんの旅荷物を持っている。エリスは当初リフィクに持たせていたのだが、線の細いリフィクには文字通り荷が重いと気遣い、レクトが譲り受けたのだ。

「おおっ！　湖だっ！」
しばらく歩んだのち、エリスが突然はしゃいだ声を上げる。
鬱蒼とした木々が開けたすぐ先で、大きな湖が太陽光を反射してまばゆいばかりに輝いていた。
「きれいですねー」
リフィクが湖面まで寄って、感嘆する。
澄んだ水は、泳ぐ魚や湖底までもを鮮やかに映し出していた。驚異的清水。これなら飲み水としても汲んでいけるだろう。
「渡りに船だな。ちょうど水浴びでもしたいと思ってたところだ」
エリスは上機嫌にそう言いながら、いきなり着ている衣服をするりと脱ぎ出し始めた。

「うっ、えっ、エーツェルさんっ！？　なにやってるんですかっ！？」

リフィクはすっとんきょうな声を上げ、慌てて赤くなった顔をそっぽへ向ける。

いくら森の中とはいえ大胆すぎるだろう。それも若い男の前だというのに。

「なにって、だから浴びるんだよ、水を。人が言ったこと聞いてろよ」

しかしエリスはなんの抵抗もない様子であっというまに一糸まとわぬ姿になり、水面輝く湖へ勢いよくダイブした。

高い水柱が上がる。

「ぷはっ、気持ちいいーっ！」

そして顔を出し、満足げに歓喜の声を弾けさせた。

「……」

それとは対照的に、うつむいたまま硬直しているリフィク。

どうしていいものか……具体的に言うなら、見てしまってもいいのか悪いのか、心の中で葛藤しているのだ。ああも大胆になられると逆に戸惑ってしまうというものだ。大抵の男ならば。

「あまり、お気になさらず」

口添えるようにレクトが言い開いた。

「小さい頃から自警団……男ばかりのところで育ったせいか、どうもそういう意識が薄いようで」

「はぁ……」

レクトは淡々とした様子で、エリスが脱ぎ捨てた衣服を拾い集める。そしてそれを、荷物から取り出したキレイな布と共に一ヶ所にまとめて置いた。

たしかに環境によって性格が左右されることもあろうが、環境だけでああ育つとは考えがたい。生来の気質も深く関係しているのではないだろうか。

むしろ薄いのは羞恥心である。

「気にするなというのは、苦行です……」
リフィクは地面を見たまま、素直に白状した。
家族同然のように育ったレクトは別としても、若い女が裸でいるのを無心で済ませられる男はいない。特定の相手もいなくその手の経験も浅いリフィクならば、なおのこと。
それでもなんとか雑念を振り払い、リフィクは草木あふれる森の中へと踵を返した。

水浴びを堪能したエリスは、体を拭くためにとレクトが置いた布をなにかで一杯にして、ふたりの前に姿を見せた。
湖畔から一歩森に入った、やや広がった場所。リフィクとレクトは荷物と腰を落ち着け、なにやら熱心に話し込んでいる様子だった。
エリスは特にかまわず、草の上にあぐらをかいて包んだ布を広げる。その中には、活きの良さそうな魚が十数匹ほど収まっていた。
「……素手で捕ってきたんですか？」
リフィクが思わず問いかけた。釣りざおや網は持っていないし、こしらえられるほど時間は経っていないはずだ。
「あたしにかかりゃぁこんなもんよ」
エリスはあっさりとうなずいて、レクトに預けておいた荷物から自分の剣を引っ張り出す。
そして地面に無造作に転がした魚たちめがけて、
「オーバーフレア！」
自慢の『炎の剣技』をぶちかまし、生魚を一瞬のうちに焼き魚へと変えてしまった。
やや焦げていたが。
エリスは剣を戻してナイフに持ち替え、フォーク代わりに魚にぶっ刺してそのままかぶりついた。
「……うまくねぇなぁ」
などという文句もこぼしつつ。

「なに話してたんだ？」
「『魔術』について聞いていた」
耳なぐさみに尋ねたエリスに、レクトが柔らかな口調でそう答えた。そして自然な振る舞いでエリスの対面へ腰を下ろし、同じようにナイフを持って焦げ魚に手を伸ばす。
「はー。あたしにも聞かせろよ」
そんなレクトを黙認して、エリスは横目でリフィクを見やった。
「あ、はい。では、最初から……」
促されて、リフィクはふたりの近くまで寄り切り出し始めた。
「俗に言われる『魔術』というのはですね、自然界に住まう『精霊』の力をお借りして行うものなのです」
「もっとわかるように言えよ」
が、いきなりエリスから野次が飛んでくる。
「い、今のを理解して頂けないと話ができないのですが……」
「気にせず。続けてください」
困り顔のリフィクへ、すかさずレクトのフォローが入れられた。
リフィクは「では……」と気を取り直す。
「たとえば、風の精霊、火の精霊、水の精霊。そういったものと心を通わし、祈りを捧げることによって力を借り受けることができるのです」
「どこにいるんだよ？　その精霊って奴は」
「ど、どこと言われましても……どこにでもおられます」
その時。心地良い風がふわりと吹き抜けた。
「あ、ほら」
たじろいでいたリフィクだったが、良い糸口を見つけたように頭上を仰ぎ見た。
「こうして風の吹くところには、必ず風の精霊様がおられるのですよ」
「……あー？」
が、しかし。エリスはまったく腑に落ちないと言わんばかりの様

子で顔をしかめた。
「何人くらいいるんだよ？」
「な、何人とかそういうアレではなくて……とにかく、我々の周りには必ず存在しているものなんですっ」
「じゃあ連れてこいよ」
「つれっ……そんなぁ……」
リフィクはなにやら泣きそうになっていた。どう説明すれば伝わるのか。
これではまるで、チンピラの妙な因縁をふっかけられているのと大差ない。
「概念的なものだよ」
と。見るに見かねてレクトが助け船を出した。
「たとえば『神』のような、無形物。見たり触ったりではなく、存在しているという考え方自体に意味があるんだ」
「そ、そうです。その通り……！」
「なら結局いねぇんじゃねぇか。聞いて損した」
エリスは言葉と共に、歯に挟まった小骨をぺいっと吐き捨てた。はしたない。
「……」
子供のような不満顔のリフィクをよそに、
「そういう御託はいいからよ、どうすりゃ『魔術』が使えんのかきっぱりさくっと教えろよ」
エリスはふてぶてしく言い放った。
決して教えてもらう人間の態度ではないが、リフィクはもはや反論する気力も失っていた。
「……教えるもなにも、エーツェルさんはもう使えるじゃないですか」
ぼそりと呟く。エリスとレクトは、そろって意外そうに眉を持ち上げた。
「ほら、あの、剣から火が出る……あれはちゃんとした『魔術』で

すよ。それも、普通に使うよりもちょっと技術が必要な」
「はー、そりゃ知らなかった」
「え、知らなかったって……じゃあどうやって使えるようになったんですか？」
今度はリフィクが意外そうな顔をする番だった。『魔術』を会得するというのは、それなりに修練が必要なものなのだが。
が、エリスはあっけらかんとして答えた。
「なんとなく」
「なっ、なんとなくっ！？」
「気付いたら」
「気付いたらっ！？」
「使えてた」
「無意識っ！？」
驚くリフィクの横で、
「たしかに。よく考えると不可思議な技だ、あれは。見慣れてしまって疑問にも思わなかったが」
とレクトまでもがエリスようなことを言い出し始めた。
常識からズレすぎている。リフィクは、なぜだか頭が痛いような気がしてならなかった。

第一章（2）

そこからおおよそ二日進んだ頃。三人はようやく人里とおぼしきところにたどりついた。

深い森にまぎれるように並ぶ、レンガ造りの家々。村の規模はささやかでこじんまりとしているものの、それでもエリスらの故郷『フィアネイラ』よりは大きいだろう。

まず目に入ったのは、倒壊した家屋だった。

その奥の家も、ボロボロな状態。右の家も左の家も、もれなく穴が開いていたり屋根がなくなっていたりと、無惨な様子で佇んでいた。

見渡すかぎり、村全体が同じような有り様となっている。

それは恐らく昨日今日壊れたものではないのだろう。しかし、廃村というわけでもないらしい。その証拠に、ぽつりぽつりとではあるが村人たちの姿が見受けられた。

「……なぁ。直さねぇの？」

近くでクワの束を運んでいた青年へ、エリスがぶしつけにもそう声をかけた。家やなんかを、と。

青年は足を止め、元気のない顔を振り向かせた。

「直したって無駄だよ。どうせすぐ、また奴らに壊される」

「奴ら？」

「決まってるだろ」

青年は値踏みするような目で三人を眺めたあと、興味を失ったようにまた歩き出した。

「『モンスター』だよ」

という言葉を残して。

エリスは表情を刃のように尖らせて、改めて村の景色を見回した。

破壊の跡。強奪の跡。蹂躙、殺戮、暴虐の跡。爪痕と傷痕にまみれた名も知らぬ村が、そこにある。

だが知らぬでは済まされないのだ。もし『自警団』がなければ、故郷フィアネイラもこうなっていた。守るべき人間がいなかったらば。

他人事では済まされない。

視界に入る村人たちの顔にも、先ほどの青年と同じような疲れと絶望が色濃くにじみ出ていた。満身創痍な心根が表れている。

「……素通りできねぇなぁ」

エリスは拳を握って、力強く宣言した。

「『モンスター』が近くにいるなら、片っぱしから倒す。根こそぎ！」

まのあたりにして、真の意味で理解したのだ。世界にはびこる『モンスター』たち。その所業。傍若無人さを。

「村の連中なら知ってるだろ、奴らのねぐらがどこにあんのか。そいつを聞き出して……」

「や、やめましょうよ」

と、まるで水を差すようにリフィクが口を挟んだ。

「そういう危険な行いは」

エリスは、剣先のような視線をリフィクへ向ける。

「あー！？」

「た、たしかに無惨なことに違いありませんが、恐らく、さしあたっての危機はないはずです。首を突っ込む必要は……」

「そういう問題じゃねぇぇんだよ！　てめぇの頭ん中には、脳みその代わりに綿でも詰まってんのかっ！」

今にも殴りかからん勢いで詰め寄るエリス。身長はリフィクのほうが高いため自然と見上げる格好になるが、それでも迫力では完全に圧倒していた。

「あたしらは奴らのトップをぶっ飛ばしに行こうっつってんだ！　そのあたしがっ！　このエリス・エーツェルが、どうして奴らの下

っぱごとき相手に尻に帆をかけなきゃならねぇんだよ！」
「下っぱと決まったわけでは……」
「言い訳すんなっ！」
言い訳ではない。
「『モンスター』が目の前にいるってんなら叩く！　ただそれだけだろうがっ！　簡単っ！　明快っ！　小難しい御託はいらねぇぇんだよ！」
言っていることはさておき気迫に押され、リフィクは黙らざるを得なくなってしまった。舌戦では勝てる気がしない。かと言って力ずくではもっと勝ち目がないだろうが。
リフィクは助けを求めて、静観していたレクトへ視線を送った。
「俺も、エリスと同意見です」
が、あっさり裏切られる。
「そんなぁ、レイドさんまでっ……」
リフィクはわかっていないのだ。
大人しやかに見えるレクト・レイドではあるが、彼も立派に『フィアネイラ自警団』の一員なのである。彼らとたがわず、『モンスター』に対する憤りや篤い思いを胸のうちに秘めているということを。
「この惨状が『モンスター』の手によってなされたものなら、到底見過ごすことはできません」
「これで二対一だ。まっ、子分と弟分にはハナっから投票権なんてねぇけどな」
エリスは機嫌をやや戻して、しかし目つきは鋭いままで荒らされた村を再び見た。
明日は我が身。いつかフィアネイラがこんな風になってしまう日が来るかもしれないのだ。今立ち向かって行けないものが、土壇場で立ち向かって行けるわけがない。
初志貫徹。もし姿勢を曲げたら、その瞬間にもう元には戻れなくなる。ならば曲げなければいいのだ。一貫して。志を。

「な、なら、せめて……」
「有象無象共っ！　エリス・エーツェルの行く先、阻めるもんなら阻んでみろーっ！」
リフィクの提案を聞こうともせず、エリスは誰に向けてでもなく高らかに名乗りを上げた。
横目に見る村人たちの目には、さぞや奇天烈な人間に映っていることだろう。
なにせ長く共にいるレクトでさえもそう思っているのだから。

「おや。旅のかたとはめずらしい」
日陰のベンチに座る高齢の男性が、物腰柔らかにそう口を開いた。
村の奥に位置する、これまたレンガ造りの集会所らしき建物。その入り口脇に、丸太をそのまま半分に切っただけのベンチがぽつんと設けられていた。
「あいにくご覧の通りなので、たいしたもてなしもできませんが」
「いえ、そんな」
老人の律儀な応対に、条件反射的に恐縮してしまうリフィク。
エリスは老人の隣にどっかりと座り込み、
「この村を荒らしてる奴らいるだろ。あいつら、どっから来てるか知らねぇ？」
とアイサツもそぞろにぶしつけに質問を投げつけた。
立っているふたり……取り分けレクトが不平そうな顔をしたが、注意を口に出す前に老人が言葉をもらした。
「あのおぞましい者たちのことですか……」
その表情が暗いのは、日陰の下にいるせいだけではあるまい。
「残念ながら、どこからやって来るのかは私には皆目」
「やっぱりな。こんなくたびれたジジィが知ってるわけねぇか」
ストレートに失礼極まりない言葉を吐くエリス。
「いいかげんにしないか」

さすがに今度はレクトが鋭くクギを刺した。慎め、と。
が、しかし。
「はっはっ。よかろう」
罵声を浴びせられたはずの老人が、愛想ではない笑いを浮かべて逆にレクトのほうをなだめ始める。
「人間、年を取ると自分の言いたいことも言わずに迎合ばかりしてしまうもの。このお嬢さんくらい素直なほうが私は好きだね」
そして微笑みをたたえた顔をエリスへとかたむけた。
「なんだよ、話がわかるジィちゃんじゃねぇかよ」
年齢を重ねるとそのぶんだけ寛大な心が身につくのだろうか。小首をかしげていいのか感心していいのかよくわからず、レクトは眉をひそめて口をつぐんだ。
そんな彼へ、
「バーカバーカ」
エリスの筋違いな反撃がお見舞いされた。

「それにしても、なんだかずいぶんと……忙しそうですね、この村の方々は」
腰をかがめて目線を合わせ、リフィクが老人に世間話を持ちかけた。
口調が一瞬だけたどたどしくなってしまったのは、口に出す言葉を選んでいたからだ。この老人が好む素直な言い方をするなら、さしずめ『無愛想で冷たいですよね』といったところであろう。
村の惨状を見るに少しは心がすさんでしまうのも無理はないのだが、いくらなんでも取り付く島がなさすぎるのだ。
揃いも揃ってなにやら農作業や狩りの用意に没頭し話も聞いてくれない。
だからこうして、のほほんとしていたこの老人くらいしか相手をしてもらえなかったのだ。
「私にはわからないが。皆がそうしている以上、近いうちにまたや

って来るということなのでしょう」
老人は眉根を寄せるように細い目をさらに細めて、どこか遠くを見やる。
「あの異形の者たちが」
「『モンスター』！？」
エリスはベンチから飛び上がるように腰を浮かし、語調を高めた。
「来るってのか！？　奴らが。近いうちに！？」
「……食料か『人間』をよこせと、脅しに来るのですよ。だから皆ああして、必死に多くの食料を集めているのでしょう。でなければ村人が食料になる。普段はやさしく穏やかな方々ですから」
老人は悲しそうな声で淡々と告げる。年齢を重ねすぎて体が弱り、困っている皆に力を貸すことができない。そんな悔しさが表情の奥底にかいま見えた。
「食料……？」
引っかかるものがあったのか、ぼそりと呟くレクト。
「……よくある話ですね」
その横で、リフィクが同情するようなため息をついた。
たしかに『モンスター』は人間の肉を好むが、それしか口にできないわけではない。基本的には雑食だ。
故に人間を食べてしまって数を減らすよりは、脅迫して奴隷同然に働かせるほうが結果的には効率がいい。言うことを聞かないようならその時に食べてしまえばいいだけなのだから。
「頭の良い『モンスター』は、だいたいそうしています。僕も何度か目にしてきました」
リフィクの説明を受け、合点がいったとレクトと静かにうなずいた。
「奴らのほうからノコノコやって来るってんなら話が早い。ふん捕まえてねぐらの場所を吐かせてやる」
エリスは意気衝天と拳を握る。
「そのあとは一網打尽だ！」

「網が小さすぎる」
そこへ、レクトが冷静な指摘を突っ込んだ。
「奴らの総数はわからないが、俺たちだけでは確実に戦力が足りない。協力者を集めよう」
「そ、そうですよね。さすがに三人だけというわけには……」
同意するリフィク。村を発つ時にも思ったのだが、あまり自警団の戦力を減らすわけにもいかないかと飲み込んだのだ。
「アホか。一騎当千のあたしがいりゃぁ問題ないだろ。こちとら天下無双のエリス・エーツェル様だぞ」
その自信はなにを根拠としているのか、エリスは外聞も臆面もなく豪語した。相変わらずのビッグマウスっぷりである。
と、そんな時。
「失礼」
不意に、明後日の方向から若い男性の声が投げかけられた。
「立ち聞くつもりはありませんでしたが」

第一章（3）

振り返った先には、いかにも旅姿ないで立ちの一組の男女が立っていた。

どちらも若く、リフィクと同じ二十代のなかばほどだろう。しかし彼とは違い、ただよっている落ち着きは年齢相応のものだ。

「なにやら、『モンスター』をどうこうすると聞こえてきましたので。つい」

男性は高貴じみた態度で言葉を継ぎ、三人プラス老人に歩み寄った。その背後にピタリとつくように女性も続く。

エリスの目を引いたのは、どちらかといえばその女性のほうだった。

友好的な男性とは正反対な、人形のように無感情な顔。しっとりと黒く長い髪。全身を覆うありふれたマントの上からでも、腰に剣を携えているのが見て取れた。

エリスが感じた最たるものは、彼女が放つ雰囲気である。

立っているだけだというのに、思わずぞっとしてしまうほどの気配がある。まるで抜き身の剣が服を着ているような、そんな妖しささえ感じられた。

「よければ、話を聞かせて頂けませんか？」

それに比べると、男性は至って普通である。どこか飄々としているところが特徴かと言えばそうかもしれないが、これといって変わったところはない。

もしくはこの女性の陰に隠れてしまっているだけなのかもしれないが。

「『話』というほど大それたものはありませんが」

ふたり組をにらむように見ているエリスの手前で、レクトが答える。

「この村を脅かしている『モンスター』を、どう駆逐するか。それを相談していただけです」
はたで聞いていた老人が、「穏やかではないね」と言いたげに眉をひそめた。
「なるほど。そういうことならば、我々が力を貸しましょう」
男性がさらりと返す。
「えぇーっ！？」
真っ先に間の抜けた声を上げたのは、リフィクだった。というより驚いているのは彼だけだった。
「ほ、本気なんですか？　相手は『モンスター』ですよっ？　か、考え直したほうが……」
三人だけでは心もとないとかなんとかぬかしていたくせにこの言いようである。こいつは。
「自己紹介が遅れました。私の名はハーニス。そして彼女はリュシール。我らは、『モンスターキング』を葬るための旅をしています」
不敵に告げる男性に、今度はエリスとレクトも驚きを見せた。自分たちと同じく、『キング』を倒すという目的を持っている。そのことに対して。
リフィクは口を半開きにしたまま絶句していた。
「故に『モンスター』を憎む者でもあります。この気持ちはまさしく本気。嘘偽りはありません」
ハーニス。そう名乗った男性は、物怖じしない口調で言葉を並べていく。
「『モンスター』がいるのなら、放ってはおけない。我々とあなた方、心は同じはずです。ならば手を組みましょう。お互いのためにも」
「そういうことなら、こちらからもおねがいします」
融和的に、レクトが応じた。ちょうど手助けを必要としていた、と。
「足手まといならいらねぇからな」

話がまとまりかけたところで、エリスが口を挟む。そういう口を叩きたくてしょうがない性分なのだ。

ベンチにふんぞりかえって、ふたりの姿をにらみ上げる。

ハーニスはにこやかに、

「ご期待には添えられますよ、必ず。『彼女』ならばね」

そして妙に自信たっぷりに、そう断言してみせた。

彼の後ろにいる彼女。リュシールは、やはり最後まで表情を微動だにしなかった。

その後、特に発展もないまま日は暮れてしまう。

情報や加勢どころか雨風をしのげる場所すら貸し与えてもらえず、エリスたちは仕方なく村の外れで野宿と相なっていた。

人里に来ていながら野外で寝泊まりとは、なんとも寂しいことである。

「あなた方も『モンスターキング』を討つべく？」

興味深げに、ハーニスが尋ね返した。

一時の同盟結託のよしみか、彼らも共に夜を明かそうということになったのだ。

「なんなら子分にしてやってもいいぞ。ふたりまとめて」

「面白い人だ」

エリスの押しつけがましい勧誘に、鼻を鳴らすように笑うハーニス。冗談だと思ったのだろう。エリスは思いっきり本気であったのだが。

その隣でリフィクが、「そう答えればよかったんですね……」と後悔の念を惜しげもなく放出していた。

エリスら三人とハーニス、リュシールを含めた五人は、木々に囲まれた草の上に円になって腰を落ち着けている。その中央にはたき火があり、さらにその上に多種多様な具材の入った鍋が乗せられていた。

食材はすべて自分たちで調達したものだ。さすがに村からもらうわけにはいかない。

小動物の肉に、よくわからないキノコに、よくわからない野草に、よくわからない白っぽいなにか等々が、濁ったスープの中でぐつぐつと煮立っている。

ちなみに調理用具はすべてハーニスらの持ち物だ。かさばったり重かったりという理由から、エリスたちはそういったものは持ち歩いていない。

「さぁ。出来たよ、リュシール」

……最初からではあるのだが。

ハーニスとリュシールは、まるで雪山で遭難してしまったかのように互いに身を寄せ合い……というか、まぁ、早い話がイチャイチャしながらメシを食らっていた。

小鉢に取り分けたスープをスプーンですくって、ハーニスがふぅふぅと息を吹いて冷まし、リュシールの口に運ぶ。俗に言う「あーんする」というヤツだ。どこの俗だかは知ったこっちゃないが。

意外なのは、同じことをリュシールもやり返している点である。相も変わらず寡黙で人形ヅラのまま、自分のスプーンですくったスープをやはり息を吹いて適温まで下げ、ハーニスの口へ持っていく。

表情と行動の温度さはすさまじいが、別に強要されているというふうでもないようだった。

遠巻きから見るのなら、なんとも微笑ましいバカップルである。

そんなふたりを前にしリフィクはなにやら照れて視線を外し、レクトは気にしないように平静を装い、エリスは穴が開くほどの勢いでにらみつけていた。

遠くや視界の外でやってくれるぶんにはかまわないが、目の前でやられるとたまったものではない。

とはいえ、エリスがこれといった文句を吐いていないのは、食している謎のスープがなかなかいける味だったからだ。

なにが入っているのかよくわからないが、とにかくいける。目の前の奇行を含めたとしても。

調理を担当したのはハーニスとリュシールである。食事と寝床と、野営の準備を分担したのだ。

不満はあれどメシがうまけりゃ文句はない。エリスの中ではそういう基礎理論が成り立っていた。

「どういった理由で『キング』を？」

食事の片手間、ハーニスが問いかける。

体と顔と目はリュシールのほうへ向けられているが、声だけはエリスたちへと向けられていた。

「気に入らねぇんだよ。『モンスター』共が」

そのエリスが、吐き捨てるように答える。

「人を食うのも、好き勝手に暴れんのも、でかい顔してのさばってんのも」

それは修飾をしていない、あまりにも率直な気持ちであった。エリスは理屈ではなく感情に突き動かされて生きている。

「全部が気に入らねぇ。鼻持ちならねぇ見過ごせねぇ、ガマンできねぇ耐えられねぇ。他の誰にも任せちゃおけねぇ。だからやんのさ。このエリス・エーツェルが！」

「故郷の村を守りたいんですよ」

内情をダイレクトにぶちまけたエリスに代わって、レクトがもう少し外側にある理由を説明した。他人にわかりやすい理由、とも言えるものを。

「いつか『モンスター』が襲ってくる可能性があるのなら、もとを絶つのが確実で早い。そう考えて」

それはそれで飛躍した考え方ではあるものの、ハーニスは納得したように「なるほど」ともらした。

「目的は同じくも理由は人それぞれというわけですか。面白いものだね、リュシール」

後半、声が妙に甘くなる。そこだけ彼女に向けられた言葉だった

からなのだろう。
「……あなたたちは、どういうような理由で？」
ふたりを包む空気の外側から、レクトが同じ質問を投げ返した。
切り出されたからには気になるものだ。言いようからすると、少なくともエリスたちとは違っているみたいだが。
そこでようやく、ハーニスが目線をそちらによこした。
「世界を変えるために」
やや真剣さを含んだ声色。
そのひとことで、話のスケールがいきなりとんでもなく大きくなった気がした。
「『モンスター』にも憎しみを抱いていますが、我々はそれ以上にこの世界そのものを憎んでいます」
決して冗談や軽口の類ではない。
エリスとレクトは、思わず聞き入るようにハーニスを注視した。
「世界の担い手である『キング』を討伐することができれば、世界を根底から変えることも可能」
ハーニスの口調からは恒常的な軽さが消え失せていた。真摯な意気が言葉の端ににじみ出てきている。
「それが私の本懐であり素懐です。心から望む目的。果たすべき約束とも言えます」
それだけ告げると、ハーニスはため息をつくようにして苦笑った。
「初対面の方にはあまり言わないのですが」
その声には、それまでの軽妙さが戻っていた。
「あなた方とは、目的を同じくする同志ということで。特別に」
微笑んだ表情は柔和そのもの。彼が心を開いた証なのだろうか。
隣で密着しているリュシールは、やはり終始無表情でスープを食し続けていた。
「世界を……」
神妙な顔でぼそりとこぼしたリフィクの呟きを、耳に入れた者はいない。

第一章（4）

『モンスター』が姿を現したのは、二日後のことだった。

森にうずもれるように佇む小さな村。その入り口に三体。

薄暗い緑の皮膚は岩のようにゴツゴツとしていて、太い足にやや細い腕。頭部は薄く、異様に突き出た口とアゴから鋭利な歯がキラリと見え、ほぼ両側にまで離れた目が鋭く辺りを見渡している。

爬虫類の『ワニ』に近い風貌をした種族だと言えるだろうか。

鉄の胴鎧と兜を身につけ、腰に各々得物をぶら下げている。

見渡すかぎり、周囲に村人たちは見受けられなかった。代わりに野菜や肉など大量の食物が納められたカゴが、どうぞ持って行ってくださいと言わんばかりに置かれている。

それがこの村の住人たちの命の代価だ。村中総手でかき集めた、平穏無事な生活との引き換え券。少なくともこれを納めている限りは、『モンスター』から害をこうむることはなくなるのだろう。

とはいえ、その量はあまりにも多い。これほど大量に献上してしまったら自分たちが食べるぶんはどうなってしまうのだろうか。

いくら森に囲まれている村だとはいえ、そうそう多くは確保できないはずだ。

住民たちに元気がなかったり妙にイライラしていたのも、もしかしたら充分に物を食べられないせいなのかもしれない。

三体の『モンスター』はそんなことなど微塵も思わぬ様子で、淡々とした食物の入ったカゴへと歩み寄る。人間から見れば大きく思えるそのカゴも、『モンスター』からすれば軽々持ち運べてしまう程度のものでしかなかった。

カゴに手が触れるか触れないかという、そんな時。突然。

「おぅおぅおぅ！　おめぇらよぅ！」

水を打ったように静寂ただよう村に、場違いなほど威勢のいい怒

鳴り声が響き渡った。
「このあたしの預かり知らねぇところで、よくも勝手気ままに横暴やらかしてくれてるなぁ！　えぇ、おい！」
火を吹く勢いでタンカを切りながら、威風堂々と少女が現れる。
「だがそれも今日でおしまいよぅ！　他の誰がまかり通そうと、このエリス・エーツェルがてめぇらまとめて刺し身にしてやるぜ！！」
すなわち彼女が。
「……なんだ？」
三体の『モンスター』は一様に、呆気に取られた顔でエリスの姿を眺めていた。
まぁ、そうだろう。当然そうなる。
しかしエリスが剣を抜いた瞬間に、『モンスター』たちの眼光が鋭くなった。
得体はわからずとも意図はわかったからだ。
つまりは敵対者。自分たちに弓を引く者であるということが。
だがわかったからこそ、『モンスター』の目に生まれた緊張感が一瞬にして消え失せていた。たかが人間がなにを吠えているのか、と。
「なぁ、ジャヴァ」
『モンスター』のひとりが、エリスなどそっちのけで仲間に声をかける。まるで笑い話でも始めるように。
「人間の女ってのは、どう食うのがうまいんだったか」
「そりゃぁ、若けりゃ若いほど生がいい。それが一番だ」
話を振られた仲間は答えながら、エリスの体を舐めるように見やる。
「まぁ、こいつは脂が少なそうだから前菜にもならねぇだろうがな」
そしてゲラゲラと笑い出す三体たち。
『モンスタージョーク』というヤツなのだろうか。なにがどう面白いのかまったくわからない。
が、言葉の内容は明らかにエリスは揶揄したものだ。彼女にヒタ

イに青筋が浮かぶ。
「今のうちだけ笑ってろ、ワニ野郎共っ！」
言葉を完全に吐き終わらないうちに、エリスは彼らめがけて突撃していた。

「不意打ちにしましょうって言ったのに……！」
そんなエリスの独断専行を遠くから見ながら、リフィクは涙声をもらしていた。いいトシした男が出す声ではないが。
ガレキの山同然の家屋の陰から、ふたつの顔がのぞいている。それがリフィクにレクトだ。
その後ろでハーニスとリュシールが、ほとんど抱き合うような格好でつっ立っている。
「ど、どうしましょう……」
眉のハの字にしたリフィクが、誰に向けてでもなく尋ねた。
「どうもこうも。出て行くしかないでしょう、俺たちも」
答えたのはレクトだ。弱気でふにゃふにゃなリフィクとは違い、すでに覚悟を決めた目をしている。
不意打ちはもはや意味がない。ならばここはエリスの援護をするのが最善の選択ではないのだろうか。
正面から当たることになってしまうが、頭数は上回っている。勝てる要素はあるということだ。
「我々が足手まといではないと証明するチャンスのようですね」
事態に反してどこか冗談っぽく、ハーニスが口を開く。
そしてリュシールの手をそっと取り、その掌にやさしくキスをした。
「頼むよ、リュシール」
猫なで声でささやく。
当の彼女はやはり無表情のまま、彼の瞳を見つめ返していた。

三体の『モンスター』のうち、エリスの相手をしているのは一体だけであった。

残りの二体は少し距離を置き、余興でも楽しむかのように戦闘を眺めている。

エリスを完全に見くびっている証拠だ。舐めて、侮り、遊び、見下している。

逆を言えば絶好の勝機ではあるものの、エリスはあと一歩のところで攻め切れていなかった。

体格からしてひと回りもふた回りも大きな相手だ。客観的に見ても、やはりその優劣はいかんともしがたいものがあった。

『モンスター』が掲げた大斧が、エリスの頭上から振り下ろされる。

それを危ういところで外側へ避け、

「オーバーフレアっ！」

得意技による反撃をうち放った。握る剣から炎が吹き上がり、そのまま相手へ向かって斬りつける。

しかしなにやら異様な気配を察知したのか、『モンスター』は巨体に似合わぬスピードで後方へと跳びずさった。

炎の剣はなにもない空間のみを斬り裂く。

「……惜しい」

エリスは獣のように獰猛な表情で、歯を見せつけて笑った。今のが当たれば勝っていた……そういう自信に満ちあふれた顔だった。

「妙なマネを……」

そんな気概が伝わったのか、対峙していた『モンスター』が警戒心を高めて顔を歪ませる。

彼のみならず、傍観を決め込んでいた仲間たちも顔色を変えていた。エリスを対する認識を改めたのだ。

ただの人間ではなく、厄介なことをする人間であると。

対峙していた『モンスター』が仲間に目配せをする。

それを受け取った仲間たちは武器を構え、エリスを取り囲むべくのっしのっしと歩き出した。
「やっとわかってきたみたいだな、ワニ野郎共。このエリス・エーツェルが一筋縄じゃぁいかねぇ相手だってことが」
エリスは我が意を得たり、と笑った。自分を見くびっていた奴らを本気にさせてやったのだ。見返してやった。自分自身の力で。腕ずくで。
「お調子者で大口叩きだということはよくわかったよ」
正面に立つ『モンスター』が、まだまだ余裕をありあまらせた口調で吐き捨てた。
「遊びはこれくらいにしておこう。そろそろ引き上げ時だからな。ボスがオレたちの帰りを心配しちゃいけねぇ」
「下っぱの使いっ走りが、偉そうなことぬかしてんじゃねぇよ」
もはや条件反射的に言い返したエリスを、『モンスター』たちはあからさまに目の色を変えてにらみつけた。
図星だったのかもしれない。本人たちも気にしている痛いところを突いてしまったのかもしれない。
だがそんなことをかまうエリス・エーツェルではなかった。
「やるならとっととやろうぜ。四の五の言ってねぇで。問答無用ってヤツだ。あたしの好きな言葉をよ」
登場するなり口上と大見得を切っていたのは誰だったかはさておき。
言葉が終わった時、ちょうどエリスを囲む陣形が完成していた。彼女を中心に正三角形を描くように『モンスター』が立つ。
このまま同時に攻撃されたらひとたまりもないだろう。わかりやすい窮地である。
しかしそんな状況に置かれても、エリスに悲観的な表情は浮かんでいなかった。逆に胸は高鳴り、口元は不敵な笑みを形作っている。
その様子に、『モンスター』は不可思議なものを感じていた。得体の知れないものに直面してしまった時のような感覚が、頭のどこ

かに芽生えている。
それはエリスに飲まれてしまったということだ。無意識的ななにかが。
「やれるもんならな！」
エリスが自分の力を誇示するように舌なめずりをした、その時。
視界の端で、黒い風が吹いた。
次の瞬間、左の後方から奇怪な悲鳴が響く。
弾かれるように振り向くと、エリスを包囲していた『モンスター』の一体からまるで噴水のように紫色の血が噴き上がっていた。
「ジャヴァ！？」
残りの『モンスター』のどちらかが、仲間の名を叫ぶ。恐らく血にまみれた仲間の名前を。
ジャヴァと呼ばれた『モンスター』は、首筋を一文字に斬り裂かれていた。刀身が黒いロングソードによって。
『モンスター』の前で腕を振り上げその剣を握っているのは、黒く長い髪に黒い衣服を身につけた、黒ずくめの女だった。
リュシール。彼女である。
彼女は体をひねり、トドメの一撃を叩き込んだ。ロングソードがまるで野菜を切るように、『ジャヴァ』の頭を斬り飛ばす。
頭部は紫の尾を引きながら放物線を描き、体は立つ力を失い崩れるように地面に倒れた。
仲間の『モンスター』が、今度こそ呆気に取られて固まっていた。唖然。あまりに予想外の事態に、脳が働きを止めてしまったのだ。
そこへ、狙いすました矢が放たれる。レクトが射ったものだ。それは風を切り、エリスの正面に立つ『モンスター』の顔面を的確に貫いた。
うめき声がかき鳴らされる。
「オーバーフレアぁぁっ！」
そのスキを見逃さず、エリスが攻め立てた。
炎の剣でひと太刀。『モンスター』の胴を鎧ごとかっさばき、火

だるまにさせる。

第一章（5）

エリスが目の前の敵を倒した時には、すでにリュシールは残りの一体へと攻めかかっていた。

まさに風のように素早い身のこなしでロングソードを振りかぶる。そしてまったくの無表情のまま。ためらいも情けも感じさせずに、『モンスター』の左腕を肩からバッサリと斬り落とした。

轟く悲鳴。

驚異的な身体能力である。剣の腕前も、恐らくエリスを上回っているだろう。

強い、と認めざるを得ない

またたくまに仲間と片腕を失った『モンスター』は、今や混乱の境地にあった。

完全なる弱者としか見ていなかった人間に、手痛いまでの反撃を食らってしまったからだ。

ことの異常さを実感し始め、彼は一目散にその場から逃げ出した。なき片腕をかばうように必死に走る。

「逃がすかっ！」

それを追いかけようと吠えたエリスの視界に、紫の血にまみれた剣先が飛び込んできた。

「！？」

無意識的に目を見開き息を呑むエリス。リュシールの握るロングソードは、眼前で、まるでそこに見えない壁があるかのようにピタリと寸止められた。

紙一重とはまさしくこのことを言うのだろう。互いに少しでも動いていたら、紫ではなく赤い血が流れ落ちていたに違いない。

そこからひと呼吸、ふた呼吸を置いても、リュシールは剣を下げようとはしなかった。

エリスを封殺するかのごとく突きつけたまま。
「……なんだよ？」
トゲを多分に含んだ声で、エリスが口を開いた。彼女の燃えるような視線とリュシールの凍えるような視線が、火花を散らすまでにかぶつかり合う。
「逃げられるだろうが。おめおめと。……どかせよ」
手負いの『モンスター』は、すでに見えなくなるほど遠ざかっていた。
しかしリュシールはなにも答えない。まるで人形のように表情を変えず、言葉も発さず、鋭利な剣先と視線をエリスに突きつけているだけであった。
「てめぇに言ってんだよ、根暗女」
「彼女の悪口はそれくらいに。ブレイジング・ガール」
ひとりで勝手に一触即発状態になっていたエリスをなだめながら、ハーニスが割り込んできた。
その場に彼がやってきた途端。リュシールはあっさりと剣を引き、空振って『モンスター』の血を払い腰もとのサヤへと収めた。自分の役目を彼に譲り渡すと言わんばかりに。
エリスの矛先が、自然とハーニスへ移る。
「女の『しつけ』くらいちゃんとつけとけっ！」
「彼女の悪口はそれくらいにと言いましたが」
「奴らをとっつかまえて寝床の場所を吐かせなきゃならねぇってのに、みすみす見逃すようなことしやがって」
「私の思惑通りですよ」
「あー！？」
『ブレイジング・ガール』というより『レイジング・ガール』なエリスにもまったく臆することなく、ハーニスは飄々と言葉を並べていく。
「わざわざ白状させるよりも自分から案内させるよう仕向けたほうが楽だということです。こういう風に」

ハーニスは地面に目を落とす。つられてエリスも見ると、紫の血痕がところどころに散らばっていた。今々行われていた戦闘の残滓である。

その血だまりが一方向へ、まるで足跡のように伸びているのが見て取れた。先ほどの『モンスター』が逃げて行った方向へ続いていり。

「……」

エリスは面白くなさそうに顔をしかめた。

「『モンスター』というのは大抵、群れを形成していますからね。不測の事態が起これば必ず根城かボスのところへ逃げ帰る。この血のあとが道しるべになるという算段ですよ」

なにやら得意満面に、ハーニスが説明する。

たしかに、絞め上げて口を割らせるよりは早いかもしれないが。

「途中でくたばったらどうすんだよ？」

道しるべ代わりになるほど血を流しているのだ。アジトにたどりつく前に力尽きてしまうことだってあるだろう。

しかしハーニスはかぶりを振る。

「あの程度では死にません。『モンスター』ですから。人間と同じと思わないことです。そしてしばらくは血も止まらないでしょう。生かさず殺さず必要量の血を流させる、彼女の手加減の巧妙さを一緒に称賛しましょう」

ハーニスは一方的に言い放ちながらエリスなど眼中にないと言外に表して、凛々しく立つリュシールへと歩み寄った。

彼女の手をやさしく握り、今度はその甲へ唇をつける。

「ありがとう、リュシール」

そしてうっとりと、見つめ合った。

すぐにふたりだけの世界を作ってしまうのは、まぁ悪いことではないだろう。仲が良いということは。

ただ時と場合と話の流れは考えて欲しいものである。

「ふざけんなっ！」

自然と無視された形になったエリスは、ただよう甘ったるい空気を踏み荒らすように声を大きくする。
「死なねぇのは別として、途中で川とかに入られたらどうすんだよ？　止血とか……なんかとか、血のあとを消されたらよ！」
「そこまで頭が回る連中なら、きっと今頃あなたもここに転がっていたことでしょう」
『モンスター』はエリスの力を見誤り、娯楽ついでに返り討ちにしてやろうと考えていた。もしエリスの自信の源を推測し、警戒して最初から三体で対峙していたのなら、リュシールが駆けつける前に勝負がついしまっていただろう。ハーニスはそう言っているのだ。
「あんだと？」
それは『モンスター』に対する皮肉であったが、引き合いに出されたことがエリスの逆鱗を刺激してしまったようである。
「あんな奴ら、三体だろうが百体だろうが目じゃねぇよ！」
「あなたのそういうところ、好きですよ。頼もしい」
ハーニスはのらりくらりと言い抜けながら、戦闘で乱れたリュシールの髪を柔らかな手つきで直していく。
「でも君のほうがもっと好きで、もっと頼もしいよ、マイ・ステディー」
「そういうのは見えないところでやってろ！　濡れごとバカ！」
物言い以前に話のかみ合わなさにもフラストレーションを募らせていくエリス。
そんなところへ、やや遅れてレクトとリフィクもやって来た。
避雷針に誘われる雷のように、エリスの八つ当たりがそちらに向けられる。
「何なまけてたんだよ、てめーらはっ！」
なにもしていないリフィクはともかく、しっかり弓矢による援護を行ったレクトにしてみればいいとばっちりである。
とはいえそのリフィクも『魔術』を詠唱しているあいだに戦闘が終わってしまっただけなのだが。

「エーツェルさん、その……」
言い訳……という様子ではなく、なにやら狼狽しながらリフィクが口を開く。
彼の言葉を継ぐように、ふたりの後ろからこの村の住人たちがぞろぞろと湧いて出てきた。
二十人、三十人はいるだろうか。エリスは彼らへ向き直る。
「おう、礼はいらねぇぞ」
「なんていうことをしてくれたんだっ……！」
てっきり感謝のひとつでも返ってくるかと思いきや、どうやらそうではなかった。村人たちはなにやら責め立てるような目でエリスらを見ている。
「『モンスター』に逆らうようなことをして……目をつけられたらどうするんだ！」
代表者なのかなんなのか、壮年の男性が先頭に立ってエリスに詰め寄る。
「奴らを怒らせでもしたら、こんな村はひとたまりもない……。よそ者が勝手なことをするな！」
正論、ではあろう。それを恐れてこの村は『モンスター』に従ってきたのだから。
「どう責任を取るつもりだ！　この村すべての命、その責任がお前に取れるのか？」
ははーん、とエリスは気付く。きっとレクトとリフィクは、先ほどまでこうして彼らにからまれていたのだろう。取りつく島がなさすぎたためにエリスに助けを求めにきたと、そんなところか。
たしかにこういうことはエリスに任せたほうが早い。
「我々はただ平和に暮らしたいだけだ。それを……」
「ねちねちねちねちと、卑屈なことぬかしてんじゃねぇーっ！　頭だけじゃなく目までヤられてんのかてめーら！」
レクトの期待を裏切らず、男性の声をさえぎって怒鳴り返すエリス。

「なっ…」
「よく聞け！」
一切の反論を許さず、たたみかける。
「そんでもって見ろ！」
そして地面を指差した。人差し指の先にある『モンスター』の死体。そこに全員の視線が集まった。
「てめーらがビビって恐れておののいて、へり下っておべっか使ってご機嫌とってた『モンスター』って奴らだ！　やられてるだろうがっ！」
迫力に圧倒されてか、村人たちは息を呑んで言葉を失う。
「今度はあたしを見ろ！」
言われるがままに、集まった視線がそのままエリス一点へと移動した。
「あたしがヤったんだよ！　この妖怪変化も裸足で逃げ出すエリス・エーツェルが、てめーらが勝てねぇとあきらめた『モンスター』をぶった斬った！」
「片方は『彼女』が、ですが」
細かく口をはさむハーニス。
「黙ってろ色情魔！」
あしらうように吐き捨てて、言葉の続きを叫び散らす。
「わかるだろうがっ！　連中よりあたしのほうが強いってことが！　その強くてカッコイイあたしが連中をぶっ倒してくるから、てめーらは景気良く祭りでも開いてイイモン食ってろっ！」
献上すべき『モンスター』がいなくなれば、かき集めた食料は村のものとなる。たしかに祭りにしても余るくらいの量はありそうだが。
「以上！　終了！」
一方的に言い終わると、エリスは脇目も振らずに村の外へと歩き出した。『モンスター』が逃げて行った方向へと。
あとを追うようにレクト、ハーニス、リュシールも続き、

「しっ……失礼します」
最後にリフィクが律儀にも頭を下げ、いそいそとその場を去って行った。
騒がしかった村の入り口付近が、一気に静まりかえる。
残された村人たちはまくし立てられた勢いに負けて言葉を飲み込んでしまっていたが、やがて息を吹き返すように小さな喧騒が生まれ始めた。

第一章（6）

くそっ、くそっ、くそっ！

そんな言葉を何度も吐き捨てながら、彼は必死に走っていた。

体が重く、視界がかすみ、頭が朦朧としていたが、それでも必死に。

ボスのもとへ急ぐためにと。

……片腕を斬られてしまったことは、特に問題ではない。自分たちの種族は腕だろうと足だろうと、時間が経てばトカゲのシッポのように再生することができるからだ。痛みもガマンできる。

命さえ残っていれば問題はないのだ。

問題なのは、その命を失ってしまった仲間がいるということ。

簡単な役目のはずだった。

近くにいくつかある小さな村のひとつにいつも通りに行き、食料を奪うだけだ。度重なる力の誇示により、住人たちは抵抗することもなく差し出してくる。それをただ運ぶだけ。

なんならついでに暴れてきてもいい。そんな簡単な、子供でもできる仕事のはずだった。

それを人間ごときに。人間なんかに邪魔をされようとは。仲間がやられようとは！

よりによって今日。自分が担当のところ、時にこんなことが起きるなんて……！

傷を負わされ、ふたりも仲間を討たれ、おめおめと逃げ帰る自分を見てボスはどうするだろう。

笑うだろうか。怒るだろうか。仕返しに動くだろうか。

どれでもいい。とにかく知らせなければならないのだ。

自分たちをあっさりと倒してしまう人間が近くにいるということを。

体の重さが限界に達しようとした頃、彼の目にようやく帰るべき我が家が飛び込んできた。
アジトだ。やけに遠く感じた道のりももう少しで終わる。
そう思うと尽きかけていた体力も復活してきた。
最後の力を振り絞って走る速度を上げようとした、その時。
突然、彼の視界が上方へズレた。
転んだわけでもないのに見える景色が上へ向かい、青い空が映る。
そのまま視界は回り、ぐるりと一回転するように天地が逆転し、自分の後方が見えた。
そこにいたのは、首と片腕がない、自分と同じ種族の奴。そしてそのすぐ近くで、黒ずくめのあの女が血にまみれた剣を高々と振り上げていた。
……ひどいことを、しやがる……。
最期にそれを思い、彼の意識はぶつりと途絶えた。

宙を舞った『モンスター』の首が、草むらの上に落ちる。
取り残された体も立つ力を失い、うつ伏せにどさりと倒れた。
リュシールを剣を振って血を払い、サヤへと戻す。一連の動きは、ハーニスでなくても見とれてしまうほどあざやかな所作だった。
「美しいよ、リュシール。まるで女神のようだ」
「容赦なく首をぶった斬る女神がいるかよ」
エリスのぼやきもなんのその。ことが終わるや否や早速、彼女に歩み寄るハーニス。
「……本当にあれが、『モンスター』の居所なんですか？」
それを阻もうとは考えていなかったが、それに近いタイミングでレクトが口は挟んだ。
視線はななめ上。木々の中にそびえる石造りの建造物へと向けられている。
それはまるで砦のようだった。城壁や門こそないが、近付く者を

すべて迎撃すると言わんばかりの迫力と巨大さに満ちあふれている。
「間違いなく」
ハーニスは迷いなく断言してみせる。
「感じるんですよ。あの中でうごめく『モンスター』たちの醜悪な気配を」
「気配……？」
と言われても、レクトにはあまりピンとこなかった。五感を働かせるにしてもこの距離はやや遠い。もう少し近寄らなければなにもわからないだろう。
「あなたも感じているでしょう？　我々と同じものを」
ハーニスは、最後尾のリフィクへと質問を投げかけた。
「えっ。えぇ、まぁ……なんとなく。なにかがいるかなということくらいは……」
リフィクはなにやら言いにくそうにしつつもそう答える。それを聞いて、ハーニスは満足したように小さくうなずいてみせた。
旅を長くしていると、そういう感覚も研ぎ澄まされていくのだろうか？

「それでは作戦ですが」
話を変えて切り出すハーニスに、
「なんでてめーが仕切ってんだよ」
口を尖らすようにしてエリスがつっかかった。なんとも難癖をつけているに近いが。
「ブレイジング・ガール。そう怖い声を出さずに」
だがハーニスは微笑んで、やさしく諭すようにとりなした。実に大人な対応である。
「仲良くいきましょう」
「てめーが言うかよ」
エリスの虫の居所の悪さは、つまるところハーニスの言動に原因があった。エリスを揶揄するようなことを言ってしまった辺りから

始まり、ここまで彼の言うがままに行動してしまっているのがどうにも気に入らないのだ。

なんでも自分で決めたいエリスである。そしてなんでも自分が一番なのがいいエリスである。

とはいえ殊勝にも従っているのは、ハーニスの言うことにも一理あると認めている部分もあるからだ。

そういう矛盾が表に出てきてしまっているのである。

その様子を、レクトは「いつものことか」と諦観したような顔で。リフィクは仲裁に入りたいもヤブヘビを恐れた困り顔で。リュシールはやはり無感情な顔で、それぞれ見守っていた。

「先ほどの、私の言葉がしゃくに障ってしまったのなら謝ります。失礼。失敬。ごめんなさい」

ハーニスはペコリと頭を下げる。

まるでふざけているような物言いではあるが、態度や声は真面目そのものだった。

「なにせ、あなたが『彼女』をさげすむようなことを口走られたので……私もつい、意地の悪いことを言ってしまったのです。お許しください」

ハーニスは頭を上げると、融和的な笑みを存分に浮かべて再びエリスを見つめた。

「捨てましょう。そんなわだかまりは。巨悪を倒すために」

その言葉に偽りはない。口よりも雄弁な彼の目がそれを物語っていた。

「あまりご存じないようですが、私はあなたのことをとても買っているんですよ。あなたの強さ……そして我々と同じく、『モンスター』に抗う心を持っていることを。肩を並べるに値するほど」

への字に曲げられていたエリスの口が、わずかに戻る。

「村で対峙しここにも転がっている『モンスター』は、『鋼鱗族（こうりん）』と呼ばれる種族でして。名前の通り鋼のように強固な皮膚と、そして熱に強い耐性を持っているのです。本来なら効きにくいはず炎の

技でたやすく打ち倒してしまう、あなたの強さはまさに本物と言えるでしょう」

「そりゃぁ……当たり前だろ。そんなこたぁ当たり前だ。あたしにかかりゃぁ、どんな『モンスター』だろうとひとひねりだからな」

そしられるのは大嫌いなエリスだが、褒められるのは大好きなエリスでもある。木に登るとまではいかないが、確実に彼女の機嫌は向上していた。

それを察知し、リフィクはほっと胸をなで下ろす。

レクトは足元に転がるワニのような『モンスター』を見下ろして、ふと思った。鋼のように強固な皮膚……それをまるで紙のように両断せしめる『彼女』はいったい何者なのか、と。

思っただけで口には出さなかったが。

「さて。では作戦ですが」

ハーニスは軽やかに、中断されたそれを再び切り出す。

「作戦もなにも、とっとと乗り込んじまえばいいじゃねーか」

が、再びエリスが割って入った。今回は悪意はなく、ただ単にナチュラルな発言であるが。

「……まだ日が高いですからね。夜になるまで待ちましょうという話ですよ」

ハーニスはエリスの視線に留意しながら、言葉を選ぶ。

「もっとも、最終的な判断はあなたに任せますが。今すぐ乗り込んで外に出払っている連中を取り逃がすか、全員が寝床に戻ってくるのを待って攻め込むか。そのどちらかを」

「……しょうがねぇ、待つか。一網打尽にしたほうが気持ちがいいからな」

ほとんど誘導尋問にも近かったが、そういう言い方ならばエリスも従うより他はない。短いあいだで、ハーニスは彼女の性格を把握しつつあるようだった。

『モンスター』の死体を見つかないよう隠して、五人はひたすら日が落ちるのを潜んで待っていた。

そのあいだに、ハーニスが作戦とやらの続きを語る。

「狙うは『ボス』です。『モンスター』たちの作る群れや集団、それを率いているのが、群れの中で最も力の強い『ボス』。それを倒してしまえば、手下らの士気をかなり奪うことができるでしょう」

エリスは故郷の近くにいた『モンスター』を思い出す。たしかにあの中にも、他の奴らよりひと回りは強そうな『モンスター』がいた。あれがあの集団の『ボス』だったのだろうか。

「要は我々が目的とする『キング』を討つということと同じですよ。真っ先に頭を潰し、手足の動きを殺す」

数の上での不利は免れられない。多数の敵に立ち向かうためには有効な手段のひとつだろう。

「そこで、ふた手に分かれましょう。私とリュシール、そしてあなた方三人が左右からアジトに乗り込み、ピンポイントで『ボス』を捜索します。見付けたあとはそのまま倒してしまってください。我々もそうしますので」

さらりと倒せとは言うものの、そのボスがどれほどの力を持っているのかまだわかっていないはずだ。

彼には、相手のことなど構わないほどの自信があるのだろうか。

自信しかないエリスは、当然そんなことは気にも止めずにハーニスの話に耳を傾けている。

「もし苦戦するようなら、退散してしまってもいいですよ。騒ぎになれば居場所もわかるでしょうしね。『彼女』が確実に息の根を止めますから、ご安心を」

「そいつは心配ご無用ってヤツだよ。苦戦にも退散するようなことにもなんねぇ。ちゃっちゃと片付けてやるよ」

エリスはいつも通りというのかなんというのか、なんの根拠もなくそう言い切った。

「結構。期待していますよ」

第一章（7）

夕焼けも落ち着き、空から赤みが消え始めた頃。
「そろそろですね。参りましょうか」
草陰からじっと砦を見つめていたハーニスが、振り返って口を開いた。
感じる気配とやらで攻め込む頃合いを判断したのだろうか。
すでに用意はできていたと言わんばかりに、如才なく立つリュシール。
ハーニスも草陰から腰を上げると、待ちくたびれて昼寝を決め込んでいたエリスへと目線を落とした。
そして肩をすくめる。
エリスは土の上だというのに、まるで天日干ししたばかりのシーツにくるまれているかのごとくスヤスヤと寝入っていた。
仇敵のアジトを前にして、なんとも神経のず太いことである。
「エリス。起きるんだ」
レクトが体をゆすって起こそうとするも、一向に目覚める気配は見られなかった。まさに熟睡とはこのことを指すのだろう。
とはいえ悠長に待ってもいられなかったため、レクトは強行手段に出ることにした。
抱きかかえるようにエリスの上半身を持ち上げ、彼女の頬をパシーンとひっぱたいたのだ。
するとまるで条件反射のごとく、眠っているはずのエリスの手が、レクトの顔面をバチーンっと的確にとらえた。無意識下での反撃である。
暗くなり始めた森の中に、二発の小気味良い音がつながるように鳴り響いた。
エリスは重たそうなまぶたを持ち上げ、大きくあくびをする。さ

すがに起きたようだ。
「……叩いた？」
「寝ぼけている場合じゃない。時間だ」
なぜか顔面を押さえているレクトに指摘され、状況を思い出す。
目と鼻の先にある『モンスター』のねぐら、そこへ攻め込もうとしていたのだった。
エリスはまどろみが抜けきれてない様子で立ち上がり、頭をかき、なんとなく痛いような気がする頬をなでた。
「……叩いたよな？」
「……」
無言のレクト。
否定しないということは肯定だ。幼少期からの経験によりそれを把握しているエリスは、カマキリが獲物をとらえる時のように素早く、レクトの頬をスパーンとぶっ叩いた。
因果応報。やったらやり返されるのは仕方のないことである。
とはいえこの場合、反撃はすでに済ませてあったのが問題だ。本人の意図していない時に。
ナチュラルに倍返しをしてしまう辺りに、エリスの転んでもただでは起きない性根がうかがえる。

「あのー、なんだか今さらなんですけども……本当に乗り込むおつもりですか？」
おずおずと、リフィクが口を開く。
本当に今さらである。ここまで、言う機会も時間も山ほどあったろう。こういうところに彼の往生際の悪さがにじみ出ているというものだ。
「お気持ちはわかります」
しかしハーニスは呆れるでもつっけんどんに返すでもなく、丁寧に応対した。
「相手は『モンスター』。凶悪な者たちです。しかし大丈夫。私の

リュシールが、行く手をふさぐすべてを切り開いてくれますから」
自信たっぷりな豪語。こちらもこちらで、あまり根拠を伴っていなさそうな自信であった。
「ですが、やはり無謀な気が……」
「ハナっからできねぇと思ってるてめーにはできねぇだろうよ！」
依然として消極的なリフィクへ、エリスが割り込むように喝を入れた。どうやらまどろみはどこかに引っ込んだらしい。
「けどあたしは違う！　やると決めたことをただやるだけだ！」
エリス・エーツェルの過剰なまでの自信。それはなによりも自分自身を信じ疑わないというところに起因しているのではないだろうか。
病は気から、などという言葉もあるように、精神的の姿勢というのはなかなかどうして侮れないものである。
「子分だったら子分らしく、あたしの後についてきてりゃあいいんだよ！　余計なことは考えんな！」
「の、望んで『子分』になったわけでは……」
リフィクは口を尖らせて、ぐちぐちとこぼす。
たしかに子分にさせられたのも旅に連れてこられたのも、エリスの恐喝寸前の迫力に負けたせいだ。ひと回り弱も年齢が下の少女に気迫負けしてしまったからである。
が、最終的に選んだのは自分なのだ。あきらめるということを選んだ。それに変わりはない。うじうじとぼやいているのは男らしくないというヤツだ。
「黙ってあたしについてこいっ！」
そんな諸々を、エリスはそのひとことに簡略して叩きつけた。

「始めましょう。では、我々はあちらから」
改めて仕切り直し、ふた手に分かれるべく行動を開始する。
ハーニスはリュシールの腰に手をそえながら、黒く染まりつつある森の中を歩いて行った。

「……あいつら、あのまんま茂みでチークタイム始める気じゃねーだろーな」

彼らの背中をにらみつけて、エリスが呟く。たしかにそんな雰囲気ではあるが。

「それは……ご本人方の自由ですよ」

微妙に赤面しながら著しくズレたフォローを入れるリフィク。

それを横目に、

「彼らの心は本物だ。俺たちこそ、彼らの信頼に応えるべきだろう」

とレクトがまっとうなフォローを入れ直した。

ふたりきりになった途端に、ハーニスが熱っぽくささやきかける。

「どこまでがんばれると思う？　あの三人」

リュシールはなにも答えず、一度だけハーニスの目をのぞき込んだ。

まるでそれだけで意志の疎通が計れたかのように、ハーニスはふっと顔をほころばせる。

「僕はね、とても期待しているよ。もしうまくいったらこれからの旅も彼らと一緒に行こうか？」

リュシールはやはり、なにも言わなかった。

ハーニスはそんな彼女の髪を、片手でいとおしくもてあそぶ。

もともとが巨大な建造物なだけに、辺りが暗いと輪をかけて圧迫感を覚えてしまうものである。

「さて、どうやって乗り込むか」

石造りの外壁に手をはわせながら、エリスが呟く。

近くに来てみてわかったが、どうやらこの砦は相当古いもののようだった。歴史的知識が皆無なエリスにはまったく見当もつかないが、とにかくだいぶ歳月が経過しているように思える。故郷の近く

にあった遺跡……あれと良い勝負ではないだろうか。
「……上から行くか」
顔と目を持ち上げるエリス。
この砦のようなアジトは恐らく二階構造だろう。一階部分だけでも巨大であるが、その上にさらに凸型の二階階部分が乗っかっている。
普通の出入り口から正面切って乗り込んでもいいのだが、それではあまりにも芸がないというものだ。そのパターンはもう少し後に取っておくことにしよう。
「なぁ、ばーっと飛べる『魔術』とかってねぇの？」
エリスは振り向いて、リフィクに尋ねた。
「えーと……ないこともないんですけど、とっても危険なのでやっぱりないです」
どこか含みのある言い方である。
「なんだよ、じゃああるのか？」
「いえ、だからないですって」
ふたりが話す間、レクトは黙々となにかをこしらえているようだった。
荷物の中からロープを取り出し、その先端にナイフの柄を結びつける。簡易な『かぎなわ』といったところだろうか。
それをカウボーイよろしく振り回して、
「あぶねっ！」
勢いをつけてナナメ上へ投げ飛ばす。
弧を描いた即席『かぎなわ』は、吸い込まれるようにして二階のバルコニーへと放り込まれた。
ロープを引っ張ると、うまい具合いにナイフの部分が欄干に引っ掛かったようである。あっというまに侵入路が完成してしまったというわけだ。
「おおっ！　でかした」
「すごいですね。一回で……」

リフィクは顔を上へ向け、ついでに口を半開きにして、感心するように呟く。いろいろと要領の良い手腕だった。
「持つべきもんは弟分だな」
エリスは誇らしげに歩み寄りながら、当たり前のごとく一番乗りを果たそうとロープに手をかける。
が、それに先んじて、レクトが腕の力だけで軽々とロープを登り始めた。
「エリスは一番最後だ」
「なんでだよ!?」
当然のように飛んでくる抗議。
エリスを先に行かすと、上に登った途端、仲間の到着も待たずに突撃してしまう恐れがあるからである。というか確実にそうなるであろう。
「大将は後ろでドンと構えているもんだろう」
思うは思うものの口に出すといろいろと問題が出てくるため、レクトは適当にお茶は濁した。
こういうことを自然に行える辺りに、ふたりが共に過ごしてきた時間の長さがうかがえる。
が……兄弟姉妹のように一緒にいたとしても、相手のことなど完全にはわからないものである。
一瞬は「それもそうか」と納得しかけたエリスだったが、文字通り一瞬後に「いや、そうじゃねぇ」と思い直す。
「大将だからこそ一番槍だろ！　後ろでふんぞりかえってたってつまんねぇよ！」
感じ思ったことをそのまま口にしながら、エリスは目の前にぶら下がるロープへと飛びついた。
ちなみに先ほどから大声を上げまくっているため、侵入する前に見付かってしまうのではないかと気が気でないリフィクである。
「なにを考えている！」
レクトの叱責も右から左へ、ひょいひょいと身軽にロープを登っ

ていくエリス。
「だからあたしが一番槍だって言ってるだろうが。どけよ！」
「無茶を言うな！」
段々と空気が弛緩していく。
エリスが暴れるために、ふたりのつかまるロープは大きく揺れ始めていた。
「あ、危ないですよーっ……」
リフィクの注意も、時すでに遅し。
ロープの振動につられて上で引っかかっていただけのナイフが動き、ズレ……弾き飛ばされるようにして外れてしまった。
そのあとのことは言うまでもない。

第一章（8）

そんな茶番を経て、ようやくアジトの二階バルコニー部へと侵入を果たした三人である。

日は完全に沈み、辺りは暗闇に包まれていた。もはや光がなければ、すぐ先になにがあるのかもよくわからない。ただよう空気も心なしかひんやりとしてきた。

バルコニー部分はおおよそダブルベッドほどの広さしかないだろうか。三人も並ぶとやや窮屈さを感じてしまう。

物はなにも置かれておらず、正面に木の扉がポツリと備えられているだけだった。『モンスター』サイズにこしらえられているのか、普段目にするものよりひと回りもふた回りも大きな扉である。

その隙間から、室内の明かりが漏れ出ていた。

ここから先は、まさに死地だ。

扉ひとつくぐれば敵地。人間をはるかに凌駕する強者たちが待っている。

ハーニスの感覚を信じるならば、かなりの数の『モンスター』が集まっているはずだ。

その中に突撃し、下っぱ共をくぐり抜け、控える『ボス』をうち倒す。そんなタイトロープ渡るような戦いがこれから始まるのだ。

この扉を開けた瞬間から。

「……行くぞ」

さすがのエリスも気を引き締めているのか、なにやら神妙な顔で口を開いた。

そして木製扉に寄る……と思いきや逆に、バルコニーの先まで後退する。

ふたりの見守る中。エリスはそこから助走をつけ、

「だらっしゃぁっ！」

と珍妙なかけ声を発しながら、扉を飛び蹴りでぶち破った。

「なんだっ……！？　人間！？」

飛び込んだすぐ先の部屋で、早速『モンスター』と出くわしてしまった。

そこは外面とたがわず石壁に石床に石天井な、かなり広い部屋だった。中央あたりに赤いカーペットが敷かれ、丸テーブルや棚が置かれ、天井近くに燭台が並んでいる。

その丸テーブルに、二体の『モンスター』が腰かけていた。テーブルの上に酒のビンやグラスがうかがえるあたり、晩酌でもしていたのだろうか。

どちらも昼間に見たのと同じ、ワニに酷似した特徴を持つ種族のようだった。

ハーニスがなになに族と名前を口にしていた気がするが、エリスはまったく覚えていない。

エリスたちの出現に声を出して驚き腰を浮かした『モンスター』が他のそれとさほど変わりない容姿をしているのに対し、もう一体はかなり異質な雰囲気をただよわせていた。

サイズがひと回りは違う。でかいのだ。単純に巨大。

それだけではなく体の色もより濃く暗く、顔にも風格じみたものが見て取れた。明らかに他の連中とはなにかが違う。

「先手必勝！」

しかしエリスはそんなこともお構いなく、問答無用に剣を抜き放ち烈火のごとく突撃した。

普通サイズの『モンスター』が、大型なほうをかばうべく前へ飛び出す。

「ボス！　ここは私が！」

「ボスーっ！？」

『モンスター』の放った言葉を耳にし、エリスは勢いあまってすっ転んでしまった。

今、確実に口にしたはずだ。『ボス』と。
「いきなり!?」
リフィクも思わず声を上げた。
言われてみれば、たしかに『ボス』である。雰囲気がそれっぽい。しかし、いくらなんでも早すぎるだろう。たまたま真っ先に乗り込んだ部屋にボスがいるなんて、そんな都合のいいことがあっていいのだろうか。
先手必勝と言いつつとんでもない不意打ちを食らってしまったエリスである。
「まぁいい。幸運すらをも従わせる女だってことだ、あたしは！このエリス・エーツェルは！」
ことあるごとに自分の名前を口にしたがるのは自己顕示欲の表れなのだろうか。
エリスはすぐに飛び起き、剣を正眼に構え直す。
目の前に立ちはだかる『モンスター』は、やはり村で出くわした連中と寸分たがわぬ姿をしていた。
連中同士はどうだか知らないが、少なくともエリスには皆同じに見える。
『モンスター』は胴鎧をつけてはいるが、くつろいでいたためか武器は持っていなかった。素手。とはいえ鋭利な爪や強靭な腕力などは、それだけで充分に脅威に値するが。
手下の後ろから、『ボス』が不敵な様子でエリスたちを眺めていた。乗り込んだ時と変わらず、イスに腰かけたまま。手下とは違い、みじんの動揺すら見受けられなかった。
うなずける。心身共に『ボス』なのであろう、奴は。
「夜襲とは。気でも狂ったか……人間共」
手下の『モンスター』が、低く呟く。基本的にエリスたちのことを見下してはいるものの、そこはボスと同席していただけのことはあるのか、油断はしていなかった。
正対しているエリスだけではなく、彼女の後ろに控えるレクト、

リフィクにも威嚇するような視線を飛ばしている。相手の出方をうかがうべく。

なかなかできる奴のようだ。

「あたしにしてみりゃ、てめぇらにへーこら頭下げてる奴らのほうがよっぽど狂ってるように見えるぜ」

しかし、そんなことはお構いなしなエリスである。

相手の力は重要ではない。自分の力をいかに発揮するかが重要なのだ。

自分が上回っていれば勝つし、下回っていれば負ける。ただそれだけのことだ。やらなきゃわからないことをやる前から考えるのはバカバカしい。

戦いというすべての場合において、エリスの頭にあるのはそれだけだった。

今回も同じ。

「あたしは嫌いなんだよ、てめぇらが。嫌いなもんを片っぱしからどかしてきゃぁ、楽しい生活ってのが手に入る」

相手の力量は考えない。相手が強ければ負けるし、弱ければ勝つ。

「そういうもんだろ、人生ってヤツは」

もし負けてしまったのなら、自分はそこまでの存在だったということだ。いっそ死のうが悔いはない。

日々を全力で生きているからだ。

自分の心をごまかしたり、隠したり、遠慮したり出し惜しみしたりしない。常に思うままに、思う通り生きている。故にエリス・エーツェルに後悔の二文字はなかった。

全力を尽してなお果てたのなら、それはそれで満足な死に方なのだ。

「けど大抵の奴はしねぇんだよな、そういうことを。嫌いもんを嫌いなまんまで放っといてやがる。それこそ狂ってるぜ」

エリスの自己主張に、目の前の『モンスター』はまるで耳を貸し

ていなかった。
貸すまでもない、といった心境なのだろう。なにをわけのわからぬことを、と。
恐らくはエリスたちのことを単なる侵入者としか思っていないからだ。
自分たちの縄張りに入り込んできた不届き者。それをただ排除するのみ。あわよくばボスに良いところを見せよう。頭にあるのはそんなところではないだろうか。
だから油断はしていなくとも、付け入るスキというものが生まれてしまうのだ。
「あたしは違う。大嫌いなてめぇらを根こそぎぶっ倒して、楽しい生活をつかみ取んのさ。グッドな未来ってヤツを！」
エリスは剣を背負うようにして振りかぶる。

その意見にはレクトも同意だった。平和な暮らしを勝ち取るには『モンスター』を討つしかない。
仲間の仇や村を守るためという大義名分はあるものの、究極的にはそれである。
自分の力量は知れているが、エリスならそれを成し遂げてくれる。そう信じているからこそ、こうして一見無謀とも思える旅にもついてきているのだ。
たとえ年下であろうとも、女であろうとも。彼女の双肩を頼もしく思っているから。
「エリス！」
「この腕っぷしでっ！」
レクトの声に背中を押されるように、エリスは仇敵めがけて突っ込んでいった。

『モンスター』と戦うなど、少し前のリフィクからすればとてもじゃないが考えられないことだった。

状況（というかエリス）に流されてこんなことになってしまっているのに対し、少なからず後悔はある。

しかしそこで立ち止まるほどリフィクは愚かではなかった。

流されているのなら、流れの中で体を動かす。かろうじてそれができるくらいの根性は持ち合わせていた。

考えようによっては、やることは簡単である。最悪な結果にならないように、ベターな行動を取ればいい。あとは『流れ』がなんとかしてくれる。

この場合の最悪な結果とは、エリスもレクトもリフィクも、三人ともども死んでしまうことだ。『モンスター』に殺されてしまうこと。

それを避けるべく行動すればいい。彼女らを助ければ、自然とそれにつながっていく。

普段ならすくんでしまうような足も、他人の命がかかっているとなると不思議としゃんとしてくるものだ。

だからリフィクはそれを唱える。

「フラッシュジャベリン！」

天井ギリギリに出現した光の槍が、一直線に『モンスター』の体を刺し貫いた。

しかし攻撃速度を優先したために、物理的なダメージはほとんどないだろう。体の神経伝達を鈍らせ、動きを一瞬だけ制限する程度である。

が、充分すぎるほどの援護。

そこへ、バッチリなタイミングでエリスが飛び込んだ。

『モンスター』の首筋に狙いを定めて剣を振り下ろす。

この上ないというほどの直撃。

しかし剣先が生んだのは鮮血ではなく、甲高い衝撃音だった。

刃が通っていない！

『モンスター』の強靭な皮膚が、エリスの渾身の斬撃を防いでしまったのだ。

硬い……！　剣を持つ手がシビレが走る。
その直後。『魔術』の拘束から復活した『モンスター』が、無防備に近いエリスめがけて右腕を振りかぶった。
鋭利な爪は、もはや刀剣などと変わらない。
レクトの射る矢も皮膚に弾かれ、『モンスター』の腕はまっすぐ振り下ろされた。
石床に敷かれたカーペットの上に、ひとつまみほどの茶色い髪と赤いハチマキがハラリと落ちる。
軽やかに後退して距離を置いたエリスは、やや寂しくなった自分のヒタイを無意識のうちに押さえていた。
「……気に食わねぇなぁ。あの氷像姉ちゃん、いったいどんな剣振ってやがる」
そしてあらぬ方向へ向け、面白くなさそうに舌を打ちつけた。

第一章（9）

「けどな、あたしにはコイツがある！」
エリスは気を取り直し、再び剣を振りかぶる。
その間にも、レクトによる援護射撃は続けられていた。
『モンスター』の頭部を中心に、文字通り矢継ぎ早に連続して矢をお見舞いしていく。
レクトの狙いは正確だった。それ故に、『モンスター』は矢を防ぐのに集中せざるを得なくなっている。
顔を覆う腕、その外皮によってすべて弾き落とされてはしまうが、『モンスター』の動きは完全に止まっていた。止まらなければならないということなのだろう。
鋼のように強固な皮膚に守られているとはいえ、やはり急所はあるようだ。泣きどころとも言うべき弱点が。
それは後方に控える『ボス』も同じなのかもしれない。レクトがそれに思い至った時、
「フラッシュジャベリン！」
リフィクが、先ほどと同じ『魔術』をもう一度うち放った。
光槍はたがわず『モンスター』に命中する。防御していた腕がだらりと下がり、無防備な体があらわとなった。
「燃えろ！」
そこへすかさず、エリスが走り込んでくる。振りかぶった剣からまばゆいばかりの炎が吹き上がった。
「オーバーフレアぁっ！」
『モンスター』の首筋を、灼熱をまとった刃がばっさりと両断する。
直前の不手際を帳消しにするほど、それは鮮やかな切れ味を見せつけた。

火だるまと化した『モンスター』の頭が飛び、床に転がる。
するとカーペットに火が燃え移り、またたくまに炎が広がってしまった。
エリスたちは慌てて、部屋の隅へと待避する。カーペットは中央部にしかなく周囲は石造りなため、それ以上燃え広がる心配がないのが救いといえば救いだった。
「我が片腕ガーディフを葬るとは……それなりに腕の立つ人間ではあるようだな」
ゆらめく熱気の向こうから、低い声が響く。
今まで戦いを静観していた『ボス』が重い腰を上げ、燃え盛る炎の中に平然と立っていた。
まるで猛火などなにするものぞ、と言わんばかりの振る舞い。
「自信の源は『魔術』とやらか。こんな辺境にも使い手がいるとは驚きだ」
座っていた時も思ったが、立ち上がって改めて思う。でかい。
手下の『モンスター』の時点で一般人よりもひと回り大きな体をしているが、この『ボス』はさらにそのひと回りは巨大である。
エリスと比べると、まるで犬と馬ほどの違いがあった。
もはや頭が天井に届きそうである。
「だが所詮、そんなものは付け焼き刃よ」
『ボス』はただでさえ大きな口を、さらに大きくしてニヤリと笑った。
その巨体は美術品を思わせる彫刻の入った胴鎧で包まれている。
足を守るブーツにも同じ意匠が見て取れた。
案の定武器は手にしていないものの、巨大さそのものが凶悪な武器になる。やはり人間と『モンスター』。基本的な部分からして大きく水をあけられているのだ。
「弱者の浅知恵。圧倒的な力の前では、なんの役に立つものぞ」
「言ってろよ、ボンクラ！」

ボスの放つ威圧感にまったくひるむことなく、エリスが猛々しく言い返す。そういうところは彼女の数少ない美点であろう。

背後に控えるレクトやリフィクからは、さすがに少なからず気圧されているような様子がうかがい知れた。

「わかってんのか？　てめぇの子分がもう何匹もやられてんだよ。あたしが！　このエリス・エーツェルが叩きのめしたんだよ！」

正確に言うなら、エリスが倒した（奴の手下とおぼしき）『モンスター』は二体だけである。

何体もと言えなくもないのだが、半数以上を葬ったのはリュシールだ。

もしハーニスがこの場にいたら、すかさずそう訂正していたところだろう。

しかし今はそんなヤボなことを言う人間はいない。

「余裕しゃくしゃくなことをぬかしてられんのも今だけだ！　すぐにてめぇも同じ目に遭わせてやるからな！　腹ぁくくっとけ、このワニ野郎め！」

ここぞとばかりに言い連ねるエリス。セリフだけを見るなら三流の悪党にも近しかった。

しかし彼女の威勢の良い弁舌を耳にし、レクトは不思議と安堵していた。畏怖が薄れたのだ。

言葉の力は大きい。

たとえそれがハッタリや強がりだったとしても、聞いた人間の心を突き動かすこともできる。そして他人のみならず、言った本人の心すら動かすことができるのだ。

自分の影響を最も受けるのは自分自身である。

故にエリス・エーツェルは、常に大言壮語を振りかざしている。他の誰でもない、自分自身に対する鼓舞のために。

そうすることで彼女は彼女たり得ているのだ。エリス・エーツェルの理想とするエリス・エーツェルに少しでも近付くために、虚勢を張り続けている。

表には決して出さないそんな姿勢を知っているからこそ、レクトは彼女を信頼しているのだ。
信頼するに値する。そのひた向きさは。

「ワニ野郎……？　我らをあのような生物と同じにしてほしくないものだな」
意外と罵倒の効果があったのかなんなのか、『ボス』は不敵な笑みのままそう言い返した。
「一緒じゃねぇかよ。そっくりだ」
たしかにエリスの言う通り、部分部分で見ると酷似している。喋るでかいワニが二足歩行で鎧を着ているようなものだ。
「違うな」
が、ボスは首を振る。そして自信たっぷりにこう付け加えた。
「なぜなら、我らは泳げない」
「弱点言いやがった！？」
エリスは思わず身をのけぞらせた。
普通に考えるなら自信満々に言うことではないが、そこは『モンスター』。やはり人間とは『普通』の範疇が違っているのだろうか。
「愚かな貴様らに、せめて名くらいは教えておいてやろう。……クローク・ディール。死ぬ際には、我が名を口惜しく叫ぶがいい」
『ボス』の声には、ぞっとするほどの迫力が込められていた。
本能的にそう思ってしまうのだろうか。絶対的強者に立ち向かうという異常性を知らしめるために、頭の中で鳴らされた警鐘なのかもしれない。
「クローク・ディール……」
顔を青くしながら、リフィクがオウム返しに呟く。
「……クローコ・ダイール？」
緊張感のカケラもなく、エリスが呟いた。
「クロコダイルか」
そんなエリスによって緊張を払拭されたレクトが、やはり呟いた。

「結局ワニじゃねーか、てめぇ！」
エリスが人差し指を突きつけて叫ぶ。ボスは愉快そうにふっふっふっと笑っていた。
「ふざけやがって、この野郎が」
それが本名なのかどうかは置いておくとして。
こうも漫才じみたかけ合いをしていられる以上、クローク・ディール（仮）には相当な余裕があるということなのだろう。
それは裏を返せば油断。すなわち勝機である。ディールが本腰を入れる前に、一気に勝負を決めてしまうのがベストな勝ち方だ。この場合は。
しかし、と、他のふたりはともかくリフィクは慎重に思案をめぐらす。
クローク・ディールは先ほどからずっと、激しく燃えるカーペットの上に立っている。
だというのに、熱や炎をまったく苦痛と感じていない様子なのだ。
そういえばハーニスがそんなことを口走っていた気がする。恐らく身体構造的に火には耐性があるのだろう。
「……」
リフィクは最悪な状況を思い浮かべながら、祈るようにエリスの背中を見つめていた。

ディールは足元に敷かれた燃焼中カーペットを乱暴につかみ取り、丸め、エリスたちへ向かって投げつける。
「！？」
慌てて散らばる三人。
言葉通りの火だるまとなったカーペットは、正確に三人が乗り込んできた出入り口をくぐり抜け、バルコニー部分に転がった。
まるでたき火のように、夜闇の中に炎が浮かぶ。
「こんなものも怖がる。人間というものは」
ディールは面白がるようにあざ笑った。

「びっくりしただけだよ！　そんな顔、すぐにできないようにしてやる！」

エリスは威勢をぶつけながら、正面切って突撃をかけた。

片手で思いきり振りかぶった剣から勢い良く火炎が噴出する。

「あたしのオーバーフレアで！」

エリスは跳び上がり、炎をまとった剣を大上段から叩きつけた。

……が。

その炎ごと、クローク・ディールの右手が刃をつかみ取った。

なんのためらいもなく。たやすく。

行き場をなくした炎が、まるで鳥が翼を広げるように拡散する。

エリスは微動だにしない剣の上で、逆立ちの体勢で膠着していた。

「効いていない！？」

レクトが目を見開いて、思わず口走る。

今まで見たことがなかったからだ。エリスの炎の剣技が防がれたところなど。

「やっぱり……！」

予見していたことが当たってしまい、リフィクは顔を曇らせた。

もともとが火をなんとも思わない種族なのだ。手下の『モンスター』は斬れても、その上位種とも言える『ボス』には通用しない。

道理の通った話ではあるが。

さすがのエリスも、少なからず驚きを表情ににじみ出させていた。

「知ったか？」

自分の力を誇示するような堂々たる声で、クローク・ディールが吐き捨てる。

「身のほどを！」

そしてディールは剣をつかむ右腕を引き寄せ、同時にエリスめがけて左腕を振り上げた。

爪によって裂かれた肩口から、真っ赤な血が弾け飛ぶ。

そのまま剣ごと投げ捨てられ、エリスは受け身もままならずに石の床へと叩きつけられた。

それでも剣を手放さない辺りはさすがと言えようか。
「くそっ……！」
エリスは苦悶の声をもらしながら、起き上がろうと腕を踏んばらせる。
が、どうにも左腕に力が入らなかった。
裂かれた左の肩から滝のように流れる血が、腕を真っ赤に染めあげている。
エリスはうつ伏せのまま奥歯をかみしめた。
「エーツェルさん！」
そこへ、悲鳴に近い声を上げながらリフィクが走り寄ってくる。

第一章（10）

「ヒーリングシェア！」
すかさず傷口に片手をかざし、『治癒術』を唱えた。
リフィクの手が光を放ってすぐに、バックリと裂かれていた傷口が跡形もなく消え去っていた。
「助かる！」
自分の腕に力が入る感覚を取り戻し、エリスは弾け飛ぶような勢いで跳ね起きた。
そして剣を両手でしっかりと握り直す。

それを横目に見ていたレクトは、『治癒術』……それによって自分も命を救われたということを痛感しながら、クローク・ディールめがけて矢を射飛ばした。
矢は風を切って、ディールの（人間で言うところの）眉間に命中する。が、刺さるどころか傷ひとつすらつけられずに、豆鉄砲のように弾き飛ばされてしまった。
ディールはレクトのほうなど見向きもせずに、エリスだけを興味深そうに眺めていた。
単なる矢など脅威どころか興味にすら値しない。言外にそう表しているのだろう。
レクトは己の無力さに歯を食いしばらせた。
そんな時。
「一回でダメなら！」
負傷から立ち直ったエリスが、気迫を口にしながら再びディールへと立ち向かっていった。
「二回目がある！」
炎の剣が叩き込まれる。

しかしやはり。それも腕を振るっただけのディールに、いともたやすくあしらわれてしまった。
「二回がダメなら！」
エリスは三再び、体をひねる。
「三回目ぇぇ！」
奮闘するエリスの姿に、そうじゃないか、とレクトは考えを改めさせられた。
力が及ばないと嘆いていても仕方がない。できないのだとしても、できるまでやり続ければいいだけの話なのだ。
レクトは息を吹き返したように表情を明るくし、背負った矢立てから再び矢を引き抜いた。

エリスはなおも剣を打ち込んでいく。
防がれ、それをかいくぐったとしてもダメージを与られなくとも、がむしゃらなまでに攻撃をし続けた。
レクトも同じように、ひたすら弓を引き矢を放つ。
互いの息はぴったりと合っていた。どちらかというとエリスの動きにレクトが合わせていると言った具合だろうか。
互いに互いの動きをジャマすることなく攻撃を続けている。
しかし、通用しなければなんの意味もない。
リフィクは理解に苦しむように眉をひそめていた。
太刀打ちできないとわかっているはずなのに、なぜそうも抗うのか。なぜそうも抗えるのか。
ただ単純に、それが不思議でならなかった。
立ち尽くしているだけのリフィクであるが、完全にあきらめているわけではなかった。
動きあぐねているのだ。
剣や炎なら無理でも、他の『魔術』なら多少のダメージを負わせられるかもしれない。
だが屋内という狭い空間では、威力の小さな術しか使えないのだ。

大規模なものは巻き添えを食ってしまう。
それにもしエリスたちが傷を負った時に素早く『治癒術』を使えるよう、なるべく体力を温存しておきたいのだ。
ある種のジレンマである。
唯一の救いは、いまだクローク・ディールに明確な殺意が宿っていないことだ。
遊んでいるのだ。彼は。
圧倒的な優位に立ち、無駄なあがきを続ける者たちの姿を見て楽しんでいる。
それだけが今の救いだ。最後の命綱。
リフィクの願う最良の展開は、ディールが本気になる前にこんな戦いなど放棄して、さっさと逃げ出してしまうことに他ならなかった。

射った矢が、クローク・ディールの左目に直撃した。
口元をほころばせかけたレクトだったが、すぐにそれは覆えされる。
たしかに当たったはずの矢が、何事もなかったかのように弾き飛ばされてしまったのだ。
レクトは一瞬だけ呆然とするも、素早く真相に気付く。
クローク・ディールは目……すなわち眼球すらも、驚くべき硬度を誇っているということに。
「有り得るのか……？」
そんなことが。
レクトは無意識のうちに呟いていた。
手下と『ボス』にこれほどの差が存在していようとは……。
このクローク・ディールに比べれば、故郷で対峙した『モンスター』の『ボス』など到底『ボス』とは呼べない。せいぜい『中ボス』がいいところだ、あんなものは。
背後に回したレクトの手が、宙をつかむ。

はたと気付いて視線を向けると、背負った矢立てが空になってしまっていた。矢が尽きたのだ。

とはいえ矢自体は部屋のあちらこちらに散らばっているので、それを拾えば済む話ではあるが。

「……」

しかしレクトは呼吸を落ち着かせて、少し頭を冷やすことにした。やり続けることは間違っていないが、ただ同じことをやっていても発展がない。

「……？」

そこでレクトは、ディールのつけている胴鎧に着目した。

装飾が派手なだけのプレートアーマー……。

剣も効かぬほど強固な肉体を持っているのにも関わらず、なぜ奴はわざわざ鎧をつけている？

エリスは腰を落とし背を丸め、肩でぜぇぜぇと息をしながらクローク・ディールをにらみつけていた。

早い話がバテてしまったのだ。

『魔術』は激しく体力と精神力を消耗する。エリスの使う炎の剣技も分類するなら『魔術』の一種だ。

初っ端から全力全開で使いまくっていれば息切れしてしまうのも無理はない。不運なことに、エリスの辞書にペース配分という言葉は載っていなかった。

「あきらめたか？　ようやく」

その様子を見て、ディールが笑いながら勝ち誇る。

幾度となく攻撃を見舞ったものの、結局さしたるダメージを与えることはできなかった。

ディールの体には焼け跡はおろか焦げ跡すらない。まさに難攻不落。生きる砦である。

「アホぬかせ！　ちょっと疲れただけだよ」

エリスは素直に言い返した。

とはいえ「ちょっと」という部分は素直ではない。「かなり」というのが正確な本音だ。

あらゆる意味において先行逃げ切り型なエリス・エーツェルである。性格的にも能力的にも、長期戦は向いていない。

「おい！　回復っ！」

内心焦りがあるのか、エリスは後方に待機するリフィクへ乱暴に指示を飛ばした。

が、しかし、

「傷は治せますけど、体力を戻すことは……」

申し訳なさそうな返事が送られてくる。

エリスが思っているほど『治癒術』というものは万能ではないのだ。ちゃんとした原理にのっとり、可能なことと不可能なことがハッキリと分けられている。

「使えねぇ！」

エリスはツバのように吐き捨てた。

完全な不可抗力だが、リフィクは怒鳴りつけられて小さくなる。

「そんなことを言われても……」とは反論したくてもできない状況だ、今は。

「『モンスター』！」

と、その時。

「貴様にひとつ尋ねる」

めずらしく挑戦的な口調で、レクトが声を張り上げた。

「どうしてそんな鎧をつけている？」

あえて問いかけたのは、多少なりとも時間を稼ぎたかったからだろう。エリスが息を整えるまでの時間を。

「必要ないだろう？　そんなもので身を守るまでもない。貴様なら」

レクトの言葉を聞き、エリスとリフィクは「そういえば」という文字を顔に浮かべてディールの腹部を注視した。

「なぜだ！」

「これは趣味でつけている」

相変わらずというべきか、ディールは冗談とも本気とも取れないような口調でそう答えた。
「どうかな？」
なおも挑戦的にレクトが続ける。
「『ワニ』の弱点は腹だと、昔から相場が決まっているが」
レクトが気付いたのはそれであった。鎧をつけてまで守らなければならないなにかがある。それこそがすなわち彼らの急所ではないか、と。
憶測の域を出てはいないが、このまま同じことをし続けるよりはよっぽど建設的である。
「我らをワニなどと同じにするなと言ったはずだが」
嘲笑するように言うディールをよそに、エリスは作戦の変更に賛成の意を示した。
「乗ってもいいぜ、レクト。お前にな」
ほんのわずかな小休止であったが、なんとか呼吸を落ち着かせたらしい。いつものふてぶてしい表情が戻っていた。
「腹か……。んなもん後生大事に守りやがってよ」
吐き捨てるように呟く。
普段からヘソ出しルックが基本で腹部を守る気ゼロな彼女からすれば、まぁそれは異質な行いに思えてしまうのだろうか。
「リフィクさんは『魔術』を撃ってエリスを援護してください。動きを制限する程度でかまいません。あとは……エリスに任せる」
レクトは祈りを込めるようにして指示を出した。
それを、ディールがせせら笑う。
「ずいぶんと筒抜けな作戦会議だな」
たしかに筒抜けもいいところである。ただレクトも、思い立った時点から隠す気などはほとんどなかった。
だまし討ちのような手が通用する相手でもなかろう。
そしてなにより、作戦と呼べるほど立派な考えはないのだ。ただ狙いをつけてやっただけ。最終的にはエリスの腕に一任することに

なる。
「わかりました」
リフィクはうなずいて、すぐに『魔術』を放つために意識を集中し始めた。彼の周囲がぼんやりと輝き出す。
エリスはそれを今か今か待ちながら、体をうずうずさせている。そしてクローク・ディールは、まるで見せ物が始まるのを待っているかのような表情で、三人の動向を眺めていた。
相変わらずの余裕っぷりである。弱点を知られたところで危機にすらならないとタカをくくっているのか、もしくはレクトの目論見が見当外れだと笑っているのか。
しかしこの際、どちらでもいいのだ。やればわかる。すべては結果が示してくれる。

第一章（11）

「フラッシュジャベリン！」
放った言葉に呼応するように、リフィクの眼前から『光の槍』が発射された。
その数、幾本無数。雨のごとく、数えきれないほどの光条がクローク・ディールへ向けて飛んでいく。
『槍』は次々にディールの手足を貫いていった。
そしてまるではりつけにでもするように、ディールの体を大の字に開いていく。目標としていた胴が、がら空きになった。
そこへ走り込むエリス。リフィクの術を避けるように迂回しながら、剣から炎をほとばしらせ、勇猛果敢に突撃する。
「うおおお！」
その時、ディールが吠えた。
今までの余裕じみた態度とは一変、気合いの声と共に全身に力を込める。
そして力任せに、自らの手足を拘束する『光の槍』をひきちぎったのだ。
……『魔術』など、強大な力の前ではなんの役にも立たない。ディールが放った言葉が思い起こされる。それを証明してみせたのだ。自らの力で。
「そんなっ……！？」
リフィクが息を呑む。
術による援護は効力を失ったが、だからといって足を止めるエリスではなかった。
「食らえぇっ！」
剣を振りかぶり、正面から突っ込む。
それを迎撃するために、ディールはすくい上げるように右腕を振

り上げた。
エリスはななめ前へ飛び込むように、その攻撃をヒラリとかわす。
先ほどまでは、当たればどこでも良いという精神で剣を振っていたエリスである。しかし今は、明確な攻撃目標が頭の中にある。
その違いは体の動きにまで表れていた。
冷静に相手の攻撃を読み、いなし、踏み込む。
ディールが右腕を振り上げたため、再び胴体は開放されていた。
今この瞬間に、エリスとそれとを阻むものはなにもない。
「オーバーフレアぁぁっ！」
単なるプレートアーマーなど、彼女の炎の前では紙にも等しい。
エリスの渾身を込めた一撃は、鎧を砕き散らして、クローク・ディールの腹部へとダイレクトに叩き込まれた。

エリスは、息を詰まらせる。
直後、自分の両腕に激しいシビれが駆け上がってくるのを感じた。
「作戦は、それで終わりか？」
頭上から、あざ笑うような声が降りかかる。
エリスは振りあおぎ、その声の出所と自分の目の、ちょうど中間に当たる場所を注視した。
そこはクローク・ディールの腹部。つい先ほどまで鎧に包まれていた部分である。
鎧はたしかに砕いた。
破片が周囲にちらばっている。しかし肝心の、その下にあるものが砕けていなかった。
腕や足と同じ質感をたたえた、腹部の硬質な皮膚。それがエリスの剣を受け止めたのだ。
「だとしたら興醒めだ」
ディールは軽く追い払うように、足元のエリスを蹴っ飛ばした。

己の読み間違いを、レクトは心から後悔していた。

なんてことはない。勘違いだったのだ。
奴は本当に趣味で鎧をつけていたのだ……！
どんなものにも弱点はある。そんな甘い思い込みにすがりつき、決めつけていた。それに他のふたりも巻き込んでしまったのだ。
レクトは拳を握る。
蹴り飛ばされたエリスは、猫のように器用に空中で体勢を整え、なんとか着地にまでこぎつけた。。
しかし直後ヒザを折る。その口端から、一筋の血が流れ出ていた。蹴られたのは腹部だ。ディールにしてみれば軽くだったとしても、人間にしてみれば充分脅威に値する。ただ単に口の中を切っただけなのか、その衝撃が内臓にまで達していたのか……。
それに気付き、リフィクは慌てて駆け寄り『治癒術』を施した。
いたたまれないのはレクトである。自分の判断ミスのせいで彼女を危険にさらしてしまったのだから。
「……なに人生の終わりみたいな顔してやがる」
そんなレクトを見かねてか、エリスは立ち上がって彼と視線を向き合わせた。
「……すまない」
「詫びならあとでいくらでも聞いてやるよ。……で、他にねぇのか？　さっきみたいなヤツ」
エリスが求めているのは先ほどのような『作戦』だ。彼女も彼女で、このまま続けていてもラチがあかないと思い始めているのだろう。
「……手立てがない」
レクトは正直に弱音を吐く。
現時点では、言葉の通り勝ち目がない。その手段が想像すらできないのだ。
加えて、エリスとリフィクの体力も今や心許ない。
冷静なレクトだからこそ、状況を正確に把握することができる。
手立てがない。それがまごうことなき事実なのである。

「ねぇのかよ。……ならいい。ひたすら、ぶっ倒れるまで攻め続けるまでだ」

それは自分が倒れるまで、という意味なのだろうか。再び前を向くエリスへ、レクトが無念そうな表情で提案する。

「一度、下がろう。体勢を立て直す必要がある」

体力を回復させ、対策を練り、ハーニスたちと合流して。再戦。そうするべきだ。

「バカ言ってんじゃねぇよ」

しかし、エリスはそれを即座に却下した。

「なにがバカだ。今は負けず嫌いを発揮している時じゃない。頭を冷やすんだ」

「頭を冷やすのはてめぇのほうだよ。ここでシッポを巻いてどうすんだ」

めずらしくも穏やかな声量で。まるで諭すように、エリスが言い返す。

「あたしらが倒そうとしてんのは、目の前にいるコイツの、さらに上にいる奴なんだぞ」

レクトは目だけで答えを送る。

わかっている。そんなことは、と。

「『モンスター』の『キング』だ。そりゃぁ、もっとずっと強ぇんだろうよ」

それを耳にしたのか、ディールが笑い声をこぼした。苦笑、であろう。

「それだけじゃねぇ。コイツみたいな奴だって、それこそゴロゴロいるはずだ。そんな奴らと戦うたびに、てめぇはそうやっておんなじことを言うつもりかよ」

エリスの声が徐々に熱を帯びてくる。それは普段の取ってつけたような熱気ではなく、芯からにじみ出てきた熱意だった。

「人生なんてのはなんでも一発勝負だ。一旦下がるとかやり直すとか、そんなことやってるヒマなんかねぇんだよ」

「……精神論はいい。現実を見るんだ！」
ついにレクトは、叱りつけるように声を張り上げた。
「お前の言いたいこともわかる。だが、このまま続けてなんになる!？　無駄死にするだけだ！」
直接的な単語が、はたで聞いていたリフィクの顔をひきつらせた。
今のレクトの根本的な願いは、身の安全である。エリスとリフィクと、そして自分。命の危機を肌で感じているからこそ言い方も強くなってしまうのだ。
「そう簡単に死ぬかよ。だってあたしは『主役』だぜ？」
エリスは口元に、ふっと笑みを浮かべてみせた。
「は……？」
気勢を削がれてしまったように、レクトは顔をしかめる。なにを言ってるんだ、という文字が顔中に浮かんでいた。
「考えてもみろよ。あたしの『物語』はまだ始まったばっかだ。自警団の団長になって子分を山ほど従えるって夢の前に、『モンスター』の『キング』をぶっ倒すっていう一大行事が待ってる」
スケール的に順番が違うのではと思わずにいられないリフィクだったが、あえて口には出さなかった。
「今あたしがいるのは、さらにその途中だ。こんな中途半端なところで死ぬわけねぇよ。お話にすらなんねぇだろ」
その理論で言うなら世界中の全員が『主役』ということになってしまう。誰しも皆、自分だけの物語を持っているのだから。
「……現実は、物語のように都合よくはならない」
レクトはゆるみかけた緊張感は再び引き締めた。
「そりゃそうだ。精神論ってヤツだよ。現にあたしには、この状況を一発で逆転できるような都合のいい秘策なんてのはねぇ」
なぜかズレてしまった話の内容が、現実側に立ち戻ってくる。
具体的には言っていないものの、エリスにもわかっているのだ。
今のままではクローク・ディールに勝てないということが。
「けどな、だからってあきらめたくねぇんだよ。あきらめないかぎ

り負けじゃねぇ。……あがく！　最後の最後までな」
エリスは再び、レクトを見た。
彼女は恐らく理想家なのだろう。胸に抱く理想を原動力に昇華させ、何事にも立ち向かっていく。だからその理想に反することはなるべくやりたくないのだ。
たとえ客観的に見て正しいことであっても。
「最後ってのはこんなところじゃねぇだろ。……勝とうぜ、レクト。リフィクもな」
自分はカヤの外だと勝手に思い込んでいたリフィクは、不意の視線と言葉についドキリとしてしまった。
「みじめったらしくてもいいじゃねぇか。身がちぎれようが食いついて、地ベタ這いずって、泥まみれになって、あがいて、もがいて、かっこ悪いって笑われても……それでも勝とうぜ」
『モンスター』と人間の力の差を、エリスは我が身をもって思い知っている。それでなお、こんな言葉が出てくるのだ。
幼なじみながら、時として彼女がとてつもなく遠い存在に思えてしまうレクトである。
「もしそこまでやっても勝てねぇようなら、三人一緒に死んでやりゃぁいい。あたしにできねぇってことは、世界中の誰にもできねぇってことなんだからよ」
エリスは言葉とは裏腹に、快活に笑ってみせた。
明確な活路はなくとも途方に暮れる必要はない。そんなことを主張しているかのような表情だった。
リフィクは自分も勘定に入っていることに気付き、やや肩を落とした。ありがた迷惑とはまさにこんな時に使う言葉なのだろう。
「……勝つ。当然そうだ。俺も勝つつもりでいる。だからこそ、この場は……」
退くべきだ、と続けようとしたレクトだったが、突然その言葉を飲み込んでしまった。
はっと気付いたのだ。

一連のやり取りを眺めていたクローク・ディールの雰囲気が、ガラリと変化していたことに。

第一章（12）

今までは楽しむように笑っていた顔が、いつのまにか興を失ったように冷めきっている。
「なかなか良い余興であったが」
口調もそれに伴い、低く鋭くなっていた。
「わしもそろそろ眠たくなってきた。幕引きといこうではないか」
しかし一番の変化は表情でも口調でもなく、ディールからにじみ出る気配だった。
徐々に高められていくそれは、殺意。まるで野生にはびこる獣がまとう殺気そのものだった。
リフィクの背中を冷たいものが走る。
感覚的に悟ったのだ。ついに『ボス』が本気になったと。
それはエリス、レクトも同じだった。
戦慄。
意識無意識とは違う本能的な部分が、命の危機だと叫んでいる。
「夜伽代わりには楽しめたぞ」
ディールが足を、一歩踏み出す。ズシリ、という重厚な震動が、有無を言わせず三人の足腰を揺るがせた。
体の大きさだけでなく、存在そのものが圧倒的な迫力をかもし出している。
「……これが本物の『モンスター』ってヤツか」
エリスはヒタイに汗を浮かべながらも、恐れ知らずに笑ってみせた。
「抗い甲斐があるじゃねぇか……！」
ちょうどその時、であった。
彼らがこの場へやってきたのは。

それに最初に気付いたのはディールだった。
他の者に比べ精神的に余裕があったからだろう。
「ほう。まだ仲間がいたか」
ななめ後方へ振り返り、部屋の出入り口を見やる。通路から部屋へノックもなく入ってきたのは、若い男女のふたり組だった。
ディールにとっては知らぬ顔の人間だが、エリスたちにとっては見知った顔である。
ハーニスとリュシール。
「てめぇら、今さらノコノコ出てきやがって……！」
叱責するようにぼやくエリスとは対称的に、レクトとリフィクはわずかに胸をなで下ろした。
この危機的状況で味方が増えたのは、単純に心強い。
「おや。ご期待に反してしまったのなら、お詫びします」
その場にそぐわないどこか軽妙な口調を飛ばしながら、ハーニスは部屋の中を進む。
「ただ私としては予定の範疇でしたが」
エリスたちとクローク・ディールと、正三角形を描くような位置でその足を止めた。つれあいの黒衣の女剣士は、やはり人形めいた面持ちで彼の背後にピタリとついている。
「このアジトにのさばる『モンスター』共をすべて始末していたら、これくらいの時間はかかるだろうと。想定通りでした」
「……なんだと？」
じわり、とディールが反応を示した。
「冗談のセンスが悪いな。人間というのは」
「否定はしませんが」
ハーニスはもっともらしく肩をすくめる。
「私の言葉が冗談なのかどうかは、ご自分の部下に直接お確かめになられては？　……あの世とやらでね」
そしてこれ以上ないというほど不敵に言ってのけた。

彼の言葉を体現するようにリュシールが動く。彼のとなりに並び、小さい動作で剣を抜いた。

知らぬ人間が見れば、命知らずもはなはだしい奴だと思うのだろう。少しばかり知っているエリスたちでさえそう思ったのだから。

「無茶だ……」

レクトが呟く。

しかし彼らは、言わば少し前の自分たちである。客観視すると、こうも危なっかしく見えてしまうのだろうか。『モンスター』に戦いを挑むという行為は。

「たぶん……大丈夫です」

レクトのひとりごとに、リフィクが割って入った。

「彼らを信じましょう」

「信じる？」

しかし身をもって強さを思い知った相手である。レクトからすればそう楽観的にとらえることなどできはしない。

「その根拠は……？」

「根拠は……ありませんけど……」

エリスは口を一文字に結んで、にらみつけるようにハーニスらを注視していた。

「やはり人間は、頭の悪い生き物よ」

ディールは鼻で笑いながら、ハーニスたちへ体の正面を向け直す。自然と、エリスたちがカヤの外へ押し出される形になってしまった。

正対する一体とふたり。

ディールは、石造りの床が崩れてしまうのではないかというほど巨大な足音を響きわたらせながら、ふたりへと歩み寄っていく。

もしもただの人間がその光景を正面から眺めていたら、ヘビににらまれたカエル以上に固まってしまっていただろう。

しかしふたりは違った。平然と、身にかぶさる影を見上げている。

「さらばだ」

ディールは無造作に右腕を振り上げ、ハーニスめがけてまっすぐ振り下ろした。

――その直後。

ディールの視界を、『腕』が横切った。

「……？」

丸太ほどもあろう深緑色の腕が、ドサリと床に落ちる。

ディールの頭の中では確実に斬り裂いたはずのハーニスは、しかし、なに食わぬ様子でその場に立ったままだった。

その代わりに、彼のとなりにいたはずのリュシールが、いつのまにか位置と体勢をわずかに変えていた。

振り抜いたばかりのようなロングソードから、紫色の血が滴り落ちている。

なにが起こったのかを理解するのに、ディールは少々の時間を要した。

呆然とするように、自分の右腕に目を落とす。

先が、ない。

ぼたぼたと血を流している断面があるだけで、途中から先が忽然となくなっていた。

ないはずだ。本来あるべきものは、近くの床に転がっているのだから。

「……なにをした……！？」

直前までの余裕は消え去り、ディールの顔はただただ驚愕で埋め尽されていた。

自分の体を斬り得る者など、そうそういないはずだ。しかもそれが『人間』ともなれば、皆無。未だかつて出会ったことなどなかった。

豊富すぎる戦果によって築かれた自信も、ヒビを入れられてしまったらこれほどもろいものか。

ディールは自分でも驚くほど混乱していた。
「貴様が……やったのか……！？」
しぼり出すような声とともに、リュシールへ視線を向ける。
「えぇ、やりました」
答えたのは、彼女ではなくハーニスだった。
たたみかけるように、短い言葉を言い浴びせる。
「斬り落としました。私のリュシールが。あなたの腕を。ひと太刀で。目にも止まらぬ速さで。鮮やかなまでに！」

クローク・ディールに負けず劣らず驚いているのはエリスたちである。
なにせ自分たちが死力を尽しても傷ひとつつけられなかった相手を、ああもたやすく斬ってのけたのだから。
「なにをしたんだ……！？」
レクトは知らぬうちに、ディールと同じ言葉を呟いていた。

「あなた方の祖先は、太古の時代、火山の火口の中で生息していた種族であると言われています」
自分の優位を強調するかのごとく、ハーニスは子供のように得意げな笑みを浮かべながら語り出す。
「故に灼熱の溶岩をものともしないほどの、硬質な肌と耐熱能力を持ち合わせている」
リュシールは剣をかまえたまま、ハーニスとディールのあいだに立っている。その様はまるで、主君を守る騎士のようだった。
「しかし一方に特化すれば、一方に極端に弱くなってしまうのも自然の摂理というものです。それははるかな年月を経て進化を果たしたとしても、脈々と受け継がれます」
いやにもったいぶった言い方は単に彼の趣味なのだろう。
「そこにいるブレイジング・ガールにとっての天敵があなただったように。あなたにとっての天敵は、高温の溶岩地帯では縁遠かった

……寒冷。すなわち冷気」

立ちはだかるリュシールの瞳は、ディールをとらえて離さない。

その場のパワーバランスが変化しつつあった。

「氷の剣技『チリーストラッシュ』を扱う彼女の前では、あなたの体など布きれにも等しいのですよ」

ハーニスは「ニヤリ」という文字が浮き出るかというほど、妖しく笑ってみせた。

ハーニスの口上を聞いても、ディールはいまいち釈然としなかった。

わずかとはいえ時間が経ち混乱から立ち直り、冷静さを取り戻したからこそ、釈然としない。

妙だ。

ディールも当然、自分の種族の成り立ちは心得ている。そしてその弱点を突いてくる者とも何度も相対してきた。

だからこそ妙なのである。

今までに受けた冷気の『魔術』にしろ剣技にしろ、これほど強力なものは滅多に見たことがない。

ディールは探るような目でリュシールを見た。

そもそもこの腕を斬り飛ばすなど、人間には無理な話だ。

どんな剣技を用いろうと所詮は人間。そして女。単純に、腕力と重量が足りるはずがない。たとえ斬れたとしても、一刀両断などできるはずがないのだ。

それだけは覆らない。人間と『モンスター』の生物的な格差だ。

ではなぜ、現にこうなったのか。

そうして考えをめぐらせていたディールは、自然と、ある結論にたどりついた。

そうとしか考えられない。そう考えれば、納得もできる。すべて。

部下たちが斬り伏せられてしまったということにも、信憑性が出てきた。

人間でありながら『モンスター』にも匹敵する能力を持つ。そんなものは……。

「よもやと思ったが……貴様、『リゼンブル』か」

それを耳にし、少しだけに目を細めるハーニス。

「『モンスター・リゼンブル』……忌まわしき者共」

「その呼ばれ方は、ひどく嫌いなのですがね」

前に立つリュシールは、眉ひとつ動かさずディールを注視したままだった。

「なんだ……？」

「……『モンスター・リゼンブル』……？」

同じく耳にしたエリスとレクトが、思い思いに疑問を口に出す。

聞いたこともない言葉だ。しかし『モンスター』という単語が頭にくっついている以上、そのまま聞き流すこともできない。

「……混血種の……ことです」

が、その疑問はすぐに解かれることとなった。かたわらのリフィクが、ためらうそぶりを見せながらも説明する。

「つまり、人間と『モンスター』の……」

第一章（13）

「まさか！？」
「マジかよ！？」
再び驚くレクトとエリス。リフィクは「事実です」と念を押すようにうなずいた。
驚愕の実態である。人間と『モンスター』の混血種。そんなものが存在していようとは。
……となると自然と、人間と『モンスター』とのあいだで生殖行為が行われたということになる。
「……」
どういった組み合わせであれ、あまり想像したくのない光景である。
「いるのかよ……そんな奴」
エリスは信じがたいといった表情で、臨戦体勢のふたりへと視線を向けた。
「いるのですよ。世の中には」
呟いたつもりの言葉は、しっかりとハーニスの耳に届いていたらしい。
「そういう奇特な連中がね」
なかば自虐的ともとれる言葉が返ってくる。
彼らを見るレクトの目が、あからさまなまでに変質していた。

今のディールには、エリスとハーニスのやり取りを律儀に聞いていられる余裕はなかった。
やすやすとは動けずにいる。
その原因はリュシール。
剣を構え立ちはだかる彼女の視線が、ディールから余裕を奪い取

ってた。
危険な目。
弱小な奴らだと見ていたエリスたちとは一線を画す危険な奴。
敵。命の奪い合いにもなり得る存在。ディールはそう認識を改めた。
だから慎重にリュシールの様子を探っているのだ。殺意あふれるまなざしで。
「……さて」
ふと、ハーニスが声の調子を一段階上げた。矛先はディールへと向けられている。
「そろそろ心の準備が済みましたか？」
「……なに？」
「彼女の力を持ってすれば、こうして顔を合わせるまでもなく、あなたの息の根を止めることも可能でした」
冗談とは違う、確信のある口調でハーニスは続ける。
「しかし我々は、あなた方『モンスター』のように無慈悲ではありません。死にゆく者にせめてもの優しさ……覚悟を決める時間を与えてさし上げたのです」
彼は笑う。愉快そうに。勝ち誇ったように。
それとは対照的に、ディールは不愉快そうに顔を歪めた。
「混ざり者の分際で。調子に乗りおる」
「さぁリュシール」
『モンスター』の言葉など聞く耳持たずと切り捨てるように、ハーニスは彼女の名前をいとおしく呼びかける。
「彼に引導を」
その言葉に忠実に応えて、リュシールは剣を振りかぶって床を蹴った。
ウサギのような駿足さを見せ、瞬時にディールへ肉薄する。
「おおおっ！」
ディールは裂帛の気合い込めて叫び、彼女を迎え討つ。

そのクローク・ディールは、エリスたちが見てきた姿とはまったくかけ離れたものだった。

みなぎる闘志、闘気、殺気、殺意、戦意、迫力。

それがディールの真の姿なのだろう。遊んでいた時とは違う、『モンスター』としての本性。

体の動きまでもが先ほどとは見違えていた。

巨体をものともしないスピードで、ディールは残った左腕を腰もとに引く。そして踏み込み、向かってくるリュシールめがけて矢のように打ち出した。

リュシールはその爪撃を、真正面に剣を立てて防ぐ。

金属同士がぶつかった時にも似た、耳鳴りを伴う高音が部屋中に響きわたった。

驚きなのは、そこから一秒二秒、両者の動きが膠着していたことだ。

力が拮抗していたのである。

リュシールはふた回りは違うであろうディールの攻撃を、ガシリと受け止めていた。

そこから一歩も押させない。ディールも一歩も押し進めない。

黒衣の剣士。驚異的な身体能力である。たしかに、並の人間とは地力が違っている。

そこから次の動きに転じるのはリュシールのほうが早かった。

正面で立てている剣の位置をわずかに横にずらし、ディールの左腕を受け流す。

体重を乗せていたぶん肩すかしを食らったように、ディールは前のめりによろけてしまった。

たたらを踏んだのを見逃さず、リュシールは一気に奴のふところへと飛び込んだ。

胸元へ、ひと突き。

皮膚の硬さなどまるで感じさせずに、刃は根本まで深々と刺し込まれた。

それは拍子抜けするほどあっけなく、この戦いの終わりを意味していた。

腹部を弱点と見たレクトの観察眼は、あながち間違っているというわけでもなかった。

おおよそは合っていた。

手足の再生すらたやすいほどの生命力を持つディールら種族の弱点は、人間と同じく頭部と胸部なのである。すなわち脳と心臓。

そこを潰されれば、いかに生命力が高かろうが死に至る。

狙いは合っていた。

エリスとリュシールの、得意とする剣技の違い。そこが両者の戦果を隔てたのだろう。

◆

「へぇー……。『モンスター』との混血ねぇー……。はー……」

エリスは感心するやら感嘆するやら、リュシールの顔を至近距離でまじまじと眺めていた。

正面から（リュシールのほうが身長が高いため、やや下から、ということになるが）、右から、左から、後ろから。

舐め回すように、無遠慮に視線をはわせている。

すぐ近くには動かないクローク・ディールが転がっているのだが、どうやらエリスの興味は完全にそちらから外れてしまったらしい。

「見た目は普通の人間と変わんねぇのになぁ……」

全方向からジロジロと見られていても、やはりリュシールは表情を変えなかった。

無感情なままでに、どこか一点だけを見つめている。

そういえば彼女とは数日ほど一緒にいるが、喋るどころか、声すらも聞いた記憶のないエリスだった。まさか本当に人形……というわけでもあるまい。

「人とか食うの？」
リュシールを眺め続けたまま、エリスがなんとなく尋ねる。
「とんでもない」
答えたのは、やはりハーニスだった。
「たしかに我々には『モンスター』と同じ血が流れています……が、彼らのような暴虐は好みません」
ディールはリュシールを見て混血種だと言ったが、この口ぶりからするにハーニスもその混血種ということになるのだろうか。
「それに我らには人間の血も流れていますからね。共食いというのは、おぞましいことです」
「まぁそうだろうな……」
自分で尋ねたにも関わらず、生返事を送り返すエリス。
たしかに彼らに人間を食す嗜好があるのなら、エリスたちなどとっくにガブリといかれてしまっているはずだろう。
なにせ数日は一緒にいたのだ。睡眠時を始めとした無防備な状態を、何度となくさらしてしまっている。現にこうして食われていないことが、なにより物語っているということだ。
「しかしブレイジング・ガール。少々がっかりしました」
やや強引に話を変えるように、ハーニスがそんなことを切り出した。
あまり自分たちの話をしたくないというのが本音なのだろうか。
「苦手な相手であろうとは承知してましたが、それでもある程度は対抗して頂きたかった。あなた方には」
「そこそこは対抗してたっての」
「それは彼が遊んでいたからでしょう。気配でわかっていました。もし彼が最初から本気だったなら……」
そこでエリスは、ようやくハーニスへと視線を移した。
そして自慢するように笑う。
「『もし』なんてもんはねーんだよ。アイツがなにを考えてたって、所詮は頭の中の話だ。実際の結果はコレ。あたしは生きてる。アイ

ツは死んでる。つまりあたしの勝ちってことだ」
逆に称賛してしまうほどの結果論である。まるで現実を見ていない。とてもじゃないが、いつ死んでもおかしくなかった人間の言葉ではないだろう。
「そのポジティブさには感服しますが……勝ったのは彼女です」
律儀というのかめんどくさいというのか、ハーニスは首を振って反論した。
「そうか？　ならみんなの勝利だな。生きたもん勝ちだ」
無邪気とも言えるくらいのエリスの笑顔を前に、ハーニスはうっかりこぼすように口元をゆるませた。
他人からはどう見えようと、エリスは常に本心を口にしている。今々の言葉もハーニスからすれば『ちゃんちゃらおかしい負け惜しみ』であるが、エリスからすれば単にそう思っただけなのだ。
脳天気と切り捨ててしまうのはたやすいが、実際問題そこまで前向きでいられるのは尋常な精神力ではない。
大物、ということなのだろう。良い意味でも悪い意味でも。
「……おかしな人ですね。あなたは」
ハーニスがそう思う理由はもうひとつある。
表情に真剣さをたたえて、それを切り出した。
「我々の正体を知り、なおも変わらず接しているというのは……おかしなことなんですよ」
正体、というのは例の『モンスター・リゼンブル』のことなのだろう。
「普通の人間ならば、恐れ、忌み、嫌い、近寄らないものです」
「他の奴はどうだか知らねぇけど、別にあたしはどうとも思わねぇよ」
エリスは逆に不思議と言いたげに、小首をかしげる。
「あたしが嫌いなのは、威張り散らして人間を食って、それを楽しんでるような手合いだ。あんたらは、まぁ気に食わねぇ部分もあるが、奴らと同じってふうには見えない」

だから正体とかはどうでもいい、と付け足して、エリスは見解を締めくくった。
真面目な顔で聞いていたハーニスは、力を抜くように、再び笑みを浮かべる。
「本当に面白い方です、あなたは」
しかしすぐさま真面目な表情に戻し、
「ただ……」
エリスの後方へと目線を動かした。
「あなたのお仲間は、そう思ってはいないようですが」
目線の先では、レクトが今にも矢を放とうと弦を引き絞っていた。

第一章（14）

臨戦体勢である。
レクトの瞳からは、ありありとした殺気が立ち上っていた。
指の力をほんの少しでもゆるめれば、たちまち矢は発射されてしまう。その狙いは正確にハーニスへと定められていた。
「なにやってんだよ？」
まるで食事中に同席者がうっかり皿をひっくり返してしまった時のような軽い口調で、エリスが尋ねる。
どうして弓なんかを構えているんだ、と。
「お前こそなにをやっている！」
しかし返ってきたのは、対照的な罵声にも似た声だった。
「忘れたのか！？　村を襲い、皆を苦しめ殺し続けていたのは、他ならない『モンスター』だぞ」
「そりゃ忘れるわけないだろ」
「ならば離れろ。『モンスター』と同じ血を引く、そんな奴らからは……！」
「あー……？」
エリスは、ため息のような疑問符をこぼす。
その横から、肩をすくめたハーニスが皮肉っぽくささやいた。
「これが普通の反応です」
エリスとレクトは、完全に意見を二分していた。
『モンスター』は害悪なれどハーニスら自身には関係がないと感じるエリスに、害悪な『モンスター』の血を受けたハーニスらに嫌悪感を抱くレクト。
感性の問題だ。恐らくどちらが間違っているということでもないのだろう。
だがそれだけに、両者の隔たりは天と地ほども大きい。

リフィクはそんなレクトのそばで、止めようにも止められず、中途半端におろおろしているだけだった。
「まぁ、あんな奴のことは放っとけ」
バカに付き合ってられない、とでも言いたげ早々に興味から外して、エリスは再び彼らへと体を向き直した。
「無理難題を」
しかし今にも射抜かれようとしているハーニスとしては、そう簡単に放っておける問題ではなかった。
「とりあえずあんたらふたり、あたしの子分になれよ」
だがそんなことなどお構いなしに、エリスは自分の望みを一方的に切り出した。
「エリス！」
すかさずレクトから抗議が飛んでくる。
どちらから対処していいのかに悩み、ハーニスは少しだけ言葉を詰まらせた。
「……リュシール」
とはいえ、危険のありそうなものを先に対処しておくのがベターな選択だろう。
彼のひとことでそんな心情をすべて悟ったのか、リュシールはたちどころにレクトめがけて突撃した。
まさに風のような速さで疾走する。
レクトは向かってくる彼女へ素早く狙いを移して、迷うことなく指を放す。
飛んだ矢は、しかし、サヤから抜き打ったロングソードによってあっさりと弾かれてしまった。
リュシールは返す刃で、レクトに斬りかかる。
振り抜かれる剣。それが斬り裂いたのは、レクトの手に収まっていた弓だけだった。
「……！」
見事なまでに、まっぷたつ。これではもはや使いものにならない

だろう。
彼女の動きの鋭さに、ただただ息を呑むしかないレクト。ついでにリフィクも息を呑む。
リュシールはそれで役目は終わったと言いたげに、剣を収めてハーニスのもとへと踵を返した。
行きとは対照的に、堂々たる様子で歩く。
「君の虜だよ、リュシール」
「まっ、お前じゃ勝てねぇよな」
それらを見ていたふたりから、別々のふたりへ、ささやかな感想が投げかけられた。

「さてブレイジング・ガール。先ほど、なんと言いました？」
一方を手短に片付け終わり、ハーニスはもう一方に取りかかる。
エリスは、
「その変な呼び方やめろよ」
と無駄にトゲのある前置きをしてから、仕方なく先ほどの言葉を繰り返した。
「だからあたしの子分になれって」
「……あなたの冗談は、時として面白くない場合がありますね。今とか」
ハーニスは一笑して跳ね飛ばす。が、エリスとしてはかなりの領域で本気だった。
「別に冗談ってこたぁねーよ。そっちの無口な姉さんが強いのは認めるし、そういうところ含めて気に入った。だから子分になれよっつったんだ」
相変わらず横柄な物言いである。もう少し態度と言葉のチョイスが違っていたら、結果も変わっていたかもしれない。
ハーニスはうんざりするように、眉をひそめる。
「……ガール。あなたが『彼女』の子分になるというのなら、話は別ですが」

「そっちこそ、つまんねぇ冗談言うじゃねぇかよ」
エリスの理不尽な要求など、普通に考えれば通るはずがない。
うっかり通してしまったリフィクが恐ろしいほどのマヌケだったという、ただそれだけのことだ。
「とにかく、我々はあなたの誘いを受けません。丁重にお断わりします」
リュシールが戻ってきたのは、ちょうどそんな時だった。彼の近くで、控えるように立ち止まる。
「断わるってのかよ」
「えぇ、断わります」
「そうかい。じゃあ、断われないようにするしかねぇな！」
言いながら。エリスは素早く剣を引き抜き、リュシールめがけて斬りかかった。

激しく火花が散る。
エリスより何段階も速く、リュシールが抜き打って迎撃した。
「おぉっと！」
弾かれた勢いに踏みとどまれずに、エリスはその場でコマのようにクルリと回転してしまった。
「……なんのつもりです？」
理解に苦しむように、眉根を寄せるハーニス。
ひと回転したエリスは、剣を構え直してそれに答えええる。
「簡単だよ。勝負だ。あたしが勝ったら、あんたらは大人しくあたしの子分になってもらう。そういうつもりだ」
「いいかげんにしろ、エリス！」
再び、レクトが怒鳴り声を飛ばした。
しかしエリスは聞き入れない。
彼女の意図を理解し、ハーニスは呆れたように目を細めた。
「勝つ……？　私のリュシールに、あなたが？」
その声には、多少のイラ立ちが含まれているような気がした。先

ほどまでの親和的な雰囲気がナリを潜めていく。
「それ以上『彼女』を愚弄するつもりなら……思い知ってもらいますよ。その身を持って」
リュシールは彼をかばうような位置に移り、いつでも剣を振れる体勢を維持していた。
「別に愚弄だのなんだのをする気はねーよ。もうどっちも剣を抜いてんだ。さっさとやっちまおうぜ。わかりやすくな」
口元には笑みを浮かべているものの、エリスの目は真剣そのものだった。
本気で、この賭博のような勝負が成立すると思っているのだろう。
「……よろしいでしょう。どうやらあなたは、言葉ではなく行動を持ってしか納得のできない気質らしい」
ハーニスは、やれやれと言わんばかりの様子でその要求に応えてみせた。なんだかんだでノリの良い奴である。
彼は視線を、リュシールの背中に移す。
「君の力、彼女に刻みつけてあげようか。……ただし、一撃だけでいい。殺す必要はないよ」
リュシールは返事もしなければ、うなずきもしない。しかしハーニスが言い終わった瞬間、彼女の周囲の空気が、音を立てるかというほど急激に変化した。
至近距離で正対しているエリスは、それを肌で感じ取る。
まるで空気が温度を下げたようだった。
突き刺さるほどヒンヤリとし、体の熱を奪っていく。吐いた息が白く残るような錯覚さえ覚えた。
鬼気迫る、というのはこんなことを言うのだろうか。
「一撃なんてケチなことぬかしてねぇで、とことんやろうぜ」
しかしこちらは、鬼をも恐れぬエリス・エーツェルである。
「そうしなきゃ納得できねぇだろう？　お互いにさ」
挑戦的に歯を見せながら、剣を振りかぶって先手を取った。
勝負は、一撃で決した。

剣をなかばから砕かれ、胴を派手に斬り裂かれ、エリスはもんどり打って石の床に叩きつけられた。
「そういえば、我々が勝った場合の条件を聞いていませんでしたね」
「エーツェルさんっ！」
事実上の勝利宣言をするハーニスに構うことなく、リフィクは切迫した声を上げてエリスに走り寄る。
倒れた彼女を見て、息を呑んだ。
大きく斬り裂かれたはずの胴体からは、血が一滴たりとも流れていなかった。
傷口が凍りついていたのだ。
通常ならば即死とも思えるほどバッサリとやられた斬傷に、まるで止血処置のように氷が張りついている。
これもリュシールの剣技とやらによるものなのだろうか。
しかし出血は皆無なものの、当のエリスは声にならない声を上げながら激しいまでに身悶えていた。
傷に張りついた氷が、徐々に広がっている。それが恐らく内側……体の内部へも侵食しているのだろう。
氷のむしばみ。その苦痛は尋常ではないはずだ。
「ヒーリングシェア！」
リフィクはすぐに『治癒術』の行使を試みる。
それによって氷の侵食はなんとか止められたが、傷の治りは普段と比べて明らかに遅かった。
その『氷』が術の作用を妨害しているのだろう。なんとも厄介な技である。
それでもリフィクは、懸命に『ヒーリングシェア』を唱え続けた。
そんな光景を横目に、レクトは険しい表情でふところからナイフを取り出す。
現在、彼に残された武器はそれだけだった。

ナイフを剣のように構えて、ハーニスたちに向き直る。
「……今すぐ去れ」
「脅しのつもりですか？」
ハーニスが肩をすくめて苦笑う。
「それともあなたも、私のリュシールと勝負するおつもりで？」
「そんなつもりはない。だが、意地だけは張り通させてもらう」
レクトの目からは、強い意志があふれ出ていた。相手が誰であろうと一歩も譲らない、それほどまでに強い拒絶の意志が。
緊迫する空気。
その瞳を正面から受け。
「……いいでしょう」
いくばくかの逡巡を見せたのち、ハーニスは深く長い息を吐いてそう答えた。
「我らとしては残念ですが、その無謀さに免じて大人しく退散することにします」
やけにあっさりと受け入れたのは、レクトとしても少々意外だった。
「……そう言われるのは、慣れていますから」
ハーニスは目を伏せ声色を落とし、うら寂しげに言葉をもらす。
それは彼が一瞬だけ垣間見せた本音の部分なのかもしれない。
しかし、そんなそぶりも一瞬だけだった。すぐに目線を上げ、リフィクに顔を向ける。
「ヒーラー」
恐らくリフィクのことを呼んだのだろう。
「我々と共に行きませんか？」
「……！」
彼の言葉を聞き、リフィクとレクトが同時に驚く。リフィクはつい『治癒術』を中断し、見開いた目でハーニスを見た。
「私から見るに、彼らは危うい。危険を危険と判断できない子供のように」

皮肉を言っているというよりは、まるで身を心配しているような言い方だった。

「我々と同行するのなら、そうそう肝を冷やすことにはならないと保証できます」

「……せっかくですけど」

リフィクはすぐさま顔を戻し、治療に専念する。

「僕は、あなたたちとは行きません」

申し訳なさそうに示されたのは、否定の意志。レクトは内心ホッとする。

ハーニスは「残念です」とだけ言い残して、前言通りに踵を返した。

第一章（15）

目を覚ましたエリスが最初に見たのは、武骨な石の壁だった。
「……やってくれるぜ……あの姉ちゃん」
しゃんとしない意識の中、上半身を起こす。
すぐとなりに、眠っているとおぼしきリフィク。そして少し遠くに、転がっているクローク・ディールが見えた。
徐々に意識がしっかりとしてきたところで立ち上がり、辺りを見回してみる。
わざわざ見回すまでもなく、そこはディールと一戦やらかした例の部屋のままだった。
「……もうちょっとうまくいくと思ったんだけどな」
呟いた言葉を聞く者はいない。
「ちぇっ……」
扉が壊れたバルコニー部分から見える空は、うっすらと白んでいた。朝……なのだろうか。
次にエリスは、自分の体を見下ろしてみた。
たしかリュシールに、剣ごとバッサリやられてからの記憶がない。服こそ切れているものの、その下の体自体はキレイだった。無傷。傷跡すらない。
エリスは眼下のリフィクをチラリと見てから、見当たらないもうひとりを探すべく、再び周囲を見渡した。

「中を見て回ってきた」
レクトが戻ってきたのは、エリスが目覚めてほどなくだった。
「大量の『モンスター』の死体があった。……奴らがやったんだろう」

どこか憎々しいニュアンスを含ませながら、目にしてきたものを報告する。
そういえば、ディールと対峙した時にハーニスがそんなことを口にしていた気がする。
自分が気を失っていたあいだの状況と砦内部の状態を聞き終わった頃には、すっかり太陽が顔をのぞかせていた。
エリスは大きくのけぞって、ぐぅーっと体を伸ばす。
「とりあえず、あの村にでも戻ろうぜ。いつまでもこんなトコにいてもしょうがねぇしな」
「……エリス」
いつになく真剣さをただよわせた様子で、レクトが切り出す。
「折れた剣は直せばいい。傷ついた体も、また治せばいい。だが、それを治してくれる人にも限りがあるんだ」
言外に指しているのはリフィクのことだ。
リフィクはかなりの長時間、エリスの治療を行っていたらしい。
それほど厄介だったのだ。あの氷の剣技は。
そして体力を使い果たし、倒れるように眠ってしまった、と。
戦闘中からしてもそうである。彼がいなければ、今のエリスはないだろう。
「だからこれからは、あまり無茶をするな」
その口調は、まるで子供にやさしく言い聞かせる保護者そのものだった。
「……わかってるよ、そんなことは」
エリスはめずらしくも殊勝に、その忠告を受け入れた。
「けど、これから先どうなるかなんてのはわかんねぇ。その時になってみなきゃな」
怒られてすねる子供のように、口を尖らせる。
「こうしたいって思ってもガマンするようなのは、ちっとも楽しい生き方じゃねぇ。お前はどうだか知らないけど、あたしはゴメンこうむる」

「抑えろとは言わない。周りと、少し先のことを見てくれればいい。それで充分だ」

物腰やわらかく、肯定的に願い出るレクト。

エリスの性格上、強く言っても逆効果なのだ。幼い頃から変わらない。真に聞かせたいことがあるなら、下手に出る。それに限る。

戦闘中のことも、レクトがもう少し冷静だったなら、そういった言い方を考える余裕もあっただろう。今とは展開が違っていたかもしれない。

しかしすでに終わったことだ。「もし」なんていう有りもしないことを考えていてもしょうがない。レクトも、その点はエリスと同意見だった。

初めて直面した状況にうまく対応できなくても仕方のないこと。ただ、次に同じテツを踏まなければいいだけなのだ。

エリスは面倒くさそうに、息を抜く。

「……覚えてたら、そうするよ」

◆

エリスとレクトが両側から肩を支えて運んでいても、リフィクは一向に目を覚まさなかった。

『魔術』使用の消耗というのはそれほどまでに激しいものなのだろうか。

高い頻度で休憩を挟んでいたせいか、例の森の中の村にたどりついた頃には、すっかり日が傾いてしまっていた。

ちなみにリフィクはまだ眠ったままである。

三人が戻ったことは、すぐに村中に広がることとなった。出て行った時と同じように数十人の村民が、村の入り口でエリスたちを取り囲む。

代表として歩み出てきたのは、やはりあの時と同じ壮年の男性だった。

「村長だ」
「村長だったのかよ！」
「まさか無事に逃げ帰ってくるとはな……てっきり『モンスター』に食われてしまっているかと」
「誰が逃げ帰ったってんだよ。奴らのアジト知ってんなら行ってみろ。みんな死んでるから」
簡潔に事実を述べるエリス。さすがにアレを自分がやったとまでは言わなかったが。
それを聞き、村人たちがざわざわと驚き始める。
「本当なのか……！？　いや、しかし、そんなことが……」
その中でも、一際驚いていたのは村長らしき男性だった。
皆をまとめる人間として、『モンスター』の手強さを最もよく思い知らされていたからだろう。にわかには信じられないのだ。
「だから行ってみろって。若い奴ならパッと行ってパッと帰ってこれるだろ」
そんなエリスのひとことに背中を押されたのか、村長は後ろに引っ込み、住民たちとなにやら話し始めてしまった。
自然と孤立する三人。完全にカヤの外だ。
「おーい！」
エリスは自分の存在を主張するかのように呼びかける。
「そんなんどうでもいいから、とりあえずどっか休めるところ貸せよ。こいつをこのまんま野ざらしにしとくつもりか、お前ら」
こいつ、とは、依然として意識を失ったままのリフィクのことだ。草の上とはいえ地面に仰向けに転がしてある。
だがエリスの言葉は彼らには届かなかった。それどころではないのだ。
近くから『モンスター』がいなくなったとなれば、生活そのものがガラリと変わる。もう奴らのために、身を削ってまで食料集めに奔走しなくても済むのだ。
気持ちはわかる。

わかる、が、それで納得するようなエリスではなかった。
無視されたことに頬をふくらませて、文句の十や百でも言ってやろうといきり立つ。
「それなら、私の家に来るといい」
エリスが行動に移る寸前に、そんなやさしい言葉が投げかけられた。
村人たちの輪を迂回して三人のもとへやってきたのは、ひとりの老齢の男性。
それはハーニスらと出会った場に居合わせていた、この村で唯一話相手になってくれたあの老人だった。
「ひとり暮らしには持て余す家です」
「助かる！　ジィさん」
「ありがとうございます」
手厚い親切に、深く礼を言うエリスとレクト。
どっぷり話し込んでしまっている村人たちをよそに、ふたりはリフィクの体を再び持ち上げた。

深き森の中を、静かに歩く男女がふたり。
頭上高くで折り重なった枝葉が、太陽の光をほとんど遮断していた。
「困った子だったね、彼女」
男。ハーニスが、微笑みながら語りかける。
女。リュシールは、相づちも打つことなくただ彼のとなりを歩く。
「彼女……エリス・エーツェルなら、僕らを理解してくれたかもしれないのに。残念だったよ」
彼は無反応な彼女を、特に気にすることなく語りかけ続ける。ふたりのあいだでは、それがごく自然な光景なように。
「けど……僕らは共に、『モンスターキング』を討とうとしている。目的が同じ以上、また会うこともあるかもね」

ふとハーニスは足を止め、彼女に顔を向けた。
「もしもう一度会ったら」
ピタリと彼女も立ち止まり、彼の目を見る。
ふたりの視線が熱っぽくからみ合った。
「その時はどうしたい？　リュシール」

断章「灰雷」

破壊が好きだ。
殺戮が好きだ。蹂躙が好きだ。攻撃が好きだ。殺傷が好きだ。断絶が好きだ。
悲鳴を聞くのが好きだ。苦しむ様を見るのが好きだ。悲しむ様を見るのが好きだ。怒り狂う様を見るのが好きだ。怯える様を見るのが好きだ。もがく様を見るのが好きだ。息絶える様を見るのが好きだ。
未来を奪うのが好きだ。希望を奪うのが好きだ。夢を奪うのが好きだ。物を壊すのが好きだ。物を崩すのが好きだ。物を消し飛ばすのが好きだ。物が積み重ねてきた歴史を消し去るのが好きだ。
形あるものを破壊するのが大好きだ。
トュループは心の底からそう思っていた。

彼は、この世界で最も差別はしない者であると言っても過言ではない。
人間も、同胞『モンスター』も、混血種も、動物も、そしてこの大地も。命あるもの無いもの関わらず、彼にとって自分以外のすべては破壊の対象でしかないのだ。
故に『モンスター』によく見られるような、群れや集落に混ざることはない。手下を引き連れることもない。
己の身ひとつで。
定住も永住もせずに、この世界を渡り歩いている。
そして目をつけたすべてのものを破壊して回るのだ。
差別はない。区別もない。見境いもない。ただ破壊する。自分が快楽を得るためだけに。
それは真の意味で『モンスター』らしい生き方と言えるだろう。

そんなトュループであるが、なるべく破壊しないと決めているものがいくつかあった。

強者。そのひとつがそれである。

気ままに放浪し破壊をし続けていれば、戦いになることも少なくない。

その中で出会った強者。最低でも自分に血を流させることのできた相手には、トュループは好意に近いものを感じることがあった。

彼の力の前では、大抵の者は言葉通りの瞬殺をされてしまう。

そんな中で攻撃をしのぎ、なおかつ反撃し、ダメージを与えてくるような希有な敵。

そういう強者をトュループは気に入るのだ。

しかしやはり、そうそういるわけではない。ここ最近で出会った中では、たったのふたりだけだ。

混血種の、若い男女のふたり組。

男の放つ『魔術』と女の扱う氷の剣技が見事に合わさり、トュループは多少の手傷を負った。

勝つこと自体はたやすかったが、トュループはそれで満足し、戦いもなかばにあっさりとその場をあとにした。

たまにはそうして、「戦いごっこ」というものもしてみたくなるのだ。

故に生かしておく。またのちのちの遊び相手とするために。

今日も今日とてトュループは行く。

気ままに、気まぐれに旅をする。

焦土と化した地の上空から哄笑が聞こえてきたら、それはきっと彼のものだろう。

第二章「消し去れ！　ディストラクトレイ」（1）

パルヴィー・ジルヴィアの胸は、興奮と緊張で高鳴っていた。
年の頃は十代の後半。うら若き……などという言葉も似合う、まだまだ未熟な少女である。
しかし彼女の格好は、同年代の少女たちと比べいささか風変わりだと言えた。
セミショートの髪を覆う額当て。軽量さと頑丈さを兼ね備えた白銀色の胸鎧。左腕には小型の盾を付け、腰元にはショートソードをぶら下げている。
彼女を見た十人に九人が、その姿を『騎士』と思うだろう。
ちなみに残りのひとりは、単なる演劇の出演者だとでも思うかもしれない。まだまだ若い顔や体つきとのギャップがそう思わせる。
草原の端の木陰で、パルヴィー・ジルヴィアは立っていた。正確には待っている、と言うべきだろうか。
彼女の近くには、彼女と同じ格好をした、もうふたりの人間がいた。
ひとりは女性だ。
束ねた長い髪に、秀麗な顔立ち。年齢は三十の真ん中を過ぎた辺りなのだが、本人の前ではもっぱら禁句となっている。
最後のひとりは、パルヴィーの父と言っても通用しそうな年代の男性である。女ふたりと並んでいると、さすがに桁違いの体つきを誇っていた。
三人の格好の違いは、それぞれほんのわずかな部分だけである。鎧もその下の衣服も武器も、示し合わせたようにデザインが統一されていた。
「……そろそろ現れる頃よ」
女性が、芯の強い声で仲間に呼びかける。

男性は低く「ああ」とうなずき、パルヴィーは、
「腕が鳴りっぱなしです！」
と、どこかはしゃいだ声で、待ちきれないように剣に手をかけた。

◆

「なぁー、よー、そもそも『モンスターキング』ってのはどこにいるんだ？」
まるで草の海とも呼べるほど広大な、草原地帯。かかる橋のように伸びる街道を進む荷馬車の上から、気だるそうな声が投げかけられた。
手綱を握る中年男性。そのとなりに座る僧侶じみた若い男、リフィク・セントランは、まばゆい青空を見上げながらぼんやりと答えた。
「どこにいるんでしょうね……」
彼の金髪の頭が、背後から伸びてきた足にゲシリと小突かれる。
「……『ルル・リラルド』というところにいる、というのは聞いたことがあるんですけど……」
リフィクは頭を押さえながら、弱々しく弁解した。
「それがどこにあるかまでは知らないんです」
再び足が飛んでくる。
「舌かみそうな名前っ！」
「それは僕のせいじゃないですよっ……」

馬車の荷台には、主に織物の詰まった木箱がびっしりと並んでいた。それらが布とヒモで、丁寧に固定してある。
その上で、エリス・エーツェルはだらしなく寝転がっていた。
外にハネた短い茶髪。下着と混合しそうなほど丈の短い白いタンクトップに、これまた丈の短い緑色のショートパンツ。
相変わらずというのか、なんというのか、健全な男には目の毒な

格好である。
　ただ――。大きな町に向かう途中だというこの荷馬車に快く乗せてもらえたのは、もしかしたらそんなエリスのファッションセンスのおかげかもしれなかったが。
「今の俺たちに必要なのは、共に戦ってくれる仲間だ」
　行儀の悪いエリスとは違いちゃんと座っていた青年、レクト・レイドが、真剣な口調で切り出した。
「何回するつもりだよ、その話。別に取り立てて必要ってほどでもねーって」
　エリスの抗議も取り合わず、話を続ける。
「繰り返すのはお前が真面目に聞かないからだ。いいかエリス、お前の力はたしかに強い。だがその力は、さしずめこの馬と同じなんだ」
　レクトは人差し指で、せっせと歩く二頭の馬を指し示した。
「はぁ？」
「人を乗せるなら鞍が必要になる。荷物を運ぶなら荷車が必要になる。力だけあっても、それを有効に使えなければしょうがないだろう」
「……説教くせぇところは母親似だな。そういうのはガキの頃に聞き飽きてんだよ」
　エリスはスッと話をすり替える。舌先三寸では彼女に分があった。
「村の外で遊んでてもガミガミ、夜遅くまで起きてもガミガミ、メシで嫌いなもん残してもガミガミだ。あたしのこと目の仇にしてんだよ、ブリジッタ・レイド」
　こうなってはこれ以上なにを言っても効果なしかと悟り、レクトは小さくため息をついた。
「……当然だろう。お前が心配をかけるようなことばかりをして、なおかつ聞き分けがないから言い方も強くなったんだ」
「ガキの頃だけならまだしも、あんにゃろうこの前まで言ってやがったんだぜ？　『そんな肌を出した格好をするもんじゃない』だの

『もっとキレイな言葉遣いをしなさい』だの。こっちの勝手だってのに」

まぁ、レクトの母親でなくともなにか言いたくはなるだろう。エリスのこの惨状をまのあたりにすれば。

ふたりのやり取りを、リフィクと御者は微笑ましい表情で聞いていた。

「……けど。あのうるせぇ小言も、聞けなくなったらなったでなんかアレだな」

エリスはほんのわずかに声のトーンを落とす。素直に寂しいとは言わない辺り、真性の意地っぱりな証であろう。

それに応えるように、レクトは目を細めて彼女を見た。

「そうだな。俺たちは村の中の世界しか知らなかった。いつも近くにあるのが当然だと思って、今まで深くは考えていなかった」

村を離れた経験はない。家族同然に接してきた村人たちと離れた経験もない。

あるとするなら、まだほんの子供の頃。『モンスター』も知らなかった昔に、村の外へ遊びに行き、夢中になってそのまま野外で夜を過ごしてしまった時くらいだ。

一日ほどである。それ以降は大人しく村の中で遊んでいたし、成長してからはずっと自警団として戦っていた。

レクトとしても、寂しく思う気持ちがないと言えばウソになる。だがそれを凌駕するほど、強い思いが胸にあるのだ。

「……いつか帰ろう。必ず。『モンスター』の『キング』を討って、もう二度と村が危険にさらされないようになったら」

無論、『モンスター』以外にも危険というのは山ほどある。だが目に見えて最も厄介なのは奴らに他ならない。

無慈悲な破壊者たち。

たとえ故郷の村でなくとも、同じ人間が奴らに苦しめられているのなら、放っておくわけにはいかない。可能な限り助けたい。

それはレクトの中にある、衝動にも似た感情だった。
「そうだろう？　エリス」
「当たり前だろ、んなこと。今さら言うまでもねーよ」
エリスは寝転がった体勢のまま、歯を見せて笑顔を作ってみせた。

道の起伏に合わせて、荷車が小さく上下する。そんなところで横になり、暖かくやわらかい陽射しが降り注いでいるとなれば、否応なく眠気が湧き上がってくるというものだ。
馬車が目指す大きな町はおろか、途中の村に着くのにさえ、まだだいぶかかるらしい。
特に面白いことがあるわけでもないので、エリスの意識はどこか遠くをさまよっていた。
心地良さそうにまどろんでいる。
狭い荷車の上で体勢を変えるたびに、徐々に彼女の衣服が乱れていく。ただでさえ丈の短いタンクトップは、もはや、性格とは対照的な控え目なバストが見えてしまいそうなまでにめくれ上がっていた。
レクトはそれを注意してやるべきか、そっと直してやるべきか迷ったが、誰も見ていないならいいかと放っておくことにした。
呆れるようにため息を吐く。
荷馬車が大きく揺れたのは、そんな時だった。
二頭の馬が、突然暴れ出したのだ。
前足を大きく跳ね上げ、悲鳴のような鳴き声を上げる。なにやら異様な興奮状態にあった。
御者が手綱を引いて落ち着けようとするも、なかなか治まらない。
レクトはバランスを保っていられずに、たまらず荷車から飛び降りる。エリスは寝たまま地面に転がり落ち、ぐえっ、というカエルのような声を上げた。
「なっ、なにがあったんですかっ！？」
御者席でうたた寝していたリフィクも、異常に気付いてうろたえ

る。
そんな中で御者の男性だけが、特に慌てることなくも馬を静めていた。

「なんなんだよ！　いきなり！　この馬共はっ！」
砂を体中につけたエリスが、ややあって静かになった馬車に飛び乗りながら、激しくタンカを切る。
その怒鳴り声で馬が再び暴れ出してしまうのでは……という配慮は一切なかった。
「ああ、すまなかったね。ケガはなかった？　よくあることだよ」
御者は苦笑いしながら、ほがらかに弁解する。
「この近くには『奴ら』の住みかがあるから、こいつらも脅えちまうのさ」
今や二頭の馬もすっかり大人しくなっていた。これも熟練がなせる技なのだろうか。
「前に何度か出くわしたことがあって……その時のことを思い出すんだろう」
「奴ら……？」
街道上で停止している荷馬車。自然と見上げるような体勢で、地面からレクトが尋ねる。
「『モンスター』だよ」
その答えを聞き、エリスの顔がこれ以上ないというほど輝いた。

◆

「狙いすました……スラッシュショット！」
白銀色の鎧をつけた少女が、手持ちのショートソードから鋭い衝撃波を撃ち飛ばす。
「続けてっ」
少女は風見鶏のようにクルリと回転して、間髪を入れずに再び剣

を振った。
「クロスシュート！」
幅広と縦長の二種類の衝撃波が十字に組み合わさり、『シカ』に酷似した頭の『モンスター』を斬り伏せた。
その背後では。
「リジェクションフィールド！」
同種族の『モンスター』の攻撃を、凛々しい女性が『光の壁』で防いでいた。
奴の剣が、まるで本物の壁に阻まれたように、女性の目前でピタリと静止している。
『モンスター』がどれだけ力を込めても武器は通らない。
「ぬん！」
その横手から飛び出した男性が、大斧で、女性の眼前の『モンスター』を豪快に叩き斬った。
大草原の外れでエリスたちが目撃したのは、そんな光景だった。

第二章（2）

馬車の御者に『モンスター』の住処らしき場所を聞き、乗せてくれた礼を言って別れ、しばらく進んだところで……それに出くわしたのだ。

十数体の『モンスター』に囲まれながら戦う、同じような格好をした三人の人間。

彼らは決して個人個人が孤立しないように立ち回り、見事な連携で『モンスター』らに対抗していた。

洗練された戦法。

ひと目で戦い慣れているということがわかった。

「どうして……！？」

リフィクが困惑するように声を詰まらせる。なぜ『モンスター』と戦っている人間がいるのか……不思議に感じているのだろう。

しかし他のふたりは、特に不思議とも思っていなかった。

「強いな。どういう人たちなんだ……？」

「終わってから聞きゃぁいいさ。それより、とっととあたしらも加わろうぜ」

レクトとエリスは荷物を置き武器を取り出し、着々と戦闘準備を整え始めている。

リフィクがふたりのほうを見た時には、すでにそれは済んでいた。

「オーバーフレアぁっ！」

『シカ』のような頭部をした『モンスター』が、背後から焼き斬り裂かれて地面に倒れる。

「なっ、なに！？」

そんな光景と、乱入してきたエリス・エーツェルの姿を目にし、

少女騎士パルヴィー・ジルヴィアは思わず上ずった声をこぼした。
突然の乱入者に驚いたのは、彼女だけではなかった。
彼女の仲間の男性、女性、『モンスター』たちに至るまでその場の全員が一瞬だけ止まる。
「ようよう。ずいぶん楽しそうなことやってんじゃねーかよ、お宅ら。あたしも交ぜろよ」
エリスは挑戦的に笑いながら、堂々とした足取りで戦場を横断する。
まるで仲むつまじいカップルにからむチンピラのようなセリフは、この際どうでもよい。
文字通り一瞬後には、激しい集団戦が再開されていた。
襲いかかる『モンスター』。それに抗戦する三人とひとり。
「なに……？　誰？」
距離的に一番近いところにいたパルヴィーが、『モンスター』の振るう大剣をヒラリヒラリと避けながら、見知らぬエリスに問いかける。
余裕があるというよりは、単に肝がすわっているだけであろう。
そんな彼女に横っ腹を向けるような位置取りで、エリスは飛び跳ねながら剣を振る。
「人呼んでエリス・エーツェル！」
まぁ本名なのだから人もそう呼ぶしかないだろう。
「名前は聞いてなぁーい！」
当然の反応を投げ返して、パルヴィーはショートソードを天を突くように掲げた。
「ウインドライン！」
頭上から発生した幾本もの『風の矢』が、周囲の『モンスター』めがけて降り注ぐ。
それ自体によるダメージはないものの、突風にあおられて『モンスター』たちの動きが鈍った。
そこへすかさず彼女の仲間が斬りかかる。エリスも負けじと剣を

振りかぶる。
『風の矢』が放たれたのと時を同じくして、どこからか、本物の矢も戦場の中へと射ち込まれていた。
それは女の勘のような鋭さで、次々と『モンスター』の顔や武器を持つ手に命中していく。
「仲間？」
遠方から狙い撃つ青年射手の姿をチラチラとうかがいながら、パルヴィーは質問を口にする。
襲いかかる棒状の鈍器を回り込むようにかわして、反撃を叩き込むエリス。
「弟分だよ！」
「良い腕じゃん！」
パルヴィーは追撃とばかりに、エリスがダメージを与えた相手に衝撃波をたたみかける。
それによって体勢を崩した『モンスター』に、
「オーバーフレア！」
エリスが豪快にトドメを刺した。

やや離れたところから戦場を見ているレクトには、三人組の強さがありありと感じ取れた。
強さの理由は、やはり連携戦術。
少女が先陣を切って囮となり、女性が支援役を務め、男性を攻撃の要とする……といったところだろうか。そして必ず敵一体に対して複数で攻める。それを徹底しているのだ。
もはや自分が手を出す必要もなく、勝ってしまうかもしれない。
「……試してみるか」
余裕が生まれたレクトは、弓を背中に収め、戦場へ向けて右手を突き出した。
彼とて、先の『モンスター』のボスとの戦いでなにも学ばなかったわけではない。無力さを思い知ったからこそ、懸命に修練を重ね

てきたのだ。
リフィクの教えは言い方がヘタすぎてよくわからなかったが、感覚をつかめたあとは自己流でなんとかなった。
実戦で使うのは初めてだが、余裕のある今が試し時だろう。
スッと意識を集中し出したレクトの片手が、ぼんやりと光を帯び始める。
「フラッシュジャベリン！」
声に呼応するように、右手から閃光の槍が射出された。
それは高速で飛び、『モンスター』の一体に突き刺さった。吹き飛ぶように倒れる。
「よしっ……！」
成功を喜ぶレクトだったが、次の瞬間、とてつもないほどの疲労感に襲われてしまった。
ついヒザをつく。
「……力の加減は、まだまだか……」

「伏せてっ！」
パルヴィーはひとことだけ忠告したと同時に、
「スラッシュショット！」
エリスに向かって衝撃波をぶっ放した。
いきなり伏せろと言われても、すぐには反応できないのが人間である。
「ばかやろうっ！」
反射的に文句を吐きつつも、エリスは寸前で後方へ倒れ込むことに成功した。
半透明な衝撃波が、胸と顔の紙一重上を通り過ぎていく。ほんの少しでも遅れていたらどうなっていたことか。
エリスが背中を思いっきり打ちつけるのと、パルヴィーの放った『スラッシュショット』がエリスの後方から迫っていた『モンスター』に直撃したのは、ほとんど同時だった。

上がったうめき声はどちらのものだったのか。
そのスキへすかさず、男性が大斧を叩き込んでトドメを刺した。
紫色のしぶきを噴き上げながら、倒れる『モンスター』。それが最後の一体だった。
すなわち戦闘の終了を意味している。
人間たちは軽傷こそあれ、重傷者は誰ひとりとしていなかった。倍近いほどの数の『モンスター』と戦っていたにも関わらず、である。
それはひとえにパルヴィー・ジルヴィアら三人の戦い方が為した結果だろう。もしエリスたちだけだったならこうはいかなかったはずだ。

「てめぇ、いったいどういう了見だよ！」
起き上がってすぐさま、エリスは少女騎士に激しく詰め寄った。
「あっ、大丈夫だった？」
パルヴィーは、まるで小石につまずいた友人を心配するような軽い口調で返事をする。
まったく悪びれる様子もなく、あっけらかんとした笑顔だった。
「あははは、ごめんごめん。危なかったから」
背後から『モンスター』が襲いかかってきていた。たしかにそれが危うかったのは認める。しかし直線上にエリスがいたにも関わらず攻撃を打ち飛ばしたのは少々乱暴な援護である。
普通に考えれば、むしろそちらの危ないだろう。
「ごめんで済むかっ！　あたしの『メロン』を輪切りにするつもりかよ！」
さらにずいっと詰め寄るエリス。彼女とは、背格好がだいたい同じくらいだった。年齢もほとんど同じだろうか。
「『メロン』？」
パルヴィーはいぶかしげな表情で、少しだけ目線を落とす。
「せいぜい『レモン』がいいとこでしょ」

「これからなる予定だ！」
「夢見がちなこと」
せせら笑いながら目線を戻したパルヴィーが、あっ、と小さく声を上げた。
エリスのアゴの先がごく薄く切れていることに気付いたのだ。
位置的に、まず間違いなく先ほどの『スラッシュショット』でついた傷だろう。
無傷ならともかく、傷をつけてしまったのなら悪く思う部分もないこともないパルヴィーだった。
「じゃぁじゃぁ、お詫びに治してあげる。それで後腐れナシね。……ヒーリングシェア」
パルヴィーは人差し指をエリスのアゴに持っていく。すると指先がロウソクのように光り出し、傷が見るまに消えていった。
「ほら、べっぴんさん。だからそんな恐い顔しないでよ」
「誰のせいだよ！」
吐き捨てたエリスはほんのわずかだけ溜飲を下げて、互いの距離を離した。やけになれなれしいからなのか、妙に調子の狂う相手である。
「……てめぇも『ここ』やっとけよ」
エリスは言いながら、自分の右頬を指差した。
パルヴィーの顔の同じ部分に、目立つ傷があったからだ。こちらは恐らく『モンスター』の攻撃がかすってついたものだろう。
なんだかんだあるも、そういう気遣いのできるエリスだった。
「え？」
パルヴィーは言われるままに、自分の左頬を触ってみる。そして手の平を見た。
斜線走った赤い血のり。
「あぁぁっ！　わたしの美顔に傷がっ！」
「凡顔の間違いだろ」
「えーん、アリーシェ様ぁー」

パルヴィーはあきらかな泣きマネをしながら、仲間の女性のもとへと駆けていった。
「イラつく奴」
エリスが素直な感想を口にしたのとほぼ同時に、女性がパルヴィーに『治癒術』を施した。彼女の顔の傷が光と共に消えていく。
「……自分でやりゃいいのに」
「『治癒術』は、自分自身には使えないんですよ」
ぼそりとこぼしたエリスの呟きに、どこからか現れたリフィクがそう答えた。
「体が自然に治ろうとする力を相手に分け与えるという術ですから」
よくわからない理屈である。
エリスはその情報を即座に、頭の中にある『いらない物』と書かれた箱に放り捨てた。
「んなことよりよ、てめぇ今までなにやってたんだ？」
顔をぐいっと近付けながら詰問するエリス。
戦闘中レクトの援護は確認できたが、リフィクの援護はまったく見受けられなかった。
リフィクはばつが悪そうに、顔をそむける。
「僕は、その……陰ながら応援を……」
どすっ、という鈍い音が、なにやらリフィクのスネ辺りから聞こえてきた。
「次にサボってたらケツをローストしてやるからな！　肝にめいじとけっ！」

第二章（3）

やけにくたびれた様子のレクトがやって来る頃には、エリスのもとにその場の全員が集まっていた。

「協力、感謝します」

三人を代表するように、女性が折り目正しく頭を下げる。

年齢は三十の中頃か、その少し上だろうか。艶っぽく美しい顔立ちに品性のある立ち振る舞い。水々しいロングヘアーは、動きのジャマにならないよう背中の辺りで束ねられている。

白銀色の防具と腰のロングソードがなければ、どこかの女伯爵と言っても通じるほどの風格をただよわせていた。

「アリーシェ・ステイシーの名において、あなた方の助力に最大限の謝辞をお送りします」

いやにうやうやしい口調が逆にエリスのシャクにさわったものの、文句を言うまでには至らなかった。

「別に感謝されるいわれはねーよ。あたしはあたしの好きにやったまでだからな。そこに『モンスター』がいればたたっ斬る。それだけだよ」

その言葉を聞き、アリーシェ・ステイシーはわずかに眉を持ち上げた。

「そう……。あなたたちも、『モンスター』と戦っているの？」

「戦ってるなんてもんじゃねーよ。連中の親玉を倒しに行くところだ」

エリスがさらりと言ってのけた内容に、アリーシェは小さく息を呑む。

「まさか『キング』を……？」

「当然」

その顔には、信じがたい、という心境がなみなみと表れていた。

無理もなかろう。普通はそうなる。
彼女のみならず、他のふたりも同じような表情でエリスを見つめていた。なにを寝ぼけたことを言っているんだ、と。
彼らに握手を求めたくなるほど共感するリフィクだった。
「バカじゃないの？」
呆れるように少女騎士が口を挟む。
「『モンスターキング』を倒すって。わたしたちでさえ、『ボス』って呼ばれてるような奴には苦戦するくらいなのに……。できるわけ？」
「やってやるよ」
「根拠は？」
「あたしが根拠だ」
パルヴィーは、ぷっと噴き出した。
「なにそれー？　もしかしてないってこと？　なーんだ、ただ考えナシなだけじゃん。アリーシェ様ぁ、一緒に笑ってやりましょーよー」
バカにするような笑顔で、猫なで声を出す。
「あははははっ！　ばーかばーか」
そしてパルヴィーは人差し指を突きつけながら、本当にあざ笑い始めた。
「おぅてめぇ良い度胸じゃねーかよ！」
無論、そんな態度を取られて黙っていられるエリスではない。頭突きをお見舞いするかと錯覚するほど詰め寄り、鼻と鼻とを突き合わせた。
「いやぁーん、バカが怒ったぁー」
ひるむこともなく、おちょくり続けるパルヴィー。たしかに度胸は良さそうである。
「バカはどっちだっ！　このバカっつら！」
その時。押し黙ってなにかを考え込んでいた様子のアリーシェが、ふと口を開いた。

「……途方もない、と一笑には付せない話ね」
そんな呟きに気付き、パルヴィーはからかうのをやめて彼女を見る。
「今まで考えもしなかったけど……たしかに、元凶から断つという考え方は間違いではないわ」
アリーシェは、パルヴィーとエリスのふたりを見ながら口にした。
というよりふたりの顔が接近しているのでどちらか片方だけを見るということができないだけなのだが。
「えぇー!?」
パルヴィーと、そしてなぜかリフィクが、声を合わせて異を唱えた。
「ほら見ろ！　わかる奴にはわかるんだよ」
賛同者が現われ機嫌を上向きにするエリス。
レクトと騎士然とした男性は、特に口出しすることもなく成り行きを静観していた。
「アリーシェ様ぁ、それマジで言ってます?」
パルヴィーは彼女にすりよりながら、口の横に手を立ててひそひそと真意を確かめる。
「考え方という点ではね」
アリーシェはやわらく微笑み、そう答えた。
「可能か不可能かは別として……。私たちがやっている行いは、『現状維持』が精一杯よ。今以上に悪い方向に進むのを防いでいるだけ」
つむぐ言葉に合わせて、彼女の顔が段々と真剣さを帯びてくる。
「ただ、もし『モンスターキング』を討伐することができたなら……それは前進に他ならないわ。世界を変えることができるかもしれない」
世界を変える……。同じ目的を抱くハーニスも、たしかそんな言葉を口にしていた。
「とはいえ、現状から言えばあまりにも遠い話だけどね。それでも

考慮に入れる価値はある……と、私は思ったわ」
アリーシェは最後に再び表情をゆるめて、穏やかに締めくくった。
聞いていたパルヴィーは「おおっ！」と驚きと感嘆の混ざった顔をし、
「さすがアリーシェ様。そんな深いところまで考えているんですねっ！　たしかにその通りですよ」
あっさりと自分の考えを一転させた。
唯々諾々……とは少し違うが、似たようなものを感じるエリスだった。
「考えナシはてめーのほうじゃねーかよ」
チクリと反撃するも、それは華麗に無視されてしまう。
アリーシェは気を取り直すように一歩踏み出し、エリスと向かい合った。
「たしか、エリス・エーツェルさんと仰いましたね」
戦闘中に大声で名乗ったのを、彼女も聞いていたのだろう。
「我々は今、この近くに棲息する『モンスター』を討伐しに行く途中です。あなた方の力を貸してもらえると心強いのですが……」
「力を貸す貸さないも、あたしらも『そいつら』をこらしめに行くところだからな。一緒に行きたきゃついてくりゃいい」
どうにも上の立ち場から物を言うエリスである。少しは人当たりというものを考えて欲しいレクトだったが、
「そう。それならご一緒させてもらいます」
相手があまり気にしていない様子だったので、目で注意するだけにとどめておいた。
「けど、ついてくるならそういう堅っ苦しい喋り方はやめろよな。うっとうしいから」

周囲の風景が、開けた草原から木々の多い林間部へと移り変わっていく。

「どうしてステイシーさんたちは、『モンスター』と戦っているんですか？」

尋ねたのはリフィクだった。

「どうして、と言われても困るけどね」

今や倍に増えた一行の中心で、アリーシェ・ステイシーが苦笑う。

彼女は仲間ふたりに確認を取るような視線を送ったあと、再び口を開いた。

「私たちは『銀影騎士団』の一員よ。苦しめられている人々を少しずつでも救うために、『モンスター』と戦っているの」

つまり善意で戦っているということなのだろうか。それだけというのも考えにくいものがあるが。

「三人でか？」

口を挟んだエリスに、アリーシェはくすりと微笑みを返す。

「まさか。同志たちは各地に散っているの。総勢は……四十人弱といったところかしら」

世界中にはびこる『モンスター』。そこから比べると、なんとも頼りない数である。

しかし彼女たちを見るに、技術や知恵を駆使してでも奴らに立ち向かっている。生半可な覚悟で戦えるものではないはずだ。その覚悟が、すでに強力な武器となっているのだろう。

「へぇー……」

エリスは素直に感心したあと、

「おいっ！」

と振り返ってリフィクにつかみかかった。

「てめー、『モンスター』とは戦わないのが当たり前、戦うヤツはバカだとかなんとかぬかしてやがったよな。けどこうして戦ってる連中がそこら中にいるそうじゃねーかよ。どういうこった」

「そんなふうには言ってませんけど……しっ、知らなかったんですよっ……」

リフィクはあわあわとうろたえながら弁明をする。

出会ったばかりの頃の話を引っ張り出してくる辺り、どうやらわりと根に持っていたらしい。

そこへアリーシェが、救いの手を差しのべる。

「私たちの存在は、表には出ていないから。彼が知らなくても無理はないわ」

「なんで隠してんだ？」

リフィクをぱっと放して、エリスは彼女に顔を向ける。エリスの性格からして、『モンスター』を倒したのならそれを大々的に言いふらしてやればいいのにと思っているのだろう。

「人々を守るためよ」

アリーシェはわずかに堅さを含めた声で、答える。

「『モンスター』に反抗している人間たちがいる……それが彼らに知れ渡ったら、どんな報復がなされるかわからないわ。関係のない人々を手辺り次第に襲うかもしれない。……見せしめのために」

エリスはつい口をつぐんでしまう。

「私たちはそれを一番恐れているのよ」

たしかにその通りだ。その可能性は充分に考えられる。

エリスが目にしてきた『モンスター』は、総じて人間を完全なる弱者だと見下している。そんな弱者に牙をむかれ手をかまれたとなれば、それは沽券に関わることだ。

故郷フィアネイラに手を出していた『モンスター』も、追い返すたびに攻めてくる数が増えていった。

つまりその規模がとてつもなく大きくなるということか。

「……」

今まで、そこまで考えてはいなかった。

ただ『モンスター』を倒せばいいと思っていたエリスからすれば、まさしく胸を突かれたような気分だった。

不意に。

「……止まれ」

しんがりを務めていた男性が、低く鋭く制止の声を上げた。
自己紹介の時に名乗った名前はゼーテン・ラドニス。短く刈り込んだ髪に、たくましい長身。恐らく『騎士団』のトレードマークであろう白銀色の防具は、アリーシェとパルヴィーが胸鎧なのに対しガッシリとした胴鎧を身につけている。よく見ると小手やブーツ、額当ても彼だけ微妙にデザインが違っているのだが、男女で違うのかサイズで違うのかはこの際どうでもよかった。
ピタリと足を止める六人。しばし、さわさわと風が枝葉を揺らす音だけが生まれ、消えていく。
「……なんだよ？」
「足音だ」
不思議に思ったエリスに、ラドニスが短く答える。
「二足歩行だが、人のものではない重さ。……『奴ら』だろう。数は四」
それを聞き、六人のあいだにピリリとした緊張感が走り始めた。

第二章（4）

ラドニスの耳を頼りに、六人はそれぞれ木の陰に隠れ、接近者の様子をうかがっている。

それはやはり『モンスター』であった。

恐らく先ほど一戦やらかした連中と同じ種族であろう。そしてまたまたやはり、数は四体。全身覆う茶色い体毛をさらに鉄の鎧が覆い、それぞれ剣や槍といった武器を保持している。

進行方向から予測すると、ちょうどエリスたちが潜むすぐ近くを横切ることになるだろうか。

ざっくりとはいえ林立する木が目くらましになっているためか、向こうはまだこちらの存在に気付いていないようだった。

「私が合図したら、一斉に飛びかかって」

風に消え入りそうな小声で、アリーシェがジェスチャー混じりに指示を出す。

「なんでてめーの言う通りにしなきゃなんねーんだよ」

エリスもできる限りの小声で異論を送り返した。異論というよりは、いちゃもんに近かったが。

見かねたレクトが、やはり小声で彼女に言い聞かせる。

「エリス、年の功だ。年長者の言うことは尊重したほうがいい。いくつ上の人だと思ってるんだ」

悪気はまったくなかろうが、レクトのひとことがアリーシェの女心に小さく傷を付けた。

「なにが年の功だっ。あたしらの倍ぐらい長く生きてるのがそんなに偉いのかよっ」

そしてエリスの言葉が追い討ちをかける。

「倍……！」

直視したくない現実である。

「ちょっと、アリーシェ様の前で年齢の話はしないでよっ。気にしてるんだから、婚期とかっ」
パルヴィーもつられるように参加し出し、フォローなのかトドメなのかよくわからない言葉を口にした。
小声とはいえ飛び交うセリフに、いつバレてしまうのかとハラハラしっぱなしなリフィクであった。
「……私のことはいいとして」
あらぬ方向へひた走る話を、アリーシェは自力で修正する。
「……それなら合図はエリスさんに出してもらうわ」
なにやらその表情から元気がなくなっているように見えるのは、木漏れ日の差し加減によるものだろうか。
「ガッテンよ……！」
彼女とは対照的に、エリスの表情には元気が満ちあふれていた。

紫の血にまみれた『モンスター』の死体が四つ、転がっている。
それらを見下ろしながら、エリスは剣をサヤに収めた。
「まっ、不意打ちならこんなもんか」
加えて言うなら、数の上での利もあった。
エリスとしてはあまり実感していないものの、やはり頼もしいものなのである。仲間というものは。
「住みかは近そうね。『彼ら』を見るに、方向もこちらで合っているようだし」
アリーシェは今々倒した『モンスター』たちがやってきた方角へ、顔を向ける。エリスたちが荷馬車の男性から聞いた場所も、たしかそちらで合っているはずだ。
「なぁ」
ひと息つくアリーシェへ、エリスが声をかける。
「あたしらが『奴ら』に歯向かってるってのを奴らが知ったら、関係ねぇ人間を巻き込むかもしれねぇっていうのはわかった」

先ほど彼女が言っていたこと。それをエリスは、自分なりに考えていたのだ。

「けどそれを隠し通すってのも無理な話じゃねぇか？　いつか絶対バレるだろうよ」

現にこうして戦い、スズメの涙ほどとはいえ『モンスター』は減っているのだから。完全なる隠蔽など不可能に近い。

「そうね」

無論のことと肯定するように、アリーシェがやわらかく返事をする。

「ただ、知れ渡るのを可能な限り防ぐ方法というものもあるわ。私たちはそれを心がけているの」

「なんだよ？」

「簡単よ」

アリーシェは女神のような微笑みのまま、それを告げる。

「私たちの姿を見た『モンスター』を、すべて葬ればいいだけ」

やさしげな表情とは裏腹に、物騒なことを言ってのける彼女である。とはいえそれはそれで、言うは易し行うは難しというヤツではなかろうか。

「なるほどな」

しかしエリスは「たしかに簡単だ」とあっさり納得し、

「いろいろ考えて損した」

それまで頭の中で考えていた一切合切を適当なところへ放り捨てた。

林を抜けた先に、すたれた小さな村があった。

箱のように屋根が四角い木の家が並び、村を横切って穏やかな広い川が流れている。

家々の外見は古く、ところどころ破損しているように見えた。

人が住んでいる気配はない。

それもそのはず。
そこには、『モンスター』たちが住んでいた。
「彼らが作ったにしては小さすぎる家。……村ごと略奪された、といったところね」
林に身をひそめながら村を遠目に、アリーシェが冷静に呟く。
「街道を行く人間を無差別に襲う、野盗じみた連中ですもの。暮らしていた人間たちはもういないと見てよさそうね」
彼女の拳が、ぐっと握り込まれた。
「……許せない」
瞳に映るは激昂。静かだが激しく燃える彼女の戦意に、エリスは同調するように犬歯をのぞかせた。
村をざっと見渡してわかるのは、奴らが道中で出くわしたのと寸分変わらぬ『シカ』に似た頭部をした種族だということ。
そしてそれほど大量にいるわけではないということだ。
建物の中にいるであろう連中を計算に入れても、せいぜい二十体以下。アリーシェらが最初に戦っていた『モンスター』たちよりいささか多いくらいだろう。
特技なのかなんなのか、ゼーテン・ラドニスがそう断言した。根拠は己の聴覚らしい。耳の良さは先ほど証明済みである。
さほど多くはないとはいえ、それでも正面からやり合うには危険な数だ。
「いつまでも隠れてないで、さっさとやっちまおうぜ」
が、まったく危機感のないエリスである。
普段通りといえば普段通りなのだが、了承も得ずに飛び出したりしない辺り少しは成長しているのかもしれない。
「やっぱり考えナシ」
パルヴィーがぼそりと呟いた。
「黙ってろ、マヌケっつら」
同じくぼそりと言い返すエリス。パルヴィーは頬をふくらませた。
「っていうかナニその薄着。戦う気あるわけ？」

「てめーみたいなだせぇカッコでもしろってのかよ。　んなもんあたしの勝手だろうが。口出しすんな、ふぬけっつらが」
「なによぅ。女は愛嬌って言葉知らない？　品なさすぎ」
「それしか能がねぇ奴はせいぜいお上品に愛嬌振りまいてろよ」
ふたりは視線と視線を静かに激突させた。水面下で激しい火花が散っている。
双方さすがに身をひそめている状況でそれ以上発展させるつもりはないらしい。

どこか緊張感に欠ける両少女を横目に、アリーシェは気を張って思案をめぐらせていた。
普段の三人での戦術は一旦よそに置き、エリスらを含めた六人での作戦行動を組み立てているのだ。
人数が増えれば可能なことも増えるぶん、選択肢も増えていく。その中から最善の策を導き出すのは、少々骨が折れる作業である。
「あの川は使えませんか？」
熟考するアリーシェへ、レクトが進言した。
川。たしかに村の真ん中を通るように、幅の広い川が流れている。幅が広いとはいっても水量はそれほど多くなく、底は浅い。水かさは大人のスネまでもいかないだろうか。
レクトは自分の案策をテキパキと伝える。
「……うまくいけば、一網打尽に」
みなまで聞いて、アリーシェは感心するように「なるほど」とうなずいた。
川を利用して一網打尽。……机の上では可能な作戦ではあるが、実際にやるとなると話は違ってくる。
レクトとしてもそこから先の現実的な算段は、自分よりも経験の多いアリーシェに意見をもらおうと思っていた。
「半分が引っかかれば上出来……といったところね」
アリーシェの予測はそれである。さすがに一網打尽とまではいか

ないだろうと。
「それでも半数を無力化させられれば勝機は見えてくる。……あなたに乗るわ」
アリーシェは作戦に賛成の意を示してから、気付いた改善点をいくつか提言した。

◆

『モンスター』の暮らしといっても、人間とそれほど差があるわけではない。
村の広場をざっくり見てもわかる。
立ち話に興じている者がいたり、武器の露店を開いている者がいたり、日も高いうちから路上で酒をあおいでいる者がいたり。
人間の生活場でもよく見られる光景である。
しかしその実体は、人間たちのそれとはまったく異なっていた。
立ち話の内容は、手にかけた人間の恐怖や混乱の様子をあざ笑っている。
武器を見る客は、それでどうやって人間を虐殺しようか考えている。
飲んでいる酒類も、人間たちから奪った物だ。
まさしく暴虐の徒。
しかし彼らにとって、それらはごく普通のことなのだ。なんてことはない日常。
弱肉強食。強き己らが、弱き人間らから思うがままに搾取する。
当たり前のように。
そこには悪気も、感謝も、罪悪感もない。
それが許されているからだ。
故に彼女らは反抗する。
最初に『それ』に気付いたのは、取り引きを終えて手の空いた露

店商だった。
大小様々並べられた武器の前に座っている彼の目は、村の外へと向けられている。
「……？」
ひとりの人間が、こちらに向かって走ってきていた。
人間が『モンスター』を種族の違いでしか見分けられないように、『モンスター』も人間をそうそう見分けられないものである。
体が大きいか小さいか。若いか老いているか。男か女か。それくらいでしか判別できないのだ。
村の外から走ってくるのは、若い女だった。人間を見分ける能力の低い『モンスター』なら、髪の短さや肌の露出具合から男だと思うかもしれないが。
なぜ人間が……？　と露店商が疑問に思ったと同時に、人間は走りながら腰元の剣を引き抜いた。
「……！？」
村と外との境界線付近で笑い話をしているふたりは、それに気付いていない。
「オーバーフレアぁぁーっ！」
自分の存在を主張するかのように叫んだ人間の剣から、炎が勢い良く噴き上がった。

第二章（5）

突然のことに驚いている『モンスター』を、炎の剣技でひと太刀。返す刃で、すぐそばにいたもう一体も斬り裂く。

そうしてエリスは、村の広場にいる『モンスター』たちへ勝ち誇るような視線を走らせた。

「やいやいやいやいっ！　このあたしをどなたと心得る！」

『モンスター』たちは、一様にぽかんとした。

そりゃそうだろう。いきなり現れて「どなたと心得る」と言われても、どなたとも心得ていないに決まっている。

「立てば戦神、座れば鬼神。歩く姿はユリの花。悪魔も泣いてひれ伏すエリス・エーツェルたぁ、あたしのことよっ！」

しかしエリスは気にも止めずに、常日頃から考えていた名乗り口上をズバッと言い切った。

得意満面な表情。きっと本人の中では、声を出して笑いたくなるほど見事に決まったと思っているのだろう。

「うわはははははっ！」

というか実際、笑い出した。

毎度毎度、自分のことをよくもそこまで持ち上げられるものである。

一瞬は「なんだこのイカレ頭は」と言いたげな顔を向けていた『モンスター』たちだったが、ふと我に返る。

彼女のかたわらには、火だるまになって倒れている同胞がいるのだ。

呆気に取られて意識から吹っ飛んでいたが、彼女によって斬られたのである。

エリスの視界に映る『モンスター』は六体。そのうち武器を所持

していた三体が、彼女めがけて問答無用で突撃してきた。
エリスが何者であるかはどうでもよいが、仲間を手にかけた者を（しかも人間を）、生かして帰すわけにはいかない。そんな心境だろうか。
それはエリスとしても望むところであった。
先頭に立つ『モンスター』が、走る勢いのままロングソードを振り下ろす。
人間よりもひと回りは大きいであろう体から放たれた攻撃は、しかし空を切った。
エリスは寸前でななめ前へと飛び込んでいる。
そのまま側面から反撃をお見舞いしようとしたエリスの全身を、その時影が覆った。
直感的に真横へ跳ぶ。
紙一重のところを、振り下ろされた斧がかすめていった。
「ぎりぎりぃっ！」
エリスは楽しむような声を上げながら、片手で側転、バック転を軽々こなし、二体から距離を置く。
しかしそこへ、槍を持ったもう一体が襲いかかってきた。
ただでさえ大きなリーチ差が、槍なんぞを持ち出されたらさらに差が離れていく。はた目では、もはや勝負にもならないくらいだ。
「あたしを阻むものはすべてっ！」
正面に向けたエリスの剣が、まるで翼を広げるように炎を吐き出した。
そのまま突っ込む。
「焼き斬り裂く！」
突き出された槍をも飲み込んで、巨大な炎の刃は『モンスター』の胴体を刺し貫いた。
「なんでぇなんでぇ、そんなもんかよ！」
広場を縦横無尽に駆けめぐるエリス。

「他の奴を相手にしてきた時もこんなザマなのかよっ！」
彼女が一筋縄ではいかない手合いだと感じたからか、その場にいる『モンスター』は当初の倍近くにまで増えていた。
「ちゃんちゃらおかしいーっ！」
武器を持ち合わせていなかった連中はこぞって露店の武器屋に押しかけ、さらに騒ぎを聞きつけた他の『モンスター』たちが村の奥から次々と姿を見せる。
エリスを中々仕留められないことと彼女の挑発が相まり、躍起になっているのだろう。
四方八方から浴びせられる攻撃を、ひらりひらりといなしていくエリス。
もともと反射神経や運動能力が総じて良い彼女である。攻めっ気を抑えて立ち回れば、そうそう捕まることはない。
とはいえしばらく続けていれば、自然と疲労はたまっていくものだ。
前方から振り下ろされるメイス。
それを後方に回避した時、思いがけず体のバランスを崩してしまった。なんとか倒れはしなかったものの、たたらを踏む。
そこへ水平方向から刃が迫ってきた。
とてもじゃないが避けられる体勢ではない。
エリスはとっさに剣を盾のように体の正面に出し、かろうじてそれを防御した。
しかしこの体格差で持ちこたえられるわけはない。
エリスは蹴られた小石のように、やすやすと打ち飛ばされてしまった。
なかば朽ちかけたような小屋に激突。壁を突き破る。そこは倉庫だったのか馬小屋だったのか、なにも物が置かれていなかった。
「派手にやってくれやがって……！」
エリスは吐き捨てながら、木片をかきわけて外に出る。当たりどころが良かったのか、さほどダメージは負っていなかった。打ち身

程度だろうか。
エリスの視界には、小屋を半円形に取り囲む『モンスター』たちの姿が映っている。数は十と五……といったところだろうか。皆が皆殺意にあふれるギラギラとした眼差しで、飛びかかるタイミングを図っていた。
「まっ……こんなもんでいいか」
見渡したエリスは呟き、走り出す。
そして『モンスター』の集団をあざやかにすり抜け、村の奥へ向かって突き進んでいった。

村のシンボルであるかのように存在感を主張している広い河川。
恐らくこの川があったからこそ、この場所に村が作られたのだろう。清流が近くにあれば生活はとても楽になる。
そんな先人たちの思いもむなしく、今は『モンスター』に蹂躙されてしまってはいるが。
村で起こっている出来事とは正反対なまでに、やさしく穏やかに流れている川。
その中へ、疾走してきたエリスがそのまま駆け込むのが見えた。
細かく水しぶきが散る。目測通り、水かさは浅かった。スネが半分もつからない。
足を止めることなく下流へ走るエリス。彼女を追撃すべく、『モンスター』の集団も一体二体と次々に川へなだれ込んでいった。
「……たいしたものね」
上流の草むらにひとりひそむアリーシェは、無事に予定地点まで現れたエリスを見て、感嘆するように呟きをもらした。
身体能力はもとより、目を見張るべきは度胸である。
大抵の人間ならば、あれだけの数の『モンスター』に囲まれれば否が応にも恐怖心が頭をのぞかせてくるだろう。結果萎縮してしまい、本来の力を出せなくなる。

しかし彼女には、それが無いように思えた。
大物なのか異様なまでに鈍感なのか、どちらにしろ普通の胆力ではない。
こうまで怖いもの知らずということならば、『モンスターキング』へ挑もうという発想が出てくるのもうなずける話である。
「私も負けてはいられない」
エリスに誘い込まれた『モンスター』たちがすべて川へ入ったのを見て取り、アリーシェは草むらから立ち上がった。
そして川岸へ走る。
それに反応するように、向こう岸にひそんでいたリフィクも姿を現した。
川を挟んで立つふたり。水面に両手をかざす。
『モンスター』たちの意識はすべて下流のエリスへ向けられているため、上流のふたりに気付く者はいなかった。
「さぁ、いくわよ」
「はい……！」
アリーシェの合図と共に、両者はそろって『魔術』を発動させる。
「フローズンワールド！」

「まだかよっ！」
エリスは、じれるように背後に視線を飛ばす。
さすがの彼女も足が水につかっている状態では思うように動けなかった。
陸で稼いだ距離も、見る間に詰められていく。この辺りはやはり体格がものを言うのだろう。
幅広な川。その中央をひたすら走り下るエリスに対し、『モンスター』たちは取り囲んでしまえとばかりに横に広がる。
速度の差は明らかだ。このままでは、じきに追いつかれてしまうだろう。

エリスが何度か振り向いたのち。
「アレか！？」
それが見えた。
自分を追走する『モンスター』たち。そのさらに後方。水面。上流からこちらへ向かって、川の色、太陽光の反射具合が、わずかに変わってくるのが見えた。
事前に聞かされていなければわからなかったろうが、川が凍りついているのだ。アリーシェとリフィクが施した術によって。
氷の侵食は、馬のような速さでこちらに向かってくる。『モンスター』たちは気付いていない。
エリスは、どんぴしゃりなタイミングで飛び石を蹴り、高らかに跳び上がった。
直下を冷ややかな風が吹き抜ける。
着地した時には、すでにそこは氷の世界に包まれていた。
足を滑らせてすっ転ぶ。

『モンスター』たちのあいだに衝撃と動揺が走った。
一瞬のうちに、自分たちの足ごと川が凍りついていたからだ。
両足が固定されたため、身動きが取れない。
これがもし普通の氷だったなら、強引に抜け出すこともできただろう。しかし『魔術』によって生成された氷である。
砕けない。そう簡単には。
「ざまぁみろっ！」
滑って転んで尻餅をついたエリスが、立ち上がりながらほくそ笑む。
そして剣を旗のように振り下ろして、
「よーし！　エーツェル騎士団、突撃ぃっ！」
高々と号令を言い放った。
「勝手に名前変えないでよーっ！」
その呼びかけに応えるように、川の両側から、パルヴィー・ジル

ヴィアとゼーテン・ラドニスが飛び出した。
アリーシェら同様、息をひそめて待機していたのだ。
『モンスター』たちの動揺が、目に見えるまでに大きくなる。
ふたりとひとりは、それぞれ武器を手に、動けぬ敵へ斬りかかった。
さしもの『モンスター』といえど、動けなければ脅威ではない。
背後に回ればなにもできなくなるのだ。
「はあああっ！」
ラドニスが大斧で、胴をまっぷたつに両断する。
「ゼロ距離からのー！」
パルヴィーは『モンスター』の背中にショートソードを突き刺し、
「スラッシュショット！」
そのまま剣先から衝撃波をうち放った。それは体の内部を食い破り、胸に風穴を開ける。
『モンスター』たちはなんとか上半身を動かして応戦しようとするも、それは無駄なあがきでしかなかった。
中には冷静に足元の氷を砕こうとしている者もいるが、みすみすやらせてはおかない。川岸から連続で放たれた矢が、その行為を許さなかった。

第二章（6）

エリスも今ばかりは、得意の剣技を封印しているようだった。
下手に炎を散らして氷が溶けてしまっては、せっかくの作戦が徒労に終わってしまう。その辺りはしっかり考えているらしい。
いつかの老婆心も無駄ではなかったということか。
レクトは岸から弓矢を射ながら、作戦にたしかな手応えを感じていた。
これでどうにかクローク・ディールと戦った時の不手際を雪辱できただろうか。
しかし最後まで気は抜かない。
「……」
三人の立ち回りを遠目から見つめながら、レクトはふと思う。
エリスの剣技にしろ、衝撃波を矢のように飛ばす彼女――パルヴィーの剣技にしろ、あれは『魔術』の応用技だ。
直接放つのではなく、武器を介して相手にぶつける。故に通常の『魔術』よりも威力や攻撃範囲、バリエーションは限定されるが、格段に扱いやすくはなる。
リフィクの説明ではたしかそういうものだったはずだ。
「……」
実戦で『魔術』を使うには、あの形がベストかもしれない……。
特に制御もままならない自分にとっては。
レクトは戦いに向けられる頭の片隅で、そんなことを考えていた。

アリーシェとリフィクがその場へ駆けつけた時には、すでに『モンスター』の数は半分以下にまで減っていた。
斬り裂かれた死体、肉片が、至るところに転がっている。凍った川には水ではなく紫色の鮮血が流れていた。

思わず顔をしかめるリフィク。
しかしアリーシェは、冷酷とも取れる表情でその光景を見つめていた。
そして心のうちで思う。凄惨だと。だが『モンスター』によって流された人間の血は、こんなものではないのだ。苦しめられた思いも、虐げられた心も、こんなものでは到底足りない。
「つぐないにすら遠い……！」
アリーシェは川沿いを走りながら、腰元のロングソードを引き抜いた。

村とはいっても規模の小さな類である。
故に騒ぎが起これば、それはすぐさま村中へと響き渡る。
『モンスター』アドレー・カギュフは、自宅に飛び込んできた手下の報告により、それを知らされた。
アドレーはまず昼寝の邪魔をされたことに腹を立て、バカに大げさに騒ぎ立てていることに、さらに腹を立てた。
人間たちによって仲間が次々とやられている。手も足も出せずに。しかも人間たちの数は十にも満たない……。
そんなことを聞かされたら、大抵の『モンスター』はこう言って笑うだろう。
「なにを寝ぼけたことを」
それはアドレーの場合も同じであった。ただ実際に寝ぼけていたのは彼のほうであったが。
アドレーは取り合わずに寝直そうとするも、手下のやけに必死な態度に免じて、とりあえず様子だけは見てやることにした。
以前は恐らく村長でも住んでいたであろう、村で一番大きな家を出て、川辺へ赴く。
そして現場の状況をまのあたりにしたところで、アドレーの眠気は一気に吹き飛ばされた。

まさしく言葉通りのことが起きていたからだ。
「どうします!?　ボス……！」
「……どうするかだと？　決まっているだろう、そんなことはっ……！」
焦りを隠せない手下を叱るように、アドレーは鋭く指示を飛ばした。
「残っている者をすべて集めろ！」

「てめぇで！」
「ラストっ！」
エリスとパルヴィーが、即席にしてはなかなか息の合った動きで、左右から交差ざまに斬撃をお見舞いした。
飛び散る血しぶき。断末魔。
これで川へ誘い込んだ『モンスター』、十五体すべてを斬り終えたことになる。
が、次の瞬間。息をつくヒマも祝杯を上げるヒマもなく。
「ラドニスさん、後ろっ！」
レクトが切迫して声を張り上げた。
戦場を見渡せる場所故に、いち早くそれに気付いたのだ。
「！」
「うおおおおっ！」
反対側の川岸から、一体の『モンスター』が雄叫びを上げながら猛進してきた。
一見それは、他の連中と同じ『モンスター』に思えた。『シカ』に似た頭部。こげ茶色の体毛。鋼鉄製のフルプレート。
しかし肉薄するにつれ、違いがわかるようになってくる。
まず第一に、他の奴らよりも体が大きい。角も雄々しく立派だった。その時点で、他とは一戦を画す存在だということは瞭然である。
この群れのボス格……！。

瞬時に、六人の脳裏に共通した認識がかけめぐった。
『モンスター』は、牛をも一刀両断できるかというほど巨大な剣を握っている。一番近いところにいたラドニスめがけて、走る勢いのままそれを叩きつけた。
避けようにも避けられず、大斧で正面から受け止めるラドニス。が、たやすくせり負けてしまった。
防ぎ損ねた大剣が滑り、肩口から赤いしぶきが弾け飛ぶ。

「出てきやがったか、元締めが！」
「フォグスクリーン！」
アリーシェは即座に、霧を発生させる『魔術』をうち放った。まるで水蒸気爆発でも起きたかのように、辺りが一瞬にして白い世界に包まれる。
煙幕代わりであろうか。迅速な判断だ。
「ここでは戦えないわ、ひとまず下がって！」
なにはともあれ氷上である。動けない『モンスター』をただ斬るだけならともかく、まっとうな戦闘を行うには足場が悪すぎる。
しかも相手は恐らくボス格だ。不安要素は少しでも減らしておかなくてはならない。
「しょうがねぇ！」
エリスも素直に従い、踵を返した。
視界はゼロに近かったが、皆の目指す先はおのずと決まってくる。ボス格がやってきた方向の正反対。レクトが陣取っていた川岸だ。

「小細工を弄するあたり、所詮はただの人間か……！」
エリスら全員が濃霧から抜け出たのとほぼ同じくして、『ボス』アドレー・カギュフも霧からの脱出を果たした。
しかし脱出を優先したためか、方向はかなりズレてしまったようだ。
村の広場のほうへ駆けていく六人の背中が、薄霧越しにうかがえ

た。
「逃がすな！」
アドレーのひと声と共に、岸に待機させておいた手下たちが人間たちを追いかける。
こちらも六体。忌々しいかな、残存戦力すべてである。

リフィクとパルヴィーがそれぞれ真横と後ろにつき、ラドニスの傷を治す。
が、やはり走りながらでは意識を集中しきれないのか、ふたりがかりでも術の効きは鈍いようだった。
「面目ない……！」
ラドニスが歯がみしながらこぼす。
とはいえ、不意打ちのような一撃である。加えてあの巨大な得物。走れる程度のダメージに抑えただけでも大したものではなかろうか。
「充分よ」
アリーシェは先頭を行くレクトに続きながら、追走してくる敵集団へと視線を飛ばした。
ノーマルサイズが六体。その背後にボス格が続く。
それですべて……だろうか。どちらにせよ『ボス』が出てきたのなら、あとひと押しであることに変わりない。
正念場だ。ここが。
同じく後方を見ていたエリスの脳裏にも、同じ言葉が浮かんでいた。
『モンスター』のボス格。やはり下っぱを相手にしていてもしょうがない。倒すべきは頭。そしてそろそろ欲しい頃だ。白星が。
「おいっ、あいつの相手はあたしがするからなっ！」
先手を打ったエリスに合わせるように、アリーシェは思案をめぐらす。
六人一丸となって戦えば『ボス』には勝てるだろう、というのが

アリーシェの予測だった。
相手の力はまだ未知数だが、このメンバーならそうそう遅れは取るまい。少なくとも互角の戦いは望めるはずだ。
しかし厄介なのは取り巻きの存在だろう。
まずはそちらをどうにかしなくては、話にすらならない。
「……私とエリスさんで『ボス』を食い止めるわ。皆はそのあいだに他の『モンスター』を！」
あえて危険な役目を自分に課すアリーシェである。
問題は、どれだけ持ちこたえられるか……といったところだろうか。しかしこればかりは仲間を信じるしかない。
「かしこまりっ！」
めいめい返事をする中パルヴィーの呑気な態度に、少しだけ肩の力が抜けたアリーシェだった。

最初にエリスが戦っていた、村の入り口にほど近い広場。
特に意図したわけではないが、ラドニスの回復を待っていたらそこに着いてしまったのだ。
だがおおよそ八割といったところで、彼の治療を中断せざるを得なかった。思っていたより『ボス』の足が速かったからだ。
手下の『モンスター』を置き去りにするほどの駿足で、エリスらに急迫する。そして追いつかれる寸前で、件の広場へと差しかかったのだ。
もはや捕まってしまうかというギリギリのタイミングで、六人はキレイに左右へ分かれた。
アドレーから見て右方へ、アリーシェ、レクト、パルヴィー。そして左方へエリス、リフィク、ラドニスが散る。
一瞬、アドレーは狙いに迷った。
そこからエリスとアリーシェだけが反転し、アドレーへ正対する。
残りの四人はそのまま回り込んで、後続の『モンスター』たちへ

と立ち向かっていった。

「たったの二匹で、オレの相手をするつもりか」

アドレーはあざ笑うように、両者へ視線を走らせる。

「片腹痛い！」

誰が言い出したかは定かではないが、『ボス』と呼ばれる『モンスター』の強さは、通常の『モンスター』十体分に相当すると言われている。

アリーシェは常々、その風聞を言い得て妙だと思っていた。個々で若干の違いはあるものの、概ねその通りなのだ。

いくら時間稼ぎが目的とはいえ、それをふたりで相手にしようというのはたしかにお笑いぐさである。

「センベイでも食ってろ『シカ』野郎ーっ！」

そんな窮地にもめげずに、アイサツ代わりの野次を飛ばすエリス。

「笑ってられんのも今だけだっ！　見てろよ！　すぐに剥製にしてやるからなっ！」

第二章（7）

別の意味で言葉を失うアリーシェ。わざわざ相手を挑発するエリスの意図を計りかねているのだ。

「剥製にするってことはな、つまり、皮ぁはいで腹かっさばいてハラワタ取り出して綿詰めて、また縫い直すってことだ！」

エリスは、ふっふっふっと笑いながら、律儀にも工程を説明する。

「そんでもって将来あたしの家に飾ってやる！」

しかしアリーシェの思惑をよそに、これと言った意図など特にはなかった。単に言いたいだけなのである。

なにかと思慮深いアリーシェには、直感だけで生きるエリスの言動は理解しがたいものがあるのだろう。

「その威勢がいつまでもつか」

アドレーはジロリ、とエリスへ狙いを定めた。

「試してみたくなった！」

そして超がつくほど巨大な剣を、片手で軽々と振りかぶる。

人間ふたりがかりでようやく持ち上げられるかどうか……というほど規格外な剣だ。まともに食らえば間違いなくまっぷたつにされてしまうだろう。まさしく文字通りに。

「もつももたねぇもあるか。あたしの勢いは止まらねぇっ……！止められねぇよっ！」

緊張感に息を呑むアリーシェが見つめる中、エリスは弾かれたように地面を蹴った。

「誰にもーっ！」

アドレーめがけて突っ走る。そしてその勢いのまま、剣を振りかぶってジャンプした。

「オーバーっ！」

刀身から火柱が巻き上がる。

「フレっ……！」
「弾け飛べぇっ！」
エリスの声をはねのけるほど叫びながら、アドレーは自分の足元へ大剣を叩きつけた。
「グランドブラスト！」
その衝撃によって砕かれた地面が、水柱のように上空へと打ち上げられる。
滞空中のエリスへ、眼下から岩の雨が襲いかかった。
巨大なものから鋭利なものまで、まさに雨のような無数の岩々。
食らえば軽傷では済むまい。
「しゃらくせぇっ！」
エリスは即座に目標を変更。剣を下方へ向けて振り下ろした。
あまたの岩石を、炎の刃でまとめてなぎ払う。
が、次の瞬間。
岩石群を突破したエリスを待っていたのは、うねりを上げて迫るアドレーの大剣だった。
二連撃……！
エリスはとっさに、剣を盾にしてそれを防ごうとする。だが甘かった。
剣と剣とが衝突した瞬間、エリスの剣が、まるで小枝のようにあっさりと砕かれてしまったのだ。
「！」
「グラヴィティホールド！」
それとほぼ同時に。エリスの体が、見えない力によって急激に下方へ引っ張られた。
まさに紙一重のところで空気を裂く大剣。
エリスは真下の地面へ、思いきり叩きつけられていた。
まばたきするほどの、わずかな時間内での攻防である。エリスの窮地を救ったのは、アリーシェの放った重力を操る『魔術』だった。
受け身も取れずに全身を打つ羽目になってしまったエリスだが、

あのまま大剣を食らうよりははるかにマシだったろう。
でなければ今頃は、上半身と下半身が別々のところに落ちていたはずだ。
すぐさま飛び起き、間合いを離すエリス。
「エリスさんっ！」
そこへアリーシェが駆けつけ、自分のロングソードをサヤごと手渡した。
「すまねぇっ！」
エリスは柄だけになった自分の剣を捨て、彼女の剣を受け取る。
そして素早くサヤを投げ捨て、抜き身を正面に構えた。
普段エリスが使っているものに比べてかなり上等な剣なのだろう。美しく輝く銀色の刀身は、吸い込まれてしまいそうなほどの妖しさに満ちていた。
「あなた、うかつよ。……それは折らないでね」
注意を含めつつも冗談めかした口調のアリーシェだったが、心情的には言葉ほどの余裕はないだろう。助かったからよかったものの、である。
「保証できねぇな」
エリスは悪びれる様子も反省する様子もなく、口元をゆるませて答えた。
顔の下半分は笑っているが、上半分は真剣のように鋭く引き締まっている。
器用なものだ。
「……困ったさんね」

対するアドレー・カギュフは、冷静なまなざしで並び立つふたりを見据えていた。
たかだか人間ふたり。普段なら歯牙にもかけない相手である。気に止める必要すらない存在。
しかし、彼の中に油断はなかった。

やられた仲間をまのあたりにしたからだ。一体二体ではない。根こそぎ……と言っていいほどの。

故にアドレーは、初撃から本気で斬りかかった。そして納得したのだ。

「大抵の者ならばあの二連撃はかわせまい。ほめてつかわそう」

どんな形であれ、避けただけでも大したものだ。人間にしては充分である。

「だが二度目はないぞ」

「そりゃこっちのセリフってヤツだよ」

エリスが威勢良く言い返す。

「今度こそ叩き込んでやる……！　このオーバーフレアをな！」

「叩き込むと、どうなるのだ？」

「あたしの勝ちだ！」

「面白い！」

そんな意気込みを笑い飛ばしながら、アドレーは巨体を走らせた。並ぶふたりの頭上から、大剣を振り下ろす。

幸いだったのは、先手を取って放たれたリフィクの『魔術』が『モンスター』二体を仕留めたことだろう。

それで四対四。数の上では互角になった。

本来ラドニスやパルヴィーたちは、多数の『モンスター』と戦う場合、ことさら慎重な作戦を取る。たとえ同数であっても戦力差は著しいのだ。慎重に慎重を重ねるくらいでないと到底渡り合えない。

しかし今は、そうも言っていられなかった。

アリーシェとエリスが『ボス』を引きつけている。そのあいだに、他の連中を片付けなくてはならないのだ。

たったふたりで『ボス』の相手をするのは、どう考えても分不相応。そう長くもつものではない。

今必要とされるのは迅速さだ。多少の危険を冒してでも、素早く

『モンスター』を倒さなくては勝利はない。
その鍵を握るのがラドニスであると、彼自身自覚していた。
パルヴィーやレクトでは決め手に欠ける。リフィクも『魔術』を連発は出来ない。
やはり最後に命運を握るのは単純な腕力なのだ。
「スラッシュショットっ！」
パルヴィーが剣先から衝撃波を射出する。
「さらにスラッシュショットっ！　おまけのスラッシュショットっ！」
計三発の衝撃波がそれぞれ三方に飛び、『モンスター』たちの足元を襲った。
それにより一体は動きを止められ、一体は転倒させられる。難を逃れた一体は、剣を片手にパルヴィーへと攻めかかった。
迷わず逃げるパルヴィー。
「フラッシュジャベリン！」
追走者へ、リフィクがロングレンジから光槍を浴びせかけた。全身をマヒさせられたように、『モンスター』はあえなくヒザをつく。
そして四体目は、目下ラドニスと拮抗中であった。
至近距離で互いの武器をぶつけ合う。『モンスター』に正面から力比べを挑めるのは彼くらいのものだろうか。
しかしさすがに互角とはいかない。やはりラドニスの形勢が悪い。
そこへレクトが援護の矢を射った。それは狙いたがわず、奴の眉間に突き刺さる。
苦痛の声を上げる『モンスター』。力の均衡が崩れた。
「ぬんっ！」
すかさずラドニスが、気合いを込めた大斧を叩きつけた。容赦なく胸元をかっさばき、奴を血の海に沈ませる。
あと三体。

「くそっ！」

砂煙が飛散する中、エリスはもどかしそうに悪態をついた。

アドレーが大剣を縦横無尽に振り回すため、攻撃距離まで近付けずにいるからだ。

恐らくそれがアドレーの戦い方なのだろう。

長大な得物の切っ先だけを当てられる距離を保ち、敵をふところに入れさせない。攻防一体の戦法。

それを可能にしているのは、アドレーの恐るべき膂力であろう。

いくら鍛えたところで人間には真似のできない芸当だ。

エリスは、高速で振るわれる斬撃の数々を避けるので精一杯だった。

直前にこの同じ場所でおよそ十五体の『モンスター』からの攻撃を避け続けてはいたものの、その時よりもはるかに追い詰められている。

戦闘が続き体力が減っているというのも当然あるだろうが、大きな違いはやはり相手。

アドレーの剣捌きが、速さも正確さも手下連中とは段違いなのだ。

攻撃は最大の防御とはよく言ったものである。

「おいっ！　見てるだけかよっ！」

攻めたいのに攻められずフラストレーションを募らせるエリスが、それを晴らすかのように怒鳴り散らした。

その間にも襲いくる切っ先が、鼻先をかすめていく。

言葉の矛先は、アドレーの後方に構えるアリーシェへと向けられていた。

エリスの言う通り、彼女はなにもしていない。ただ押し黙って様子をうかがっているだけだった。

「……」

とはいえアリーシェも、なにも休んでいるわけではない。

行動を必要最小限に抑えているのである。

挑発の効果か、アドレーは完全にエリスへと狙いを定めていた。

アリーシェは二の次……あるいは眼中にないと言ってもいいかもしれない。

そして今のところ、エリスはひとりで猛攻をしのげている。時間を稼ぐのが目的な以上、このまま力を温存しておくのもひとつの手。アリーシェは冷静にそう考えたのだ。

ちらり、と仲間の状況を確認する。ノーマルサイズの『モンスター』はあと二体となっていた。ラドニスが万全でないことをふまえると、まだ少しかかるだろうか。

「……とはいえ、このままというわけにもいかないわね」

温存するのも大事だが、これ以上エリスを消耗させるのも正直よろしくない。

アリーシェは自分に言い聞かせるように呟いたあと、意を決して攻勢に転じた。

「ロックブレイド！」

奴の背中めがけて、十数本の『岩の刃』をうち放つ。

が、アドレーはまるで背中にも目がついているかのように、恐ろしく機敏にアリーシェに反応した。

振り返りざま『刃』をすべて斬り払う。そして間髪を入れずにまた振り返り、再びエリスを攻め立てた。

第二章（8）

「ならば……！」

驚いている時間も惜しいとばかり、アリーシェはすぐさま次の『魔術』を練り直す。

その間徐々に、エリスの息が上がってきていた。間断なく回避をし続けているのだ。もはや体力は限界に近いはず。

対するアドレーは、顔色ひとつ変えていなかった。この程度、奴にとっては軽い運動量なのであろうか。

「グラヴィティホールド！」

アリーシェが解き放ったのは、先ほども使用した重力を加算する術だった。

しかし狙いはアドレー自身ではない。奴の持つ剣へ、だ。

袈裟がけに振り下ろされる最中、局地的に発生した高重力に引っ張られ、大剣の軌道が下方へズレた。

生じる地響き。

「！」

アドレーは驚いて顔をしかめる。大剣は狙いを大幅に外し、エリスのかたわらの地面へと深々と突き刺さっていた。

その瞬間、鉄壁を誇っていたアドレーにスキが生まれた。近寄ることすらできなかったふところが、がら空きになったのだ。

「あとでキスしてやってもいいぞっ！」

援護に対する感嘆と謝辞を乱暴に述べながら、エリスは迷うことなく直進した。

ふところに入ってさえしまえば、巨大な剣も使い物になるまい。無用の長物というヤツである。

「今度こそ燃えろぉっ！」

エリスはそのまま跳躍。振りかぶった剣から紅蓮の炎が噴き上が

った。
先ほどと同じ攻め方なのは、ある種の意地もあったのだろう。
「オーバーっ……！」
「攻撃とはっ！」
斬り込もうとした瞬間。エリスの声をさえぎるように叫びながら、アドレーは大剣からするりと手を離す。
「こうするものだ！！」
そして握った右拳を、まるで稲妻のような速さでうち放った。
鈍い音が響く。
直撃。
アドレーの岩石のような拳が、飛びかかったエリスの顔面へとまともにねじり込まれたのだ。
息を呑むアリーシェ。
エリスはもんどり打って、まるで投げ捨てられた人形のように地面を転がった。
振り抜いたアドレーの拳から、真っ赤な血がどろりと滴る。

意識を失っていたのは果たしてどれくらいだろうか、と。
のろのろと立ち上がったエリスは、まずそんなことを思った。
しかし足腰に力が入らず、とてもじゃないが自力で立っていられない。剣を杖のようにして体を支えるのが精一杯だった。
妙にぼやける視野で、周りの状況を見る。意識を吹っ飛ばされる前と、ほとんど変わっていないようだった。
ゆっくりと、余裕をみなぎらせた様子で、なかば地面に埋まった大剣を引き抜くアドレー。
血相を変えて走ってくるアリーシェ。
意識を失っていたのは一瞬に近かったのだろうか。
「……」
はたから見ると、エリスはひどい有り様だった。
直撃を受けた顔面……恐らく折れてしまっているであろう鼻の辺

りからは、粘度の高い血がとめどなくこぼれ落ちている。弱々しく荒い息。ぐったりとした全身。地面で擦ったのか、肌の至るところも血がにじんでいた。

……まぁ最後のは、生地面積の狭い服装を好むが故の自業自得であろうが。

どこをどう見ても、もはや戦える状態ではなかった。立っていられるのさえ不思議なくらいだ。

「……一撃で……」

エリスは血を吐きながら、声にならない声で呟く。もしかしたら見た目以上にダメージは深刻なのかもしれない。

そんな彼女を眼下に捕えて、アドレーが大剣を振りかざした。

まるで断頭処刑でもするように切っ先が天へ向けられる。

「口ほどにもなかったな」

エリスは言葉の代わりに、視線を奴へと送り返した。

満身創痍。目も当てられない状態になっているのにも関わらず、彼女の目は、まだ強い闘志に満ちていた。

戦う者の目。相手にスキがあればすぐにでも飛びかかろうかと、そんな意志を感じさせるような眼差しだった。

その視線を、駆けつけたアリーシェの背中がさえぎる。

かまわず、まっすぐ大剣を振り下ろすアドレー。

アリーシェは片手を前に突き出し、

「リジェクションフィールド！」

手の先に半円球の『光の壁』を作り出した。

打ち込まれる大剣。

しかし刃は、ふたりの体にも地面にも到達していなかった。

何もない空中……アリーシェの手の先で、まるでアドレー自身が寸止めしたかのようにピタリとその動きが止められていた。

「なにっ……！？」

アドレーは思わず驚愕を口走る。

いくら力を込めて大剣を押しても、そこから少したりとも刃が進

まないからだ。恐ろしく頑丈な壁がそこにあるかのように。
「動けないの!?」
アリーシェは防御の『魔術』を維持したままで、背後のエリスへ問いかける。
「……エリス・エーツェルをなめんなよ。……ちょっと休んでるだけだ……」
エリスは虫の息で言い返した。問うまでもなく、休めばどうにかなるという次元ではあるまい。
「……たかたがパンチ一発……んな地味で攻撃でやられてたまるかよ……」
口端に血を垂らしながら、言葉を続ける。
「……やられんなら、『アレ』でぶった斬られてからだ……。じゃないとかっこつかねぇだろうが……」

「こんな時になにをっ……!?」
アリーシェは困惑するように眉根を寄せる。
そんなボロボロの状態で。こんな危機的な状況で。どこにそういう軽口を叩く余裕があるというのか。
もう諦観してしまったということなのだろうか。勝利をあきらめて、抗うことを放棄したか。それとも気が触れたか……。
しかし横目で彼女の表情をうかがった時、アリーシェは自分の考えが的外れだったことに気付かされる。
エリスの目には、まだ炎が灯っていた。彼女の心は折れていない。不屈の意志に満ちあふれていた。
「すぐに望み通りにしてやろう!」
アドレーは大剣を構え直し、再びアリーシェめがけて叩きつける。
直接受けてはいないものの、アリーシェの顔に苦々しい色が走った。
一度だけでは済まない。アドレーは何度も何度も、執拗に防御障壁を打ち続ける。

攻撃が加えられる度に、アリーシェの表情が目に見えて曇っていった。息も徐々に激しくなり、にじむ汗の量も増えていく。
物理的な衝撃をすべて防いでいるのだ。やはり力の消費は大きいのだろう。
「……お互い、覚悟を決めたほうがよさそうね」
アリーシェは険しい表情でそう投げかけた。
限界は自分自身で把握している。
ここが瀬戸際なのだ。
……恐らくエリスを見捨てさえすれば、アリーシェだけは助かるだろう。まだ逃げる力くらいは残っている。
だが彼女の頭の中に、その選択肢は存在していなかった。
『モンスター』に虐げられている人々を救う。守る。それがアリーシェ・ステイシーの本懐だ。信念と言ってもいい。だから戦っている。
背にしたエリスも、そんな守るべき人間のひとりに変わりはない。どうして見捨てていけようか。
仮に自分がここで倒れようとも、同じ志を持つ仲間が、必ず自分の思いを遂げてくれる。そう信じているからこそ、アリーシェはその場を動かなかった。
命尽きるまで、この身この信念を貫き続ける。
「短いあいだだったけど……あなたのこと、好きになれそうだったわ」
アリーシェが、微笑むようにささやきかける。それは彼女なりの別れの言葉だった。
「もう少し、じっくりとお話ししてみたかった」
その表情には、ありありと諦念が浮かんでいる。
「……早すぎんだよ、あきらめんのが……」
それを察したのか、エリスは叱り飛ばすように声をしぼり出した。
「体ひきちぎられて血ヘド吐いて、手足動かせなくなって……目の前真っ暗になって。あきらめんのはそれからだろうがっ……！」

実際、そうなりかけているエリスである。
しかしなりかけているだけで、なってはいない。だからまだエリスはあきらめていないということなのだろうか。
こんな状況になっても、まだ。
アリーシェは力なく笑いをこぼす。驚きを通り越して呆れてしまったのだ。
彼女はエリスのことを、恐ろしく精神の強い人間だと思っていた。だがその認識を、今少し改める。
単なるバカなのかもしれない、と。
しかしその心意気だけは感心する。その不屈さ、不折さは。感銘に値する。
そんな人間で出会えてよかった。最後に、と付くのが残念だけど。
諦観しきったアリーシェが視線を前に戻した、その時。
「……そうね」
なかば死にかけていた彼女の表情に、わずかな光が舞い戻った。
「たしかに、あきらめるのはまだ早かったわね」

「なかなかどうして、しぶとい」
アドレーはまるで楽しむように、アリーシェの防御壁へ大剣を打ち続けている。
刃は相変わらず彼女の身まで至らないが、打ち込むたびに彼女の顔がしかめられていくのが見て取れた。
如実に弱ってきている。あとひと押しだろう。
「だが悪あがきもこれまでだ！」
大剣をさらに大きく振りかぶった時。ななめ後方から、なにかが風を切る音がアドレーの耳に飛び込んできた。
アドレーは反射的に、そちらへ向けて剣を振る。
手応えはあった。甲高い音を鳴らしながら、刃がなにかを弾き返す。

地面に落ちたそれは、一本の矢だった。
が、それで終わらない。文字通り矢継ぎ早に、二の矢、三の矢が次々に飛来する。
それらをやすやすと払い落とすアドレー。
「スラッシュショットっ！」
その彼の足に、地をはう衝撃波が命中した。
さらに背後から、屈強な男が飛びかかる。頭上に掲げた大斧が力強く振り下ろされた。
「それで攻撃のつもりか！」
が、アドレーは自分の体を回転させるように剣を振り回し、大斧の一撃ごと男を跳ね返した。
アドレーは遠方、地面に転がる手下たちへと視線を送る。
「やられただと……？　情けない！」
そして怒りをあらわに、自分を取り囲む人間たちへと向き直った。
「貴様ら……！　我らに牙をむいた報い、我が同胞を手にかけた報い、オレが直々に臓腑の底まで思い知らせてやる！」

第二章（9）

「エーツェルさんっ！」

後方から回り込むように駆けてきたリフィクが、無惨な姿のエリスを見て悲鳴のような声を上げる。

そして慌てて『治癒術』を施した。リフィクの片手と、エリスの体がほのかに輝き始める。

「すみません、僕ももう力が残ってなくて……」

言葉の通り、普段に比べて傷の治りがひどくゆっくりだった。

しかしそれでも、自分の体が楽になっていくのをエリスはありありと感じていた。

「……あいつに一発お見舞いできりゃいい」

彼女の目は、離れたところにいるアドレーの背中を真っ直ぐににらみつけている。

レクト、パルヴィー、ラドニスの三人が、あえて逃げるように戦い、奴をこの場から遠ざけているのだ。奴は奴で、どうやら重体のエリスからはもう興味をなくしてしまった様子である。

「それで決めてやる……！」

「三度目の正直とは言うけど。勝算はあるの？」

かたわらでヒザをつくアリーシェが、つらそうな表情で確認した。

彼女は限界近くまで『魔術』を使ったため、体力をほとんど失っている。今は休息に努めている状態だ。もしあとほんの少しでも使い続けていたら気を失っていたことだろう。

「勝てるだの負けるだのの計算は性に合わねぇ。あたしはただ、やるだけだ。全力やって道を切り開く」

愚直すぎるエリスの答えに、アリーシェは厳しい視線を差し向ける。

「けど『あれ』には通用しなかったじゃない」

エリスの攻撃は、一度たりともアドレー・カギュフを捕えていない。それどころか反撃をまともに食らい、重傷まで受けてしまっている。

今のままでは、ただ大言壮語を口にしているに過ぎないのだ。

「たとえ体が癒えてもそれは変わらないわ」

『治癒術』で傷を治せても、失った体力は戻らない。すでに相当消耗しているはずだ。今まで以上の戦いができるとは思えない。

「そりゃぁ、さっきまでのあたしなら、そうだったかもしれねぇけどな」

エリスは笑うように声のトーンを上げて、杖代わりにしていた剣から体を離した。

自分の足でしっかりと立ち、地面から剣を引き抜く。

「さっきまでの……？」

言葉の意味がわからず、眉根を寄せるアリーシェ。

ただノックアウトされていただけのあいだに、なにが変わったというのだろうか。

「あたしの目は節穴じゃねぇ、ってこったよ」

しかしエリスはそれが答えだと言いたげに、いやに自信あふれる表情を彼女に見せつけた。

ラドニス、パルヴィー、レクトの三人は、それぞれ三方に散り、アドレーを包囲していた。

正対する者は構わず退き、必ず背後や横方向から牽制と攻撃を仕掛ける。その繰り返しだ。

はた目には善戦しているように見えるも、実際はそうではなかった。ただ消極的なだけ。そうせざるを得ないのだ。

こちらもこちらで激戦の直後。エリスやアリーシェほどではないが消耗している。故にいまいち攻勢に踏み切れていないのだ。

「……つまらん戦いだ」

そんな戦況に嫌気が差したか、アドレーは吐き捨てるように呟いた。

元来、アドレーは戦闘行為自体に快感を覚える性格をしている。たまに他の『モンスター』のボス格のところまで赴き、腕試しを挑むこともあるくらいだ。

そんな彼からすれば、こうも消極的な戦い方はひどく退屈なのである。これ以上続ける気が起きないほどに。

「終わらせる」

アドレーは大剣を高々と振りかざし、

「グランドブラスト！」

それを自分の足元へ強烈に叩きつけた。

「……！」

石を放り込まれた水面に、波紋が広がるように。アドレーを中心とした地面が砕け、まるで火山の噴火のように岩々が上空へと舞い上がった。

逆方向から襲いかかる岩と石の雨が、近距離に構えていたラドニスとパルヴィーを瞬時に飲み込む。中距離を保っていたレクトだけが、唯一その攻撃から免れることができた。

飛び上がった岩石群が、重力に従って今度は本物の雨のように降り注ぐ。

レクトは、直視しがたい光景に息を詰まらせた。

アドレーの周囲に、岩に埋まりかけたラドニスとパルヴィーが倒れている。意識を失っているのか、動く様子はなかった。

……死んではいないと、思いたい。

「ただでは殺さん」

そんなふたりを見下ろしながら、アドレーが低くささやく。

「生きたままその身を食らい尽してやる」

そしてその目が、ぎろりと音を立てるかのようにレクトに向けられた。

レクトのヒタイから、冷や汗が流れ落ちる。
強大な相手だ。しかし、いすくまりはしない。
『モンスター』の『ボス』と対峙するのは、これで二度目。今度は言い訳はできない。やらねばならないのだ。
弓を引くレクトめがけて、アドレーが攻めかかる。
その横合いから、エリスが猛然と突撃してきた。
「勝負しろーっ、剥製野郎ーっ！」
普段の活発さを取り戻した彼女を目にし、レクトはほっと胸をなで下ろす。
先ほどまでは、遠目からでもわかるほどエリスの状態は思わしくなかった。それを見た時一瞬は血の気が引いたレクトだったが、すぐに気を取り直すことができた。こうして復活してくるのを信じていたからだ。
恐らく大抵の人間ならば、体は無事に治っても心はそうはいかないだろう。あれだけの傷を負わされた恐怖が脳裏にこべりつき、足を震わせる。
しかしエリスに限ってその心配はない。
たとえ恐怖に身を縛られていたとしても、それよりもっと強い反骨心が体を前へ前へと突き進ませる。レクトの知るエリス・エーツェルとはそういう人間だ。

「懲りない奴め」
嘲笑気味に、アドレーはエリスへと目標を改める。
「だが面白い！」
ある種の興味を抱いたのだろう。痛めつけてもまだ向かってくる、その根性に。
アドレーは彼女めがけて、大剣を袈裟がけに振り下ろす。
エリスは走る勢いのまま、頭から地面に滑り込んだ。背中の直上を巨大な刃先が通り過ぎる。そのままでんぐり返りの要領で立ち上がり、勢いを殺すことなく再び走り出した。

しかしまだアドレーの間合いである。
大剣の軌道がななめから縦方向に変わり、再びエリスへ振り下ろされる。
紙一重のところで身をひねってそれを避け、エリスはさらに前へと駆けた。
巨体故に足元は死角になりやすい。エリスは駆け抜けざま、アドレーのヒザへと斬撃を残していった。
銀の刃が紫のしぶきを飛び散らせる。
恐らくアドレーにとって、それはかすり傷程度のものなのだろう。
がエリスは、まるで首でも取ったかのような表情を奴へと見せつけた。
「どうだっ！」
「……腑に落ちないな」
アドレーは足の傷などまるで気にせず、彼女に懐疑的な眼差しを向ける。
「そんな動きで、オレの攻撃を避けれるはずがない」
彼はひと目で見抜いていた。今のエリスには、もはや満足に体を動かせる力など残っていないということに。
一挙手一投足が鈍く、重い。先ほどまでと比べるとまるで全身に鉛をつけているかのような遅さなのだ。
だというのにエリスは、アドレーの攻撃を二度もかいくぐり、あまつさえ傷を与えるに至った。
普通なら有り得ないことだ。運良く……の範疇を超えている。
「考えられるとするなら……オレの剣筋を読んでいるのか？」
アドレーは楽しむような様子で推測を口にした。
体を動かせば大なり小なりクセというヤツが個々に出るものだ。
手や足の振り方、視線などが顕著だろう。注意深く観察すれば、あるいはそれを見極めることもできるかもしれない。そして攻撃を先読みして剣が振るわれる前に動き出せば、たしかに避けることも可能であろう。

……理屈の上では、と付け加える必要はあるが。
「まさかな」
アドレーは自分の考えを笑い飛ばす。あまりにも机上の空論すぎる、と。
「そりゃあ、あんだけやたらめったら振り回してりゃな」
しかしエリスは、アドレーの推測に応じるように片口角を持ち上げた。
「遠くから見りゃまるわかりだ」
まるで勝ち誇った表情。
遠くからということは、アドレーがラドニスたちとやり合っていた時のことを指しているのだろうか。至近距離で正対するより全体を眺めたほうがわかりやすいというのも、理屈としてはうなずける話ではあるが。
アドレーはわずかに顔をしかめる。エリスはなおも上調子に言葉を継いだ。
「それを見逃すほど、あたしの目はマヌケじゃねぇんだよ。つまりこのエリスアイはなっ！」

肩で息をするリフィク。そのとなりでヒザをつくアリーシェは、驚きの表情でエリスを見つめていた。
「……信じられない」
本当にアドレーの動きを先読みしているのだとしたら、大した洞察力と動体視力である。にわかには信じがたいが、それ以外の説明が思いつかないのも事実だった。
しかし真に目を見張るべきは、そんなところではない。
彼女はあの瀕死の状態で……手足もロクに動かせないような状態で、奴の動きを観察していたということになる。
痛みで卒倒しなかったのが不思議なくらいの負傷だったというのに。彼女は本当にあきらめていなかったのだ。
まだ戦うために。勝つために。その牙を研いでいた……！

その姿勢がすべてを物語っている。彼女という人間の心根を。
「エリス・エーツェル……口だけじゃない」
アリーシェは一瞬だけ愕然と、そして一瞬だけ口元をほころばせて、ゆっくりと重い腰を上げた。
両足で地面を踏みしめ、深く息を吐く。
「少し元気をもらったわ」
そして凛々しさのよみがえった眼差しを、前方へ向けて射飛ばした。

第二章（10）

振るわれる大剣の間隙を縫って、エリスはアドレーの真下へとスライディングで滑り込む。
足のあいだをくぐり抜け、背後へ。そしてその背中に渾身の一撃を叩き込んでやろうとした、直前。
アドレーは恐るべき速度で振り返り、同時に剣を横なぎに払った。跳躍するエリス。足のわずか下を刃が走り抜けた。
着地した次の瞬間、迷わずななめ後方に飛びずさる。一直線に突き出された大剣が、エリスの影を刺し貫いた。
「どうした、それで本気かっ！」
アドレーは笑いを混じらせながら、巨大な剣を高速で振り回す。
「口ほどにもないとは、まさにこのことっ！」
恐らくエリスの体力が万全な状態だったなら、もう少し『戦いらしく』もなっていただろう。
エリスは奴の攻撃を何度もかいくぐりながら反撃を叩き込んでいる。しかしそのどれも、表面をなでるような軽傷しか与えられていなかった。
アドレーがそれしか許していないのだ。
レクトからの援護も行われている。だがアドレーはそれを斬り払い、あるいは避け、急所への直撃を巧妙に防いでいた。
ふたりがかり。だというのにスキが生み出せない。故に攻めきれない。なにかが足りないのだ。あと少しが及ばない。
「焦んなよ。今にでかいヤツをぶちかましてやるから……！」
距離を取り、エリスは剣を持つ手を握り直す。しかし当のエリスは、もう少し焦るべきだろう。体力が心許ない上に、決定打を与えられずにいる。その先に待っているのはゆるやかな敗北だ。
悠長にしている余裕はない。

「オレもそう気の長いほうではない」
アドレーはふと攻撃の手を止め、地響きのように低い声を投げかけた。
「こんなものは、ただの悪あがきだ。一時は人間にしておくには惜しい気概と感じたが……どうやらオレの勘違いだったようだ」
吐き捨てた言葉は、嘲りと失望を伴って風に消えていく。
「お前の言葉は、すべて単なる虚言だ。吠えることしか能のない弱者に興味はない。手早く同胞への供養とさせてもらう」
あえて口にしたのは、彼なりの礼儀なのだろうか。もしくは罵っただけか。それを確かめる術はない。
「言ってろよ！」
突き返すように、エリスが激しくタンカを切った。
「てめぇがどう思おうが知ったことかっ！　勝つのはあたしだ！　てめぇは負ける！　そうなんのに変わりはねぇぇんだよっ！」
「……やれやれだ」
この期に及んでまだ、と言いたげに、アドレーは鼻の先であしらう。
「まったくね」
捨てられた言葉を拾い上げたのは、その場へ歩いてくるアリーシェだった。
「口にするのは、なんの根拠もない大言壮語や屁理屈ばかり。態度が立派なだけで、あまりにも現実が伴っていない」
「懲りない奴がもうひとりいたか」
「だけど一切の迷いもなく、ためらいもなく言うものだから、不思議と、本当になにかを成し遂げてしまうのかもしれないと思えてくる」
彼女の足取りは、お世辞にも軽快とは言えなかった。顔色もまだ優れていない。無理をしているのは誰の目にも明らかだった。
「そして信じてみたくなる」
エリスのとなりに立ち、足を止める。

「だから……！」
アリーシェの体が、うっすらと輝き始めた。
『魔術』の兆候。それを認め、アドレーはわずかに警戒の色をのぞかせる。
「……エリスさん、私が手を貸せるのは一度だけよ。それで決めて。それをしくじると、本当にもう勝機がなくなってしまう」
アリーシェは、エリスだけに聞こえるくらいの小声で真摯に告げた。正直な状況分析である。理屈抜きに、もう後がない。
「あなただってわかっているでしょう？」
「わかんねぇな」
しかしエリスは、それを否定するべく言葉を返した。
「勝機はいつでもあたしの中にある」
活力に満ちた強い瞳は、まっすぐにアドレーへと向けられていた。
「それを捨てない限り、エリス・エーツェルに負けはない……！」
彼女の横顔を見るアリーシェは、無意識のうちに短く噴き出していた。どうやら自分は、まだまだ彼女のことを見くびっていたようだ、と。
アリーシェの瞳も、正面の強敵へと向けられる。
「頼むわよ」
「任せとけ」

エリスとアリーシェが、足並みそろえてアドレーへと立ち向かっていく。
その姿は目にし、レクトは彼女たちの考えを推し量った。
その攻撃に、残る力をすべてかけるつもりであると。
この状況を打開するにはもはやそれしかないだろう。口ではどう言おうと、エリスももう余力が残ってないはずだ。
捨て身の攻撃で決着をつける。
ならば自分もそれにかけるしかない。
レクトは構えていた弓を下げ、意識を最大限に集中し始めた。

いざという時のためにと思っていたが、紛れもなく今がその時だろう。
「出し惜しみは無しだ……！」

「腹をくくったか」
正面から迫るふたりを目途に収めて、アドレーは全身に力を込めた。
「最後のひと花を踏みにじる。それもまたよし！」
そしてちょうど切っ先を当てられる距離を見計らって、先陣を切るエリスへ大剣を振り下ろした。
エリスは舞うように刃を避け、さらに突き進む。アドレーが剣を引き戻したのと同時に、軽やかに空中へと飛び上がった。
「オーバーっ！」
エリスの振りかぶった剣から、猛々しい炎が湧き上がる。
「ワンパターンな奴め！」
アドレーはすかさず、大剣を自らの足元へ突き立てた。
「グランドブラスト！」
その衝撃で、砕けた地面が勢い良く弾け飛ぶ。が、その直前に、アリーシェが爆心地へと滑り込んでいた。
「リジェクションフィールド！」
そして地面に向け防御障壁を展開する。それによって、上空へ飛び散る岩の弾幕に一カ所だけ穴が生まれた。まるで直上のエリスを、意志を持って避けるかのように。
「無駄だっ！」
アドレーは間髪を入れずに、エリスへと剣を横なぎにした。そこまでが勘定の上だ。最初にも見せた二連撃。いくら動きを読もうが、これはかわせまい。
が、しかし。
「フラッシュジャベリン！」

レクトの打ち放った巨大な光槍が、大剣を持つ腕を直撃した。
「なにっ……！？」
それは完全に、アドレーの予測を外れた攻撃だった。彼からの援護など、弓を射るくらいしかないだろうと侮っていたのだ。
貫かれた腕の力が奪われ、大剣が手からすっぽ抜ける。
「フレアぁぁ！」
次の瞬間。炎の刃が、アドレーの胴を肩からバッサリ斬り裂いた。

傷口から広がる炎に、苦痛の声を上げながら身悶えるアドレー。
その様子を見ながら、レクトは力尽きてその場に倒れた。先ほどの『魔術』に文字通りの全力を注いだからだ。
アリーシェはなんとか意識を保ちながら、気を許したように座り込む。
しかしエリスだけは、疲弊した体にムチを打ち、しっかりとした眼差しで剣を構え直した。
奴はまだ倒れていない。
斬り裂かれ、火だるまになった今でも、アドレーはまだ倒れていなかった。
エリスの眉間にシワが増える。手応えで、斬り込みが浅かったということを自覚していた。
詰めが甘かったのだ。
「おおおおおっ！」
アドレーが雄叫びを上げる。充血した瞳がエリスを見下ろす。そして固く握った左拳を、大きく振り上げた。
エリスは息を呑む。反射神経に体が追いつかない。
間に合わない……！
「フラッシュっ……！」
その窮地を救ったのは、リフィクがかろうじて放った小さな光弾だった。
殺傷力もなにもない、単なる光の玉が、アドレーの眼前で炸裂す

る。
振り下ろされた拳は目測を外し、エリスのほんのわずか隣へ叩きつけられていた。
「……だからさ。言ったろうが……！」
エリスは剣先をなめ上へ向け、跳び上がる。
「勝つのはあたしだって！」
突き出した銀の刃は、アドレーのノド元を深々と刺し貫いた。
『シカ』に酷似した巨体が、今度こそ倒れる。それから二度と起き上がることはなかった。

◆

驚くほど時間がゆっくりと流れている。
そう感じるのは、極限まで高まった緊張と興奮がなかなか覚めやらないからであろう。
まず優先させたのは、傷を負って倒れたラドニスとパルヴィーの治療だった。
しかし『治癒術』の使えるアリーシェとリフィクも相当に消耗していたため、それは時間をかけてじっくりと行われた。強い衝撃で気を失っただけで、命に関わる重傷ではなかったのがせめてもの幸いだったろう。
それが一段落ついた頃には、空は斜陽に染まっていた。
「エリスさん」
戦場となった村の、なにもない小屋の中。寝転がっていたエリスへ、アリーシェが微笑みを携えて歩み寄った。
「今回は、敵の力を見誤っていたわ。私たちだけでは負けていた。あなたたちがいてくれて、本当に助かったわ」
そして右手を差し出す。
「ありがとう」
心からの感謝だった。

若干の照れくささを感じながらも、エリスは起き上がってその手を握り返す。

「まぁな。助かったのはこっちも同じだ。お互い様ってヤツだよ」

エリスも、全員が満身創痍になるまで奮闘したからこそこの勝利があるのだと痛感していた。

『モンスター』。それほどまでに強大な相手だ。ひとりでも欠けていたら駄目だったろう。

エリスとアリーシェは笑い合う。

肩を並べ、背中を預け、共に修羅場をくぐり抜けた戦友。死線を共にした仲。出会って間もないふたりではあるが、彼女たちのあいだには確かな絆が芽生えていた。

無論それはふたりだけではなく、この場に生き残った全員に言えることである。

◆

「マスター、聞いたかよ」

大草原『グリンシー』の外れに位置する小村。そこに居を構える酒場に、ひとりの男が上機嫌に入ってきた。

正確には酒場と食堂と、二階の宿屋を兼ねた店である。

男は並ぶ丸テーブルを通り越しカウンター席に直行し、興奮気味に二の句を継いだ。

「近くに巣くってた『モンスター』共がみんな死んでたって」

「もう何度も聞いたよ」

壮年の店主は苦笑してそれに答えた。

店に来る客来る客がそれを口にするため、喜ばしい反面どこか辟易している部分もあるのだ。

男の顔は、興奮とは別に紅潮している。恐らく酔っているのだろう。もう夜も深まっている時間だ、それも無理はない。

店主は注文された酒を出し、構わず続けられる常連客の話に付き

合うことにした。
この店を始めて長い。酔っ払いの相手をするのは慣れていた。

第二章（11）

「最初に見つけたのはガキ共だったんだって」
「うん」
「言い付け破って村の外まで遊びに行って、奴らのすみかに入りやがったんだ」
「らしいね」
「奴らが死んでたからよかったものの、生きてたらどうなってたことか。ぞっとするよ」
「まったく」
「……しっかし、なんで死んでたんだかなぁ。マスターわかる？」
「さぁ。『モンスター』同士で揉め事でもあったんじゃないかな」

「……」
同じカウンター上で交わされる会話に、エリスは割り込みたくてウズウズしていた。
自分たちがそれをやったんだと。だから褒め称えてもいいんだぞと。崇め祭ってもいいんだぞと。
しかし言わなかった。アリーシェの言葉を覚えていたからだ。
積極的に『モンスター』に抵抗し、なおかつ打ち破った人間がいるということが知れ渡れば、奴らがなにかしらの報復を行うかもしれない。
無論、それが自分にだけ向けられるのならば問題はなかった。望むところである。しかしそれが自分以外の、目も手も届かない無関係の人間たちに向けられるのならば、たまったものではない。
その可能性は充分にある。『モンスター』とはそういう奴らだ。
故にエリスは黙殺する。
黙って夜食の、熱々のビーフシチューをすすっていた。

……戦いのあと。一度落ち着いた場所で休息すべきと提案したアリーシェに則り、一同は近場にあったこの村で宿を取った。

そしてひと眠りしたエリスは、空腹を覚え、一階部分の食堂スペースまで降りてきて今に至るというわけだ。

酒場も兼ねているためか、夜中であったが客の入りはまずまずといったところだった。

「今回ばっかりは、本当に危なかったですね」

隣のイスに座るリフィクが、ため息まじりにささやく。彼の前には、水の入ったコップだけがぽつりと置かれていた。

熟睡していた彼を叩き起こして、強引に夜食に付き合わせたのは無論エリスだ。別にひとりで食べにきてもよかったのだが、そこは枯れ木も山の賑わいというヤツである。

「一歩間違えれば、死んじゃうところでした」

「いつだってそーだろーが」

投げやりに答えるエリス。

「遊んでるわけじゃねーんだから。間違えなくても、ちょっとでも気を抜きゃそこで終わりだよ」

口調は投げやりとはいえ、その内容は決して冗談の類ではなかった。

敵は強大。自分よりも強い者。それを嫌というほど思い知って、なお軽口のようにビーフシチューを食べながら言えてしまう辺り、やはりどこか神経のズレているエリスである。

「……『ボス』と呼ばれる『モンスター』を相手にするのさえ危ないのに、さらにその上の『キング』に挑もうとしているんですよね、エーツェルさんは……」

リフィクはしみじみと、思い返すように呟いた。今さら、ではあるが。

「やめませんか？　そんなバカげたことは」

顔をエリスに向け、真剣な表情で切り出す。

「なにも『キング』に挑まなくたっていいじゃないですか。アリー

シェ・ステイシーさんたちの、あの騎士団に入れさせてもらって…
…それで、人間に率先して害を与える『モンスター』たちと細々と
戦っていけば……！」
　しかし当のエリスは、そんなリフィクの熱弁をマジメには聞いて
いなかった。また始まった、とつまらなそうに眉をひそめている。
　口を開けば同じことしか言わないからだ。やめよう、逃げよう、
あきらめよう。飽きもせずそんなことばかり。
　普段なら、エリスがそのまま無視して終わりだろう。もしくは怒
鳴るか小突くか、その程度のものだ。
　しかし不幸なことに、今のエリスは、言いたいことを言えないた
め虫の居所をひどく悪くしていた。だから普段とは少し違った結果
を招いてしまう。
「今からでも遅くないですよ。一緒に考え直しましょ？　ねっ？」
　真に考え直すべきはリフィクに他ならない。
「……」
　エリスは無言で、シチューをスプーンですくう。そして湯気の昇
り立つそれを、カウンターの上に無防備に置かれているリフィクの
手にポトリと落とした。
「ぁあっつぁいっ！！」
　リフィクはそれにびっくりして、イスから転げ落ちてしまう。し
かもその弾みに自分の手でコップを倒し、頭から水をかぶってしま
った。
「エリス・エーツェルに二言なし！」
　散々な状態のリフィクへ、さらに怒鳴り声が浴びせかけられる。
「あたしが決めたことはもう決まったことだ！　雨が降ろうが槍が
降ろうがそれは覆らないんだよ！　臓腑の底まで思い知れっ！」
　こっそりとアドレー・カギュフのセリフを拝借するエリスだった。
気に入ったのだろうか。
　カウンター席から響く威勢の良い声を耳にして、アリーシェは含

み笑うように微笑んだ。
木製の丸いテーブルについている彼女。対面に座るゼーテン・ラドニス共々、今は鎧も武器も身に付けていなかった。
ゆったりとしたローブに袖を通し、鮮やかな色のハチミツ酒を味わっている。
口元から笑みが過ぎ去った頃。アリーシェは、深刻な表情をラドニスへと差し向けた。
「『銀影騎士団』……その全戦力を集めれば、『モンスターキング』に対抗することができるかしら……？」
真剣そのものといった様子の彼女に対し、彼は「らしくないな」と冗談を返すような口調で答えた。
「あんな娘の絵空事を真に受けるとは。アリーシェ・ステイシーらしくもない」
「……かもしれないわね」
アリーシェは顔を横に向け、カウンター席のエリスをじっと見つめる。
「けど、彼女という人を知ってしまったから」
ラドニスも一度だけカウンターを視線を送り、グラスを口につけた。
「エリス・エーツェル。……私が彼女くらいの頃は、ただただ『モンスター』に怯えて生きているだけだったわ。戦おうなんて考えもしなかったし、そんな力もなかった」
アリーシェがこの道に入ったのは二十を過ぎてからだ。むしろそれまでは、逆に戦闘や暴力といった行為を忌避していた。しかし今は、そんな自分を少々後悔している。
「でも彼女はそれを持っている。私にはなかったものを、すべて。もし過去の私が、彼女のような力と心を持っていたら……と思うとね」
普段より饒舌なのは、アルコールが入っているからだろう。アリーシェは顔を正面に戻し、グラスに目を落とした。

「とてもうらやましくて。憧れて。少し妬ましい」
話がずれたわね、と呟いて、アリーシェはハチミツ酒をひと口含んだ。そしてラドニスを見つめる。
「私たちがしているのは、終わりのない戦いでしょう？　一体でも『モンスター』を倒せば、それで救われる人間がひとりでもいる。今まではそれで充分だと考えていたけど……」
端的に言ってしまえば、それは根本的な解決にはなっていない。小さすぎる抵抗。せいぜい悪あがきにすぎないのだ。
「彼女がやろうとしているのは、その根本の解決。……『モンスター』は強い生き物で、人間は弱い生き物。それが常識。だけどもし、その人間が『モンスター』の最高峰である『キング』を倒すことができれば」
常識が覆る。
「世界が変わるかもしれない」
無論、『モンスターキング』を倒すなどラドニスの言うように絵空事だ。人間ごときが口にするのもはばかられること。そして仮に倒せたとしても、この現状が変わるという確固たる保証はない。
しかし。
「とても魅力的な目標だと思うの」
たとえイバラの道であったとしても、それが成されれば、自分たちがやってきたこととは比べ物にならないほどの人間が救われるかもしれない。命を救うことができるかもしれない。
『モンスター』と戦っていくなら、これ以上ないというほどの目標である。
一瞬でも甘美な夢を抱いてしまった以上、それを忘れろというのはあまりにも酷な話だ。
「どれだけ大きな目標でも、心が折れない限りは挑戦できる。そしてエリスさんはそんな心を持っている。……だけどすべてを成し遂げるには、まだまだ力が足りていない。だから私たちがその力を補えれば、もしかしたら……と思って」

熱心に言い終えたアリーシェは、ノドを潤すようにグラスに手を伸ばす。
静かに聞いていたラドニスは、彼女がグラスをテーブルに戻した頃、ようやく口を開いた。
「『モンスターキング』の力量を知らない俺には、なんとも言えない話だ」
「終わらせないでよ」
アリーシェはクスクスと、まるで少女のように笑いをこぼす。
「たしかにそうだけどね。それに、仮に『キング』に太刀打ちできる目処が立ったとしても、騎士団の意志を決めるのはオーランド様ですもの。私が頭を悩ませていてもしょうがないわよね」
そして肩をすくめた。
「……だが、ひとつだけ言えることは」
ラドニスはテーブルの中央を見つめながら、真摯な口調で断言する。
「俺はお前の決定に従うということだ。それは変わらない」
言葉と共に向けられた視線に、アリーシェは穏やかな微笑みを送り返した。
「……うん。ありがとう」
そんな時。店の奥にある階段から、パルヴィーが降りてくる姿が視界に入った。

「ねぇー、エリスちゃん」
「……あー？」
隣席に座るなり投げかけられた猫なで声に、エリスは怪訝顔でそちらを振り向いた。
「おねがいがあるんだけど」
このパルヴィー・ジルヴィアも、今は武器や防具の類を身につけていなかった。ワイン色のワンピースに、髪を頭の両端でアップにしている。

そういう姿だと、やはり戦士ではなくどこかの村娘という印象が強かった。ちなみにエリスはどこかの不良娘だろう。

「聞かねーからどっか行け」

エリスはそっけない態度であしらい、ビーフシチューを口に入れる。

「えーっ？　そんな意地悪なこと言わないでよー。わたしたち友達でしょー？」

パルヴィーはさらに甘えるようにすり寄った。うっとうしそうに腕で振り払うエリス。

「いつからだよっ！」

「えへへ。今から」

あからさますぎる猫のかぶり具合に、エリスは鬼のような形相で彼女をにらみつけた。

延々と『各地に伝わる一風変わった逸話』を喋らされていたリフィクは、乱入者の登場にひそかにほっと息をつく。

第二章（12）

「あのかっこいい彼のこと、教えてくれない？」
「どいつだよ」
エリスは興味なさげにシチューを含みながら、それでも一応相づちを打ってやった。
「ほら、弓矢の。レクトくんだっけ？　彼のこと」
「あんなもん別にかっこよかねーだろ。あたしのほうがかっこいいっての」
妙なところでも負けず嫌いを発揮するエリスである。パルヴィーはかまわず食い下がった。
「ねぇ教えてよぅ、いろいろ。好きなものとかぁ、嫌いなものとかぁ、趣味とかぁ、特技とかぁ、将来の夢とかぁ、女の子のタイプとかぁ。なんでもいいから知りたいの」
好感と興味にあふれた表情が、ありありと浮かんでいた。その奥にあるものは、まぁ、わからなくもない。本人も隠す気はないのだろう。
しかしエリスはまったく相手にせず、シチューの中のニンジンを横によけるという作業を優先させていた。
エリスがつれないと見るや、パルヴィーはその向こう隣のリフィクへと矛先を変える。
「ねぇリフィくんでもいいからさぁ、彼のこと教えてぇ」
リフィくん……。彼のヒタイに、妙な汗がひと粒浮かんだ。
「いえ、あのー……僕は、まだおふたりと出会ってから日が浅いので。そういうことは、あまり」
詳しくないんです。と言い終わる前に。
「使えねっ」
パルヴィーは小骨を吐き出すように、低い声で呟いた。

「えぇぇーっ！？」
「んな回りくどいことしてねーで、あいつに直接聞きゃぁいいじゃねーか」
リフィクの驚愕を押しのけて、エリスが口を挟む。めずらしく正論だ。
「えー？　でもー」
パルヴィーは再びかわいこぶりっこな仕草で、もじもじと照れ笑った。
「……」
空恐ろしいものを見るような目をするリフィク。
「そういうのってさぁ、順序ってものがあるじゃん？　まだ早いかなって」
「ささいなこったよ。迷ってたってしょうがねぇ。思い立ったら即行動。今すぐ奴の部屋に行ってこいよ。そんで押し倒してこいよ」
「エーツェルさんっ……！」
最後に一気に飛躍した展開に、リフィクはたまらず声を上げた。いつも二段三段、段階をすっ飛ばす。
「えー……？」
パルヴィーは困ったように顔を赤らめるが、
「……いいのかなぁ？」
意外と乗り気な様子だった。
思わずイスからずっこけるリフィク。
「でもでも、もう遅いし、寝ちゃってるかもしれないよね？」
「そっちのほうが都合いいだろ」
イスに座り直そうとして、再び滑り落ちるリフィク。
「先手必勝ってのはどこの世界にも通用するアレだ。ためらってちゃなにも始まんねーだろ？　だったらやれよ。奇襲だ、奇襲」
親身に激励しているようにも聞こえるも、その実、とっととどこかに消えてほしいだけのエリスだった。
「うーん。……よーし！　奇襲！」

そうとは気付かぬパルヴィーは、なにかを決意したのか、勢い良くイスから飛び降りる。
「やってみる」
そしてペロリと舌なめずりをして、上機嫌な調子で階段を登って行った。
「……お互いの気持ちが大切なんじゃないかと、僕は思いますが……」
真面目に呟くリフィクを横目に。エリスは彼女の背中を眺めながら、
「さかりつきやがって」
と自分でそそのかしたことを見事に棚に上げて、白い目で言い捨てた。まぁ、あの程度の扇動でやる気になってしまう彼女も彼女でかなりアレなのだが。
「別に。自然なことじゃない？」
そんなエリスの肩に、そっとやわらかな手が置かれた。
振り返った先にいたのは、アリーシェ・ステイシー。その後ろにラドニスの姿もあった。
「私たちの戦いはいつでも命がけだもの。焦がれた思いなら、ためらわずに伝えたほうがいいわ。遂げられないよりはね」
彼女の顔は、かなり紅潮していた。目が据わっていて、声や喋り方も普段と比べて甘ったるい。完全にできあがっているようである。
「あなたにも、そういう人のひとりやふたりはいるでしょう？」
水を向けられて、エリスは短く鼻を鳴らした。
「どうだかな。あたしに釣り合うような奴なんかそうそういねーよ。」
言い終えてから、反撃のように「あんたはどうなんだよ？」と聞き返す。
アリーシェは意味深な微笑みを見せて、
「さぁ、どうかしら？　おやすみ」
ラドニスを連れ立って二階に上がって行った。

「おやすみなさい」とリフィク。
エリスはそれ以上はかまわず、他の客と話し込んでいた店主をカウンター越しに呼び寄せた。
「おかわり」
そしてビーフシチューをもう一杯注文する。
「まだ食べるんですかっ！？」
「悪いかよ」
リフィクは思わず目を丸くした。かれこれ三杯目だ。見ているぶんにはかまわないのだが、エリスが残したニンジンたちを食べさせられているのだから、たまったものではない。彼女と違い特に空腹だったというわけでもないのだから。
断ると、食べ物を粗末にすんじゃねーよという理不尽な説教が飛んでくる。
それがもう一杯ぶん追加されると思うと、不満を通り越して泣きたい気分になるリフィクだった。

新たなシチューが運ばれ、ひと口ふた口と進んだ頃だろうか。パルヴィーが戻ってきたのは。
彼女は無言でエリスの隣に座り、カウンターにがっくりと突っ伏す。
「……マスター、キツイのちょうだい」
そしてその体勢のまま、なんとも暗然な声を吐き出した。
エリスはそんな彼女をチラリとだけ見て、特になにも言わずにスプーンを運ぶ。
しばしののち店主が、小さなグラスをパルヴィーの前に静かに置いた。大抵の場合、グラスの小ささに反比例して中身のアレの度合いが強くなっていくものだが、さて。
それがきっかけとなったか、リフィクがおずおずと口を開く。
「なにかあったんですか……？」
様子を見るに、なにかがあったのは明白だろう。パルヴィーはグ

ラスに入ったものを一気に飲み干し、再びカウンターにうなだれた。
「……言いたくない」
「『その気持ちは嬉しい。だが今は、心から集中すべきことがある』」
彼女の言葉が終わるか終わらないかというタイミングで、エリスがなにかを言い出した。
まるで紙に書かれた文字を追っているかのように、抑揚のない言い方。
「『それが済むまでは、他のことにまで気を回していられない』……とかなんとか、よくわかんねー御託でお茶濁されて、すごすごと追い返されてきたんだろ？」
なんのことだかリフィクにはわからなかったが、パルヴィーは泥から出るように顔を上げ、じっとりとした目でエリスを見やった。
「……なに？　あんたエスパー？」
「あんなクソ真面目な野郎の言いそうなことなんて、たかが知れてるってこったよ」
さらりと言って、シチューをひと口。
「それにあいつだって行きずりの女と寝るほど落ちぶれちゃいねーだろ」
「エーツェルさん、言葉っ……」
あまりに遠慮のない物言いに、リフィクはたまらず眉をひそめる。
しかしパルヴィーは、特にそれを気にした様子はなかった。なにやら頬をふくらませながら、なめ回すようにエリスを見つめている。
「なーんか、ずいぶん詳しそう。彼のことならなんでもわかってますみたいな感じで」
やけにトゲの含まれた声。
「なんだそれ」
「どういう関係なの？　レクトくんとは」
言葉的にも物理的にも、ずいっと詰め寄るパルヴィー。エリスは目障りそうな顔を彼女に向けた。

「弟分だよ」
「……レクトくんのほうが年上に見えるけど」
「気にすんな」
「それだけ？　いつから知り合いなの？　どうやって知り合ったの？　なんで一緒に旅してるの？　本当にそれだけ？　ねぇねぇねぇねぇ？」
「うるせーなぁっ！」
もう少しでキスしてしまいそうなほど詰め寄っていたパルヴィーを、エリスはガマンの限界とばかりに突き放した。
まぁエリスでなくとも、こうしつこくされたら嫌気も差すだろう。
「ガキの頃から一緒にいたってだけだよ。わかったらとっとと寝ろ、バカっつら」
「それって、幼なじみってこと？」
当初の位置に戻るも、パルヴィーは懲りずに話を続けた。
「……あやしい」
「なにがだよ？」
「だって王道じゃん。なんだかんだあっても、結局そこに落ち着くじゃん」
「だからなにがだよ？」
「負けないからっ！」
パルヴィーはいきなり大声を出して、イスから飛び降りた。そしてそのまま、ふらふらとした足取りで再び階段を登っていく。恐らく今度は自室に向かって。
「鼻につく上に、よくわからん奴」
エリスはその途中まで目で追い、投げやりに言い捨てた。

◆

世界のどことも同じように、その村にも朝はやってくる。
輝く太陽が顔を出し、さわやかな風が流れていく。

酒場兼食堂兼宿屋の軒先に、赤茶色の毛並みをした二頭の馬がつながれていた。アリーシェら、銀影騎士団の所有馬である。

と言っても彼らが乗せるのは人ではなく、人間では持ちきれないほどの荷物だった。両側面に吊らした皮の袋の中には、代替用の武器防具がたんまりと詰め込まれている。

その馬のたてがみを、エリスがわしわしとなでていた。

動物に向けられる目は、いつもと違って穏やかでやさしい。……ような気がした。

背後から、旅支度を終えたレクトとリフィクが歩み寄る。

彼らに少し遅れて、アリーシェ、ラドニス、パルヴィーの三人も建物から出てきた。エリスら三人は自然とそちらに振り向き、対面する形になる。

「みんなで話し合ったんだけど」

アリーシェが口を開いた。

「あなたたちの旅に、私たちもお供することにしたわ。かまわないでしょう？」

「もちろんです」

と気持ち良く答えたのはレクトだった。心強い、という思いが全面ににじみ出ている。

「ありがとう」

「三人そろってあたしの子分になるってんなら、かまわねーけど」

付け足したエリスに、レクトとリフィクが非難の目を集中した。

アリーシェは「ふふっ」と微笑んで、それをあっさり受け流す。

単なる冗談だと思ったのだろう。エリス的にはあながちそうでもなかったのだが。

「『モンスターキング』を打倒するという最終目標まで付き合えるかは保証できないけど、協力は惜しまないわ。これから、力を合わせてがんばっていきましょう」

かしこまった彼女のあいさつにこそばゆいものを感じながらも、エリスは笑顔でそれに応えた。

「しょうがねーな。頼むよ」

第二章（13）

人間が六人に馬が二頭というなかなか賑やかになった旅路は、青空の下、大草原を渡る街道を進んでいた。

それなりに整えられた道は歩きやすく、疲労も少ない。人数が増えたことで交わされる言葉も増え、一行のあいだには陽気な雰囲気がただよっていた。

「……『キング』の居場所を知らずに、今まで旅をしていたの？」

その事実に、アリーシェは思わず目を丸くする。

あれだけ豪語しておいて、だ。目的の場所がわからない。もはやそれは笑い話のレベルだろう。

おかしそうに笑みを浮かべる彼女に、エリスは口を尖らせて反論した。

「まったく知らねーってこともねーよ。名前くらいは知ってる。えーと、あれだろ、『ルル・リラルド』とかって」

「そうね。北の地グッドレムに位置する魔都……。ヴァーゼルヴ・ヴァネスはそこにいるわ」

「それが親玉の名前か」

と、しみじみ呟くエリス。それすら知らなかったのかということには、もう苦笑さえ起きなかった。

いろいろとアンバランスな奴である。

「行ったことあんのか？」

「まさか」

気軽に訊ねたエリスに、アリーシェは心外とばかりに肩をすくめた。

「近付こうとも思わなかったわ」

人間からすれば、そこはまさに悪鬼の総本山だ。ヤブをつついてヘビを出すこともあるまい。良識ある人間なら、耳にするのも避け

たい場所であろう。

そのやり取りを、なんとも言えない心境で聞いているリフィクである。

先日は『モンスターキング』の居場所はわからないと答えたものの、実はウソだったのだ。

知っていた。旅をしていれば嫌でも耳に入ってくる。

しかしそれを教えてしまえば、ますますエリスに拍車がかかってしまうのは明白だ。

指をくわえて死地に行かせたくはない。そして連れて行かれたくはない。そう思って、主に後者の理由で、あえてシラを切ったのだ。

そんなリフィクのささやかな抵抗が、この瞬間に水泡に帰す。

いずれはわかること、とあきらめていた部分もあったにはあったのだが。

「場所がわかりゃぁ、こっちのもんだな」

エリスは一行の先頭を意気揚々と闊歩しながら、豪快にひとりごとをこぼす。

まるで最大の悩みが解消されたとでも言いたげな様子だった。

実際問題、それは大した悩みではないのだが。もっとはるかに高い壁がそそり立っているということは、考えないのだろうか。

……考えないのだろう。

上機嫌な彼女へ、レクトが横に並んで問いかけた。

「やっぱり必要だろう？　仲間は」

「まっ、いないよりはな」

先日とは異なり、一応は同意するエリス。

一連のことで思い直したのだろうか。良い傾向である。

「それよりお前」

と、エリスが話を変えた。彼の胸元を平手の裏で軽く叩く。

「あんまり女に恥かかせんなよ」

「彼女のことか」
レクトは少ない言葉から、パルヴィーのことを指しているのだと読み取った。それ以外に思い当たる節はない。
「出会って間もなかったからな。だが出発が決まってから、改めて返答をし直した。共に行くなら、これから互いを知り合っていく機会もあるだろうと。そしてその上で目的を達成するまで待っていてくれるのなら、このことを真剣に考えると」
重い……とまではいかないものの懇切丁寧な彼の態度に、エリスは「けっ！」と吐き捨てた。良家のお嬢様かっ、お前は、と。
というかなにやら、少々ズレた受け取り方をしているような気がしてならない。
「やっぱり男だな、お前も」
しかしその指摘はあえてせずに、エリスは見下すように呟いた。
言葉の意味がわからず、難しい顔で二の句を待つレクト。
「自分に気がある女が、そうやって気長に待っててくれると思ってるところがだよ」
その付け足しを聞き、ようやく理解したように眉尻を下げた。
女性の立場から見た意見なのだろうか。女らしさなど揮発してしまうようなエリスなのだが。
「チャンスは少ねーんだから、えり好みできるような立場でもねーだろ」
ひどい決めつけである。
しかしレクトは、子供に言い聞かせるような穏やかな口調で言葉を返した。
「そうだな。だが往々にして男は、健気に待っていてくれるような女性を求めてるものだ。そういう身勝手さを包んでくれるような、やさしさを」
若さがほとばしる青少年とは思えないほどの、老成した意見である。
エリスは呆れ顔を浮かばせた。

「傲慢なこって」
「承知している」
微笑むレクト。

友人のようでも、家族のようでも、ましてや男女の仲のようでもない。ふたりのあいだには独特な関係が形成されているのだと、パルヴィーは内心で思っていた。
後方からレクトを見つめる彼女は、へそを曲げたようにふくれている。
戦いの時の勇ましい表情も良いが、そうして談笑している表情も良い……と、うっとりする反面、それがエリスに向けられていることが面白くないのだ。
意中の男が他の女と楽しそうに話している光景は、あまり見たくないものである。
なのでパルヴィーは、
「ていっ！」
それを実力行使で妨げることにした。
海に頭から飛び込むようにふたりのあいだに割って入り、レクトの腕をからめ取る。
そして不意を突かれてびっくりしているふたりにもかまわず、さらに会話をも妨げてみた。
「レクトくんって『魔術』練習中なんだよね？　もしよかったら、わたしが教えてあげよっか？」

◆

花と緑の豊かな町『イーゼロッテ』は、最後の市庭とも呼ばれている。
各地から流れてくる人や物が、ほとんどの場合この町より奥地へは進まないからだ。

ここから先は、人里が極端に少なくなる。好き好んで進むのは、なにか特別な理由のある者か俗世間に飽きた旅人くらいのものだろう。

辺境最後の交易場。

そんな町の性質から、自然とそう呼ばれるようになったのではないだろうか。

「うおっ……！　でかいっ……！」

その奥地からはるばるやって来たエリスは、町の規模にただただ口を半開きにしていた。

三角屋根の並び立つ木造建築の整然さと数。行き交う多種多様な人々の盛況。通りの先に建てられた、物見やぐらのような時計台。

そのどれもが、エリスの知識レベルを超越していた。ここと比べれば、故郷の村など単なる家畜小屋にすら見えてしまうだろう。

「そう？　別に普通だけど」

驚いている様子のエリスを見て、パルヴィーが勝ち誇ったように茶々を入れた。

「そうですね」

と悪意なくリフィクも同意する。

「ざらにある感じの……」

「マジかよっ!?」

「あんた、どういう田舎に住んでたわけ？」

しめたとばかりにからかうパルヴィーの横で、レクトは口から出そうになった感嘆を静かに飲み込んだ。

時計の針は、二本ともが頂点を指そうとしている。

「まず宿を取って少し休みましょう。そのあと分担して武器防具の修理や買い替え、食料、諸道具の買い出し、情報収集を。そして出発は明朝に」

様々な露店の並ぶ通りを歩きながら、アリーシェがてきぱきと予

定を決めていく。さすがに手慣れたものだった。
「情報収集って？」
その中の一語を耳に止め、エリスが聞き返す。アリーシェは「『モンスター』のよ」と小さな声で答えた。
周囲を歩く人間は多い。彼らの耳に入らないように、という配慮だろう。
「近くで、無闇に暴れてはいないか。生活ができないほど苦しめられている村はないか。そういう情報をね。もちろん、この町が……ということもあるけど」
普段からそうして戦ってきたのだろうか。エリスは「なるほど」とうなずいた。
「『頭』を目指してはいるけど、『そういうの』を見過ごしては行かないでしょう？」
「当然」
エリスだけでなく、レクトもコクリと首肯する。

イーゼロッテの町は、普段と変わらぬ昼下がりを過ごしていた。
昨日と同じ普通な。おとといと同じ普通な。何事もない、平和な昼下がりを。
それはここ、中央にほど近い一角にある軽食屋『イーゼロッテ・サンドイッチ』も同じであった。
店名にもあるサンドイッチが自慢の古顔は、老若男女を問わず住民に親しまれている。今日も昼時にはお客が殺到し、店主は目を回しつつもやりがいを噛み締め、サンドイッチを次々と仕上げていった。
しかし得てして。わざわいというものは突然やってくるものである。
「……」
店主は、客が入ってきたらもはや反射的に出る「いらっしゃいま

せ」という言葉が、言えなかった。
ピークを過ぎて客足が一段落した、そんな頃。ふらりとひとりの客の入ってきた。
店主は、どう接客すればいいのかわからなかったのだ。
『モンスター』の客など初めてだったのだから。
「……」
『モンスター』というとまず巨体がイメージされるが、『それ』は、比較的人間に近いサイズに留まっていた。
すらりと伸びた黒い四肢に、紫水晶のように輝く防具にも似た皮膚。そして顔の造形も、シルエットだけを見れば人間のそれとそう変わらなかった。
しかし背中から生えるコウモリのような翼が、決定的に人間とは異なっている。
「……」
店主はなおも固まっていた。
どうして『モンスター』が？　『モンスター』もサンドイッチを食うのか？　今すぐ逃げたほうがいいのか？　それともしかして今日は自分の誕生日で、これは誰かが用意したサプライズイベントなのか？
様々な混乱が思考を停止させている。
すると質素な店内を見回していた『モンスター』が、向かって右を指差した。
「あれをひとつ」
まるで冗談を言っているような、軽い声。指の先には、『一番人気！　ミラクルサンド』という張り紙がしてあった。
それは紛れもない、注文である。
「……」
それでもやはり硬直している店主を、『モンスター』は笑いかけるような声で促した。
「急いでね」

リフィクとアリーシェは情報を集めに。
ラドニスは諸道具を購入しに。
レクトとパルヴィーは消耗した武具を修理しに。それぞれ宿屋をあとにした。
そして残ったエリスはというと、ぶらりと町並みを散策している。
別に、分担作業をサボったというわけではない。小休止のつもりがひと眠りしてしまい、起きた時にはもう誰もいなかったのだ。
「薄情な奴らめ」
と、ぐちったものの、なにもしなくていいのならそれに越した事はないか、と頭を切り替えて町へと飛び出したというわけである。
イーゼロッテの町並みは、エリスにとってやはり壮観だった。
目をこらして右を見ても左を見ても、町の外が見えない。それだけでも驚きだ。
これで「普通」だと言うのだから、世界というのは広いものである。
「おっ」
きょろきょろと周りを見回していたエリスの目が、遊んでいる子供たちを見てピタリと止まった。
通りから外れた空き地で、五人くらいだろうか。木の棒を剣に見立てて、無邪気に振り回している。
その光景がなんとも言えず懐かしくて、エリスはしばらく眺めていた。

第二章（１４）

「さっきのお店の人に聞いたんだけど、この先においしいサンドイッチ屋さんがあるんだって」
武具屋から宿へ戻る道すがら。そういえばと思い出すように、パルヴィーが切り出した。
「行ってみない？」
のぞき込むように、並んで歩くレクトの顔を見る。
「そうだね。じゃあ、みんなの用事が済んでから」
レクトはほがらかに、そううなずいた。
「……そうじゃなくてぇ」
いやいや、みんなで行っては意味がないではないか。
意図をやんわり受け流されたパルヴィーは、即座に直接攻撃に切り替えた。
「ふたりで」
「……」
すっと身を寄せられて、レクトは困ったような照れたような面持ちで苦笑った。
武器と防具の修理は、アリーシェの見立て通り明朝には終わるそうだった。運搬用に連れて行った馬一頭は、その武具屋に預けてある。仕事用に馬車馬を飼っているので一頭くらい増えても構わないという厚意に甘えさせてもらったのだ。
さすがにボッキリと折れてしまったエリスの剣は修理するより新しいものを買ったほうが早く安くつくため、レクトは適当なものを見繕っておいた。
普及的な鋼鉄製の両刃剣が、今は彼の片手に収まっている。
「それにしても……この町は、ずいぶんと平和なんだな」
押し切られるような形で歩むレクトが、町並みを眺めながらぽつ

りとこぼした。
「まるで別世界だ」
自分の村を含め、今まで立ち寄ってきたところは少なからず『モンスター』による恐怖や実被害が見受けられたものだ。しかしここは違う。
人々の様子や町の景観を見ても、あまりそれらしい雰囲気は感じられなかった。
「『モンスター』が少ないのかもね、この辺」
「地域によって差が？」
パルヴィーの相づちに、レクトは興味深げな視線を送る。
「うん、まぁ。……たぶん」
パルヴィーとしては、こういう話よりももっと明るく気軽なお喋りがしたいところなのだが。ただ彼が興味あることならそれでもいいかと思い、話を続けた。
「それか、『取り引き』みたいなものが成立してるのかも」
「取り引き……？」
今の話と結びつけにくい単語にレクトは眉根を寄せた。ふたりは道を曲がり、大きな通りへと出る。
「『モンスター』が人間を襲うのって、わたしたちが動物を狩るのとおんなじ感覚なんだって」
パルヴィーは「アリーシェ様から聞いたことなんだけど」と前置いてから、それに答えた。
「でも、いちいち山に入って探して狩るより、牧場みたいなものを作ったほうが簡単に手に入るでしょ？」
「……まさか」
話の全体像が見えかけて、レクトは顔を険しくする。
「これくらいの町になると、そういうこともあるんだって。近くに住む『モンスター』と町長みたいな人が取り引きするの。町で暴れたりしない代わりに、決められた日が来るたびに人間を何人か差し出すっていう……」

「まるで生け贄じゃないか、それは……！」

レクトは思わず歩く足を止めた。言い表せない憤りが体の内から湧き上がってくる。

それは取り引きなどではなく、脅迫に近いものだということがたやすく想像できた。

似たケースは前にも出くわしたことがある。あれはたしか、ハーニスとリュシールに出会った村だったろうか。

あの村の場合は、ただ普通の食料だけを要求していた。しかしこの話の場合は次元が違う。……人間を。同じ町に住む同胞を差し出せという要求なのだ。

「そんなことを……！」

レクトはキツく拳を握る。

「いやっ、あのぅ……別に、この町がそうだっていう話じゃなくて、そういうパターンもあるよねっていう話で……」

熱気をほとばしらせる彼を、パルヴィーは慌てて落ち着かせようとした。

レクトとしても、それはわかっている。

だがどうにも許せないのだ。そんなことが現実に起こっているということが。それをさせている『モンスター』が。

村人全員が家族のように触れ合っていたレクトの故郷と、こういう大きな町とでは住人同士の意識は違うのかもしれない。しかしそれでも、心を痛めない人間はいないだろう。

犠牲になった人のことを思うと、いたたまれなくなる。

「……」

頭を冷やそうと、レクトは深く息を吐く。

そこでふと周りを見て、あることに気付いた。

立ち止まっているのは自分たちだけではない。

話に没頭していて気付かなかったのか。大通りにいるほとんどの人間が足を止め、なにやら一点を遠巻きに眺めながらざわついていた。

レクトとパルヴィーは、何事かと顔を見合わせる。
その時。
皆の視線が集まっていた建物が、突如爆発を起こした。
轟音と爆風と衝撃波が、ところどころから悲鳴を上げさせる。
吹き飛ぶ建物の木片に紛れて、『イーゼロッテ・サンドイッチ』と書かれたポップな看板が正面の書店に突き刺さった。

恐怖と驚異にかられて、人々が一斉にその場から退避する。
しかしレクトとパルヴィーのふたりだけは、人の波に逆らうように前へ前へと進んでいた。正確には、進むレクトのあとをパルヴィーがついて行っているのだが。
爆発の余波も治まらぬうちに、ふたりは爆心地を視界に収める。
それはなにかの建物だったのだろう。無惨にも両隣を巻き添えにして全壊し、黒い煙をもくもくと吐き出している。
その時、煙の中から人影らしきものが歩み出た。
ふたりは目を見開き、思わず足を止める。
それはしかし、人ではなかった。人間に似た黒い四肢の、鎧のような箇所だけ皮膚が紫色に輝いている。肩甲骨の辺りからコウモリのような翼が生えたその姿は、まるで寓話に登場する悪魔のようだった。
「『モンスター』っ……！？」
パルヴィーが驚きに息を呑む。
恐らく爆発の中心部にいたと思われるその『モンスター』の体には、傷ひとつ、ヤケドひとつすらついていなかった。
まったく無傷の『モンスター』は悠然とした足取りを止め、建物の跡を振り返る。ペロリと舌なめずりをしたその口が、「ごちそうさま」と動いたような気がした。
「……みんなを捜して、連れてきてくれ」
レクトは動揺を抑えて、肩越しにパルヴィーへと指示を送った。

ふたりでは勝てない。だが、このまま奴を野放しにしておくなど到底できない。

レクトは、エリスのためにと買った剣を引き抜いた。

「それまで、俺が引き止める」

「でも……」

と、パルヴィーは戸惑いをうかがわせた。仲間を呼びに行くためとはいえ、彼ひとりを残すのは気が気でない。

無謀だ。相手は『モンスター』。一体だけとはいってもその力は未知数。さすがに、この状況で楽観視はできない。

「いいから行くんだ。迷っていたって状況は好転しないだろう？　なら動くしかない。自分の行動で状況を打破するんだ」

レクトは言い聞かせるように、彼女を促した。

「う……うん……」

その言葉に背中を押されるように、パルヴィーは後方に向かって走り出す。

それを確認してから、レクトは剣を両手で握って正面に構えた。

臨戦体勢のレクト。彼の存在に、『モンスター』も気付いたようだった。

「おや」

感情というものがまったく読み取れない、水晶玉のような瞳が彼をとらえる。

「なにかな？」

発せられた言葉は、ひどく軽いものだった。笑い話でも始めるような、真剣さの欠ける声。

「もしかしてその剣で、僕とやり合うつもり？」

だというのに。その瞳に射抜かれた瞬間、レクトの背筋に冷たいものが走った。

えも言われぬ圧迫感が心臓の鼓動を早める。

逃げるべきだ。そんな言葉が脳裏をよぎった。

「だとしたら面白いよ。傑作だね」
しかしレクトは、戦う姿勢を崩さなかった。
無意識下の部分が警鐘を鳴らしているが、それを無理矢理押し殺す。
「……なぜあんなことをした……！？　貴様がやったんだろう……！」
時間を稼ぐ。そのために、レクトは問答を口にした。利くかどうかはわからなかったが。
「なにが目的だ！　……金か？　食料か？」
それを聞いて、『モンスター』はなぜかおかしそうに噴き出した。
甲高い笑い声が、ひとけのなくなった大通りに響き渡る。
「君は人間だね」
ひとしきり笑ったあと、唐突にそう切り出した。
レクトは顔をこわばらせる。他のなにに見えるというのだ。
「そういう、枠にとらわれた考え方が実に人間らしい」
『モンスター』の笑いの種類が、嘲笑へと変化する。
「でも僕は違う。目的なんてないさ。必要ないんだよ。あるのはただ破壊の衝動だけ。『人間』には到達することも、理解することも、想像することもできないだろうね」
レクトは心の中で吐き捨てた。なにが衝動だ！　わかりたくもない。理性なき暴虐者がっ！
「誰かが大事にしているものを壊し、消し、潰し、裂き、焼き、奪い、破壊することによって得られる至高の快感。それを思うままにできる絶対的強者。……それが僕だ」
「『モンスター』……！」
レクトは憎々しげに呟いた。それが敵の名前だ。それが敵の正体だ。奴らを倒さなければ、人々に安息は訪れない。
「それが君の枠だよ」
『モンスター』は、なおもせせら笑うように言葉を続けた。
「僕はトュループ。それ以外の名前はいらないよ」

レクトは得体の知れなさに気圧されて、息を詰まらせる。
目の前に立つこの『モンスター』は、今までに見てきた奴らとはなにかが決定的に違っていた。まとう雰囲気が異質すぎる。
「……！」
その時、レクトは見た。
奴の後方から駆けてくる、ゼーテン・ラドニスの姿を。
騒ぎを聞きつけたのだろうか。たまたま近くにいたのは幸いだ。
彼の片手の、抜き身のロングソードが光る。
レクトは少しだけ胸をなで下ろし、視線を戻した。
奴はまだ気付いていないようである。冷笑しているような表情をレクトに向けたまま。
ラドニスが急速で迫る。
走っているにも関わらず、足音というものがまるで聞こえてこなかった。どういう技術なのかはわからないが気配を完全に絶っている。
理想的な奇襲。
しかし。斬りかかるまであと一歩というところで、トュループがいきなりその翼を広げた。
バック宙でもするように、ふわりと飛び上がる。
その下を、あえなくラドニスが走り抜けた。
「残念」
トュループは同じようにふわりと着地して、からかうように言い捨てた。気付いていたのか。
ラドニスは特に聞き耳持たず、身を翻してロングソードを構え直す。ちょうどレクトと並ぶような形でトュループに正対した。
「ひとりか。無茶をする」
発せられた言葉は、レクトに向けられたものだった。レクトは、かいつまんで状況を説明する。
「今パルヴィー・ジルヴィアが他のみんなを捜しに行ってます。そ

れまで食い止めようと……」

「意気は買う。だが相手が悪かった」

レクトはついラドニスの顔を見た。彼の目は、わずかな動きをも見逃さないと言わんばかりにトュループを熟視している。

厳しく引き締まった表情が、ことの切迫さを物語っていた。

「あれは危険すぎる」

第二章（15）

エリスは、
「ふはははははっ！　よくぞここまで来たな、勇者ども！」
木の棒を片手にさげて、まるで悪役のように芝居がかった口調で高笑っていた。
「この悪魔王の力、知らぬわけではあるまい！」
彼女と向かい合うように、同じく木の棒を剣のように構えた子供が五人ほど並んでいる。
「さぁ、どいつから我が必殺のオーバーフレアの餌食になりたいのだ！？」
「なんか違うよ」
すかさず子供たちからツッコミが入った。
「うっせぇバーカ。細かいこと気にしてると泥棒の始まりなんだぞ」
と、どちらが子供なのかわからないような言い返しかたをするエリス。
「それもなんか違う気がする」
が、最終的に折れたのは子供たちだった。顔を見合わせてやれやれしょうがないなと肩をすくめ、ごっこ遊びを再開させる。
そんな時だった。
「エッ、リーース！」
通りに面した空き地に、息せき切らせたパルヴィーが駆け込んできたのは。
「エリース！」
「おお、ちょうどいいところに来たな、我が片腕よ」
しかし彼女の慌てた様子など意に介さず、エリスはそんなことを言い出した。予想外の展開に子供たちが「なにっ！？」と驚く。
「勇者どもよ、私と戦う前に、まずはアイツを倒すがいい！」

エリスはビシリ！　っと人差し指を突き出した。指の先にいるのは言うまでもなく、肩で息をするパルヴィー・ジルヴィアである。

「おーっ！」と盛り上がりながら、子供たちは一斉に彼女へと突撃した。

そして周りを取り囲んで、棒でポカポカと袋叩きにし始める。パルヴィーはまるでいじめられっ子のように、しゃがみ込んで頭を抱えた。

「いやぁーっ、痛い痛い痛いっ、やられたぁ……って遊んでる場合じゃなくて！」

見事なノリツッコミを一応披露してから、子供たちを払いのけるように立ち上がる。そして自分が今々やってきた方向を指差し、真剣な表情でエリスに訴えかけた。

「『モンスター』がっ！」

腕を組んでニヤニヤしていたエリスの顔にも、さすがに緊張感が走る。

アリーシェとリフィクは、オープンテラスのカフェでコーヒー片手に談笑していた。

どちらも、各地を旅してきた身の上だ。なにかと話も合うのだろうか。

歩き回って町の住人たちにそれとなく話を聞くも、目当ての情報はあまり手に入らなかった。

『モンスター』の少ない地域なのかとアリーシェは推測したが、断定はしなかった。もとより情報収集などしらみ潰しに行なって初めて成果の出てくるものだ。早計はよくない。

ひと息だけつこうと入ったカフェでよもやま話に花が咲いてしまったのは、アリーシェとしても苦笑するしかなかった。少々サボってしまったなと。

そしてコーヒーを一杯飲み終わろうかという頃である。

ふたりは、町の異変に気が付いた。
「……騒がしいわね」
どこからか喧騒が聞こえ出す。通りを走る人間が目立ち始め、それらが徐々に拡大していった。
ただごと、ではないだろう。
「もしかしてさっきの大きな音が、なにか……事故とか……」
不安げに眉をひそめるリフィク。対照的に、アリーシェは物々しい表情を浮かび上がらせた。
「その程度で済めば御の字だけど」
彼女は、確信に近いものを感じていた。
逃げ惑うように道を走る人々。その必死とも取れる様子には、見覚えがあった。
まるで命の危機……根源的な恐怖に震えているような、そんな逃げ方だ。
よく知っている。そんな恐怖を拭い去ってやりたいと思って、今日まで戦ってきたのだから。
「……行きましょう」
アリーシェは、深刻な表情のまま席を立った。

子供たちに家へ帰るよう言いつけてから、エリスとパルヴィーは現場に急いだ。
視界の至るところで、住人らがクモの子を散らすように家の中へと駆け込んでいる。
かなり波紋が広がっているようだ。急激な勢いで。
そんな目に見えてひとけのなくなっていく町並みの中で、見慣れたふたりの姿を発見した。
「アリーシェ様ぁっ！」
なかば抱きつくように、パルヴィーが彼女へと走り寄る。
「なにがあったの？」

アリーシェはその様子からただならぬ雰囲気を感じ取り、落ち着かせるように説明を求めた。
「町の中でいきなり『モンスター』が現れて……今レクトくんがひとりで戦ってるんです！」
「なんですって……！？」
それを聞き、アリーシェとリフィクはそろって息を呑んだ。恐らく『モンスター』のほうではなく、レクトのほうにであろう。
「おいっ、早くしろっ！」
そんな三人をエリスがせかした。今は話をしている時間も惜しい、と言わんばかりに。
「そうね。場所は？」
「こっちです！」
唯一現場の位置を知っているパルヴィーが再び急いで走り出し、他の三人がそれに続いた。
やがて大通りに到達した頃には、すっかり住人の姿は見えなくなっていた。昼間だというのに、まるで深夜のように静まり返っている。
「無事だった！」
通りのはるか先に見えたレクトの姿に、パルヴィーはほっと胸をなで下ろした。他の者も同じく。
彼はラドニスと共に、例の『モンスター』を剣で攻め立てている。遠くからではよくわからないが、危機に瀕しているというわけではないようだった。逆に押しているようにも見える。
「……あれは……！？」
その『モンスター』を視認した途端、アリーシェが愕然としたように声をもらした。冷静沈着な彼女らしからぬ、ひどく動揺した声である。
「まさか、『灰のトュループ』……！？」
奴の名前だろうか。それを耳にし、リフィクとパルヴィーが「えぇっ！？」と反応を示した。

エリスは、自分だけがわけのわかってない状況に軽く口を尖らせる。
「なんだよ。知り合いか？」
「……己の衝動のままに、なんの見境もなく破壊を繰り返す異端の『モンスター』にして、悪の権化。それがトュループよ」
少し落ち着きを取り戻した口調でアリーシェが説明する。エリスは、ただの『モンスター』とは違う、ということを感じ取った。
「できることなら戦いたくはなかったけど、こんな町中で出くわしてしまったのなら……そうも言っていられないわ」
彼女の声から迷いが消えていく。瞬時に覚悟を決めたのだろう。この辺りは、やはり年の巧である。
「それよりあなた、どうやって戦うつもりなの？」
腹をくくって心の余裕が生まれたのか、アリーシェはエリスの体へと視線を向けた。
アリーシェとパルヴィーは、鎧こそつけていないが習慣として武器を携帯している。それに引き替えエリスは、まったくの丸腰なのだ。
「……そういえばっ！」
手ぶらだった。ということに、言われて初めて気が付くエリス。この思慮の浅さはどうにかならないものだろうか。

なぜレクト・レイドが弓矢を愛用しているかというと、それは単純にどの武器よりも得意だからである。
一意専心を信条としているレクトは、ひたすら弓の鍛錬だけを重ねてきた。故に剣での戦い方など粗末のものだった。
しかしそれでも、彼は戦う姿勢を取り続けている。
不慣れでもいい。無様でもいい。ただ、目の前にある害悪を放っておくわけにはいかないのだ。
「レイド！」
ラドニスが、レクトの名を叫ぶ。

彼の斬撃を後退して避けたトュループが、挟撃する形に位置取っていたレクトの攻撃範囲へと飛び込んだからだ。
「はぁぁっ！」
レクトは気合いと共に踏み込み、奴の背中めがけて剣を振り下ろす。
しかしトュループは羽ばたいて、上方へと軌道を変えた。レクトは空振り、勢いあまってつんのめる。
その背後に着地したトュループが、彼の背中を蹴り飛ばした。
地面に打ちつけられるレクト。彼を守るように、ラドニスが両者のあいだへ走り込む。
その時。突然トュループが、後方へと素早く下がった。
なんのつもりかとラドニスが訝しんだ、次の瞬間。
今々まで奴の立っていた地面が、巨大な刃のように隆起した。

「……ロックブレイド」
アリーシェが遠距離から放った『魔術』は、しかしあっさりとかわされてしまった。
だが牽制と考えるなら充分だろう。トュループとの間合いが離れているあいだに、戦闘態勢を作り上げてく。
アリーシェとラドニスは一瞬だけアイコンタクトを交わして、すぐに敵へと向き直る。
蹴り倒されたレクトが起き上がる頃には、エリスとパルヴィーが最前線へとたどりついていた。
「エリス！」
諸々の状況を素早く把握したレクトは、即座に持っていた剣を丸腰のエリスに手渡す。
「おうっ！」
「大丈夫だった？」
駆け寄るパルヴィーの気遣いに、
「ラドニスさんのおかげで、なんとか」

と答えて、レクトはひとまず前線から退いた。
「みんなを連れてきてくれて、ありがとう」と律儀にも付け加えて。
「ずいぶんと増えたね。仲間かな？　君たちも僕と戦うつもり？」
増援として現れた彼女らに、トュループは好奇的な笑みをかたむけた。
ただそれは人間の認識による『笑み』であるため、実際に笑っているのかどうかは定かではないが。
「そうだとしたら、君たちはバカだよ。もしかして僕のことを知らないのかな？」
愚かしい者を失笑するように、投げかける。その口調からは、まるで自分のことを神とでも思っているような不遜な自信と余裕が感じ取れた。
「んんんーなもん知ったことかっ！　てめぇこそあたしのこと知ってんのかよ！？」
しかしその手の不遜っぷりならエリスも負けてはいない。むしろ彼女の領分であろう。
エリスは三角の陣形の頂点に立ち、新しい剣を片手にぶら下げている。その両翼にラドニスとパルヴィーが構え、少し後方にリフィク。そのさらに後方にアリーシェと後退したレクトが控えていた。
「全然」
トュループは見下した笑みを含ませたまま答える。
「モグリめっ！　じゃあ覚えとけ！」
エリスの物言いに、リフィクは寿命のちぢむ思いを味わっていた。
『灰のトュループ』の悪名は各地に轟いている。わざわざそんな相手にそんな口を叩かなくてもいいだろうに、と。火に油を注ぐだけである。
まぁ、今に始まったことでもないのだが。
「あたしはエリス・エーツェル！　朝でもエリス！　夜でもエリス！　風が吹こうが雨が降ろうが不変不動のエリス・エーツェルだっ

！」

「……当たり前じゃん」

豪快に言い切った彼女の名乗りを聞き、パルヴィーがぼそりと呟いた。

次からは正しく、普通のことをさも凄いことのように豪語するエリス・エーツェル、とでも言ってもらいたいものである。

「だが呼ぶ時は『炎のエリス』と呼べ！」

「それパクってない！？」

『灰のトュループ』に対抗して作った呼び名なのは、はなはだ明白だ。内心「うらやましい」と思っていたのだろうか。

ふたつ名を自分で言い出していれば世話がない。

「興味ないよ」

トュループはささやいて、悠然と進み出す。

「どうせ君も、ここで破壊されるんだから」

「そんでもって、こいつが」

奴の言葉などまるで聞かずに、エリスも駆け出した。正面切って攻めかかる。

振りかぶった剣から、炎の渦が湧き上がった。

「あたしのオーバーフレアだ！」

それが戦闘再開ののろしとなる。彼女に呼応するように、他の皆も動き始めた。

エリスの初撃は、すんでのところで回り込むようにかわされてしまう。

「スラッシュショットっ！」

回避した直後の背中へ、パルヴィーがショートソードから衝撃波を撃ち飛ばした。

矢のような速さで飛ぶそれは、しかしトュループの足元を通り過ぎる。飛び上がって避けられたのだ。

「フラッシュジャベリン！」

滞空中のトュループを、次にリフィクの『魔術』が狙い撃った。

無数の光が尾を引いて襲いかかる。
トュループは触手のようにうねりながら追尾する光条を、地面すれすれを滑空して回避していく。目標を見失った光が地面に着弾し、小さな穴を穿った。
高速で滑空するトュループの前方へ、ラドニスが走り込む。
そして絶妙のタイミングで、ロングソードを振り下ろした。
しかしトュループは、まるで時間を止めたかのように、ピタリと急停止をしてみせる。ラドニスの刃はしたり顔の前を通り過ぎ、あえなく地面を叩いていた。
「ひょいひょいと逃げやがって！」
そこへすかさず、駆けつけたエリスが躍りかかった。
「その翼からぶった斬ってやる！」
「無理だよ」
トュループは薄ら笑いを貼り付けたまま、エリスが剣が振るうよりも速く、回し蹴りを叩き込んだ。
「君にはね」
脇腹を強打されたエリスが、吹き飛ばされるように地面を転がる。

第二章（16）

「……たしかに奴は、トュループと名乗りました」

陣形の最後列。上がった息を整えながらアリーシェの説明を聞いていたレクトが、真新しい記憶を引っ張り出してそう答えた。

前線では他の四人と、トュループと名乗った『モンスター』による激しい攻防が続けられている。

剣がきらめき、炎が舞い、『魔術』が輝く。

やや距離を置いたこの場所からも、その苛烈さが肌で感じられた。

「そんな相手だったなんて……」

レクトは愕然をかみ殺すように独語する。

灰のトュループと呼ばれる破壊の化身。人間も『モンスター』も動物も、数え切れないほどの命が奴の手によって奪われている。なんの理由もなく、ただイタズラに。

生きる天災。出会ったしまったこと自体が不運。他の『モンスター』とは、比較にならないほどに危険な存在。

それを聞いた時、レクトは己の軽率さに戦慄した。そんな相手にひとりで立ち向かおうとしていたのだから。

「……しかし」

それならば、と、レクトの中に新たな疑問が浮かび上がってきた。

自分は、無事だ。不慣れなことをしたために体力を浪費してしまってはいるが、目立った外傷すら負っていない。たとえ二対一の戦いだったとしても、それは妙ではないだろうか。

レクトは激戦の空間を凝視する。

……ずっと、そうだ。トュループの攻撃はすべて殴る蹴るといった打撃ばかり。しかもその力も、せいぜい人間と同じ程度だった。

頻度も限りなく低い。思い出したように、反撃の形で繰り出しているだけだ。

「……」

手を抜いている？　この数で当たっても、奴からすればまだ、鼻も引っかけない程度ということなのだろうか……？

レクトがそんな思考に至った時、

「呼吸は落ち着いた？」

横に立つアリーシェが再び口を開いた。

「剣ならここにもあるけど」

自分の腰元を目で指す。

レクトはつられるようにそれを見てから、ひとつ疑問を訊ねてみた。

「あなたは、戦列には？」

彼女は最初の一撃以降ずっと、こうしてここに立ち尽くしていた。戦いに加わるそぶりすら見せていない。

自分の倍に近いほどの年齢とはいえ、この場へ駆けつけるだけで疲れてしまったということもあるまい。……と、微妙に失礼なことを思うレクトだった。

「もしあれが、本当に『灰のトュループ』だとするなら……きっと、可能な限り力を温存しておくのが私の最善だと思うの」

アリーシェは前方を見すえたまま、重々しく答える。そのあまりに厳然な表情に、レクトは思わず眉根を寄せた。

「この町を、地図から消すわけにはいかないから」

「……それは、どういう……？」

なぜトュループに『灰』という通り名がつけられたのかを、レクトはまだ知らなかった。

「ウインドライン！」

パルヴィーが発生させた突風によって、滞空中のトュループが体勢を崩す。

そこを見計らって、エリスとラドニスが両側から飛びかかった。

「くらえぇっ！」
叫びながら斬りかかるエリスに、黙って斬りかかるラドニス。正反対のふたりであったが、しかし、そのどちらの刃もトュループには届かなかった。
トュループは高速で風見鶏のように回転し、広げた翼でふたりを弾き飛ばす。
「フラッシュジャベリン！」
その間隙を狙ってリフィクが放った光槍は、やはり素早い動きで避けられてしまった。
「くそっ……！」
受け身に失敗して尻餅をついたエリスが、苦々しく吐き捨てる。
四人がかりで怒涛のごとく攻めているのにも関わらず、ここまで一撃たりともトュループには当たっていなかった。
ことごとく、いなされるか避けられるかしてしまうのだ。
だが少しずつではあるが、攻撃の精度が上がってきたように思える。恐らくトュループの動きに皆の目が慣れてきたせいだろう。
とらえるのも時間の問題。
そういう楽観を頭に浮かべながら、エリスは跳ねるように立ち上がった。
「全然ダメだね、君たち」
まるでそれを待っていたかのように、トュループが口を開く。
「あー？」
威圧的に聞き返すエリス。それ以外の三人は、なにを言うつもりなのかと様子をうかがった。
「楽しくないよ」
そんな時。後方から、銀色のロングソードを携えたレクトが戦列に復帰してきた。
四人はそれぞれ、横目で彼の姿を確認する。
「ひとり増えてもね。同じことさ」
言いながら、トュループは右手を前に突き出した。皆に警戒の色

が走る。
「だから」
その右手が、まばゆいばかりの光を帯び始めた。
やがてその光は手の先に集まり、細長く収束していく。その形は、まるで剣。
「このライトニングレイピアで」
トュループはスパークを散らす光の剣の柄を、本物の剣のようにつかむ。そしてそれをハスに構えた。
「そろそろ僕も攻撃させてもらうよ」

レクト、リフィク、パルヴィー、ラドニスは、慎重にトュループの次の動きを洞察する。
剣状の形から察するに、やはり近距離での斬撃というのが攻撃方法なのだろうか。
しかしあれも、恐らく『魔術』の一種。うかつに断定はできない。見た目を凌駕する効果があり数え切れないほど利用法があるのが、『魔術』の頼もしいところでもあり恐ろしいところでもあるのだ。
「たっぷり『間』ぁ使って喋りやがって！」
しかしエリスは、まったく警戒することなく再び奴へと攻めかかった。
「エリス！」
レクトの制止など聞くわけもなく。
四人は仕方なく、彼女のフォローに急いだ。
「オーバーフレアぁっ！」
エリスが肩口へ振りかぶった剣から、激しく炎が噴き出る。何度となくかわされてしまったそれだが、しかし今回は様子が違った。
トュループが、まるで避けるそぶりを見せない。
翼をたたみ地に足をつけ、棒立ちのように迫るエリスを眺めていた。
斬れるものなら斬ってみろ、とでも言わんばかりに。

エリスは「なめんなよ」と言外に表わしながら、最後の一歩を踏み込んだ。
猛る刃が振り下ろされる。その瞬間になって、ようやくトュループが動きを見せた。
肉薄する炎の刃を、自身の光の刃で迎え撃ったのだ。
『魔術』の刃同士が衝突し、周囲の空気が震動する。吹き飛ばされそうなほどの衝撃波が生まれ、そのまま互いの姿勢が膠着した。
「防ぎやがった！」
歯がみするエリス。いくら剣を押そうと、その状態からピクリとも動かなかった。
炎と光の向こう側で、人間に酷似した顔が薄ら笑いを浮かべている。
「笑ってんじゃねぇぇっ！」
なおも押し続けるが、やはり動かなかった。
そもそも力比べに持ち込んでしまった時点でエリスには分が悪いのだ。
威勢だけは超人級だが、身体的にはやはりまだ十代後半の小娘である。人間の大の大人にも劣る腕力が、どう転んでも『モンスター』に敵うわけがない。
もとより一撃必殺の『オーバーフレア』があればこそ奴らに対抗できていたのだ。それが通用しない場面では、たちどころに無力となってしまうのも当然な結果である。
しかし、たとえそうだとわかっていても、エリス・エーツェルは引き下がらない。
「このっ！　このっ！　このっ！」
「少し力を入れるよ」
だがトュループがささやいた次の瞬間、逆に押し返され、エリスの上半身がのけぞってしまった。
「この野郎っ……！」
「エリス、持ちこたえろ！」

側面へ回り込んだレクトから激励が飛んでくる。
エリスが動けずにいるということは、相対するトュループも動いていないということだ。包囲するのはたやすい。
すなわち絶好の好機。
レクト、ラドニス、パルヴィーの三人が正面以外の三方を取り囲み、先んじてラドニスが背後から斬りかかった。
「背中を狙うのは常套手段だけど、僕には無意味だよ」
トュループは正面を向いたまま不敵にささやく。剣が体に到達する直前に、彼の翼が勢い良く後方に伸びた。
そして爪のように鋭い翼の先端が、ラドニスの両腕を深々と刺し貫く。
「……！」
「ほらね」
滴る鮮血。ラドニスは驚異と苦痛に、険しい表情をさらに険しく歪ませた。
それと同時に、トュループの視線が左を向く。ラドニスのあと間髪を入れずにたたみかける予定だったパルヴィーを、その瞳がとらえた。
彼女はすでに至近距離まで走り込み、ショートソードを引き絞っている。今さら急には止まれない体勢だ。
「不用心だよ。攻撃するって言ったのに」
迫るパルヴィーに向け、トュループは左手を突き出す。
「ライトニングレイピア」
そしてその左手から、右手同様『光の剣』を出現させた。
伸びた刃が、パルヴィーの肩に突き刺さる。その瞬間、電流が走ったように彼女の体がけいれんし、短い悲鳴と共に地面に倒れた。
そしてトュループは、ラドニスの両腕から翼の先端を引き抜き、元の位置にたたむ。
ヒザをつくラドニス。
トュループの顔が、あえてゆっくりと右側へ向けられた。

「君は来ないのかな？」
「……！」
レクトは、思わず足を止めてしまっていた。
ほぼ同時に攻めかかったふたりが、手玉に取られたように返り討ちにあってしまった。しかもたやすく。エリスからの攻撃を受け止めたままで。
「賢明だね」
トュループは顔を、正面のエリスへと戻す。
そして炎の刃とせめぎ合っている右手の剣に、左手の剣をクロスするように重ね合わせた。
倍化したエネルギーに、エリスはたまらず吹き飛ばされる。
「でもこっちからは行くよ」
トュループは再びレクトに向き直り、黒い翼を開いた。
その異形のシルエットに、レクトは改めて目を見開く。
エリスは激しく地面に叩きつけられるも即座に跳ね起き、負けじと再びトュループへ躍りかかった。

第二章（17）

「ジルヴィアさん！」

切迫したリフィクの声に呼びかけられて、パルヴィー・ジルヴィアは失っていた意識を取り戻した。

すがめながらまぶたを開ける。映った視界の中では、まだ戦いは続けられていた。

エリス、レクト、ラドニスの三人がかりで果敢に立ち向かっている。がやはり、形勢が優れているとは言えなかった。

トュループには傷ひとつ、ダメージひとつ見受けられない。対して三人は、重傷こそなさそうだが見るからに傷だらけといった様子だった。小さいダメージがかなり蓄積している。

『モンスター』と戦う限り楽勝などという言葉は期待していないが、いくらなんでも圧倒されすぎだろう。まるで相手になっていない。

「……強すぎでしょ」

パルヴィーはぽつりと呟いた。

いくらかは『モンスター』と戦ってきた彼女である。いわゆる『ボス』と呼ばれる手合いでも、一体だけならば、三人でかかれば最低でも手傷くらいは負わせられるはずだ。

今は正味五対一の戦い。だというのに、このざまである。

「やんなっちゃうな、もう」

「大丈夫ですか？」

彼女のため息まじりの呟きを聞き取り、リフィクが再び声をかけた。今度は穏やかに、やさしい声調で。

「うん、大丈夫大丈夫。おかげでね」

パルヴィーは苦笑いに近い笑みを作って、よっこらせと体を起こした。

刺された傷は完治している。それを確認してから、かたわらのシヨートソードを再び手に取った。
「強いけど……倒さなきゃね」
手足にはまだ若干のシビレが残っているような気もするが、動くのに支障はないだろう。パルヴィーは苦笑っていた顔に、普段とは打って変わった真剣な表情を浮かび上がらせた。
「『モンスター』は」

翼による高速滑空と、両手それぞれに携えた『光の剣』。主にそのふたつにエリスたちは苦戦させられていた。
その動きの前では攻めることもままならず、その攻撃の前では防ぐこともままならない。
そんな圧倒的な差がありつつもエリスたちがいまだに戦い続けていられるのは、トュループがまだまだ手を抜いているという証に他ならなかった。
遊んでいるのだ。その気になれば、その高速移動をもって急所に剣を突きつけることも不可能ではないはず。こちらには避けようもないのだから。
「そろそろ飽きてきたかな」
交戦の最中。ため息を吐くように、トュループが聞こえよがしに独語した。
と同時に、エリスの右ももが斬り裂かれる。
「くそっ！」
体勢を崩して尻餅をつくエリス。
「ヒーリングシェアっ！」
そこへ、ダウンしていたパルヴィーが復帰してきた。やわらかな光が足の傷を癒していく。
「なんだよ、生きてたのか」
「ごあいさつだこと」
と緊迫した状況に反して軽口を叩き合ってから、エリスは軽やか

に立ち上がる。
　顔を上げた時には、トュループはまたしても棒立ちをしていた。
　レクトとラドニスは、エリスが体勢を整えるのを待っていたのか、穴が開きそうなほど奴をにらみつけて待ち構えている。
　エリスはもとよりパルヴィー、リフィクも戦線に戻り、再度一斉攻撃を仕掛けようとした、その時。
「いけないよ、これは」
　トュループはおもむろに、両方の剣を手から放した。たちまち剣の形が崩れ、『魔術』の光が霧散する。
「戦いが始まってどれくらいが経ったのかな？　でも僕は、傷も負ってない。……ダメなんだよ、それじゃあ」
　トュループの声音がわずかに変化した。楽しそうにあざ笑う声から、突き放すように冷たい声へと。
「なに言ってやがる。まだ途中だろうが。最後までやってから言いやがれ！」
「もう終わりだよ」
　エリスの反論にも、冷ややかなまでに吐き捨てる。
「僕が終わらせる」
「勝手に決めんな！」
「生きていても僕の欲を満たせない君たちは、死んで僕の欲を満たすしかないんだからね」
「意味わかんねぇことぬかしやがって！」
「さようなら」
　それを言い残したところでトュループは羽ばたき、真上へ向かって飛翔した。
「逃げる気かよっ！」
　エリスが慌てて追いかけようとするが、真下に着いた時には、すでにジャンプしても手が届かない距離にまで上がってしまったあとだった。
「降りてこーい！　勝負しろーっ！」

さらに上昇を続けるトュループ。が、どうやら、この場から去るというわけではないようだった。
湯気のように、ただ上へ上へと昇っていくだけ。
やがて奴の姿が虫ほど小さくなったところで、ようやくその上昇が止まった。
「……？」
エリスは目を細めて、上空を見つめる。空中で静止するトュループ。なにかをするつもりなのだろうか。
すると見る見るうちに、空に暗雲がただよい始めた。青空があっというまに、灰色に染まる。
太陽が隠れ周囲が薄暗くなってくると、トュループの体が輝いているということがはっきり見て取れた。
「なんだよ……？」
ただならぬ異変に、エリスは顔をしかめる。この天候の異様な変化は奴の仕業なのだろうか。
「まさかっ……！？」
その横で、リフィクが驚きをあらわに声をもらした。
「なんだよ！？」
振り向くエリス。
「えっ、あれが噂の……！？」
さらにその横で、パルヴィーもこぼした。
「だからなんだよ！？」
「……こんな近くで拝むことになるとはな……」
「あれが……？」
続けてラドニスとレクトも呟く。エリスは、またしても自分だけが置いてけぼりを食らっている状況に、ひどくもどかしさを募らせた。
「なんだよーっ、教えろよーっ！」
これではまるで、いじわるをされている子供である。
「少し下がっていて」

と凛として言ったのは、いつのまにか近くに来ていたアリーシェだった。

「……できるのか？」

深刻な面持ちのラドニスが、彼女に問いかける。

「失敗した時は、大人しく恨みごとを聞くわ。天国でね」

アリーシェは冗談めかして肩をすくめた。

頬をふくらませたエリスが、

「だからあれは……」

なんなんだよ、と訊きかけた時。

『――天地を焦がす霹靂は』

まるで反響しているような、トュループの声が降り注いできた。

エリスははっとして再び上を向く。トュループを包む輝きは、もはや太陽と見間違うほどに強くなっていた。

『――雷帝来たりて降り注ぐ』

「あれこそが、奴が灰のトュループと呼ばれるゆえんよ」

同じく空を見上げながらアリーシェが説明する。その口調には、冷静な中にも憎々しさと忌々しさがたっぷりと含まれていた。

『――すべてを滅ぼす声のもと』

「すべてを灰燼に帰す」

『――破壊の光を今ここに』

「ディストラクトレイ……！」

トュループの体を包んでいた光が上空へ放たれる。次の瞬間、イーゼロッテの町へ強大な雷が落下した。

だがそれを雷と呼ぶには、あまりに規模が違いすぎる。

圧倒的な光量は町を丸ごと飲み込み、大地に激震を走らせる。まさに天災にも匹敵する驚異の力。

そのすさまじい衝撃と大音量は、空中をただようトュループ自身にもビリビリと伝わってきていた。

「ふふっ……」
大量の砂煙と黒煙が立ち込める眼下を眺め、トュループはこらえきれずといった様子で高らかに笑い出した。
「はははははははっ」
消した。
破壊してやった。奪ってやった。数えきれないほどの命を。丹精込めて作り上げられた建造物を。歴史を重ねた集落を。この手で。
思うままに！
「あはははははっ」
トュループの中が、えもいわれぬ悦楽と優越感で満たされていく。
死んだ命はその時なにを思ったのだろう。苦しんだ？　悲しんだ？　怒った？　それとも自分が死んだことにも気がつかなかった？
その様を想像するだけで笑いが止まらない。
飽きることがない。至高の快楽。
生殺与奪の権を持つことへの快感を、彼は存分に味わっていた。
一陣の風が吹き、黒煙がわずかに薄れて、大地がのぞく。
「……へぇ」
それを見た時、彼の笑いが別種のものになった。

あまりに想像を超越したことが起きると、人間は一時頭の働きを止めてしまう。エリス・エーツェルもその例外ではなかった。
「……」
目を見開き、言葉を失い、石になってしまったかのように固まっている。それは他の面々も同じであった。
目の前から、町並みが消えていた。
道も建物も花も緑も、そして恐らく住人たちも。ほんの少し前まで町であったその景色が、ただの焼け野原へと変わってしまっていた。
まるで消しゴムで消したように、キレイさっぱり。跡形もなく。

ところどころから黒煙が上がる、残骸すらもほぼない見渡す限りの焦土。それが忽然と、目の前に現れていた。

その焦土と無事な大地の境目に立っていたアリーシェ・ステイシーが、立つ力を失いガクリとくずおれる。

「防いだんだ」

トュループははしゃぐように笑いながら、好奇的な目で大地を見下ろしている。

町であった場所は、いつものように消し去った。

だが、一方向だけ。ひと切れだけ残ったピザのように、町の中心部から細長い三角形を描くよう無事に残っている部分が見て取れた。

その三角形の頂点は、今さっきまで戦いをしていた場所だ。ならばあの中の誰かが防いだ、ということになる。

「見直したよ」

それだけで、トュループは少しだけ彼女らに興味を抱いた。

だが、まだ足りない。

「けど二発目はどうかな？」

酷薄な笑みを浮かべるトュループの体が、先ほどと同じように輝き始めた。

座り込むように倒れたアリーシェを、ラドニスがすかさず支えた。

彼女はトュループの『ディストラクトレイ』を、防御用の『魔術』で防いでみせた。しかしそのたった一回で、全快に近かった体力を使い切ってしまったのだ。

立つ力すら、残っていない。

「……なんだよ、これ……」

エリスは目の前に広がる惨状を見つめながら、呆然と呟いた。

常に恐怖と緊張が抜けきらない自分の故郷とは、正反対のように違うところのはずだった。活気のある明るい町。住む人々も楽しく、幸せそうだった。

だが、これはなんだ？　その光景はどこへ消えた？　数多くの住人たちは、どこへ行ってしまった？

エリスはぎこちない動作で背後を振り返る。アリーシェが守った無事な町並み。しかし確かめるまでもなくわかる。こんなものは、ほんの一部だ。たったのひと握り。あとのすべては、灰となって消えてしまった。

奴の手によって。目の前で。

直接的な憤慨が、エリスの心をさらに激しく燃えたぎらせる。

「あたしの見てる前で、こんなこと……！」

キツく拳を握りしめ、再び頭上を振りあおいだ。

「あの野郎っ……！」

「……ねぇっ、また光ってない！？」

同じように空を見上げるパルヴィーが、奴へ向けて人差し指を掲げる。

暗雲を背景に輝きをまとうトュループ。それは先ほどとまったく同じ光景であった。

「まさか、また『アレ』を……やる気なのか……！？」

自分たちが置かれている状況を瞬時に察したレクトが、信じがたい様子で息を呑む。

アリーシェにはもう頼めないだろう。再び『アレ』を放たれたら、防ぐすべはない。残った町と住人もろとも、すべてが光の中へと消えていく。

「悠長にしてる場合じゃねぇよ！　なんとかできねぇのか！？」

エリスが皆を振り向くも、望んだ回答は得られなかった。一様に口を閉ざし、苦い顔をしている。

その顔が物語っていた。この状況を打開する手立てが思いつかないと。

放たれたら終わりな以上、その前に止めるしかないのだが。ではどうやって止めるのか。

はるか上空にいるトュループを攻撃するとなると、普通の武器で

はダメだ。ならば『魔術』？　しかし生半可な威力のものが通用するとは思えないし、それをこしらえる猶予が残されているかは怪しいところだった。

素直にやめてくださいとお願いするわけにもいかないだろう。そしてこの場から逃げるのも、恐らくは間に合わない。

お手上げである。

その場に、あきらめの気配がただよい始めていた。

ただひとりエリス・エーツェルをのぞいて。

第二章（18）

「もういいっ！　あたしがなんとかする！」
エリスは辺りをキョロキョロと見回すようにしながら、必死に頭を回転させる。
「なんとか……って？」
そんな彼女に、パルヴィーがため息まじりに問いかけた。
よく聞く言葉で、三人も集まればなにかしら良い考えが浮かぶものだ、という類のものがあるが、今はその倍の六人もいる。だというのに打開策が浮かばずにいるのだ。
なんとかできるものならなんとかして欲しいものである。
「そりゃ……なんとかするんだよ！　なんとかして、なんとかするしかないだろっ！」
「考えついてないんじゃん。もう無理だって」
「無理じゃねぇよ！　決めつけんなっ！」
「そう言われてもね」
パルヴィーは苦笑いに近いものを浮かべた。余裕すら感じられる態度は、すでに結末を受け入れてしまっているということなのだろうか。
「……『モンスター』と戦ってるんだから、もしかしたらこういうことになるかもって、いつも覚悟はしてたし」
懸命に頭をめぐらすエリスの横で、パルヴィーは遺言のようにひとりごとを言い始めた。
「それがちょっと、思ってたより早かったかなっていうだけで。……まぁ、心残りがないってこともないんだけどね」
伏し目がちに、レクトへ視線を送る。
そのレクトは、いちぶの隙もなく上空のトュループをにらみ続けていた。まるでそれが、せめてもの抵抗であるかのように。

トュループを包む光は、見る見るうちにその輝きを強めていく。
先ほどは『アレ』が放たれるまでにどれくらい時間がかかっていただろうか。もはや体感時間はあてにならないが、そう長くは待っていないはずである。
もういくばくもない。
「おいっ、『魔術』かなんかで、飛べるようになるヤツはないのか！？」
その時エリスが、誰に向けてでもなく質問を投げつけた。
「攻撃が届かないなら、あたしが直接あいつのところまで行って叩き落としてやる！」
発想としては、それは間違っていないかもしれない。しかし皆の表情は好転しなかった。
「飛べるようにって……ないんじゃない……？」
パルヴィーが、記憶を探るように呟く。思い当たらない。もしあるのならば、もっと早くに気付いているはずだろう。
「……いいえ、なくはないわ」
だがそう答えたのは、ラドニスの腕の中でぐったりとしているアリーシェだった。
「このまま、終わりを待つくらいなら……ね。私も、まだあきらめてはいないもの」
彼女は強い意志を秘めたまなざしで、エリスを見つめる。
「『魔術』で、真上へ向かって突風を起こす。その気流に乗れば、あの位置まで飛べるはずよ」
「なんだよ、あるんじゃねぇか。そんな単純な方法が」
活路を見い出し、エリスはパッと表情を明るくした。
「ちょっ、ちょっと待ってくださいっ！」
しかしそこへ、リフィクが口をはさむ。
「それだと、エーツェルさんが無事では……」
「どういうこったよ？」
歯切れの悪い言葉に、エリスは水を差すなと言いたげに口を尖ら

せた。
　代わりにアリーシェが説明する。つまりこれは、真上へ向けて小石を投げるようなものだ、と。
　ある程度の狙いはつけられるが、微調整はむずかしい。そして仮に狙い通りのところへ飛び、わずかなチャンスでトュループを阻止できたとしても、そのあとに問題が待っている。
　はるか上空から落下してくる小石を、受け止めるすべがないのだ。そのまま地面に激突して無事で済むはずはない。落下スピードを軽減する手段もあるにはあるのだが、それは焼け石に水程度の効果しかないだろう、と。
「だから私からは、強制もお願いもできないわ」
　手短に説明をし終わり、アリーシェは申し訳なさそうに言った。
「選ぶのはエリスさんよ」
　まさに命がけの攻撃。しかし彼女にとって、それはささいな問題であった。
「言うまでもねぇ。あたしがやらなきゃ誰がやるってんだ」
　即答するエリス。リフィクはやはり不安げに、それを考え直させようとした。
「危ないんですよっ！　なにか、別の方法を……」
「やるやらねぇと論じてるあいだに、ああなっちまうのがオチだろ！」
　エリスは声を荒げて、人差し指を突き出した。その先には、無に帰した焦土が広がっている。
「あとのことはあとで考えればいい！　先のことばっかり考えてて目の前のことをやらなきゃ、本末転倒ってヤツだろ！　今考えんのは、今のことだ」
　なにもしなければ、このまま灰となって消えるしかない。ならばどんなことでもやらなければならないのだ。
　ダメで元々。この絶望的な状況が少しでも良くなれば、それで上出来というものである。

「わかったらさっさと準備！」
無論エリスひとりでは、なにもできない。『魔術』の使えるリフィク、パルヴィー、そしてレクトの力が必要なのだ。
三人の力を合わせれば、少ない時間でも、人間ひとりを打ち上げられるだけのパワーを捻出できるだろう。
「……わかった」
最初にそれを了承したのはレクトだった。不本意ながらも意を決したといった様子で首肯する。
「わっ、わたしも」とパルヴィーも続いた。
ふたりはすぐさま、『魔術』を使うべく意識を集中させる。
「そんなっ……」
苦い顔のリフィクであったが、それを見て、悩みながらもふたりのあいだに加わった。
三人がちょうど三角形を描くように立ち、力を集中させていく。
エリスは最終確認のつもりか、頭上を仰いだ。
灰色の空。太陽のように輝くトュループ。あれは許してはいけない光だ。どうあっても、打ち倒さなければ。
「エリスさん」
アリーシェに呼びかけられて、エリスは顔を下げる。彼女は自分の両手首から、宝石のようなライトグリーンの腕輪を外しているところだった。
「これを」
そしてそれをふたつとも、エリスに手渡す。
「なんだ？」
「身につけることで『魔術』の力を高めてくれるものよ。あなたの炎の技も、それで強化できるはず」
「へぇ、便利なもんだな」
エリスは気おくれた様子もなく、微笑みながらそれを自分の腕へとつけた。
「一蓮托生だ。任せる」

アリーシェを支えるラドニスの言葉に、エリスは「任せろ」と力強く答えた。
そして三人が結ぶ三角形の中央へと移動する。そこは正確に、トュループが位置する真下だ。
その時。
『――天地を焦がす霹靂は』
トュループの例のセリフが、こだまのように響いてきた。

「……雷帝来たりて降り注ぐ」
実のところ、これを口にする意味はまったくなかった。
『ディストラクトレイ』を放つためには、かなり長く力を溜めなくてはならない。そのあいだの退屈しのぎとして考えた口上なのである。
毎回のように口にしてはいたが、『灰のトュループ』という名前ほどには知れ渡っていかなかった。それを聞き、生きている者があまりにも少ないからというのが一番の理由だろうが。
「すべてを滅ぼす声のもと」
トュループは眼下を眺めた。
わずかに残った町の一角。しかしそれも、もうすぐ消え去ることになる。さすがに二連続ともなると多少時間がかかってしまったが、大した問題ではない。
どの道、消えることには変わりないのだから。
「破壊の光を今ここに！」
トュループははやる気持ちに従順に、口調を高ぶらせる。
しかしその時、彼の感覚器官がなにやら異質なものをとらえた。
聴覚と触覚が下方から吹く強い風を感知し、そして視覚がその正体を認知する。
だが認識した時にはすでに遅かった。
高速で飛び上がってきたエリスとすれ違った瞬間、トュループの

片腕から紫色の血が噴出する。
それで意識の集中が途切れたのか、彼の体を包んでいた光がたちどころに拡散を始めた。

高山の頂上から見下ろすような、果てしなく雄大な景色。しかしエリスには、そんな景観を堪能していられる余裕はなかった。
しくじりやがって、と数瞬前の自分を叱り飛ばす。
『魔術』によって打ち上げられたはいいが、そのスピードと勢いが思っていた以上にすさまじく、ろくに攻撃の姿勢もとれなかったのだ。
それでもなんとか切っ先を触れさせることができたのは、彼女の意地の表れであろうか。
強い風の音しか聞こえず、体の自由もほとんど利かず、上下左右もわからない、刹那の世界。悔いも刹那に捨て去り、エリスは必死に目と顔を動かして奴の姿を探した。
すぐに見つかった……のはいいのだが、かなり距離が遠かった。普通に考えたら、ここからの攻撃は不可能だろう。弓矢でもなければ届くはずがない。
しかしエリスは剣は振る。
この期に及んで、不可能だったとあきらめられるわけがない。
なにも考えず、ただ届け届けと自分の力に思いを込めながら、それを放った。
「オーバー……フレアぁぁっ！」
声が出ていたのかどうかは、自分でもわからなかった。

トュループは、茫然自失となっていた。なにが起きたのかを理解するのに時間が必要だったからだ。
数多くの者と戦ってきたトュループであったが、こういう対応をしてきた者は初めてだった。
有翼種ならば、無論、飛んだトュループを同じく飛行して追いか

けてくることもある。だが翼を持たぬ人間が、こうして上空にまで追撃をかけてくるなど今まで有り得なかったのだ。

とはいえその驚きに固まっていたのは、一秒にも満たないほんのわずかな時間である。

トュループは上へ視線を向け、彼女の姿をとらえた。

打ち上げられた際の気流から中途半端に外れ、風にもみくちゃにされている。あの状態では意識を保っているかすら怪しいだろう。あとはもうあのまま、重力に従って落ちるだけである。

一興としては充分だった。トュループはニヤリと口元を歪ませる。捨て身の攻撃が浅かったのはさぞや悔しかろう、と。

しかしそのトュループの見ている前で、彼女の持つ剣から、激しく火柱が噴き上がった。

「……？」

地上で戦っている時に何度と見た、あの攻撃をするのだろう。だがこの距離。到底届くはずがない。

徒労に終わるのはわかりきっている。

そうほくそ笑んだトュループの予測は、しかし裏切られることとなった。

「もう一度、術を！」

『魔術』で烈風を起こしエリスを打ち上げた次の瞬間には、レクトはもうそれを口にしていた。

再び風を起こし、落ちてくるエリスの落下スピードを可能な限り減殺してやろうと考えているのだ。

アリーシェはその声を耳にしながら、しかし……と思う。

はるか上空まで飛び上がったとはいえ、落ちてくるまで数秒もないだろう。そんな短い時間で力を溜めても、たかが知れている。

ずっと空を見上げていたアリーシェは、すべてを見届けていた。

飛び上がり、すれ違った際に軽い一撃を与えたこと。

次いで放った剣技が、貸したブレスレットにより強化され、炎の

刃が普段の何倍にも伸びてトュループの胴へ傷を与えたこと。
そして、その傷があまり深くなかったことを。
……よくやった、というところだろうか。
もう少し近ければ、確実に胴体を両断できていたはずだ。あの状態から二撃目を放ち、当てただけでも大したものである。充分健闘した。
上昇軌道が折り返し地点を過ぎ、エリスは落下軌道に入る。
もう誰にも止められない。見ていることしか、できない。
が、その時、トュループが動いた。
高速で落下するエリスを追いかけるように、さらなる高速で急降下し出したのだ。
「……！」
なにを……？　自分の手で直接トドメを刺そうとでもいうのか？
と直感的に思うアリーシェが見守る中、両者の距離がまたたくまに狭まっていく。
そしてエリスが地面に激突する寸前。トュループが、まるで獲物を捕るワシのように、彼女の体を拾い上げた。
助けたのだ。
予想だにしていなかった結果に、それを見ていた全員の時間が少しのあいだ止まる。

第二章（19）

エリスを小脇に抱えたまま、トュループがふわりと地面に降り立つ。

その体には、先ほどにはなかった傷が刻みつけられていた。胴体を斜めに走った、火傷を伴った大きな斬傷。そして右腕にも小さいものが見受けられる。血が流れてはいるものの、どちらも重傷という気配はなかった。

皆一様に、息を呑んで彼の姿を見つめている。

手を出すどころか、声を出すこともできない。これからどうなるのか、ただ眺めているだけしかできなかった。

抱えられたエリスは、ぐったりとしたまま動かない。意識を失っているのだろうか。

そんな彼女を、トュループは自分の前へと放り捨てた。どさり、とわずかに砂ぼこりが舞う。

「なんて言っていたかな？」

トュループの問いかけに、誰もすぐには答えられなかった。

気圧されているというのもあるが、問われた質問があいまいすぎてわからなかったのだ。

そこをトュループが、自分自身で補足する。

「彼女の名前」

「……エリス・エーツェル」

声を絞り出すように、レクトが答えた。

「そう」

トュループは微笑みながら、眼下のエリスと、自分の体の傷とを交互に見た。まるで楽しんでいるかのように。

「覚えておくよ」

そしてそれだけ言うと、再び大きく翼を開いた。

はっと身構える一同を尻目に、くるりと背中を向ける。トュループはそのまま、どこかへ向かって飛んで行ってしまった。

トュループが空の彼方に消えた頃には、頭上にただよっていた暗雲は消え去り、青空が戻っていた。

奴の姿が見えなくなってからようやく、固まっていた皆の心にも平常が戻り始める。

しかし無事に生き延びることができたという喜びは、あまり感じられなかった。悪夢から覚めた直後のように、後味の悪いものが胸にこべりついている。

生きた心地がしないとは、こんな時に使う言葉なのであろうか。

「……まさか本当に、なんとかしてみせるとは……」

ラドニスがエリスを見ながらしみじみと呟いた言葉を、近くにいたアリーシェだけが聞き取った。

◆

なぜトュループがいきなり去ったのかは、この際どうでもよかった。他のことで頭が一杯で考えている余裕などなかったからだ。

エリスたちから出た犠牲は、ほとんどないと言っていい。

あるとすれば、馬が一頭。預けた武具屋もろとも、光の中に消え去ってしまったのだ。幸いにも借りた宿屋のある区画は無事だったので、もう一頭とその他の荷物はことなきを得ることができたが。

しかし住人たちの犠牲は、その程度では済まない。

町のおおよそ八割が、無惨にも消滅してしまったのだ。

知り合いもいただろう。恋人、家族もいただろう。直前まで世間話を交わしていた者すら、もういない。

その事実が知れ渡った時の混乱と怒りと悲しみは、想像を絶するものがあった。

阿鼻叫喚のるつぼ。

エリスたちは最低限の休息を取ったあと、そのただ中へと足を踏み出していった。

破壊された部分はまさに灰となったようにキレイになくなってしまっているので、無事な部分との境目が一番の被害地と言える。

衝撃と余波で建物はほとんど倒壊しており、ケガを負った人や生き埋めになってしまった人がいるという声があちらこちらから叫ばれた。

『治癒術』の使えるリフィクとパルヴィーはケガ人の治療につとめ、それ以外のエリス、レクト、ラドニスは、ガレキの除去を手伝う。

心身共に力を使い果たしていたアリーシェには、まだ少しの休息が必要だった。

「こんにゃろーっ！」

妙な叫び声を発しながら建物の破片を片付けるエリスを、周りで同じ作業をする住人たちが奇異の目でチラチラと見ている。

彼女は少々虫の居所を悪くしていた。

その原因は、やはりトュループである。

こうして破壊の限りを尽くしたこともそうだが、自分が気を失っていたあいだのことも、なんとも腹立たしかった。

他の皆の話によると、奴は自分を助けた上に、その場を見逃してどこかへ行ってしまったというのだ。そういう見下されたような、情けをかけられたような態度が、非常に鼻持ちならないのである。

気に入んねー。

気にくわねー。

「あの薄ら笑いヤロウ……今度会ったら……」

エリスを力を込めるように低く呟きながら、新たなガレキに手をかける。

「ギッタンギッタンのコテンコテンにしてやるからなぁーっ！！」

物騒なセリフを吐きながらガレキを持ち上げる彼女を、もう周り

の人間は見ないようにしていた。

アリーシェが宿屋から出たのは、諸々の作業が一段落ついたあとだった。

彼女は重い足取りで、町の様子を見て回る。

さすがに一時の混乱からは立ち直ったようだが、それでもまだ、住人たちの怒りや悲しみが形を持ったように周囲に渦巻いていた。

崩れた建物の跡に座り込み、泣きむせぶ女性がいる。アリーシェはその光景を少しだけ見つめたあと、痛みに耐えるようにまぶたを閉じた。

多くの犠牲者が出てしまったが、中には被害を免れた者もいる。それを直接的に守ったのは他ならぬアリーシェだ。

これだけでも守れたと喜ぶべきか、これだけしか守れなかったと嘆くべきか。

彼女は後者を選んだ。

「……なんて無力な……」

その場に立ち尽くし、血を吐くように呟く。しょうがなかったと片付けることは、彼女にはできなかった。

「……アリーシェさん」

そこへ声をかけたのは、レクトだった。口調は重く、暗い。

アリーシェは目を開け、背後を振り返る。

「すみません」

それと同時にレクトが第二声を発した。その表情は、声と同じ暗さを秘めている。

「俺が勝手な手出しをしなければ、もしかしたらこんなことには……」

伏し目がちに続けられた言葉から、アリーシェは彼の心境を汲み取った。

トュループと最初と対峙したのはレクトである。こんな結果に直

面してしまえば、もしあの場面でなにもしなければ……と思わずにはいられないのだろう。

そしてその憂いを、どこかに吐き出したかった。アリーシェに詫びることでもないというのは、彼もわかっているはずだ。

「……同じことよ」

アリーシェはゆるやかに首を振る。抑揚の弱い声だった。

「相手は『モンスター』……言葉も聞かない殺戮者だもの。なにもしなければ無事で済むなんていうことは有り得ないわ」

彼女の鋭敏な瞳が、レクトを射抜く。

「私たちにできるのは戦うことだけ。灰のトュループという脅威にいち早く対応できたのは、あなたがいたおかげよ」

戦わなければなにも守れない。奪われるだけ。そして、泣き寝入りをするしかなくなる。

だから戦って抗うしかない。アリーシェの瞳は、雄弁にそれを語りかけていた。

「戦い続けましょう。その後悔すらも力にかえて、脅威を断ち切るのよ」

「……はい」

レクトは重く、しかし先ほどよりは少しだけ軽く、そううなずいた。

断章「いつも嵐は突然に」

うららかな時間が流れていた。
のどかな町の一角。路上。屋台の軽食屋の脇に、簡素なテーブルセットがいくつか並んでいる。
その一席に、旅姿の若い男女が仲むつまじい様子で座っていた。
はたから見た光景は、なんとも平和で微笑ましい。
テーブルの上に置かれた大きな皿に、数枚のバンズや適量の野菜、肉、調味料の小瓶などが乗せられている。男性がそれらをいくつか組み合わせてハンバーガーを作り、
「さぁ。できたよ、リュシール」
黒髪の女性へと手渡した。
女性はそれを、なにやら人形めいた無感情な顔で受け取る。男性が慣れた手つきで同じものをもうひとつ作り上げたのを見てから、そのハンバーガーに口をつけた。
昼食には少々早い時間なためか、他のテーブルに客の姿は見えなかった。
通りをゆく人間たちは、彼らの食事風景を視界に入れ、自分の昼食はなににしようかとぼんやり考えるのだろう。
やがてふたりが、皿の上を空にする。
その頃には、周囲の席も埋まり始めていた。集客力からするとなかなかの人気店なのだろうか。
男性の口元についていたケチャップを、女性がナプキンで拭う。
やはり無表情であったが、その仕草から、ふたりの深い間柄が見て取れた。
ただの知人同士ならそういうことはやらないだろう。
「ありがとう。そろそろ行こうか」
男性が微笑んで、席を立つ。彼に続いて女性も立ち上がった、そ

の時。
彼女の目つきが変化した。
まるで野生の獣のように鋭く険しく、物々しい雰囲気へと瞬時に変わる。腰に吊っていたロングソードに手をかけ、いつでも抜き放てる姿勢を作った。
不意に彼女が空を見上げる。つられるように彼も顔を上に向けた……次の瞬間。
それは舞い降りた。
不敵に。堂々と。そして軽やかに。
大きな翼を羽ばたかせて、ふたりの目の前へと着地する。
『モンスター』だった。
人間に近い四肢と顔面に、黒と深紫の体。コウモリに似た翼をたたんだ彼は、柔和な笑みをふたりへとかたむけた。
「やぁ、久しぶり」
旧友と再会した時のような、明るくほがらかな声。
しかしそれが発せられた時には、すでに周囲は悲鳴に包まれていた。
突然の『モンスター』の出現に、食事もほったらかしにして人間たちが散り散りに逃げていく。あっというまに、そこに立つ三者だけが残された。
男性が、静かに唾を飲み込む。それがただの『モンスター』でないことを、経験をもって思い知っていた。
「これはこれは……灰のトュループ。……なにかご用で？」
男性は驚きと警戒の上に作り笑いを貼り付けて、あくまで融和的に受け答える。
となりに立つ女性は、妙なことをしたら斬りかかるぞ、と言わんばかりの気配を全身からうち飛ばしていた。
しかしそんなことなどまったく気にかけない様子で、『モンスター』が二の句を継ぐ。
「たしか君『治癒術』が使えたよね。ちょっとやってくれない？」

男性はそれを聞いてようやく、『モンスター』の胴体に大きな傷跡があることに意識を向けた。
血こそ出ていないが、それは刃物でバッサリとやられた跡だろう。
そしてまだ真新しい。
「……わかりました」
一瞬の間を置き、男性がうなずく。
こんな町の中では滅多なことはできない、と結論を出したのだ。
もっとも、そんな気遣いなどなんの意味も持たない相手だということも承知していたが。
男性は『モンスター』に歩み寄り、その胴体へ片手をかざす。
近くで見て、あることに気付いた。それがただの斬傷ではなく、火傷を伴った斬傷であったことに。
この傷をつけたのは、さしずめ炎の刃といったところだろうか。
「……」
男性には、少なからず思い当たるものがあった。しかしそれ以上は考えず、かざした手に光を宿らせる。
「ヒーリングシェア」
光が傷跡に移り、見る見るうちに再生がなされていった。
「……あなたが傷を負うとは、めずらしいのでは？」
「そりゃね。でも面白い人間に出会ったから。まぁ、君たちほどじゃぁなかったけど」
「『人間』ですか」
楽しそうに語る『モンスター』のひとことを聞き逃さず、男性が思案顔で呟く。光が消えると、傷跡は完全になくなっていた。
「別に放っといてもいい傷だったんだけど、たまたま君たちは見かけたからね。ついでにアイサツでもしようと思って」
『モンスター』は確認するように、傷のあった場所を指でなでる。
「ありがた迷惑という言葉の意味が、今わかりましたよ」
そして男性の皮肉を笑顔で受け流して、翼を開いた。
「ありがとう。またね」

にこやかに言ってのけ、ふわりと飛び立つ。そのまま雲間へと消えていった。

嵐のように現れ、嵐のように去っていく。そういうところは前と同じだ。

男性は肩の力を抜き、女性へと振り向いた。

「びっくりしたね」

彼女も彼女で体の力を抜き、剣から手を放す。目つきも普段の、さざ波のように穏やかなものへと戻っていた。

嵐がいなくなると、その場にざわざわという喧騒が生まれ出す。避難していた人間たちが帰ってきたのだ。恐らくどこかで、この場の様子をうかがっていたのだろう。

人間たちの視線が、自然とふたりに集中する。

しかしそれはただの視線ではなく、懐疑や悪意、敵意すらをも含んだ視線だった。

無理もなかろう。

『モンスター』と親しげに話をしていた上に、その傷まで治してやっていたのだ。逆になにも思わないほうがおかしい。

「……困ったものだね」

男性は周囲をぐるりと見渡してから、やれやれと苦笑った表情を彼女にかたむけた。

「今日はこの町で宿を取ろうと思っていたのに」

女性は無言のまま、彼の瞳を見つめ返す。

第三章「吠え砕け！　スローグラウンド」（1）

木々に囲まれた山道をひと組の老夫婦が歩いていた。
「そろそろ、町が見えてくる頃だ」
ジャムス・グライドは背後の妻に振り向いて、明るく声をかける。
ふたり合わせて百二十を超える年齢での長旅はかなり厳しいものがあったが、それももうすぐ終わりだろう。そう染み入るように思って、ふたりは互いに微笑みあった。
グライド夫妻が暮らしていた村が『モンスター』に破壊されたのは、今よりひと月ほど前のことである。
かろうじて逃げ延びたはいいが、もうそこに戻ることはできなかった。家も生活も、隣人たちをも奪われてしまったのだ。
子供もなく、近くの村に頼れる人間もいなかったので、ふたりは意を決して旅に出た。
最初に目指したのは、イーゼロッテという町である。そこは『モンスター』も少なく大きな町と聞いていたので、遠い道のりではあったが、行く価値があると結論を出した。
もう二度とこのような目に遭いたくなかったからだ。
しかしやっとの思いでイーゼロッテに着いたふたりは、すぐさま愕然とすることになる。
町の大半が、焼け野原へとなってしまっていたのだ。
聞く話によると、それはつい先日『モンスター』が行なった破壊らしい。
わずかに残った住人たちも自分のことで精一杯で、とてもじゃないがグライド夫妻を受け入れてくれる余裕はなさそうだった。
ふたりは肩を落とす。
あてが外れたこともそうだが、どこまで行っても『モンスター』からは逃れられないという事実を突きつけられたようで、ひどい脱

力感に襲われたのだ。
山向こうにある『シルパリーサ』という町の話を聞いたのは、そんな時である。
そこは以前のイーゼロッテほどではないものの、規模も大きく『モンスター』による被害も少ないそうだった。
いちるの希望を抱いて、グライド夫妻はその『シルパリーサ』を目指した。
そして今、その町を見下ろしていた。
山道の途中にある崖から全景が一望できる。噂にたがわず立派で、活気のありそうな町だった。
ふたりの口から感嘆がもれる。あの町ならば、きっと平和でにぎやかな、新しい暮らしを始められるだろう。それがなによりも嬉しかった。
だがその時。妻のニコールが、突然小さな悲鳴を上げた。
ジャムスはなにごとかと後ろを振り向く。
ふたりはいつのまにか、大勢の人間に囲まれていた。
全員が全員武器を持ち、あまりキレイとは言いがたい、皮や毛皮の服を身に付けている。放つ雰囲気は粗野そのもの。ジャムスの脳裏に、山賊という言葉が浮かんできた。
「なっ……なんだ……！？」
ジャムスは妻を背中にかばうようにしながら、その人間たちに問いかける。ざっと見るに、男だらけのようだった。
そんな彼らを割って、真ん中からひとりの男が歩み出た。
まだ若い。青年と言っていいだろう。みずみずしく鍛えられた体に毛皮の服をまとい、両手と両足にだけ鉄製の防具をつけている。武器は持っていなかった。
その青年が口を開く。
「食料と金目のものを、半分だけ置いていけ。そうすりゃ見逃してやる」
ジャムスは、頭に浮かべた言葉が間違っていなかったのだという

ことを実感した。

「ぐはぁぁぁー」

エリス・エーツェルはベッドに飛び込むなり、断末魔のような奇声を上げた。

いつも通りの肩へそ太もも丸出しな格好で、三つ並んだうちの真ん中のベッドに、そのやわらかさを堪能すべく顔をうずめている。

外にハネた短い茶髪頭には、ハチマキをしていたり布を帽子のように巻いていたりというバリエーションがあるが、服に関してはほとんど同じようなものしか見たことがなかった。

普通の衣服の袖や裾を自分で切っているくらいである。

なんのこだわりがあるのかは不明だが、男性からすれば目のやり場に困り、女性からすればはしたなく見え、あまり評判はよろしくなかった。

しかしそれをまったく気にしていないのは、彼女の良いところでもあり悪いところでもあるのだろう。

「ベッドを作った奴は偉大だな……」

しみじみと言うエリス。顔がシーツに埋まっているのでくぐもった声だった。

「どこでもすぐに寝られるようなのが、よく言うー」

彼女と同年代の少女パルヴィー・ジルヴィアが、銀色の防具を外しながら横目に見た。

地面の上だろうと岩の上だろうと木の上だろうと、なんの問題もなく快眠できるエリスである。そんな彼女にはベッドの快適さなどわからないと思っていたが、どうやらそうでもないようだった。

「旅をするようになってから改めて気付くことも多いものね」

同じく銀の防具を脱ぐ、ふたりの姉と呼ぶには少々年齢を重ねすぎた感のある女性アリーシェ・ステイシーが、包容力の高い微笑みを浮かばせた。

三人がいるところは、『シルパリーサ』という町の安宿の一室である。

ベッド三つで部屋がほぼ埋まってしまうほどの狭さで、他のものは一切置かれていない。まさに寝るためだけの宿だが、安さを考えれば妥当なところだろう。

旅の身からすれば、あれやこれやと付加されて料金が高くなってしまうのも考えものなのだ。

「たしかさっき、この町には温泉が湧いてるって言ってましたよね？　宿の人」

わくわくとした表情でパルヴィーが言い出す。

「みんなで行きましょうよ！　このあと」

「いいわね」

アリーシェは窓の外を見た。日が沈み、夕焼けもそろそろ消えかかっている。時間的には少し急ぎたいところか。

「温泉か。……その前に」

耳ざとく聞き入れたエリスが、跳ねるようにベッドから飛び降りる。

そして荷物の中からひと振りの剣を引っ張り出し、そのままドアに手をかけた。

「汗かいてくる。置いてくなよ」

振り向いてそう言い残し、部屋から出ていく。残されたふたりは、特に言われずとも「アレか」と見当がついた。

「熱心ね」

「まったくです」

閉じたドアを眺め、それぞれ呟く。

廊下の先に白いローブ姿の若い男を見つけ、エリスは駆け寄りついでにその肩をひっぱたいた。

「あうっ」

リフィク・セントランの柔和な顔が情けなく眉尻を下げる。

「エーツェルさん……なんですか？」
「あいつどこだよ」
「あいつ？」
「ゼーテン」
「ラドニスさんなら、まだ僕たちが借りてる部屋にいると思いますけど……」
バシッと、エリスのローキックがリフィクのふくらはぎをとらえた。
「ひぐっ」
悶絶するように体をくねらせるリフィク。
「だからその部屋がどこにあるか聞いてんだよ」
初耳である。なんと理不尽な仕打ちだろうか。
リフィクは以前一瞬の気のゆるみから、エリスの『子分』にさせられてしまった経緯がある。そのせいか、七つほども年下の彼女にいまいち頭が上がらないのだ。
もっとも、そもそも気の小さい性格だというのもあるのだろうが。
「蹴らなくてもいいじゃないですか……」
リフィクが弱々しい声で訴える。
言っていることは正しい。しかしこの力関係においては、悲しいかなエリスがすべて正しいことになってしまうのだ。
「前から思ってたんですけど、やっぱりエーツェルさんはもう少し品位というものを意識されたほうがいいかと……。今のままでは、はしたないと言いますか見苦しいと言いますか……」
エリスが再び足を後ろに引いたのを見るや、リフィクは即座に小言を中止させた。
「突き当たりの部屋です」
その返事代わりに、二発目のローキックが見舞われる。
「はぐっ……」
「あっ、そうだ。あとでみんなで温泉行くとか言ってたから、あんまりブラブラ出歩くなよ」

そしてエリスは、なにごともなかったようにリフィクの横を通り過ぎていった。

行動力の塊のような彼女に言われるのもなんだか微妙な心境である。

こんな扱いにもめげずに彼女に付き合っている辺り、彼の人柄の良さは大したものだろう。

ただ受動的なだけとも言えなくもないが。

楽な格好に着替えたアリーシェとパルヴィーが、ギシギシと音の鳴る階段を下る。

宿屋の受付と出入り口を兼ねた狭いホールまで降りたところで、窓際に立つ十代終わり頃の青年が目に入った。

「そこでやっているの？」

アリーシェが声をかける。青年レクト・レイドは「ええ」と年齢のわりに落ち着いた口調で答えて、目で窓の外を指した。

裏庭か空き地だろうか。

そこでエリスが、たくましい中年の男性とウッドブレードをぶつけ合っていた。

ゼーテン・ラドニスとエリスが、こうして稽古をするようになったのは少し前からのことである。

持ちかけたのはラドニスだ。最初のうちは口頭で指南していたのだが、エリスがうとましがったために今のような模擬戦形式へと変化する。

もっともエリスにしてみれば稽古をつけてもらっているという意識などなく、ただラドニスから一本取ってやろうという目標に燃えているだけなのだが。

ちなみにその目標は、まだ一度も達成されていない。

「今日はここまでだ」

つばぜり合いの体勢から押し飛ばされたエリスが尻餅をついたと

ころで、ラドニスが口を開いた。
握ったウッドブレードを下げ、ヒタイの汗を拭う。
「バカ言ってんじゃねーよ。まだやる！」
エリスはすかさず起き上がって、すかさず抗議を述べた。するとラドニスもすかさず反論を送り返す。
「あまり皆を待たせておくわけにもいくまい」
窓越しにうかがえる建物の中では、レクト、アリーシェ、パルヴィー、そしてリフィクと、全員が集合している。もうあとはふたりを待つだけの状態なのだろう。
「待たせとけよ！」
しかし肝心のエリスがこういう言いぐさをする。
模擬戦闘とはいえ、やられっぱなしな彼女だ。どうにも自分が勝つまでは終わらせたくない性分なのである。このセリフを待っている面々が聞いたらどんな顔をするだろうか。
「しばらくぶりのベッドだ。今日は旅の疲れを取ることに専念したほうがいい。いざ実戦で疲労が残っていたら形無しだからな」
もはや毎回のように似たやり取りが行われるため、ラドニスも彼女の扱いを覚えつつあった。背中を向け、さっさと宿へ戻ろうとする。完全にやる気がないとアピールすれば、エリスとしても矛を収めるよりないのだ。
「疲れてねーよ」
エリスのすねた声が浴びせかけられる。
「お前らみたいな年寄りと一緒にすんな！」
お前ら、の『ら』に彼以外の誰が含まれているのかは、あまり深く考えないほうがいいだろう。

そんな言葉を背に受けるラドニスの中では、非常にムラがある…
…というのがエリスに対する評価だった。
良いところはとことん良いのだが、悪いところはとことん悪い。
その差が激しいのだ。

剣の基本はまったくなっていないのだが、不思議と剣筋は悪くない。それは恐らく動体視力と反射神経が優れているからなのだとラドニスは見当をつけているが、なにより迷いがないというのが一番大きいだろう。

攻撃にしろ防御にしろ回避にしろ、一挙手一投足すべて、一切の迷いもためらいもなく行われる。故に動きが鋭いのだ。

時折息を呑むほどに。

それは努力してもそうそう身につけられるものではない。体ではなく心の問題だからだ。

訓練という状況ではなく真剣勝負で、なおかつあの炎の技を使われたら……もしかしたら危ういかもしれない。

ラドニスは密かにそう考えていた。

第三章（2）

朝をさわやかだと感じるのは、吹く風がまだ夜の名残を含んで涼しいからだろうか。もしくは本能的に、太陽の光に安堵するからなのか。

そんな小難しい考えなど頭の片隅にも抱かないエリスは、宿の外に出てぐぅーっと体を伸ばした。

「今日は体が軽いな」

腕や腰を曲げたり回したりしながら呟く。

子供のように底知れないパワーと元気さを常に放っている彼女である。逆に体が重い日というのがあるのだろうかと疑問に思うリフィクだった。

「温泉のおかげね」

エリスのひとりごとに、アリーシェが相づちを打つ。

湯治という習慣からもわかる通り、温泉の効能は意外とバカにできない。日々の旅の中で気付かぬところまで疲労していることを、こういう休息の時に思い知るのだ。

「私とラドニスさんは、『コープメンバー』のところに顔を出してくるわ。あとのことはよろしくね」

宿屋の軒先に集まった仲間たちを見ながら、アリーシェが本題を告げた。

「なんだ、それ？」

上半身を限界までのけぞらせたエリスが、耳慣れない単語を聞き返す。

「私たち『銀影騎士団』の協力者のことよ」

アリーシェは彼女のそんな態度にも、昨日ちゃんと説明したはずだという記憶にも一切かまわず、和やかに答えてみせた。

「実働メンバーは四十人弱だけど、その他に水面下で協力をしてく

れる人が大勢いるの。いろいろな町で、普段は普通に暮らしている人たちだけどね。装備品や資金の支援をしてくれたり、その人たちを通じて団員同士が連絡を取ったりもできるわ」

「へぇー」

ふんふんとうなずくエリス。まるで初耳のようなリアクションだ。

「……ひと晩寝ちゃうと忘れちゃうわけ？」

ぼそりとパルヴィーが呟いた。

アリーシェとラドニスという年長組が抜けると、残るはエリス、レクト、パルヴィーのティーンエイジャー組と、ひと回り弱上のリフィクという構成になる。

順当に考えれば年長のリフィクが中心になるべきなのだが、あいにく彼の発言力は風前の灯火なみに弱かった。

「とりあえず武器屋行こうぜ。いつまでもこんなんじゃかっこつかねーからな」

町の往来を先頭立って歩きながら、エリスが自分の剣を引き抜く。

「うわっ」

それを見て、パルヴィーが苦いものを食べたような声を上げた。

刃がボロボロになっていたのだ。

もはや刃こぼれなどというレベルではない。岩にノコギリのようにこすりつけたとしても、恐らくこうはならないだろうというほどだ。

「それ、ちょっと前に買ったヤツじゃない？」

そのスチールソードは、この『シルパリーサ』のひとつ前に寄った町『イーゼロッテ』で購入したものである。買う場に立ち会っていたパルヴィーには、かなり真新しく見覚えがあった。

「扱い雑すぎー」

「勝手にこうなったんだよ！　こんな不良品つかまされやがって。節穴野郎め」

「剣自体はごく普通のものだ」

と、買った張本人であるレクトが一応弁解した。そしていぶかしげに眉をひそめる。
「しかし、この消耗の仕方は妙だな。逆にどうすればこうなるのかわからない」
あれからまだ十日も経っていない。習慣として剣を振っている彼女は目にするが、買ってすぐの灰のトュループ以降実戦は行なっていないのだ。まず消耗する機会がないはずである。
「だから不良品だからだろって」
レクトの思惑をよそにエリスは完全にそう決めつけ、剣をサヤに戻した。
別段反対者がいるわけでもなかったので、一向はひとまず武具屋を探すことにした。
シルパリーサの町並みは、木造よりもレンガ造りのおもむきが多い。ざっと見回すと、今まさに建築中の建物が目に入った。赤褐色の焼成レンガが外壁に生まれ変わろうとしている。
山が隣接しているため資源も豊富で、汗を流すための温泉も湧いている。ともすれば労働意欲の刺激される環境だ。
この町が活気を含んでいるのはそういった側面もあるからなのだろう。
ここもエリスの故郷などからすれば信じられないほど広く人も多いのだが、少し前にこのさらに上をいく町をまのあたりにしていたため、さすがに感慨は薄れていた。
とはいえ充分驚異に思ってはいるが。
「ところで、なんでお前がいんだよ？」
エリスは右へ左へ目を動かしながら、無遠慮な物言いでパルヴィーに問いかけた。
「あいつらと行かねーで」
イメージ的にはまったくそぐわないが、パルヴィーもアリーシェやラドニスと同じく、れっきとした銀影騎士団の一員である。そのふたりが行くのだから、パルヴィーもあちらについていくのが自然

な流れのはずだろう。
「別に、どうせ行っても楽しくないし」
パルヴィーが、わかりやすい理由を答える。果たして楽しい楽しくないで決めていいものなのだろうか。これを聞いたアリーシェの本音をうかがってみたいところである。
「それに……ね」
彼女の視線に射抜かれて、レクトはせき払いをしながら顔をそむけた。
「はっ。良いご身分だな。普段は大して役にも立ってねーくせに」
エリスが率直な感想をこぼす。
パルヴィーが少しむっとした表情を浮かばせたところで、
「あっ、あれそうじゃないですか？」
話の矛先を変えるように、リフィクが人差し指を突き出した。
指の先には、『ブレード・ヴァン』と書かれた看板が掲げてあった。たしかに武器屋っぽい屋号である。

狭く薄暗い店内に、大量の様々な剣が並んでいる。奥にはカウンターがあり、さらにその奥には鍛冶場のようなものが見て取れた。
「……あんた、『術剣技』を使うのか」
カウンター越しに座る、いかにも職人気質な老人男性が低くうなった。
彼が手に取って眺めているのは、例のエリスの剣である。
「術剣技？」
と知らない言葉をオウム返しする彼女に、
「エーツェルさんがいつも使ってるヤツですよ。ほら、火が出る」
リフィクがざっくりと説明した。『魔術』を応用した剣技をそう呼ぶこともあるのだ。
「はー。わかんのか？」

エリスは感心しながら聞き返した。
「得物を見りゃだいたいのことはな。人間なんかよりはよっぽど雄弁だ」
店主はつまらなさそうに答えて、剣をサヤに収める。どことなく気難しそうな雰囲気が感じられた。
剣を見ただけでそういうことがわかるようになるまで何年かかるのか、想像もつかない。これも職人芸というものなのだろうか。
「新しいもんを買うなら、もうこういう『普通』の得物はやめときな。こんなふうになっちまったのを見るのは良い気分がしねぇ」
「この消耗の仕方は、その術剣技によるものなのですか？」
当のエリスよりも興味深げに、レクトが訊ねた。店内が狭いため、エリスの肩越しから。
「ああ。あの手の技は武器にかかる負担がでかいからな。それ用のもんを使ったほうがいい」
ふとレクトは、自分の記憶を掘り起こした。そういえばエリスは昔からよく武器を壊していたような気がする。ただ取り扱いが適当なだけだろうと思っていたが、もしかしたらその辺りに理由があったのかもしれない。
「しかし、彼女はずっとあの技を使っていましたが、こんなに激しく武器が消耗したのは初めてなんですよ」
なおも熱心に聞くレクトに、エリスは「別にいいだろ、そんなこと」と言い捨てた。彼女にとって関心は薄いらしい。
「そりゃ……この嬢ちゃんの力が上がったってこったろ」
だが続く店主の言葉に、エリスの耳がわかりやすくピクリと動いた。
「技の力に武器がついていけなくなったんだろうな。ガキがサイズの合わねぇ服を着せられてちんちくりんになってるようなもんだ。そりゃ破れもする」
「それ用の剣ってのは、この店にあんのか？」
レクトの発言を押しのけるように、エリスが訊ねた。どことなく

上機嫌になっているように思える。
「ピンからキリまでなんでもござれだ。好きなもん選んどくれ。質は保証する」
ようやく商談に入ったからか、店主の声もワントーン高くなった。
しかし選んでくれと言われても、素人目にはどれが『それ用』でどれが『それ用』でないのかまったくわからない。倉庫かと見間違うほどズラリと並べられている大量の剣の中から目当てのものを探し出すのは、容易なことではないだろう。
骨が折れる。
「めんどくそうだな」
エリスがそれをストレートに口にした。
「剣なんて使えりゃどれも一緒だろ。おい、じぃちゃん、あんたが適当に選んだヤツでいいよ」
土地勘ならぬ店勘のある人間に任せたほうが早いはず。
「あ……？」
彼女としては何気なく言った言葉なのだが。それを聞いた店主の顔つきが、みるみるうちに堅くなっていった。
エリスは、制作者に向かって言ってはいけない言葉ランキングがあるとしたら間違いなく上位に入るであろう言葉を、ずばり本人の前で言ってしまったのだ。
どれも一緒。
特にこういう、長年こだわりを持って作り続けてきた感のある職人には禁句中の禁句である。
「……帰っとくれ」
「なんだよ？　急に」
完全にヘソを曲げてしまった店主が、低い声で呟いた。
しかしまったく心当たりを感じていないエリスは、無邪気とも言える態度で小首をかしげる。不幸にもそれは、怒っている人間の神経を逆なでする態度であった。
「物の価値のわからねぇ人間にはオレの作ったもんは売れねぇって

こったよ」
なのでついつい、店主の口調も強くなってしまう。
「所詮、女にはわからねぇ世界だ。向かいの服屋で髪飾りでも買ってろ」
「あの、穏便に……」
怪しくなった雲行きに、リフィクが先手を取ってなだめようとする。
「エリスが悪い」
そこへパルヴィーが、ここぞとばかりに口を挟んだ。たしかに発端はエリスのひとことだが。
「そうだな。謝るべきだ」
レクトも同意し、事態の沈静化を図る。ここでエリスが素直に謝れば、すべてが丸く収まるのだが……。
「ふざけんなじじぃ！」
どっこいそうはならないのがエリス・エーツェルである。
カウンターに乗り出す勢いで言い返す。
「あたしの目が節穴だとでも言うつもりか！？」
「そうじゃなけりゃガラス玉だ。オレの得物が全部一緒に見えてるわけだからな」
エリスでなくとも、さほど違いがあるようには思えない……と他の三人は思ったが、それは心の小箱にしまっておいた。
「事実一緒じゃねぇか。大した差なんてねーよ！」
「普段から下等なもんしか見てねぇからそんな言葉が出てくんだよ」
もはや売り言葉に買い言葉である。どう仲裁していいものか、リフィクとレクトはそれぞれ迷っていた。
パルヴィーは対岸の火事のようにただ眺めているだけだったが。
「じゃあ見せてみろよ、その上等なヤツってのを！」
「よかろう。見せてやる」
事態の方向性が変わったのは、その時だった。
店主は店の奥へ入っていったかと思うと、すぐに細長い木箱を大

事そうに抱えて戻ってくる。そしてそれをカウンターの上に置き、見せつけるようにしてフタを持ち上げた。

「これぞ我が『ブレード・ヴァン』開店史上最高傑作、名付けて『ブレード・マリア』だ！」

興奮のためか、店主の口調もやや芝居じみている。

箱の中には、ひと振りの抜き身の剣が収められていた。

形状的にはごく普通のロングソードだが、目を見張るべきはその刀身。刃全体が、まるで宝石のようなライトグリーンに輝いているのだ。

「おおっ……！」

エリスを含む四人から感嘆の声がもれた。

武器の域を脱した美術品じみた美しさに、ただただ見とれてしまっている。

その反応を見て、店主は満足したようだった。

「すごいです！」

まずリフィクが率直な感想を口にする。

「やるじゃねーか。じぃちゃんよ」

そしてエリスも、店主の言い分を素直に認めた。

感情をストレートに出してしまうのは彼女の悪い部分であるが、相手を認めるべき時にはわだかまりなく認められるところは良い部分であると言えるだろう。

事態が沈静化へ向かうと思われた、そこへ。

「これって、ただ見た目がキレイっていうだけ？」

パルヴィーが新たな火種を放り込んだ。

第三章（3）

「……帰っとくれ」
パルヴィーのひとことを聞き逃さず、店主はまたしても険悪な表情で吐き捨てた。
ふりだしに戻れだ。
他の三人の視線が、パルヴィーに集中する。
「え？　えーと……ごめんなさい」
失言の空気を感じ取り、彼女はすぐさま謝った。
なんてことはない行動なのだが、エリスのあとだと非常に素晴らしい偉業に見えてしまう。
「ふん……」
しかし、店主の気分は上向きにはならなかった。恐らく先ほどの怒りもぶり返してきたのだろう。
「いいか、コイツにはな、『魔術』の力に干渉しやすい『魔導鉱石』っつーもんがふんだんに使ってあるんだ」
まるで説教のように、この剣の説明をし始めた。
「術剣技を使おうってんなら、コイツ以上にふさわしい得物はねぇと断言してやる。よその店のひよっこが作ったもんとは格が違うんだよ」
こちらのせいで機嫌を損ねてしまったのだから、黙って聞くしかない。という思いの三人である。
しかしエリスだけは、店主の言葉などろくに聞かず、目の前に置かれた剣をまじまじと眺めていた。
この輝くライトグリーン。どこかで見たことがあると思ったら、あれである。トュループと戦った時にアリーシェから借り受けたブレスレット。あれと同じ色をしているのだ。
あのブレスレットをつけた時。今まで感じたこともないほどの力

が、体の底から湧き上がってきた。
もしこの剣に、あれと同じ効果があるとするならば……。
「魔導鉱石ってのはな、アクセサリーみたいなもんに加工するのでも十年、二十年の修行が必要だ。それぐらい取り扱いがむずかしいんだよ。こんなふうに剣の形にして、なおかつ切れ味、重量、見た目、握りとの相性なんかを完璧に兼ね備えられるってのがどういうことかわかるか？　えぇ？」
「よし、買った！」
得意げに語る店主をまるっきり無視して、いきなりエリスが大声を上げた。
内心で助かったと思う三人である。彼女の失礼千万な性格も、こういう時はありがたい。
「売らんぞ」
店主は仕方なく講釈を途中で打ち切り、冷ややかに言い捨てた。
「売れよ！」
「……さっきも言ったが、コイツはオレの最高傑作だ」
店主の口調が、怒りを含んだものから真剣そのものといったものへと変化する。
「ただ金を出して売った買ったって話じゃねぇんだよ。魂の問題だ」
そう言い捨てると、店主はそそくさと剣を箱にしまい奥へと引っ込んでしまった。
「あっ……くそっ！」
エリスは恨めしそうな顔でパルヴィーを睨む。
そもそもの原因を作ったのは自分だということは、完全に棚に上げていた。
客が去りひっそりとした『ブレード・ヴァン』店内に、新たな客がやってくる。
若い男女のふたり組。

「おう、お前さん方か」
それを見た店主は先ほどとは打って変わって表情を明るくし、ふたりをほがらかに迎え入れた。
「お久しぶりです」
男性が礼儀よく頭を下げる。しかし後ろに立つ長い黒髪の女性は、まるで背後霊のように佇んでいるだけだった。
「相変わらずだな」
店主はそんな女性を笑い飛ばして、
「おい、『ブレード・ルシッド』を見せてみろ」
相手の用件を聞く前に片手を突き出した。
男性が振り返って女性を見る。それに応えて、女性は自分の腰元に吊った剣をサヤごと受け渡した。
店主は剣をサヤから引き抜き、黒い刃のそれをじっくりと眺め始める。
「ところで、先ほど来ていた方々は……？」
と、前置き代わりに男性が切り出した。
「ただの、見る目のねぇボンクラ共だよ。あいつらがなんだ？」
「いえ。大したことでは」
男性の口元が、わずかに笑ったような気がした。
店主が剣をサヤに戻し、女性に返す。
「だいぶ斬ってるみたいだな。腕前のほうも相変わらず見事なもんだ」
「ええ。おかげさまで」
答えたのは男性だった。女性は喋ろうともしない。店主も、それは期待していないようだった。
「それで今日は、この剣の代金を支払いに来たのですが……」
男性が本題を切り出した途端、店主は顔をしかめて小さく手を払った。
「おいおい。よせよせ、そんな無粋な真似は」
口調には呆れたようなニュアンスが込められている。

「そいつはお前さん方にくれてやったもんだ。金なんぞいらねぇっつっただろ」
「しかし、やはりそういうわけにも」
「いいんだよ。前に言ったことがすべてだ。お前さんがたがその剣で『モンスター』をバッサバッサと斬り倒してく……それでチャラだってな」
言い切り、反論は受け付けないとばかりに店主はそっぽを向いてしまった。
男性は困り顔で、女性と目を合わせる。

◆

あのあと何軒か武具屋を回り、ランチのために食堂で落ち着いたエリスたちである。
結局エリスの剣は買わずじまいだった。
いわゆる『術剣技』用の剣は他の店にもあったのだが、そのどれも、値段が普通の剣と比べて十倍以上も高かったのである。到底手持ちでは足りなかった。
「意外と高いんだな、ああいうの」
エリスは鶏肉のフライが挟まったハンバーガーをペロリと平らげ、深々と呟いた。世の中まだまだ知らないことが多い。
手についたソースを舌で舐め取っていたら、レクトから行儀が悪いという注意が飛んできた。無視したが。
普通の剣ではそう長持ちしないと知った以上、買うならば『それ用』のものしか考えられない。
とにもかくにも問題は金である。
「そういえば、みんなはどうやってお金稼いでたの？」
サンドイッチを片手に、パルヴィーが唐突に訊ねた。
それは、とリフィクが答える。
「道中で見つけためずらしい薬草をつんで売ったり……獣の毛皮や

牙なんかもお金になりますし」
「ふーん、けっこう地道だね」
たしかに地道な稼ぎだが、贅沢をしなければ意外とそれでなんとかなったりするものである。ちなみにパルヴィーらと合流してからは、すべての出費を彼女らに頼りきりであった。
「そう言うお前らの金の出所はどこなんだよ？」
逆に、とエリスが同じ質問を返す。
しばらく一緒にいるが、彼女らは旅の身とは思えないほど羽振りが良かった。食料も充分に買えるし、なにより武器や防具に関しては金に糸目をつけないほどである。
一緒にいるあいだの行動には、特に収入源になるようなものは思い当たらなかった。
「お金は、あれだよ。『コープメンバー』」
「あいつらが会いに行ってる奴らか？」
一般人の中にいるという、銀影騎士団の後援者のことである。
「そ。お金だけじゃなくて、他にいろんなものくれたりもするけどね」
口ぶりだけ聞くと、まるでおじいちゃんおばあちゃんと孫のようだ。
武器や資金が用意されていれば、戦うほうは戦うことに専念できる。すると自然と成功確率は高くなり、能率も上がっていくだろう。
最善の形になる。
そういう構図ができあがっているということは、銀影騎士団の歴史はかなり古いのかもしれない。
「だからアリーシェ様に言えば、剣くらいぱぱっと買ってくれると思うよ」
たしかに、微笑んで応じてくれる光景がありありと目に浮かぶ。
しかし、とレクトが芳しくない表情を作った。
「それでも安い買い物じゃないだろう？　今以上にお世話になるわけにはいかないよ。この代金くらい、なんとか俺たちで稼いでみな

いか？」
　これくらい大きな町ともなれば、日雇いの働き口もいくつかあるはずだろう。パルヴィーは除くとしても、三人がかりならそう時間はかからないかもしれない。
「別にそんなの気にしなくてもいいのに」
　パルヴィーがこぼす。恐らくアリーシェやラドニスも同じことを言っただろう。
「いや大事なことだ。なぁ、エリス」
「ん……そうだな」
　とエリスから返ってきたのは、いまいちしゃんとしない生返事だった。
　別に働くのが嫌なわけではない。とあるひとつのことが、彼女の頭の中を席巻しているのだ。
　最初に訪れた店で見た、あのライトグリーンに輝く妙剣。他のどの剣を見ても、あれが忘れられずにいる。
　ひと目で魅了されてしまった。
　ついつい、あの剣のことを考えてしまうのだ。思い人に恋い焦がれるように。
　……エリスには似合わないロマンチックなたとえだが。
「それなら、『旅人支援所』に行きましょうか？　来る時に見かけました」
　するとめずらしく、リフィクが提案を口にした。
「それは？」
　知らぬ言葉にレクトが小首をかしげる。

　旅をするというのは、様々な面で見ても困難と言える。
　その中でも一番はやはり金銭的な問題だろう。
　なにかしら一芸を持つ者ならばそれで稼ぐこともできるが、世の中にはそうでない者のほうが多い。

そんな稼ぎ口に困った旅人を支援するために各地に設けられたのが、読んで字のごとくの『旅人支援所』である。

システムは単純だ。基本的にはその町の住人が、なにか人手の必要なことを依頼し、その依頼を旅人が受ける。そして然るべきのち依頼主から報酬が支払われるのだ。

旅人は金を手にでき、住人は困っていたことを解決できるという具合である。

もっとも旅人だけでなく、仕事のない住人が依頼を受ける場合もあるのだが。その辺りの線引きはやや甘くなっている。

そういった説明をリフィクがしているうちに、一行は目当ての建物へと到着した。

辺りの建物と比べても立派と外観だ。

中に入ると、すぐにホールのような広い空間が待ち受けていた。

「旅人というのは、それほど多いのですか？」

レクトが訊ねる。こんな施設まで作られる以上は、そういうことなのであろうが。

「そうですね」

少し声量を落として、リフィクが答えた。

「『モンスター』に住んでいたところを奪われてしまったり、その一歩手前の状況が嫌になってしまったりして、どこか新天地を求めて旅をする……そういう人も少なくないと思います」

「……」

レクトは痛ましい心境で周囲を見回した。

旅姿の人間が、ざっと二十人ほどいる。若者だけでなく子供連れや、老夫婦とおぼしき人たちも見て取れた。

皆少なからずそういう境遇にあるのだろうか。

そういった人々を救済したり手助けをするためにこの施設が作られたというのは、人情的にごく自然な流れだったのかもしれない。

「そういえば、リフィクさんはどうして旅をしていたのですか？」

視線を戻してレクトが訊く。彼は旅の途中でレクトとエリスの故

郷『フィオネイラ』に立ち寄ったという話だったが、そのところの詳しい話はまだ聞いていなかった。

「えっ？　それは……その……」

リフィクはあからさまに言葉を濁す。

「別に……たいした理由ではないです。全然。そんな」

もしや言いにくいことだったのだろうかと気を遣って、レクトはそれ以上追及しなかった。

第三章（4）

ホールの奥に大きな掲示板のようなものがあり、そこに何枚もの紙が貼り付けてある。

ざっと目を通すと、どうやらその紙に依頼が書かれているようだった。

内容は多岐に富んでいる。

飲食店の手伝いに、ベビーシッター。屋根の修理、農作業、ペット探し、果てはただの話し相手というものもあった。

「退屈そうだな」

それらを眺めながら、エリスがため息まじりに呟いた。期待していたものとは、少し違っていた。もっとこう……うまくは言えないが、エキサイティングなものを予想していたのだ。

肩すかしである。

「……おっ？」

落胆しかけた彼女の表情が、一枚の紙を目にとめてわずかに明るくなった。

それを掲示板からちぎり取り、改めて書面に目を落とす。ニヤリと白い歯がのぞいた。

「山賊退治か」

「おい、これやろうぜ」

それぞれ掲示板を見ていた皆を呼び集めて、エリスはその紙を見せつけるように突き出した。

「んー？　山賊退治？　報酬は……二百万ルーツぅぅっ！？」

読んだパルヴィーが、とてつもない大金に驚き奇声を発する。

周囲にいた人間たちがその声を聞いて、彼女らに視線を向けた。

「かっ、書き間違いじゃないんですか？」

リフィクはその紙を手に取り、目を皿のようにする。
他の依頼と比べて、報酬の額がまさに桁違いであった。二百万ルーツもあれば、当分は遊んで暮らせるだろう。
「依頼主は、この町の町長と書いてありますね」
横からのぞき込んだレクトが、紙の最下部に目をとめる。依頼の概要の下に、『シルパリーサ町長リッキー・ロッキード』というサインが記してあった。
町長名義ということは、町をあげての依頼ということなのだろうか。それならこの額も納得できなくはないが。
「面白そうだろ？　とっとと退治しに行こうぜ」
得意満面で乗り気なエリス。しかし他の三人は、やや慎重な姿勢を取っていた。
「あのー……報酬の額が大きいということは、それだけ困難だということだと思います」
リフィクがおっかなびっくり反論の口火を切る。それをレクトが継いだ。
「金額は魅力的だが、あまり規模が大きい話なら俺たちだけでは解決できないかもしれない。お金を稼ぐだけなら、もっとふさわしいのがあるんじゃないか？」
「そうそう」
と、パルヴィーが締めくくる。
たしかにそれは正しい物の見方ではあるが、口で言って聞くようなエリスではなかった。
「なんだよなんだよ、へっぴり腰になりやがって！　一発でガツンと稼げるんだからそれでいいじゃねーか！　うまくいかなかった時のこと考えてもしょうがねーだろ」
口を尖らせて反論に反論する。もしや反対されるとは思っていなかったのだろうか。
「なんかギャンブルで人生失敗する人みたいな言い方だけど」
パルヴィーがチクリと刺す。正しい評価だ。

「決断が早すぎると言っているんだ」
穏やかな口調で、レクトがなだめようとする。
「ここに貼ってある仕事の依頼に、まだ全部目を通してない。決めるのはそのあとでもいいんじゃないか？」
「じゃあお前らはそうしろよっ」
しかしエリスは意見を曲げずに、リフィクから依頼の書かれた紙を乱暴にひったくった。
「給仕でも掃除でもして地道に稼いでろよ、勝手にっ！」
勝手なのはどちらなのか。
エリスは捨て台詞を残して、出入り口へふてくされるように歩いていった。
「すねちゃった」とパルヴィーが肩をすくめる。
やることが子供だ。
三人は、やれやれと顔を見合わせる。彼女は本当にこのままひとりで行くつもりだろう。放っておくのも、なんだか気が引ける。
「エーツェルさんっ、まずはここで依頼を受ける手続きをするんですよーっ」
建物を出ようとする彼女の背に、リフィクが慌てて呼びかけた。

山賊がいるというのは、この『シルパリーサ』に隣接するようにそびえ立つ『ベガ山』山中。被害の報告が頻繁に上がるようになったのは最近。何度か町の有志による討伐隊が出されたが、そのことごとくが返り討ちにあってしまった。
故に腕の立つ旅人に力を借りるべく依頼を出した。山賊とおぼしき連中のほぼすべてを捕まえるか始末してくれれば、報酬を支払う。
紙に書かれた依頼の概要と、町役場の人から聞かされた話。それらを合わせると、つまりはこういうことらしい。
『旅人支援所』で依頼を受け、役場へ詳しい話を聞きにいった帰

路。
エリス以外の三人の表情は、重く張り詰めたものになっていた。
「聞いた？　返り討ちにあったんだって。何度も」
パルヴィーが眉尻を下げる。
「つっても人間だろ？　『モンスター』に比べりゃどうってことねーよ」
憂慮すべき情報を、エリスは一言のもとに切って捨てた。
が、たしかにその通りなのである。彼女が乗り気になっている一因もそこにあった。
どれだけ腕が立とうが、所詮は人間なのだ。強者『モンスター』と何度も戦ってきた彼女からすれば、造作もない相手。
流れのゆるやかな川を渡るようなものだ。海を渡るのに比べれば、へっちゃらすぎてあくびが出てくる。
それで大金が手に入るのだから、やらない理由などなにもないはず。と、エリスは考えているのだ。
「比較問題じゃない」
が今度は、レクトがそれを切り捨て返した。
なんだろうと厄介なものは厄介なのだ、と。
「とにかく一度戻って、アリーシェさんとラドニスさんにも話をしよう。当初の目的からは外れるが、俺たちだけでは手に負えないかもしれない」
気を取り直すように、レクトが指針を提案する。その内容は事態に前向きなものだった。
「ようやくやる気になってきたか」
彼の心境の変化見て取り、エリスが軽く茶化す。
「……そうなの？」
パルヴィーが確認の意味を込めて訊ねた。てっきりまだ、やるかやらないかを考えている途中だろうと思っていたのだろう。
レクトは真剣な表情で答える。
「さっきの話を聞いた限りでは、町の人たちの被害はかなり大きか

った。『モンスター』に苦しめられている人がたくさんいるっていうのに、人間が人間を苦しめるなんていうことがあっていいはずがない」

大きな脅威に対して協力することもなく同胞を傷つける。レクトからすれば、その行為はどうにも許せないのである。

旅人や行商人を襲うなど同じ人間として黙っていられない。

彼の中では、すでに金の問題ではなくなっているのだ。

「だから俺たちでなんとかしよう。君も力を貸してくれ」

「う、うん……」

なにやら頬を染めた様子で、パルヴィーはコクリとうなずいた。

頼りにされるのが嬉しいのだろうか。

リフィクはなりゆきを傍観しながら、また危険そうなことに巻き込まれるのか……と悲観的なことを思っていた。それでも『モンスター』と戦うよりは気が楽だったが。

宿へ着くと、用事を済ませたアリーシェとラドニスが先に戻ってきていた。

「……なるほど」

部屋は狭いので、宿屋の玄関口を陣取っておおよそのいきさつを話す。するとアリーシェは、深く静かにそううなずいた。

「たしかにそれは放ってはおけない問題ね。私たちも協力するわ。いいでしょう？」

一応といった様子でラドニスにも確認を取る。

彼が「ああ」と快諾するのを受け、レクトは「助かります」と頭を下げた。

「なぁー、早く行こうぜー」

そんな話の早いやり取りも待ってられないのか、エリスはうずうずと催促し始めた。

短気もここまでくるとあっぱれである。

「はーやーくーいーこーおーぜー」

「……それはかまわないけれど。あなた、目当ての剣は買えたの？」
アリーシェは苦笑いで受け流しつつ、別件の経過を訊ねた。
「そりゃ、まだだけど」
「ならそっちを先に済ませてしまったほうがいいんじゃない？　その山賊と、ことをかまえた時に武器がなくては困るでしょう？」
彼女の言うこともっともなのだが、そもそも、その剣を買うために山賊を退治しようというのが話の流れなのである。
当然、まだ買えるわけがない。
「まぁ……アレで充分だろ」
とはいえエリスも、それをまったく考えていないわけではなかった。たかだか人間相手、ちゃんとしたものを使うまでもないだろうと甘く見てはいるが。
「あっ、そういえば！」
とエリスはいきなり、なにかを思い出したように大きな声を出した。
「あの剣の値段聞いてなかったな」
「あの剣？」
疑問符を浮かべるレクト。
「偏屈なじじぃがいる汚ぇ店の緑の剣だよ」
「……あぁ。あの店の」
失礼極まりない説明だったが、それだけでもなんなく伝わったようだった。
「あれを買うつもりか？」
「おうよ」
「でもさ、値段がどうこうって雰囲気じゃなかったと思うけど……」
パルヴィーも同じものを思い起こし、呟く。仮に聞いたとしても、値段などつけられないと言われるのがオチだろう。
「そこはあたしとあのじじぃの根比べだろ」
なにごとも自分の思い通りにさせたがるエリスだが、今回の相手はどうも分が悪そうである。

「絶対手に入れてやる！」
誰に向けてなのかは不明だが、高らかに決意を宣言してみせた。
そんなやり取りを聞いていたアリーシェが、もしかして、と訊ねる。
「そのお店って……『ブレード・ヴァン』？」
「その道では、知らない人はいない名匠よ」
シルパリーサの町並みを歩きながら、アリーシェが件の人物についての説明をする。
「そして私たち銀影騎士団の『コープメンバー』でもあるの。打った剣を提供してくれているわ」
彼女とラドニスを加えた六人で、一行は再び例の武器屋へと向かっていた。
「会ったことあんのか？」　エリスが訊ねる。
「数えるほどだけど、印象に残る人だからよく覚えているわ。この町に来ると思い出す」
「わたし大丈夫かなー……」
と、パルヴィーが不安げな声を上げた。
部外者のエリスはともかく、団員であるパルヴィーが彼のヘソを曲げてしまったのは、それなりに問題があるかもしれない。下手をしたら大事である。
「大丈夫よ」
アリーシェがほがらかになぐさめた。
「剣に関してはカッとなりやすい人だけど、基本的にはいい人だから。きちんと話せばわかってもらえるわ」
たしかに、いい人でなければ彼女らへの協力などしないだろう。
しかし見るからに頑固そうなあの老人が、話せばわかるかと言われても疑問が残る。
「たしかこの辺りでしたよね」
周囲の建物を見回しながら、リフィクが呟いた。

第三章（5）

剣専門の武器屋『ブレード・ヴァン』。店主の名前はアルムス・ドローズ。

そしてその『ブレード・ヴァン』を訪れた若い男女の客は、男のほうがハーニス。女のほうがリュシールという。

三人はドローズの自宅で、この町特産のハーブティーを味わいながら、たわいのない話に花を咲かせていた。

ちなみにその八割を喋っているのはハーニスである。残りの二割がドローズ。リュシールはまさかのゼロ割となっている。

ドローズの自宅は、店舗と一体になった造りだ。

建物を真上から見て、左下に店舗。右下に居住区。そして上半分が鍛冶場と倉庫になる。

妻を亡くしてひとりで暮らすようになってからは、もう五年ほど経っただろうか。

ハーブティーが半分ほど減った頃。店舗のほうから、なにやら彼を呼ぶ声が聞こえてきた。

「今日はずいぶん客が多いな」

よっこらせとこぼしながら、ドローズはテーブルから離れる。

「ちょっと待っととくれ」

「お構いなく」

ハーニスたちに短く断わってから、面倒くさそうにダイニングキッチンをあとにした。

残されたハーニスは、優雅な仕草でハーブティーをひと口含む。

そして少々いたずらっぽく、となりに座るリュシールへと微笑みかけた。

「聞き覚えのある声だね」

「おーい！　いるんだろじじぃー！」
エリスはカウンターはバシバシと叩きながら、姿の見えない店主を呼び続けていた。
ガラの悪いことこの上ない。店側からすれば、間違いなくもっとも接客したくないタイプの客であろう。
もうほんの少し続けていたらアリーシェかレクトあたりに止められていただろうという、すんでのところで。店の奥からドローズがやって来た。
「なんじゃい。あんたらにはなにも売らんと言ったはずだがな」
最前のエリスの姿を見て、さっそく短いため息を吐く。
「……お？」
しかしそのとなりに立つアリーシェを目にした途端、一転して顔から険悪な雰囲気が抜けていった。
「いつもお世話になっています」
アリーシェと、そしてラドニスがそろって頭を下げる。
「さっきはあのー……失礼つかまつりまして……」
ひと呼吸遅れてパルヴィーも頭を下げた。緊張のせいか言葉遣いが妙なことになっていたが、指摘した者はいなかった。
「たしか……アリーシェ・ステイシー。それとゼーテン・ラドニスだったか」
ドローズは首をひねりながら記憶を掘り起こす。様子を見るに、パルヴィーのことはあまり気にしていなかったのだろう。
あくまでエリスの失言が尾を引いているようである。
「無事に生き残ってるみたいだな。前に会ってから、もう何年経つんだ？」
「四年と記憶しています。そちらもお元気なようで、なによりです」
「じじぃのくせに意外と物覚えいいんだな」
旧知との再会のあいさつを、エリスの正直な感想がぶち壊した。
どうしてそれを胸の中にとどめておけないのか、毎度のことながら小さく頭を抱えるレクトである。

ドローズはカウンターの定位置に座りながら、ふん、と鼻を鳴らした。
「美人の顔ならそうそう忘れねぇさ。お前さんの顔は明日の朝には忘れてるだろうがな」
そしてきっちり言い返す。しかし前に店を訪れた時とは違い、その声には多少の冗談っぽさが含まれているような気がした。
「この、はすっぱな娘もあんたらの身内か？　騎士団の」
「いえ。ですが彼女とこちらのふたりも、共に『モンスター』と戦う同志です」
アリーシェはエリスと、背後に控えるレクトとリフィクを手で指して紹介する。
彼女らを見るドローズの目が、ほんの少しだけ変化した。
諸々のあいさつも済んだところで、エリスが余計なことを言う前に、とアリーシェが用件を切り出す。
「彼女が剣を探しているのですが、そちらの『マスターピース』をとても気に入ったようで」
「あの緑色の剣だ」
「……それを、いくらでお譲りしていただけるのか、ご相談にうかがいました」
ドローズは合点がいったという顔をしてから、軽くあしらうように息を吐いた。
「だから売らんと言ったろうが。あれは売りもんじゃない」
しかしそこで言葉を終わらせず、「だが、まぁ」と二の句を継いだ。
「『モンスター』を斬るってんなら、他の剣なら売ってやる」
まったく売らないの一点張りだった状態からすれば、目覚ましい進歩と言える。
「ボケんなよ、じじぃ」
だがエリスにとっては、その程度の進歩などたいした意味はなかった。

「あの剣以外はいらねーよ。ごちゃごちゃごねてねーで、耳そろえてとっとと売りやがれっ」
耳をそろえるのは売るほうではないのだが。
「いいか、じじぃ。あたしらが倒しに行くのはただの『モンスター』じゃねぇ。奴らの頂点だ」
エリスはカウンターに身を乗り出す勢いで言い募る。
「普通の剣よりてめーの剣を使ったほうが、楽に倒せるだろうがっ！」
まず倒せることが前提なのが恐ろしいところである。
「たぶんだけどな！」
「……『ボス』とかってのか？　んなもん大差あるめぇ」
「アホか。そいつらひっくるめた頂点だよ」
「あん？」
ドローズの目が、初めて興味深げに開かれた。半笑いでエリスを見やる。
「おいまさか、『モンスターキング』なんて言う気じゃあるめぇな？」
「仰る通りです」
助け舟を出すように、アリーシェがすかさず口添えた。
「先ほど『コープメンバー』を通して、他の団員にもその旨を伝えて頂くよう頼んできました」
「本気か？」
ドローズは、彼女をにらみつける勢いで見やる。
「冗談では口にできません」
アリーシェはその目を、鋭い眼光をもって見つめ返した。真に迫った意気がにじみ出る。
「……死ぬぞ」
「そうならないために、あなたの『マスターピース』を譲って頂きたいのです。そうすれば百人力。他の剣では力が足りません。……そういうことでしょう？」

アリーシェはこれで援護は終わりと言いたげに、最後にエリスへ微笑を向けた。
「そういうことだ」
エリスはまるで、それが自分の代弁であったかのようにうなずいてみせる。調子の良いことだ。
「……」
ドローズはムスリと押し黙り、なにかを考え込む。
迷っているのだろう。それはつまり、少なからず賛否の選択肢が生まれたということ。心が揺らいでいるということだ。
アリーシェの言葉がかなり効いているようである。
「……条件がある」
エリスが待ちきれなくなるだろう寸前、ドローズがやおら口を開いた。
「最近、近くの山に賊が住み着いて町のモンが迷惑してる。その連中をひっ捕まえてこい。そうすりゃ、考えてやらんこともない」
「……それって」
と、パルヴィーが呟く。
なんとも都合のいいことに、こちらの目的とうまく合致してしまった。一石二鳥というヤツだ。
「お安い御用だな。捕まえてくりゃいいのか？」
エリスは喜々としてそれを引き受ける。もとより断わる理由などない。
「ああ。説教のひとつもしてやらにゃならんからな。それに人間同士、命の取り合いをすることもあるまいて……」

「待たせたな」
ダイニングに戻ったドローズに、ハーニスは「いいえ」と首を横に振ってみせた。
「どんな用件だったのです？」

「いきなり俺の『マリア』を譲れときた。最近の若いもんは礼儀知らずでいけねぇや」
困ったふうに顔をしかめながら、よっこらせとイスにつくドローズ。カップに残ったハーブティーを一気にあおるが、もう冷めてしまっているだろう。
「あの負けん気が彼女のいいところでもありますが」
苦笑まじりに言ったハーニスに、ドローズは「あ？」と片眉を上げた。
「知り合いみたいな言い方だな」
「何人かとは面識があります」
このダイニングと武器屋店舗は、ドア一枚を隔てた距離にある。先ほどのエリスたちとのやり取りもほとんど筒抜けであった。
「そうかい。ならあの嬢ちゃんに目上に対する口の聞き方を教えてやっといてくれ」
「言って聞くとは思えませんが」
ハーニスは小さく肩をすくめる。
「……して、例の剣。彼女に譲るつもりで？」
「わからんが、やらんだろうな」
ドローズは不明瞭なことを即答して、ティーポットから新たな茶をカップに注いだ。
「あの嬢ちゃんがこっちの嬢ちゃんくらいの腕前なら、まぁ俺も気分良くくれてやるところなんだが」
ぐびりと飲むが、恐らくそれも冷めているだろう。とはいえ冷たくなってもさほど風味が損なわれないのがこのお茶の特徴ではある。
「ただの人間が束になってかかったところで『モンスターキング』になんぞ勝てるわけがねぇ。小娘と一緒に土に帰すにゃぁ、惜しい傑作よ」
「では、なぜあのようなことを？」
山賊を捕らえてくれれば考えないこともない、と。
「断わる理由を考える時間が欲しかっただけだ。まぁ困ってんのは

事実だからな。一石二鳥ってヤツだよ」
　ハーニスは「ふふっ」と声を出して笑った。食えない老人である。
「ですが、それを考える必要はないと思いますよ」
「なぜだ？」
「たしかに腕はまだ未熟ですが、胸に秘めた気概はそうではありません。常人とは一線を画しています。精神は時に肉体を凌駕する…将来性を考慮すると、彼女に渡してみるのも悪い話ではないでしょう」
　ハーニスはよどみなく、すらすらとエリスに対する評価を並べていく。ドローズはそっぽを向いて面白くなさそうな顔をした。
「ずいぶんと買ってるじゃねぇか。あのおてんばを」
「個人的な感情で見る目が甘くなっている可能性もありますが」
　対照的に、ハーニスは冗談めかして笑う。
「少なくとも、『ただの人間』で片付けるには惜しい少女には違いありません」
　なんにせよ高評価であることには変わりない。それがいまいち理解できずに、ドローズはぽりぽりと頭をかいた。
「……そこまで言うならな。連中が戻ってきたら、そこの嬢ちゃんと腕試しするとこ見せてくれよ。それでまた判断し直す」
　ドローズはドローズで、リュシールの腕をかなり高く買っているらしい。ただ実際に戦っているところを見たことはなく、使っている剣を見ただけのはずなのだが。
「よろこんで……と言いたいところですが、残念ながらそれはお断わりさせていただきます」
　まさか断わられるとは思っていなかったのか、ドローズはポカンとした表情でハーニスの顔を見た。
　ハーニスはカップに少しだけ残っていたお茶を飲み干し、音を立てないよう静かに受け皿に戻す。
「少女らと一緒にいたのは『銀影騎士団』でしょう？　……彼らと顔を合わせるのは、いささか避けたいところなのですよ」

空になった彼のカップへ、リュシールがティーポットをかたむけた。

第三章（6）

準備を万端に済ませたのち、エリスたちはシルパリーサの町をあとにした。そしてそのまま『ベガ山』へと足を踏み入れる。

山を登り始めてからまだまだといったところで、

「そろそろ休憩にしましょうか」

とアリーシェが提案した。

「なんでだよ？　まだ入ったばっかりだろ」

すかさずエリスが異を唱える。一行の中ではもはや見慣れた光景となっていた。

アリーシェはわずらわしさなどみじんも表さず、丁寧に言い聞かせる。

「山道を歩くのは自分が思っている以上に体力を消耗するわ。その消耗をしている時に戦いになってしまったら、力を満足に出せなくなるでしょう？　だから早め早めに休憩をして、体力を常に温存しておく必要があるのよ」

先日立ち寄ったイーゼロッテからシルパリーサへはこの山道を越えるのが最短ルートであったのだが、エリスたちはあえて山を迂回し、平地で町へとやって来ていた。

その理由がこれである。

ただの旅人なら疲れるまで歩き、休み、また歩き出せばいいのだが、彼女らの場合は事情が違う。なにを置いても戦闘ということを考えなくてはならないのだ。

普段なら『モンスター』。今の場合は山賊との。

どこで出くわすかわからないため、どこで出くわしてもいいよう常日頃から心掛けなくてはならないである。

「ふーん。そうなのか」

こうも懇切丁寧に正しいことを説明されては、エリスとしても納

得するしかない。
特に反対する者もいなかったので、一行は提案を実行に移した。

町の住人が採掘や伐採によく訪れるからか、ベガ山の山道はとてもよくならされていた。
細くて長い木が所狭しと林立し、視界を茶色と緑に埋め尽くす。さわさわと風が葉を揺らす音と鳥のさえずりは、とても賊がいるとは思えないほどのどかな雰囲気をかもし出していた。
「ククルスですね……」
山道の真ん中に立って木々を見上げていたリフィクが、ぽつりと呟く。
「……なにが？」
じっとしていられずになにやらうろうろしていたエリスが、その呟きを耳にして問いかける。
「鳴いてる鳥です」
「はー……」
興味の薄い返事でそのやり取りは終了した。
レクトとパルヴィーとアリーシェは道の脇に腰を下ろし、ラドニスは荷物を載せた馬（オルセーくんという名前らしい）の首をなでている。
「なー、よー、いつまで休むんだ？」
落ち着きのないエリスへ、
「そんなにうろうろしていたら休憩にならないでしょ」
アリーシェが苦笑いをこぼした。

しんがりをつとめるラドニスが足を止めたのは、それからしばらく進んだ頃だった。
「……囲まれてるな」
それを聞き、皆もそれぞれ足を止める。だが周囲を見回してみて

も、特に変わった様子はなさそうだった。
「レイド」
とレクトを呼びながら、ラドニスはわきの林を指で差す。
「木を避けて射れ」
「はい」
意図は飲み込めないものの、レクトは言われた通りにやってみた。
手早く弓を構え、矢を抜き、狙いを定めて引き絞る。
放たれた矢は密集する木々をかいくぐるように飛び、やや間を置いてトスンと木に突き刺さった。
変化が起きたのはその瞬間だった。
うわっ、という短い悲鳴。それに端を発するように、あちらこちらから生物の気配が次々と現れていった。
「……！？」
どこに隠れていたのか、現れたのは人間の男たち。一様に毛皮や皮の衣服をまとい、剣や斧といった武器を手にしている。
「この人たちがっ！？」
泡を食うリフィク。反射的にエリスたちも武器を取り出し、応戦の形を取った。馬を中心に、六人が互いに背を向け合った円形の構え。
「待ちくたびれたぜ」
エリスは好戦的に笑いながら、ざっと辺りを見やる。
一行を取り囲む彼らは、おおよそ十五人から二十人はいるだろうか。注がれる視線はあまり友好的とは言いがたい。
「無事か！？　ジョゼフ」
そんな時、男たちの誰かが、仲間に向かって大声で訊ねた。
「大丈夫だ、びっくりして声出しちまっただけだ！」
その反対側から返事が飛んでくる。どうやら先ほどの悲鳴は彼のものらしい。
そのやり取りを聞いた周囲の男たちが、小さく息を吐くのが伝わってきた。

さしずめ仲間がやられたと思い、いきり立って出てきたといったところだろうか。ラドニスがそこまで計算していたとしたらかなり策士である。

「金目のものと食料を、持っている半分だけ置いていけ」

今度はエリスたちに向かって、男たちの誰かが声を投げた。

「そうすりゃ無事に山を降りられる」

そうしないと無事には降りられないということか。やはり、な展開である。

声の主は、ちょうどエリスの正面に立つ、顔の下半分がヒゲで埋まった男だった。年齢は恐らく三十を越えたほどで、肥満に見えるくらいの筋肉をたくわえている。身長も高く、手にする斧も他の者と比べて大きかった。

「半分たぁ、ずいぶんお優しいこったな。身ぐるみはいでいかねーのか？」

とエリス。ヒゲ面の男は、さも当たり前と言いたげに答えた。

「オレたちは『モンスター』とは違うからな。同じ人間にそんなむごいマネはしねぇ」

「……よくも言う」

「盗っ人猛々しいとはこのことね」

横目で聞くレクトとアリーシェが不快感をあらわにした。冗談だとしても、聞くに堪えない。

「さぁ、痛い目を見るか大人しく従うか、さっさと選べ」

男が選択を迫る。

「痛い目見るのはてめーらのほうだよ！」

これが答えとばかりに、エリスは手に持つ剣を頭上に掲げた。ちなみにそれは、ラドニスとの模擬戦で使う木製の剣である。

「エーツェル騎士団、いざ出陣んんっ！」

そしてウッドブレードを振り下ろしながら、自身も正面へ向かって突撃していった。

それに呼応するように周りの皆も動き出す。

「だから勝手に名付けないでってーっ！」
パルヴィーのツッコミだけが、その場に取り残された。

「逆らう気か」
エリスたちの反応を見て取り、賊たちも威勢良く襲いかかった。
「お前ら、目にもの見せてやれ！」
まとめ役らしいヒゲ面の男が号令をかけるが、すでにそれをかき消すほどの喧騒がその場に渦巻いていた。
のどかな山景はいそいそと姿をひそめてしまっている。
「てめぇが頭か！？」
エリスは一直線に、ヒゲ面の男へと急進した。
彼女の持つウッドブレードを目にし、男は短くあざ笑う。
「恨むなよ、嬢ちゃん！」
そして大きな斧を振りかぶり、エリスめがけて振り下ろした。
腕力と武器の重量がタンデムを組み、振り下ろされる速度は電光石火に迫る。しかしエリスには、それがとてもゆっくりに思えてしまった。
「やっぱりな」
斧が地面を砕く。厚い刃は、エリスの影すらをも捕らえられなかった。
男ははっとした表情で天を見る。
「やっぱりてめぇらなんぞっ！」
目を見張る男の顔面に、声と陰が落ちた。
「敵じゃねぇっ！」
頭上から叩き込まれた猛烈なひと振り。男は、そのたった一撃で昏倒させられてしまった。
エリスは猫のように身軽に、スタリと着地する。
やはり『モンスター』に慣れきった体からすれば、人間など大した脅威ではない。

それはエリスだけでなく、他の皆も少なからず思っていた。
普段が死線をさまよう戦いなのに対し、今は相手を殺さないよう手加減する余裕すらある。『モンスター』相手では考えられないことだった。
だが……と、レクトなどは、それを少し不安にも思っていた。
『モンスター』と比べて人間はかくも弱い生物だ。そして自分たちもまた、その人間なのである。
放った矢が、名前も知らない男の片足を斬り裂いた。

勝敗が決するのは驚くほど早かった。最初は十六人いた賊たちも、今はもう五人にまで減っている。残りは気絶させられたり急所を外した傷をつけられたりして、無念にも地面に倒れていた。
「なっ、なんだこいつら……!?」
賊のひとりである若い男が愕然と呟く。
今まで襲った奴らの中にも、当然抵抗してきた者はいる。町の連中が束になってかかってきたこともある。しかしそのどれをも、自分たちは蹴散らしてきたはずだ。
この無様な状況はなんだ!?　どうなってる!?
「おいっ!」
と、仲間のひとりが彼のもとへと駆け寄ってきた。
「アニキを呼んできてくれ!」
「えっ……!?」
その言葉に、彼は息を呑む。生まれるためらい。しかしすぐさま、考えを改めた。
たしかに、もはやそれしかない。醜態を見せることになってしまうが、こうなってはもう、頼れるのはひとりしかいないのだ。
なりふりを構っている場合では、ない。
「誰を呼んでくると?」
その時、不意打ちのように女の声がかけられた。
「!」

「!?」
同時に飛来した二条の光が、ふたりの体を貫いていく。

倒れている男たちの腕をロープで縛る。十六人ともなれば、ちょっとした重労働であった。
「ヒーリングシェア!」
縛り終えたのち、負傷のある者には最低限の『治癒術』を施していく。全員分が終わる頃には、気を失っていた者もすっかり目を覚ましていた。
「で、こいつらを町まで連れてきゃいいんだよな?」
エリスはヒタイの汗を腕で拭い、ひと息つく。
いまいち物足りない幕切れではあったが、これで大金とあの剣が手に入ると考えれば悪い話ではないだろう。
男たちは暴れるでも罵詈雑言を吐くでもなく、大人しく座り込んでいた。
圧倒的な力の差を見せつけられ、なおかつ傷の治癒までされては、ぐうの音も出ないのだろうか。
「まだ他にも仲間がいるはずよ」
すっかり終わり気分でいたエリスの横から、アリーシェが口を挟んだ。
「そうでしょう?」
アリーシェは男たちをずらりと睥睨する。質問は彼らに向けて投げられたが、返答は得られなかった。
じっとりとした沈黙が場に広がる。
「……お前らなんか、アニキがいりゃ返り討ちだったってのに」
それを破ったのは、若い男の愚痴だった。
「……まったくだぜ。たかだかオレたちをやったくらいでいい気になりやがって」
「偉そうな顔すんのはアニキに勝ってからにしろ!」

「そうだそうだ！」
それがきっかけとなったか、男たちは次々と言葉を吐き出し始めた。
内容は微妙に情けなかったが。
「アニキ……？」
とレクトが疑問符を顔に浮かべる。
「誰だよ？」
エリスの問いに、一番近くにいた男が恨みごとを言うように答えた。
「オレたちの頭だ。あの人にかかりゃぁお前らなんかまとめてポイだぜ！」
やはりまだ他にも仲間はいるようだ。
「頭って……こいつじゃないのか？」
エリスは自分が真っ先に倒した、ヒゲ面の男を指差した。たしかに見た目のイメージからするとそれっぽくはあるが。
「……」
彼は彼で、むっすりと黙りこくったままだった。
「まぁいいか。じゃぁてめーら、そいつんところに案内しろよ」
エリスの要求に、男たちは再び騒ぎ始める。
「バカかよ。頭を売れってのか！」
「いや待て、アニキがこいつらを叩きのめしゃぁ結果オーライだぜ」
「いくらアニキでも、オレらを人質に取られたら身動き取れねぇんじゃねぇか！？」
「人質だと！？　こいつら卑怯なマネを！」
なにやら彼ら同士でも意見が割れているようである。が、なんにせよやかましいことこの上なかった。
「うるせぇぇーっ！　四の五の言ってねーでさっさと案内すりゃいいんだよっ！」
とエリスも持ち前の威勢を発揮するが、それでも彼らは一向に黙ろうとしなかった。荒くれ者の手法は同じ荒くれ者には通用しにく

いのだろうか。
いよいよ対処に困りかけた、そんな時。
「よしやがれ野郎共！」
と野太く一喝したのは、例のヒゲ面の男だった。

第三章（7）

男たちが一転して、水を打ったように静まり返る。
「お前らの知ってるザット・ラッドは、こんな奴らにやられるほど情けない男か！？　違うだろ。騒げば騒ぐだけアニキの名を落とすってことがわからねぇか！」
トップではないにしろ、彼も一団の中でそれなりの地位についているのだろう。皆、彼の言葉を黙って聞いている。
「必ずオレたちの仇は取ってくれる。だから無用な心配はするな！」
みたび、男たちから声が上がった。だがそれは先ほどまでの雑然としたものではなく、ある種の団結力を伴った声だった。
アニキと呼ばれる彼らの頭。ザット・ラッドというのがその名前だろうか。こうまで信頼されているということは、ひとかどの者であるのは間違いない。
「望み通り案内してやる」
皆の様子を見て取ったあと、ヒゲ面の男はエリスに向き直った。

指針は決まっている。捕獲すべき山賊がまだ残っているのだから、それらを捕らえに再び山を進む。案内役もいるので、その者を信じるなら、リーダー格のところへは手早くたどりつけるだろう。
決まっていないのは手段のほうだった。
「……どうすんだ？」
エリスたちは今、捕らえた賊を眺めながら作戦タイムの真っ最中である。
議題を彼らの処遇についてだ。
このまま十人超の人間をぞろぞろと引き連れて山道を登るのは、正直言って厳しいものがある。
だからと言って、ここに置いていくのもまずい。見張りを残さな

ければならないし、そのまま夜になってしまったら面倒のことになるのは目に見えている。
ということは。選ぶ道は絞られてくる。
「案内役だけ残して、あとは町へ連れて行く」
消去法で弾き出した答えを、代表するようにレクトが口にした。
異論は出ない。
次に決めるのは誰が連れて行くかであるが、これは即座に名乗り出る者がいた。
「私がひとりで連れて行くわ」
アリーシェである。ひとりという部分に懸念の声が上がったが、
「まさか全員で戻るわけにはいかないでしょう？」
というひとことに丸め込まれてしまった。
「戦力は多いほうがいいわ。私は大丈夫よ」
山賊たちがあと何人残っているのか定かではない。たしかに、頭数は多いに越したことはないだろうが。
それでもひとりで彼らを連行しようというのは、彼女らしからぬ少々無茶な行動に思えた。

◆

アリーシェを除いた五人と、荷物を載せた馬一頭、そして案内役として選出したヒゲ面の男が山を奥へ奥へと進んでいく。
無論ロープで腕を縛ったままだ。
「……あんたら、町の奴らか？」
男が訊ねる。
「まぁ、そんなとこだな。そいつらに頼まれたんだよ」
答えたのはエリスだった。他の者は、大なり小なり話もしたくないと言いたげな表情を浮かべている。
「で、どこにいるんだ？　そのアニキって奴は」
今度はエリスが訊ねる。男は礼とばかりに、「もう少しだ」と素

直に答えた。
「……ホントに大丈夫かな。アリーシェ様」
その後方で、パルヴィーが不安げな呟きをもらした。
なんとなく言いくるめられてしまったが、よくよく考えると心配である。同じ『ひとり』なら、ラドニスに任せたほうがよかったのではなかろうか。
「本人が大丈夫だと言ったのだ。心配はない」
と、そのラドニスが彼女をなぐさめた。年長者特有の包容力のある声が、パルヴィーの不安をほんの少しだけやわらげた。
「……そうだね」

そんなパルヴィーの心配をよそに。アリーシェ一行は、すこぶる順調に下山の道を歩んでいた。
ロープで腕を縛られた男たちが、さらにもう一本のロープでビーズアクセサリーのようにつながれている。先頭でロープの端を握っているのは、無論アリーシェだ。
歩を進めるたびに、彼女の心は幾分か軽くなっていった。
皆には言わなかったが、なるべくならこの一件から手を引きたかったのである。
実際に対峙してみて、ようやく実感した。やはり自分の剣は『モンスター』を斬るためにある。悪しき血を流し尽くすためにある。
命を奪わないとはいっても、人間を斬るのは良い気分ではない。たとえ悪人だとしてもだ。
我慢して付き合おうとも思っていたが、都合良くチャンスがめぐってきた。
自分がいなくとも、彼らなら充分に任をまっとうしてくれるだろう。
任せておけば安心だ、と。

やがてしばらく下った頃。男たちのあいだから、小さな呟きがもれた。
「なぁ……逃げれるんじゃね？」
力の差をまのあたりにしてすっかり逆らう気力をなくしていたが、よく考えたら相手は今ひとりなのである。
縛られているとはいえ、大の男が十五人だ。全員がその気になれば女ひとりくらい造作もないはず。
生まれた提案は、水面に浮かぶ波紋のように広がっていく。
「……」
小声でその計画を立てる男たち。
それが聞こえたのか、もしくは最初から想定のうちだったのか、アリーシェは歩きながらするりと剣を引き抜いた。
銀色の刃が、日の光を反射して美しくきらめく。
「……ロックブレイド」
彼女が言葉を唱えると、一行の真横の地面から、まるで巨大な刃のような岩が勢い良く隆起した。
何本もの木が、まっぷたつに両断される。まるで小枝のようにたやすく。
「……！？」
男たちのあいだに戦慄が走った。先ほどの戦いでは、あんな殺傷力の高そうな『魔術』など見かけなかったはずだ。
アリーシェは振り返ることも、声をかけることもしない。無言の圧力。背中から放たれるプレッシャー。
男たちは完全に、その威圧に飲み込まれてしまっていた。
その後なにごともなく町まで下りられたのは、言うまでもない。

なおも山の奥深くへと進んでいくエリスたち。
その時不意に、前方の茂みがガサリと揺れた。はっとして身構える一同。

茂みから姿をあらわしたのは、ひとりの若い男だった。
背格好からすると賊たちの仲間だろうか。
「……」
男は、エリスたちと縛られたヒゲ面の男とをじろじろと眺めながら、ゆっくりと近寄ってくる。
「……なにがあった？　ダドリー」
そして険しい表情で訊ねた。どうやらダドリーというのが、このヒゲ面の名前らしい。
「町から来た奴らだ。他の連中も捕まった」
「なんだって！？」
ダドリーの説明を聞き、男はますます顔を険しくしてエリスたちをにらみつけた。
が、にらむだけで、これといった行動は起こさない。やはりこのダドリーが縛られている手前、滅多なことはできないということだろうか。
「こいつらはアニキに会いたいそうだ。今どこにいる？」
「アニキか……」
ダドリーに訊ねられたからか、その名前が出たからか。男の顔が、ほんの少しだけやわらかくなった。
「今は、風呂に入ってるところだが」

◆

岩に囲まれたくぼみから白い湯気がもくもくと上がり、辺りを霧のように包んでいる。
地中から湧き出た温泉が溜まり、天然の露天風呂と化しているのだ。入浴するのはもっぱら山に住まう動物たちであるが、たまに人間が利用することもある。
そこに今、十数匹ものサルと共に、ひとりの男がつかっていた。
伸ばしていると言うよりも伸び放題な髪の毛に、しなやかに鍛え

られた肉体。周りを囲むサルたちは、まるで彼を仲間だと認めているかのようになついている様子だった。
「アニキーっ！」
そこへ、彼の手下が慌ただしく駆けてくる。
途端にサルたちは湯から上がり、逃げるようにその場から去っていってしまった。
「……なんでい？　騒々しい」
後頭部から返ってきた声は、意外にも若い。
「それが……」
「てめーがこいつらの頭か？」
手下の声を押しのけて、エリスがずうずうしくも問いかけた。
聞き覚えのない声の出現に、彼は怪訝そうに振り返る。
「なにもんだ？」
その顔は、声にたがわず若いものだった。
二十代。いや、十代の終わりといっても通用するかもしれない。
彼を『アニキ』と呼ぶほとんどの男が、彼よりも年上ではなかろうか。
「聞いたのはこっちが先だろ」
とエリスが返す。
彼はゆったりと湯につかったまま、エリスたち五人と、縛られているダドリーと、最初に駆けつけた男を順に見ていった。
「かたじけねぇ、アニキ」
ダドリーが、おおよそのいきさつを説明する。
「……そうかい。うちのもんが世話になったみたいだな」
それを聞き終え、彼は勢い良くバシャリと湯の中から立ち上がった。
「たしかにオレが、こいつらの頭のザット・ラッドだ」
「にゃぁぁぁぁぁーーっ！！」
しかしその自己紹介は、パルヴィーの超音波のような悲鳴によって、後半がかき消されてしまった。

ザット・ラッドは、全裸だったのだ。
まぁ温泉に入っていたのだから当たり前なのだが。
「……オレがこいつらの頭、ザット・ラッドだ！」
聞こえていなかっただろうと踏み、ザットは名乗りをやり直した。
その立ち姿は、非常に凛々しく堂々としたものだった。たくましい肉体はまるで彫刻のような美しさと力強さにみなぎっている。
裸でなにが悪い、と言わんばかりの佇まいだ。
だがせめて、最低限一カ所だけは悪く思ってほしいパルヴィーであった。
「あたしはこいつらの頭の、エリス・エーツェルだ！」
心身共に威風堂々としたザットに負けじと、エリスもズバッと威勢良く名乗り返した。
「勝手に頭にならないでよっ！　ってゆーかなんで平然としてんのーっ！？」
パルヴィーは顔を真っ赤にしつつも、聞き逃さずにツッコミを入れる。
彼女らふたりは同年代のはずだが、この反応の違いはいったいなんなのだろうか。エリスはどこで、道を間違ってしまったのだろうか。
「お前、意外と純情なんだな」
と冷静に分析するエリス。いつぞやは夜這いを仕掛けようとした奴とは思えないほど乙女なリアクションである。
パルヴィーは恥ずかしさと、やるせない怒りと、行き場のないもどかしさを平手に込め、何故かリフィクの顔面へと叩きつけた。
「ていっ！」
「なんで僕っ！？」
まっとうな疑問を残しながら、リフィクはその場にくずおれた。
「うちのもんを人質に、このオレを捕らえようって魂胆か？」
ザットは眼光鋭く、エリスたちをにらみつける。全裸で。

パルヴィーなどは、完全に彼へ背を向けてしまっていた。
「ばーか、人質になんかするかよ」
エリスは縛られているダドリーを見せつけるように蹴りつけ、自分たちから遠ざける。
「けどてめーらをひっ捕まえにきたのは当たりだ。面倒なことはごめんだから、ここはいっちょ手っ取り早くいこうぜ」
ザットは「ほう」と続きを聞く。
「こっちとてめーで一対一の勝負するんだ。こっちが勝ったら、てめーは残ってる手下共をまとめて、大人しく捕まる。頭ならそれくらいやれるだろ？」
要は決闘ということである。
「オレが勝ったらどうなるんだ？」
「勝たねーからいいんだよ」
はっはっはっ、とザットから笑いがこぼれた。あざ笑っているとも、挑戦的とも取れる笑いだった。
「いいぜ。ついてこいよ」
ザットは温泉から上がり、そのまま奥へと歩いていく。全裸で。

どうやら話は受け入れられたようだ。
彼のあとを追おうとする、その前に。不意にエリスが、半笑いの表情をレクトに向けた。
「……負けてたな」
「なっ、なにがだ……？」
声が上ずるレクト。
「ねぇー、もういーいー？」
背中を向けてなおかつ顔までふさいでいたパルヴィーが、誰にでもなく問いかけた。

第三章（8）

場所は変わって、木々が刈り取られた小広い空間。傾斜もほぼないその一画に、いくつもの人影が集まっていた。

一方はエリスたち五人。もう一方は、ザット・ラッドを始めとした野性味あふれる男たちである。

両者が、一定の距離を置いて向かい合っていた。

ザットは毛皮をポンチョのようにかぶり、腰巻きを巻いただけという軽装。武器や防具のたぐいは見えない。背後に控える手下たちは、おおよそ十人くらいはいるだろうか。ちなみにダドリーもすでに縄を解かれてあちらの陣営に加わっている。

「まだけっこう残ってたんですね」

高まる緊張に、リフィクが生唾を飲み込む。

とはいえ先ほど戦った人数よりは少ない。もし総力戦になったとしても、おくれを取るようなことはないはずだ。

「こっちが勝ったら、全員ガン首そろえてお縄につく。二言はねぇな？」

エリスが念を押す。ザットは大きくうなずいてみせた。

「間違いねぇ。その代わりオレが勝ったら、てめぇらが捕らえてる他の奴らを解放してもらう」

「残念だが、今頃はもう町の牢の中だ」

と、レクトが答える。

そう答えるがわかっていたかのように即座に、ザットは言葉を続けた。

「そっから解放してこいっつう話だよ」

つまり脱獄を手伝えということだろうか。そんなことをすれば、まず間違いなくお尋ね者である。『モンスター』と戦っている場合ではなくなってしまう。

とはいえ彼らも自身の行く末がかかっているため、条件としては対等なのかもしれないが。
「いいぞ」
エリスはあっさりと、その条件を飲んでしまった。
「いいの？」
一応確認するパルヴィー。
「負けねーから心配すんな」
エリスは杞憂だと軽く笑い飛ばして、さも当然のように前へと進み出た。その手にはウッドブレードが握られている。
「さっ、始めようぜ」
「……なんだと？」
その様子を見て、ザットは不愉快そうに片眉を上げた。
「まさか、お前がオレの相手をするつもりじゃないだろうな」
「見てわかんねぇか？」
「ふざけるなっ！　そこの男を出せ」
ザットは一喝して、ラドニスを指差した。パッと見た感じ一番強そうな彼を指す辺り、腕には相当の自信があるのだろう。
「なんだよ、あたしじゃ不満だってのか！？」
「いきがったところで所詮は女だ。話にもならねぇ」
眼中にないと断言され、エリスの堪忍袋の緒が紙のようにあっさり千切れ飛んだ。
「上等だっ！」
有無を言わさず突撃する。口よりもまず、腕ずくで思い知らせてやろうということだろう。いつもと同じだ。
やれやれと言いたげに、どっしりと待ち構えるザット。
ウッドブレードが振り下ろされる寸前、彼は後方へ跳んだ。そして右の拳を固めて引く。
エリスはまだ剣を振り終わった体勢。スキがある。
そこめがけて踏み込み、ザットは右ストレートをうち放った。
避けられる距離ではない。

しかしエリスは剣を振った勢いを利用して、そのまま足元へでんぐり返った。
「！？」
空を裂く拳。エリスは、彼の狙いの左下にいる。
「ぜやぁぁっ！」
エリスはしゃがんだ体勢から跳ね上がりながら、ウッドブレードをザットのアゴ下へと叩き込んだ。
「ぐっ……！」
うめき声が口から出ていかない。衝撃は一直線に脳を貫き、彼の視界を揺さぶった。
「どうだっ！」
してやったりと、勝ち誇るエリス。今のはかなりの手応えがあった。もし真剣だったなら、一撃で勝負がついていただろう。
「……所詮女と言ったのは、取り消す……」
ザットは頭を押さえながらフラフラと踊る。あれで倒れなかったのは驚嘆すべきところだろう。
「……今ので、オレの油断は消え去った……」
だが、効いているのはたしかだ。もはやまっすぐ立ってもいられなくなっている。
「……ダドリー！」
泥酔したかのように足元がおぼつかないザットが、嘔吐するように手下を呼んだ。
「へい」
エリスたちも顔なじみの、ヒゲ面の男が前に出る。
「オレは殴れっ！」
「へい！」
ダドリーの迷いのない右ストレートが、ザットの顔面にぶちかまされる。痛烈な音を響かせながら、ザットは地面に倒れ込んだ。
「……もうわたしたちの勝ちでいいんじゃない？」
パルヴィーが呟く。

「ダァドォリィィィッ！！」
それが聞こえたわけでもないだろうが、ザットは叫びながら、飛び立ちそうな勢いで起き上がった。
「面倒をかけたなぁぁっ！」
大仰に礼を言い、ダドリーを下がらせる。立ち上がった彼は、ものの見事に復活していた。
むちゃくちゃな復活方法である。
だが復活どころか、先ほどよりも覇気が増しているようにさえ思えた。
「お前にもだっ！　女！」
ビシッと音が出そうな迫力で、エリスは指差す。
「おうおう、天下のエリス・エーツェルを『女』呼ばわりとは、まだわかってねぇみたいだな」
「なんでもいいっ！　見くびった詫びに、オレの本気を見せてやる。だからお前も、そんなオモチャじゃなくちゃんとしたモンを持て！」
オモチャとは、このウッドブレードのことを指しているのだろうか。ということは、ちゃんとしたものとは真剣のことであろう。
「負けたあとで、武器のせいにされてはたまらんからな」
「するか、そんなこと！　けどまぁ、それが望みなら変えてやってもいい。後悔すんなよ」
相手の望み通りのことをした上で勝てば、ただ勝つよりも『勝った感』が増す。なんとなくそんな気がしたので、エリスはそれを快く引き受けた。
双方が、仲間のもとへと踵を返す。

「持ってろ」
エリスはウッドブレードを、それが子分の役目とばかりにリフィクへ投げ渡す。
「借りるぞ」
そしてパルヴィーの腰元から、ひょいっとショートソードを抜き

取った。
「ちょっと！」
当然のごとく彼女からは抗議が飛んでくるが、
「借りるくらいいいだろっ」
というひとことだけで済ませてしまった。
「貸してもらえないか？」
そんなエリスの代わりに、レクトが折り目正しく頼み込む。
「……いいけど」
彼に言われてしまったら、パルヴィーとしても断わりにくいようだった。
「ありがとう」
そしてレクトは、エリスに向き直って一応の忠告を口にする。
「あの技は使うなよ」
人間相手に『オーバーフレア』を使えば、致命傷は免れられない。条件が条件とはいえ、殺してしまっては意味がない。
「わかってんよ」
当のエリスからは、本当にわかっているのかどうか怪しい返事が返ってきた。

「意外と軽いんだな、これ」
エリスはショートソードの握り心地へ確かめながら、もとの位置へと舞い戻る。するとザット・ラッドも、本気を出す準備とやらを終えたようだった。
先ほどとは違い、両腕と両足にだけ金属製の防具を装着している。プレートアーマーでいうところの籠手とブーツに似ているだろうか。
ザットは防具で覆われた拳同士をぶつけながら、気迫充分といった感じでエリスに正対する。
「今のオレに油断はない」
「それつけたら、なんか変わるのか？」
「やればわかる」

「じゃあやるか」
エリスはショートソードを、両手で握って正面に構える。普段使っているものよりだいぶ短くて軽いが、使っているうちに慣れるだろうと、相変わらず楽観的であった。
両者構えたまま、一瞬二瞬とにらみ合う。
先に動いたのはエリスだった。地を蹴り疾駆し、真正面から突き進む。
一拍遅れてザットも直進していた。互いに向かったふたりが、その中間点で衝突する。
剣を振り下ろすエリス。右腕を突き出すザット。
だがザットの狙いはエリス本体ではなく、彼女の振る剣に定められていた。
刃に対してななめ方向に拳が入る。ショートソードは腕具の表面を滑り、その軌道を曲げられてしまった。
「!?」
瞬間、息を呑むエリス。まっすぐ振り下ろしたはずの剣は、しかし袈裟斬りの軌道でなにもない空間を斬っている。
至近距離でのこのスキは命取りだ。
すでにザットは左腕を引き絞っている。エリスの無防備な上体めがけて。
そこでエリスは、腕を振った勢いに身を任せて、そのまま前方へと飛び込んだ。先ほど彼へ直撃を与えた時と同じ、あの動きである。
ザットの左拳が、影だけを打つ。
だが彼も先の失態を忘れたわけではない。目はしっかりと、影のその先を捕らえていた。
刹那のインターバル。そこからの第二撃は、どちらも放てば当たるタイミングだ。まさに早いもの勝ちという状況である。
わずかな差で出足を制したのは、エリスのほうだった。
でんぐり返るや否や、体を風見鶏のように回転させ、ショートソードを振り上げる。

それは見事に、ザットの胴体を斬り裂いた……はずだった。
「……」
エリスは、我ながらにして呆気に取られる。手応えがない。ザットも一瞬、目を見張っていた。
避けられたわけではない。狙いを外したわけでもない。完璧な一撃だった。
だったのだが、ザットの体は、切っ先のわずか向こう側にあった。剣が短くて、ほんの少しだけ届かなかったのだ！
うっかりすぎるミスである。
「……やっちまった」
呟くエリスの脇腹に、ザットの猛烈な蹴りが打ち込まれた。

「バカだ」
まるで小石のように蹴り飛ばされて地面を転がったエリスを眺め、パルヴィーは心の声をそのまま口にした。
「ねぇバカのせいで、わたしたち悪の手先にならなきゃいけなくなったみたいなんだけど」
そして仲間たちを見やる。
今の蹴りは、間違いなく直撃だったはずだ。事実地面に倒れたまま、エリスは動かない。
沈黙する四人とは対照的に、賊たちはおおいに沸いている様子だった。もう勝負がついたかのような盛況ぶりである。
ザットも同様だった。
「全員相手にしてやってもいいぞ！」
すでにエリスなど眼中になさげに、四人に向かって叫ぶ。
「ああ言ってることだし、ルール変更させてもらおっか？」
と軽口を叩くパルヴィーの横で、レクトが彼へと言い返した。
「油断はないんじゃなかったのか？」
言葉の意図を察したのか、ザットはエリスへ視線を戻す。少し目を離したスキに、彼女は起き上がっていた。

「立つか」
ザットの声には感心のニュアンスが含まれていた。
エリスは口から垂れる血を拭い、剣を構え直す。
「慌てんなよ。これでおあいこだ」
たしかに双方共に、一発ずつ打撃を食らっている。だがどう見ても、エリスのほうがダメージが重そうだった。
「どうやら女といっても、オレの知ってるのとは少し違うみたいだな」
好戦的に笑うザット。そして勝負は再開される。
それぞれ相手の出方を見たからか、今度はどちらも、そうそう直撃を許さなかった。

◆

ザットの手下たちは、全員が全員、ふたりの勝負を観戦しているわけではなかった。
日頃と同じく山中に散らばり、『獲物』が探している者も何人かいる。
「……！？」
そのうちのひとりが、驚いて顔を青ざめさせていた。
見てしまったからだ。
連なる木々の向こう側。しばし距離を隔てたところを歩く、人ならざる者たちの、その姿を。
黒い体毛に長く尖った口元。のぞく牙。鋭い目。三角の耳がピンと立ったその容姿は、どことなく狼を連想させる。
それが三体。
「……『モンスター』……！？」
もらした声は、ため息よりも小さい。
だがまるでそれを聞き取ったかのように、『モンスター』は男と目を合わせた。

第三章（9）

エリスとザットの戦いは、表面上は互角の様相を呈していた。
最初の一撃以降は、どちらも直撃は受けていない。
剣を持ってるぶんだけエリスに攻めの利があるが、腕と足の防具がザットに守りの利を与えている。筋力的にはザットが勝っているが、反射神経はエリスが一枚上手といったところだった。
今の時点では一進一退を繰り返している。
だがこのまま局面が進めば、まず間違いなくエリスが劣勢になるだろうとラドニスは分析していた。
やはり体力の差だ。男と女の絶対的な体格差が、時間が経つほど如実に現れてくる。
とはいえ大抵の男が相手なら、そうなる前に倒せる実力を彼女は秘めているはずだ。目をつけるべきはザット・ラッド。
ラドニスは、彼の腕前に高く評価していた。
エリスの腕のほどは、少し前から始めた稽古で把握している。この戦いでの動きも悪くない。
なのに勝負がついていないということは、彼の腕前が優れている証だろう。
抜きん出ている。他の賊たちとは一線も二線をも画している。
まだ若い彼が年長揃いの男たちの中で頭と認められているのも、この腕っぷしなら頷ける話だ。
「やはり生命線はあの技か」
ぽつりと呟くラドニス。『オーバーフレア』を取ってしまったら、彼女はただ威勢が良いだけの少女に過ぎない。だからこそ、基礎から地力を鍛える必要があったのだ。
「……負けだな」

均衡が崩れたのは突然だった。
「はぁぁっ！」
ザットが裂帛の気合いと共に、右の拳をうち放つ。
その一撃が、エリスの手からショートソードを弾き飛ばしたのだ。
間髪を入れずに、ザットは回し蹴りを繰り出す。それはものの見事にエリスの側頭をとらえ、彼女の体を地面に沈ませた。
男たちから歓声が上がる。
ザットは勝ち誇った表情で、のろのろと起き上がる彼女を見下ろしていた。
「女だてらによくやったが、もういいだろう。お前の負けだ」
きっぱりと勝利宣言をする。しかしエリスは、ちゃんちゃらおかしいと言いたげに口角を持ち上げてみせた。
「まだ途中だろうが。なんでそんなことがわかんだよ」
「オレの蹴りが効いていないはずはない。それにもう武器もない。どうやって戦うつもりだ？」
ザットでなくとも明白だろう。エリス本人の態度とは裏腹に、立ち姿は押せば倒れてしまいそうなほど消耗しているのだ。
「アホか。あたしが剣を拾いにいきゃぁいいだけの話だろ。なんなら、素手でやってもいい」
強がりにしか聞こえないセリフに、ザットは小さくため息を吐いた。
「わからねぇなら、わからせてやるしかねぇみたいだな」
そして彼は両拳を握り、攻撃の構えを取る。
「その体に！」
トドメを刺すつもりだろう。ダウンさせてしまえば文句なしの勝利である。是非もない。
エリスは黙って相手をにらみつける。
ザットは息を吸って攻撃の準備を整える。
一秒後には拳が繰り出されていたであろう、そんな瞬間。

その場に、乱入者が飛び込んできた。

「アニキーっ！！」

息せき切らせて、ザットの仲間らしき男が走ってくる。

彼は勝負のことなどまるで無視して、向かい合うふたりのすぐそばまで駆け寄ってきた。

「アニキ！」

「勝負の最中になに考えてやがるてめぇぇっ！」

ザットは攻撃の構えを解いて、その手下を激しく叱りつけた。仲間内からもブーイングが上がる。

しかし彼は、それにも構わず言い募った。

「そんな場合じゃねぇんだよアニキ！　奴らがっ……！」

彼の様子はただごとではない。それに気付いたザットの脳裏に、瞬時にとある想像が浮かび上がった。

そしてそれは、現実のものとなる。

「『モンスター』がっ！」

その報せが耳に入り、賊たちのあいだが一気に騒然となった。勝負の興奮とは違う、戸惑いのうずまくどよめきである。

当然それは、対面のギャラリーにも聞こえていた。

「なんだと……！」

息を呑むレクト。町の平和な様子に触れていたせいか、完全に油断してしまっていたのだ。動揺が隠せない。

「武器を取れ！」

アリーシェの代わりとばかりに、ラドニスが鋭く喝を飛ばす。

その声に頬をひっぱたかれたように、一同は揃って動き始めた。

「わたしのはーっ！？」

パルヴィーはどこかへ蹴り飛ばされてしまったショートソードを、急いで捜索し始めた。

「くそっ！　なんで奴らが来やがる……！」
歯を食いしばって悔しがるザット。
「ヒーリングシェア！」
その横では、駆けつけたリフィクがエリスへ『治癒術』を施している。
それが終わるや否や、彼女はリフィクの頭をペチンと叩いた。
「お前もかよっ！　勝負の最中に入ってきやがって！」
「えぇー！？」
理不尽な暴力に驚きの声を上げるリフィク。
『モンスター』の出現に傷ついたままではまずいと思い、治療をしにここまで走ってきたのだ。どう考えても自然な流れ。むしろ礼こそ言われても、叱責されるいわれはないはずである。
「なにが勝負だ。そんな場合じゃねぇだろうが」
そのやり取りが耳に入ったのか、低くぼやくザット。そのあと、戸惑う仲間たちを一喝した。
「落ち着け、お前ら！　あわててたって始まんねぇだろ！」
「どっ、どうする？　アニキっ……」
「どうもこうもねぇ。みんな集めて、アジトの荷物まとめて逃げる準備だ！　早くしねぇと逃げ切れなくなる！」
「わかった！」
報せを持ってきた男が、指示を受けて弾かれたように走り出す。
「ちょっと待てぇぇいっ！」
がその矢先、エリスが彼を呼び止めた。男は思わず転びそうになってしまう。
「なっ、なんだ……？」
「奴らはどこにいんだ？」
詰め寄りながら訊ねる。
「……俺が聞いたのは、あっちだ。三体くらいいたらしいが……」
指差された方角を見ながら、エリスはニヤリとほくそ笑んだ。
「よし、行っていいぞ」

そしてザットに振り返る。
「倒してきたら続きやるからな」
「……なんだと？」
疑問顔の彼には取り合わず、エリスはさっさと仲間のほうへと走っていってしまった。

エリスを追うべく走り出すリフィク。
その腕を、ザットがつかみ取った。
「おい待て！」
「ひぃぃっ！」
まるで少女のようなか細い悲鳴が上がる。びびりすぎだ。
「あの女の言葉、どういう意味だ？」
そんな情けない反応には構わず、詰め寄るザット。質問の意味が汲み取れなかったのか、リフィクは数秒ほどきょとんとした。
「言葉の通りだと、思いますけど……」
腕を握る力が、ギリッと強くなる。言葉を聞いてわからないからわざわざ訊ねているのだ、と。リフィクは今度は、その内心を汲み取れた。
「その……『モンスター』を倒しにいって、そのあとでまた、あなたと戦うつもりでおられるのだと……」
というか訊ねるまでもなく、そうとしか聞こえなかったと思うのだが。
ザットの手の力がゆるむ。
リフィクはそのスキを見逃さず、罠から解かれた子鹿のように一目散に走り去った。
「……倒すだと……？　奴らを……？」
愕然と呟くザットだけが、取り残される。

「あったーっ！」
と歓喜の声を上げながら、パルヴィーが草むらの中から自分のシ

ョートソードを拾い上げた。
だが。
「さんきゅっ」
やっとの思いで探し出したそれを、エリスが横からかすめ取ってしまった。

「返してよー！」
「だからまだ借りてる途中だってー」
そんなことを言い合いながら、パルヴィーとエリスが追いかけっこをする。危機感のなさは、さすがである。
そうこうしているうちに、レクト、ラドニス、リフィクが合流するべくやってきた。
レクトは弓を、ラドニスは大斧を、それぞれ手にしている。
「あっちだってよ」
エリスが、先ほど聞いた方向を指差す。その背後では、パルヴィーが不満そうに頬をふくらませていた。
「体力は大丈夫か？」
ラドニスが確認を取る。途中だったとはいえ、一戦していたエリスだ。さすがに万全というわけにはいかないはずである。
「元気印のハナマルよ！」
言葉の意味はよくわからないが、まぁ大丈夫ということだろうか。
そうラドニスは受け取り、気を引き締めるべく号令をかけた。
「では行くぞ」

◆

「妙なところだな」
山林に佇む、三つの巨大な影。その左側に立つ一体が、訝しげに呟いた。
全身が黒く短い毛に覆われた、狼に似た顔立ち。胴体にはレザー

アーマーをつけ、腰にはブロードソードを下げている。
三体の容姿はほとんど同じであった。
「こう山奥にしては人間の気配が多い。村でもあるのか？」
三体の足元には、人間の男がひとり、血まみれで倒れていた。外見からするとザットの一味だろう。今しがた、彼らが仕留めたものだ。
「妙といえばこの匂いだろ。なんだこれは？」
「まるで鼻が利かないな。面倒なところに迷い込んじまったもんだ」
彼らが顔をしかめている原因は、地中から漏れ出る温泉の匂いである。人間からすれば気にならないような匂いでも、それをひどく嫌う種族が存在しているのだ。
特に嗅覚の優れた彼らからすれば、ことさら不快なはずである。
「鼻が利かないなら条件は同じだな。ゲームでもしないか？」
向かって右側に立つ『モンスター』が、嬉々としてそんな提案を口にした。
他の二体は、こんな時に？　と難しい顔をする。
「いつもと同じ要領さ。この山の中にいる人間を、誰が一番多く狩れるかってな」
すると真ん中に立つ『モンスター』が、呆れながら彼の肩を叩いた。
「おいおいなにが条件は同じだよ。この中で一番耳が良いのはてめぇじゃねぇかよ。普段勝てねぇからって、こんな状況で」
「ちっ、バレたか」
「まぁいいさ。鼻の悪いグンドラムにもたまには花を持たせてやろう。それにこんな状況だ、ゲームでもして気を紛らわすのもいい」
と、左に立つ奴が承諾する。それを聞き、「しょうがねぇな」と真ん中の奴も渋々うなずいた。
提案者である『モンスター』は、仲間の気が変わらないうちにと、いそいそと開始の合図をするのだった。
「それじゃあ、いくぞ！」

◆

ザット・ラッドを先頭とした集団が、草木のただなかを疾走している。

獣道にも近いかすかな道ではあったが、長らく山中で暮らしてきた彼らからすれば充分すぎるくらいの道であった。

彼らが目指しているのは、自分たちのアジトである。『モンスター』から逃げるため、皆一様に必死で走っているのだ。

だがザットだけは、他の者たちとは少し違う心境にその身を置いていた。

どこかうわの空。心ここにあらず。エリスの言葉が、どうしようもなく気になっているのだ。

『モンスター』といえば、強い者。凶悪な者。そして決して勝てない者だ。ずっと、そう思っていた。

だが彼女は倒すと言った。そいつらを。簡単なことのように。

それを聞いた瞬間、ザットの心に深い爪痕が刻みつけられた。それは刻々と痛みを増し、有無を言わさず存在を主張してくる。

……倒す？　倒せるのか？　しかも、たったあれだけの人数でか？　……無理だ。倒せるはずがない。

それは予想というよりも、彼の願望に近かった。

もし倒せてしまったら……自分はどうなるのだ？　勝てないとあきらめ、仇を取ろうともせず、逃げ、隠れ、恐怖していた今までの自分は、どうなってしまうのだ？

やられた皆にも、『おかしら』にも、いったいどんな顔を向ければいいのだ！？

「……」

ザットはいつのまにか歩調を落とし、ゆるやかに立ち止まっていた。

「どうした！？　アニキ」

後方から気遣いの声がかけられる。
「……ダドリー、あとは任せる」
が、ザットは背中でそれだけ告げたあと。振り向かずに、横道へと走っていってしまった。
「アニキっ！？」
男たちが口々に呼び止めるが、効果はない。
「ジョナス！」
後事を任されたダドリーが、ハッとして仲間のひとりを呼びつけた。
「アニキのあとを追ってくれ！　様子がおかしかった」
「わっ、わかりやしたっ……！」
任を受けたのは、ザットとほど近い年齢の青年。彼は急いで、消えた頭のあとを追いかけた。

第三章（10）

散開して『狩り』を始めた『モンスター』が、風のように緑のあいだを駆け抜けていた。
彼らの聴覚は、かなり広範囲に渡る空間の音を、漏らすことなく聞き取っている。そこから人間の発する音だけを抽出し、位置を絞り込むのだ。鼻が利けばさらに正確さが増すのだが、人間を相手にするぶんには充分だろう。
「近い！」
『モンスター』の一体が、走りながらほくそ笑む。他の者より先に、自分が獲物にありついたのだ。
人間の数は恐らく五つ。固まって一方向へ走っている。
感じ取ったのも束の間、すぐにそいつらの姿が見えてきた。
「一歩リードさせてもらうぜ」
そこにはいない仲間へ優越感を誇示しながら、彼は獲物めがけて足を速めた。

――その彼の気配が、消失する。
「グンドラム……？」
それを感じ取り、一体の『モンスター』が走る足を止めた。
獲物にいち早く飛びついたはずのグンドラムの、『音』が消えたのだ。どういうことだ？
だが彼が襲いかかったはずの人間たちの気配は、まだそこにある。
彼だけ感じ取ることができないのだ。
「どうなっている……？」
何が起きた？
「バルトロ？」
もうひとりの仲間もその異変に気付いたのか、気配が消えた場所

へと方向転換したのが伝わってきた。距離的には奴のほうが近いか。
「なにもなければいいが……」
念のためという思いで、彼もそこから踵を返した。

「アニキっ！」
林間をひた走るザットは、後方から自分を呼ぶ声を聞き、振り返った。
「ジュナス!?　なんでついてきやがった！」
「ダドリーのアニキに言われて……それにオレも心配で！」
「……あいつめ」
ザットは、顔に似合わず世話焼きな仲間へ小さく舌を打った。
「しょうがねぇ、ついてこい！」
今ひとりで戻らすのも心配だ。ならば自分と一緒にいたほうが、まだいくらか安心である。
返事をするジュナスを引き連れて、ザットは再び駆け出した。
動物たちも本能的に危険を察知したのか、鳥のさえずりが先ほどからピタリと聞こえなくなっている。
ふたりは網の目のように並ぶ木々を軽やかに避けながら、疾走する。
「どこに行こうってんです?」
「あいつらの様子を見に行く」
「あいつら……」
という言葉だけど、どうやらジュナスには伝わったようだった。
あの五人、と。
やがて木々のあいだに、彼らの姿を見つけることができた。
「いたっ……！」
近付くにつれ彼らの様子がはっきりわかってくる。彼らは、戦闘の真っ最中であった。
相手は一体の『モンスター』。狼に似た種族の奴だ。

「本当に戦っていやがった……！」
ザットはほどほどの距離で立ち止まり、食い入るようにその戦いを見た。
自分と戦った女と大男が前衛となり、あとの三人が弓矢や『魔術』で後衛をつとめている。『モンスター』の動きは素早いが、彼らが苦戦している様子は感じられなかった。
むしろ逆。圧倒していると言ってもいい。
「アニキ、あそこ！」
隣に立つジュナスが、なにかに気付いて指を差した。彼らから少し離れたところの地面。その先を見て、ザットも大きく目を見開いた。
今対峙しているのと同種の『モンスター』の死体が、ひとつそこに転がっていたのだ。
「……！」
ザットは言葉を失う。すでに一体、倒したあと？　あれは二体目だというのか……？
「やった！」
ジュナスがガッツポーズを決めるが、ザットは呆けたように無反応だった。
大男の大斧が、『モンスター』の背中をバッサリと斬り裂いたのだ。おびただしい量の紫の血が、周囲に飛散する。
かろうじて持ちこたえていた『モンスター』だったが、やがて力を失い、その場にドサリと倒れ込んだ。
決着、である。
「すげぇ、ホントに倒しやがった！」
ジュナスが、まるで自分のことのように喜ぶ。
ザットも内心ではそう叫びたい気持ちだった。だが心の中でくすぶるなにかが、その気持ちを強く押さえつけていた。
自分でもその『くすぶり』の正体がわからずにいる。心に霧がかかってしまったような状態だ。

故に。
背後から迫る巨大な影に、気が付くことができなかった。
「貴様ら、よくもっ……！」
頭上から、低い怒声が降り注ぐ。
「！？」
ザットは振り向くよりも先に、前方へと飛び出していた。ほとんど無意識による反応だったが、それが彼の命運を分ける。
背中越しに聞こえてきたのは、なにかが風を切る音。地面を砕く音。そして、
「ぐわぁぁぁっ！」
ジュナスの叫び声だった。
「ジュっ……！」
振り向いたザットは、目の前に広がる光景に愕然とする。
そびえ立つ狼型の『モンスター』。手に持つは赤く染まったブロードソード。そして奴の足元に、下半身が血まみれとなったジュナスが倒れていた。
「……！」
ザットの体は、まるで石のように硬直していた。
仲間の危機。すぐに助けなくてはならない。そう前進しようとする一方で、もうひとりの自分が手足を押さえつけていた。
行くな。やめろ。死ぬぞ。放って逃げろ。怖いんだろう？　あれはお前の敵う生物じゃない。
立ち向かおうとする自分と恐怖する自分。そのふたつがせめぎ合い、ザットの体を縛りつけていた。
だが時間は彼の葛藤など待ちはしない。
仲間をやられた怒りに目をむく『モンスター』は、眼下のジュナスをにらみつけた。まだ息があることに気付き、トドメを刺そうとする。
やめろ！　その声さえ出せない自分が、ザットは悔しくてたまらなかった。

ブロードソードが振り上げられる。
その時。
彼の真横を、なにかが素早く通り抜けていった。
ザットはハッと息を呑む。あの女？
『モンスター』へ直進するのは、ザットと戦ったあの少女。彼女の持つショートソードから、激しい火炎が噴き上がった。
「！？」
「オーバーフレアぁっ！」
炎の刃が、『モンスター』を一刀両断する。
火だるまとなった体が地面に倒れ、落ちたブロードソードが、ジュナスのすぐそばに突き刺さった。

「ヒーリングシェア！」
駆けつけたリフィクが、ジュナスへ『治癒術』を施す。やさしい光と共に、脚部の大きな傷口がみるみるふさがっていった。
「ありがてぇ……」
「大丈夫か！？　ジュナス」
ザットが気遣わしげに彼の様子をうかがう。ジュナスは「なんとか」と力なく笑ってみせた。
「あなたは、ケガは……？」
彼の治療が終わると、リフィクはザットへと振り向いた。
「いや、オレは平気だ。……恩に着る」
ザットはかぶりを振ったあと、痛み入るように深く頭を下げた。

「これで全部かな？」
と、パルヴィーが小首をかしげる。
三体倒したところで、『モンスター』の来襲はピタリと止まった。まだ他にもいるのなら、出てきてもよさそうなところではある。
「たしか、三体とかって言ってたな。もういないんじゃねぇか？」
エリスが、情報を知らせにきた男の言葉を思い出し、呟く。

「だが警戒する必要はある」
ラドニスは冷静に言い添えながら、リフィクのほうへと視線を向けた。
彼とザットとジュナスの三人が、並んで歩み寄る。ジュナスの下半身は真っ赤に染められていたが、傷自体はもう治っているため、痛みはないようだった。
「とんだジャマが入っちまったけど」
エリスがザットへ言葉を投げる。
「さっさと続きやろうぜ」
それを聞き、彼は小さく吹き出した。そして、意気消沈にうつむく。
「勝負はもうしなくていい」
絞り出すように、心が吐かれる。
「……オレの負けだ」
エリスたちよりなにより、ジュナスが驚いたようだった。
「なっ、なに言ってんだよ!?　アニキ」
狼狽して兄貴分の顔を見る。
「そ、そりゃぁ、こいつらは『モンスター』を倒しちまうような奴らだけど……さっきはアニキが勝ってたじゃねぇか！」
「……そんな問題じゃねぇんだよ」
「それに、アニキだってまだ全力だったってわけじゃねぇ」
「ジュナス」
「あの技だって……」
「そんな問題じゃねぇぇんだよ！」
ジュナスの言葉を振り払うように、ザットは吠えながら地面を殴りつけた。彼の中の、なにかが爆発したようだ。
「オレらが戦おうともしなかった『モンスター』共に、こいつらは臆せもせず立ち向かってた！　その差だ！」
ザットの声からにじみ出るのは、ある種の悔しさ。そして自分に対する憤りの色だった。

「その差が、オレにはデカすぎるんだよっ……！」
「……」
ジュナスは言葉を失っていた。彼のそんな様子など、見たことがなかったからだ。
ザットは、締めつけられるようにささやいた。
「……すまねぇ」

ザット・ラッド一味のアジトは、山深い洞窟の中に築かれていた。
そこが今や、火事があったかのように慌ただしくなっている。頭の指示通りに、そこから退避する準備を急いでいるのだ。
「ダドリーのアニキ！」
と、洞窟の入り口に立つダドリー・ベイカーのもとへ、若い男が駆けてきた。
「準備、終わりやした。いつでも逃げ出せます！」
「そうか。なら、あとはふたりを待つだけか……」
報告を受け取ったあと、ダドリーはいかめしい顔で洞窟の外へと視線を戻した。
ザットとジュナス。いくら火急とはいえ、彼らを置いていくわけにはいかない。先に『モンスター』たちが現れないことを祈るばかりである。
焦りと緊張が最高潮に達しようかという頃。
「！」
ダドリーの目に、渇望のふたりの姿が飛び込んできた。

共にいる部外者五人を一瞥しつつ、ダドリーはふたりへと駆け寄る。
「すぐに行けます！」
「いや、その必要はなくなった。奴らはたぶんもういねぇ」
やけに落ち着いたザットの返答を聞き、ダドリーは無意識に、部

外者たちを再び見た。
「ただ、みんなは集めてくれ。お縄につく準備だ」
だが続けられたその言葉に、驚いて視線を戻す。
「……勝負を？」
あいまいな質問が出てしまったが、それも仕方あるまい。自分の知らないところで、事態がガラッと変わっていたのだから。
「はなっから、勝負にすらなってなかったんだよ」
さわやかと取れるほど快活に、ザットが自嘲する。そして、かしこまって頭を下げた。
「勝手に決めちまって、申し訳ねぇ」
少々面食らったダドリーだったが、一拍置いたあと「いや……」と首を横に振った。
「アニキが決めたことなら、文句はないさ」
ささやかれたのは、年長者らしい柔和な声。そのあと彼は振り返り、
「野郎共、集まれ！　アニキが戻ってきた！　それから、ずらかるのは中止だ！」
声を張り上げながら、洞窟の中へ戻っていった。

やがて洞窟の入り口の前へ、ずらりと男たちが並ぶことになる。総勢十八人。
皆の視線を一手に集めながら、ザットが威勢良く口を開いた。
「すまねぇみんな！　オレはこいつらに負けた！　最初の約束通り、全員大人しくお縄について、町で豚箱に入る！」
口づてに聞いていたのか、衝撃はさほど大きくなかった。
「だがオレは、お前たちを無理強いしたくない！　気に入らない奴は前に出て、オレから『頭』の座を奪い取ってみろ！」
「えー？」
と異を唱えたのは、はたで見ていたパルヴィーだけだった。
男たちは、そんな気などさらさらないとばかりに、口を閉じてい

る。彼らもダドリーと同じ気持ちなのだろうか。
しばしの沈黙を、ザットが破った。
「……わかった。感謝する」
それでこの一件は無事に終わった……かに見えたが。
「あの、アニキ……」
端に立つ男が、おずおずと口を開いた。
「サミュエルの姿が見えねぇんだけど……」
「サミュエル？」
それを言われて、ザットを含む全員が辺りを見回した。たしかに、姿が見えない。
「まさか！」
と声を上げたのは、ザットとエリスのもとへいち早く襲撃の報せを持ってきたあの彼だった。
「オレあいつから聞いたんだ、『モンスター』が来たって。あいつ、他の奴にも知らせてくるって……」
他にも何人かが同じような報告をしたが、それ以上の情報は得られなかった。
「やられちまったんじゃ……」
嫌な予測が声となり、ざわざわと波及する。
ザットは焦るようにエリスたちへと振り返った。
「仲間がひとり戻ってねぇ。捜しにいってもいいか？」
「えーー？」
「まぁ、いいぞ」
パルヴィーとエリスから、正反対の答えが返ってくる。

第三章（11）

すっかり夜のとばりが下りた『シルパリーサ』の町並みを、六人の男女が歩いていた。

友達同士にも、仕事仲間にも、家族にも見えない、バラバラな年齢構成である。

「そう……『モンスター』が」

仲間からの報告を聞き、アリーシェが小さく眉を上げた。

「大事がなくてよかったわ」

「まぁあたしがいたからな」

当然のごとくと言わんばかりに、エリスが薄い胸を張る。

「そうだったわね」

これを笑って受け流すあたり、アリーシェも彼女の扱い方に慣れてきたということだろうか。

実際はエリスのせいで、別のことが大事になりかけてはいたのだが。

「そっちは大丈夫だったんですか？　ひとりで」

とパルヴィーが訊ねると、

「ええ、なにも問題なく。大人しいものだったわ」

アリーシェは、なにやら含みのある微笑みを浮かべてみせた。

エリスたちが町へ戻ったのは、すでに夕焼けも消えかけた頃だった。行方不明だというザット・ラッドの仲間を捜索し……その遺体を埋葬していたら、そんな時刻になってしまったのだ。

ザットたちは特に抵抗もせず、大人しく町までついてきた。そして全員そろって役場へ引き渡し、無事にその報酬を得ることもできた。

一件落着である。

そして今は一日の疲れを癒やすため、皆で大衆浴場へと向かって

いる途中だった。
「……似ていたな」
ぽつり、とレクトがささやく。
「……そうだな」
隣に並ぶエリスが、めずらしくしんみりとした様子で答えた。
「なにがなにが？」
そこへ、パルヴィーが首を突っ込む。
「なんでもねーよ」とあしらうエリスとは反対に、
「山で出くわした『モンスター』のことだよ」
と、レクトはやさしく説明した。
「故郷の近くにいた奴らに似た外見だったんだ」
「ふーん……」
うなずくパルヴィーだが、心中はあまり穏やかではなかった。自分は知らないふたりだけの共通事項に、なんともモヤモヤしているのである。
もっともふたりだけではなくリフィクも知っていることではあるのだが、それはこの際どうでもよかった。
「似てるといえば、あれですね」
そのリフィクが、笑みを浮かべながら会話に加わる。
「あの山賊の人たち、自警団の皆さんになんとなく似てましたよね」
エリスやレクトが属していた『フィアネイラ自警団』を最初に見た時、リフィクは山賊っぽいという印象を受けた。どこがというわけでもなかったが、発する雰囲気がそれっぽかったのである。
そして日中、本物の山賊に出くわした時から、ぼんやりと彼らのことを思い出していたのだった。
「そうか？」
「そうですか？」
だがその感覚は、当のふたりにはあっさりと否定されてしまう。
「なんのことー？」
またしても自分の知らない話題に、口を尖らせるパルヴィーだっ

た。

役場の地下には、牢屋が三つ並んでいる。この『シルパリーサ』は犯罪が極端に少ないため、その牢が使われることはほとんどなかった。

せいぜいケンカを起こした者たちを、一晩二晩、入れておくくらいの役割しか持っていなかったのである。

もし牢屋に意志があるなら、今の自分の状態にひどく驚いていることだろう。

安穏としていた普段と打って変わって、大勢の人間が所狭しとひしめきあっているのだから。

捕縛された、ザット・ラッドの一味である。

最初に捕まった十五人に、あとから来た十八人。計三十三人ものむさ苦しい男たちが、牢の中でスシ詰め状態となっていた。

交代の時間なのか休憩なのか、不用心なことに見張りの姿はない。

彼らの処遇決めや罪状確認などすべてが明日に先送りされてしまったところからもすると、町の人間もどう扱っていいのか戸惑っているのではなかろうか。

いざ捕まえてみたはいいものの、である。

「サミュエルの奴……ひとりで逝っちまいやがって」

奥の牢では、先立った仲間のことを、皆が口々に悼んでいた。空気がどんよりとしているのは、地下だからというだけではあるまい。

入り口に近い牢の中でも、やはり同じ話題が交わされていた。しかしこちらは、少々方向性の違うやり取りである。

「あいつら……案外良い奴らだったな」

自分たちを捕らえた、あの部外者たちのことだ。

「サミュエル捜すの手伝ってくれたし、一緒に葬ってもくれたしな」

「オレらを殺そうともしなかった。町の奴らとは、ちょっと違うぜ」

そして、中央の牢では。

「どうだ？　ソニエール」
鉄格子の出入り口に張りついていた小柄な男、ソニエールが、仲間へ向けてオッケーサインを見せつけた。
声を押し殺した歓声が、一瞬だけ上がる。
このソニエールという男、実は鍵開けの達人なのである。ちょっとやそっとの鍵など、彼の前ではかかっていないに等しい。
特に道具も必要とせず細長く伸ばした爪だけで開錠してしまう技術は、聞いたところでマネできない、まさに達人級の業である。
その彼が、オッケーの合図をした。開いた、と。
彼らがさほど抵抗もなく捕まったのは、彼の存在があったのが大きいのかもしれない。投獄されたとしても、抜けるのは易いのだ。
「アニキ、いけるそうです」
暑苦しいヒゲ面のダドリーが、『頭』へ指示を仰いだ。いくぞというひとことがあれば、皆すぐにでも動き出す。こんな薄暗いところとは、とっととおさらばだ。
しかし肝心のザットは、一点を見つめたまま、なにやらぼんやりと黙り込んでいた。
「アニキ……？」
ダドリーが再度呼ぶが、返事はない。
しばらくしてからようやく、ザットがその重たい口を開いた。
「なぁ、お前ら」
次のひとことが、彼らを戸惑いの坩堝へと叩き落とす。
「『モンスター』と戦わねぇか？」

あの少女が『モンスター』を打破した光景は、ザットの脳裏を突き抜ける勢いで網膜を貫いた。
その鮮烈な光が、彼の心にくすぶっていたものを照らし出したのである。
「……オレは、今まで、自分をだましてた。お前らといるのは楽しかったし、人から物を奪って騒ぐのも、楽しかった。そういうのを

自由だと思ってたんだ」

ザットは一語一語を置くように、言い募る。周りの仲間たちは、なにやら不安じみた表情で、それを聞いていた。

「けどそれは、ただウサを晴らしてただけなんだよ。『奴ら』に対する恐怖を直視したくなくて、頭の隅に追いやって……自分たちより弱い奴をいたぶって、ウサを晴らしてた。逃げてただけだ。それを自由だと思いたかっただけで……」

牢の中に、ほんの小さなうめき声が響いた。口にはしてこなかったが、彼らにも思い当たる節があったのだろうか。

「あいつらを見て気付いた。そして、教えられた。オレたちにも、『奴ら』に対抗することができるってことに。倒せるんだよ、『奴ら』は！」

熱が徐々に高まっていき、ザットは立ち上がった。「だから」と、皆を見回す。

「オレは決めた。戦う。戦って、真に自由に生きられる道を、この手でつかみ取ってやる」

自分のためはもとより、こうして共にいてくれる仲間のために。口にはしないが、ザットの心を燃やす最大のたきぎが、その感情だった。

「お前たちも一緒に戦ってくれると、心強い」

ザットは改めて、皆の顔を見回す。

賛同の色は、まったく見受けられなかった。

「……正気ですかい……？」

「いくらアニキの言うことでも、そりゃぁ……ちょっと」

「アニキくらい強けりゃ別かもしれねぇすけど、オレたちに、そんな力はねぇですよ」

「や、やめましょうや、そんなバカげたことは」

この反応は、ザットもある程度覚悟していた。『モンスター』に立ち向かうなど狂気の沙汰……少し前なら、ザット自身もそう思ってたいたからだ。

「オレだって、楽に戦えると思ってるわけじゃねぇ。……強制はしねぇよ」
わかっていながらも寂しげに、ザットは告げる。
「自分たちの意志でついてきてくれ」
薄暗い地下牢に、沈黙が落ちた。
恐らく声が聞こえているであろう両隣の牢からも、反応はなかった。
「……考え直しましょうぜ、アニキ」
ひとりの男が、説得を試みる。
「勇気と無謀は違いますぜ」
「だが無謀をやるのにも勇気は要る」
と落ち着いた声で言ったのは、ダドリーだった。
「オレたちとアニキとじゃ、勇気を使う場所が違うんだ。だからオレたちは、ザット・ラッドという男を信じて、オレたちなりに勇気を使えばいい」
周りの仲間に言い聞かせたあと、彼はザットへ視線を向ける。
「行ってくだせぇ、アニキ。アニキの目の前にある道は、オレたちにとっては険しすぎる。共には行けませんが、ここに残ることはできます」
「残る……？」
という言い回しに、ザットは眉根を寄せた。
鍵は開けられるのだ。『モンスター』とは戦わないにせよ、一緒に逃げ出せばいいはずである。
ダドリーは笑った。
「この人数がいりゃぁ、ひとりくらい減ったってわかりゃしないでしょう」
ザットはそれを聞き、ハッと言葉の意味に気付いた。他の仲間たちからも、「あ……」という声がもれる。
「せっかくの『勇者』が、お尋ね者ってんじゃかっこつかねぇですぜ」

なんにせよ、ザットは脱獄をする。罪人のままだ。だが、それを気付かれなければ……はじめからいなかったことにすれば、少なくとも、罪人として追われることはなくなる。

ダドリーはそれを、自分たちの身を挺してやろうというのだ。ひとりの脱獄をカモフラージュするために、全員でこの場に留まると。さっきとは打って変わって、賛同者が次々と現れた。共に戦う代わりに、彼のためになることならなんでもしてやりたいという気持ちはあったのだろう。

「お前ら……わかってるのか？」

だがザットは逆に、気遣わしげに問いかけた。

我ながらではあるが、自分たちがやってきたことは、かなりあくどい。その罰ともなれば、極刑……死刑ということも充分ありえる。なのに残るというのか？

「『モンスター』と戦うのなんて、命をかけなきゃできねぇ。兄貴分が命を張るってんなら、子分も張るのが筋ってもんでしょ」

ダドリーが誇らしげに言い切る。周囲からの異論はなかった。両隣の牢からも、逆に賛同の声が湧き上がる。

そしてそれは、やがてザットを鼓舞する言葉へと変わっていった。

「オレたちわかってましたから。アニキは、こんなところで収まるような人間じゃないってことに。今までもったいなかったんですよ」

「調子のいいことを、言いやがって。この」

ザットは胸を熱くして、歯を見せた。

「『あいつら』のところへ行くんでしょう？」

と、ジュナスが言った。ザットはうなずく。

「アニキならやれます。オレ信じてます」

「さぁ、ザットアニキ。見張りがいないあいだに」

ソニエールが、鉄格子のドアを引き開けた。キィという甲高い音が、石壁に響く。

ザットは牢の外を見た。

この先にはイバラの道が伸びている。戦いの道だ。見いだすこと

ができる人間は限られている、とても険しい道。
進むのならば、かけがえのない仲間たちと別れなければならない。最後まで進めるのかもわからない。
だがそれでも、進む価値がある道であることを、ザット・ラッドは感じていた。
自信があるわけじゃない。勝算があるわけでもない。ただひとえに、『モンスター』に恐怖する毎日はもう終わりにしたいのだ。
終わらせてやりたい。
「……お前たちの覚悟は借り受けた」
ザットは狭い出入り口をくぐり抜け、牢屋の外へと踏み出した。
「いつか、かならず生きて返しにくる」
三つ並んだ牢をまじまじと眺める。鉄格子越しに、見慣れた者らの誇らしげな顔がずらりと並んでいた。
「だから、お前たちも生きて受け取れ」
彼と彼らを隔てるドアを、ソニエールがゆっくりと閉じた。再び、キィという音が反響する。
「また会うぞ！」
ザット・ラッドは、目の前に伸びた道を走り出した。

第三章（12）

ほてった体に夜の冷えた空気が心地良い。
大衆浴場から宿屋へ戻ったエリスら一行は、男女に分かれて二階の客室へと入った。
この町での残す用事は、例の武器屋『ブレード・ヴァン』へと赴くだけである。山から帰った時にはすでに時間も遅かったため、とりあえず行くのは明日ということに相成った。
「あー、今日は疲れたー」
パルヴィーが両腕を頭の上に伸ばしながら、部屋の奥まで進んでいく。
といっても狭い部屋のため、数歩で窓際まで到達してしまったが。
「ご苦労様」
「お前なにもやってないだろ」
アリーシェとエリスが、正反対の表情で正反対の反応を浮かばせる。
「そんなことないよ」
パルヴィーはとりあえず、邪険にするエリスへと反論することにした。
「いろいろと……」
が、反論しようとして、特にこれといった働きはしてなかったな、ということに気付いた。今日は戦闘でもさほど活躍していない。皆よりも多くやったことといえば、文句を言ったくらいであろうか。
「いろいろー……」
宙を泳ぐパルヴィーの視線が、なにげなく、窓の外へと向けられる。
もはやすっかり暗くなった町並み。明かりの少ない景色が、そこから見える。

しかし、その時突然。その景色が『なにか』によってさえぎられた。
「……？」
それは、窓のすぐ向こう側に現れたようだった。
パルヴィーは目をしばたたかせる。
悲鳴は、その一秒後に上げられた。

夜に響く少女の悲鳴。と聞くとなにやらスプラッタな想像が頭に浮かぶが、実際に響いたのは、どこか気の抜けた声だった。
三つ隣でそれを聞いたレクトとラドニス、一拍遅れてリフィクが、なにごとかと部屋を飛び出した。
昼間に聞いた彼女の悲鳴と酷似していたが、一応、と。
「なにがっ……！？」
レクトが、目当ての部屋のドアを押し開けた時。
「ウインドラインっ！」
パルヴィーが『魔術』で、窓を枠ごと打ち砕いていた。
涼しい夜風が、部屋の中に入り込む。
「……なにが？」
あったのかと、レクトが再び訊ねる。
ベッドの脇にいたエリスとアリーシェは、ハテナという表情を彼へ返した。
パルヴィーが振り返る。
「人がいた！」
「外に？」
「うん！　たぶん男だった！　のぞいてた！　きっと、夜ばいに来たんだ！　最悪っ！」
「お前が言うかよ」
エリスは横から軽く皮肉りながら、半壊した窓から身を乗り出した。
「本当に？」

とアリーシェが、念を押すように訊ねる。彼女はベッドに入る準備をしていたため、窓は見ていなかったのだ。

それに、である。二階なのに加え、この窓の外にはベランダがない。落下防止のためか申し訳程度の手すりがあったくらいだ。

それに手を引っ掛けていたというのは、考えにくい。よほどの腕力がなければ無理だろう。

「ホントです！」

「ホントみたいだな」

エリスが窓から離れる。

「いたのか？」

入れ違うように、レクトも窓から身を乗り出した。

たしかに、下に倒れた人影があった。窓の破片も散らばっている。どうやらまともに落ちたらしい。

「のけのけ」

という声にレクトが振り向くと、エリスはウッドブレードを手にしていた。

レクトは一歩下がり、なにをするんだ？　と聞こうとした……瞬間。エリスが窓から飛び降りた。

「！？」

部屋の中に驚きが走る。

重ねて言うが二階だ。いくらなんでも生身で飛び降りるのは無茶すぎる。

が、間髪を入れずに。向かって左側のカーテンが、勢い良く下方に引っ張られた。

飛ぶ直前、エリスがつかんでいたのである。

伸びきったカーテンは悲鳴を上げ、内側から外側に向かって、徐々に引きちぎられていく。完全にちぎれる前に、道連れにつかんだ手が放された。

「よっ、と」

窓の下は、雑草の生える空き地だった。この町に着いた夜に、エリスとラドニスが模擬戦闘を行なったあの場所である。
「窓から入ろうってのは男らしくねーな」
軽やかに降り立ったエリスが、木片とガラス片にまみれて倒れている男へと歩み寄った。
「堂々と正面から来いよ」
果たしてそういう問題なのだろうか。
「……入ろうとしてたわけじゃねぇよ……」
男は小さくうめきながら、上体を起こした。様子を見るになかなかタフな体の持ち主のようだ。
「のぞいてただけだ」
それはそれで悪いのだが。
起きた彼の顔を見て、エリスは大きく眉を持ち上げた。
「お前……！」
「痛い目見ちまったが、おかげで捜してた奴らは見つかったぜ」
その時エリスの背後から、他の皆も駆けてきた。こちらは普通に階段を降りてきたのだろう。
わずかな光に照らされた男を見て、やはり皆も驚いた。
「露出魔っ！？」
パルヴィーが、イメージだけの名前を叫ぶ。
そこにいたのは、たくましい体に毛皮の衣をまとった、伸び放題の髪をした、通称アニキの、あのザット・ラッドであった。
「……誰？」
と唯一アリーシェが、皆の反応に小首をかしげる。
一味を役場へ引き渡したあと合流したので、彼女だけ顔を合わせていなかったのだ。
「山賊たちの頭です」
隣にいたレクトが説明する。
「なんだよ、あたしらに仕返しにでも来たのか？」
エリスはウッドブレードの切っ先を、ザットの眼前へと突きつけ

た。どことなく楽しそうな口調である。
「とんでもねぇ」
ザットは真剣な口調で否定し、土の上で正座をし直す。
「頼みに来たんだ！」
そして地面に頭突きを食らわす勢いで、なんと土下座をしてみせた。
「オレをあんたらの仲間にしてくれっ！」
意外すぎる訪問理由だ。エリスは思わず振り返り、皆と顔を見合わせた。

「ふざけたことを」
しかしザットの熱烈な頼みは、レクトにバッサリと切り捨てられてしまった。
「第一、なぜここにいる？　脱走してきたのか？」
問い質す視線も鋭い。
「他の仲間もか？」
「いや、オレだけだ」
ザットは土下座の状態のまま答えた。
「オレの脱走を隠すために、みんなは残ってくれた」
それに少し、面を食らう。
「オレは今までの生き方を恥じて、『モンスター』と戦うと決めた。自慢じゃねぇが、そんじょそこらの人間よりは力があると思ってる。足手まといにはならねぇつもりだ。だから頼む！　あんたらと一緒に戦わせてくれっ！」
彼の熱意は、どうやら本物のようだった。
せっかく牢を抜け出たというのに、こうして自分を捕まえた者たちのところへやって来たのだ。また牢へ突き返される可能性もあっただろう。それを覚悟の上で来たということは、半端な気持ちではないはずである。
その真剣さが伝わったのか、レクトは思わず口をつぐんだ。

「私は歓迎しよう」
代わりに口を開いたのは、意外にもラドニスだった。
「この男の腕は買っている。『モンスター』と戦う意志のある人間は、すべて同志に他ならない。拒む理由もない」
「……そうね」
とアリーシェも、彼に同意を示した。
「待ってください！」
レクトが異を立てる。
「賊ですよ！？　さんざん人を苦しめてきた者を、そう簡単に受け入れていいんですか！？」
加えて今は脱獄犯である。レクトの言い分ももっともだ。
「そうですよー。露出魔だし」
パルヴィーは、レクトと同意見のようだ。ザットを見る視線にかなりトゲがある。裸を見せられたことを、よっぽど深く根に持っているのだろう。
ただよくよく考えると、あれは彼が入浴しているところへ無理に押しかけた故の悲劇であるため、一概に彼が悪いというわけでもないのだが。
「……露出は置いておくとして」
アリーシェが話を戻す。
「罪を憎んで人を憎まずよ。それに一般の人間からすれば『モンスター』と戦うということほどの罰はないわ。そして『奴ら』の数が減れば、彼の被害にあった人間もきっと喜ぶ。結果的に戦うことが罪滅ぼしになるのではなくて？」
「……詭弁ですよ」
「手厳しいわね。けど、戦力が増えるのはありがたいでしょう？腕はお墨付きなようだし」
アリーシェの言うことも正しい。むしろ『モンスター』と戦っていくことを重視すると、彼女のほうに分があるのではないだろうか。
ザット・ラッドの剛腕ぶりは、レクトもその目で見ているのだ。

それについての異論は出せない。
「……」
レクトはリフィクへと、無言の視線を向けた。あなたはどう思うのか、と。
リフィクは決まりが悪そうに答える。
「僕は、どっちでも……」
相変わらず主体性のない奴である。
これで賛成が二票に反対が二票、白紙が一票ということになる。多数決的にも発言力的にも、最後のエリスの票で決まってしまうだろう。
「エリスはどうだ？」
レクトが最終結果を促す。
エリスは仁王立ちでザットを見下ろしながら、例のセリフを口にした。
「あたしの子分になるならいいぞ」
やっぱりか、と内心で思うレクトである。どうせそう言うだろうと予想していた。
「わかった！」
しかしこのザットの快活な答えは、彼の予想とは違うものだった。
「えぇぇっ！？」
パルヴィーとリフィクが、同時に驚きの声を上げる。
声には出さなかったが、他の皆も少なからず驚いた。なんならエリスも、ちょっとだけびっくりしていた。
「オレの目を覚まさせてくれたのは、もとはといえばお前だ。そのお前が言うのならば、子分だろうが舎弟だろうがなってもいい！」
エリス以外の全員が「考え直したほうが……」と口にしようとした時、ザットが再び地面に頭をつけた。
「いや、ならせてくだせぇ！　姉御！」
「えええぇぇぇーっ！？」
パルヴィーとリフィクの重なった声が、夜の『シルパリーサ』に

こだました。

「よし、決まりだな」

エリスは満面の笑みでザットへ歩み寄り、その腕を持って立ち上がらせた。

「さぁ立て立て。ところでお前、なんて名前だっけ？」

「はっ、すいません。ザット・ラッドです」

変わり身が早い。

エリスは、くるりと皆へ振り返った。

「あたしの子分のザット・ラッドだ。よろしくしてやってくれ」

「いや……こちらこそ……」

状況のあまりの急転っぷりに、めずらしく戸惑うアリーシェである。状況が整理できていないのは彼女のみならず、だが。

「よろしくおねがいします！」

ザットは一同へ向け、『気をつけ』の姿勢から深々と頭を下げた。山賊とは思えないほどの礼儀正しさである。

「ちょっ、ちょっと待てっ……！」

レクトが焦りながらエリスの腕をつかむ。そしてスッと、ザットのそばから引き離した。

「本気か？」

なぜか小声で、真意を問い質す。

「エリス・エーツェルが本気じゃなかった時なんてねーよ」

「……山賊だぞ？」

「前の話だろ。今はあたしの子分だ」

こちらもこちらで頭の切り替えが早すぎる。

「共に戦うということは、背中を預けるということだぞ。そこまで信頼できるのか？」

「まぁそこそこ強かったしな。それにもう子分だし、信頼するもしないもないだろ」

「……」

レクトは言うべきことを失い、立ち尽くした。このまま続けても平行線をたどるだけだろうと気付いてしまったのだ。

孤立するザットへ、今度はアリーシェが歩み寄る。

「私たちが目標としているのは、『モンスター』の最上位……『キング』と呼ばれる者よ。通常の『モンスター』とは言葉通りの別格。それでも戦うと？」

ザットは一瞬は息を呑んだが、

「……望むところだ」

と力強くうなずいた。

「それなら歓迎するわ」

アリーシェが微笑みを見せる。

その時。

「……おい、お前さんら」

一同のさらに背後から、不機嫌そうな男の声が聞こえてきた。

声に振り向いた面々が、『そういえば』と『まずい』の混ざった顔をする。

そこに立っていたのは、険しい顔をした、パルヴィーが窓を粉砕した、宿屋の主人だった。

第三章（13）

朝日の差す宿屋裏の空き地から、チョキチョキというハサミの音が聞こえていた。

イスに座ったザット。その背後にエリスが立ち、彼のボサボサな髪を切ってやっていたのだ。

「終わったら、服屋だな。んな格好じゃ町歩けねーよ」

「すまねぇ姉御。面倒かけます」

「気にすんな。金もたんまりあるしな。好きなの買ってやるよ」

そんな様子を、宿屋二階の窓から、パルヴィーが寝ぼけまなこで眺めていた。

「……なんか親分っぽいこと言ってる」

「嬉しいのね、きっと」

対照的にしゃんとしたアリーシェが、微笑みながら相槌を打った。

今ふたりがいる部屋は、昨夜破壊した部屋の隣である。窓の修理代と新たな部屋の宿泊代、そして多めの心付けを払ったことで、なんとか店主とは丸く収まった。

ちなみにザットは、昨夜はレクトらの部屋に宿泊した。ベッドは三つしかないはずなので、恐らくは床で寝たということになるのだろうが。

「パルヴィー。これからは彼も仲間なのだから、ささいなこだわりは忘れなさいよ」

アリーシェが、やさしく言い聞かす。

「そう言われましても」

しかしパルヴィーは、一晩経っても納得はいっていないようだった。

「アリーシェ様は、見てないからそういうこと言えるんですよ」

「……なにを見ていないから？」

「……」
朝特有の鳥のさえずりが、部屋の中でもよく聞こえた。

寝るための部屋しか備えていない安宿のため、必然的に食事は他のところでしなくてはならない。
そろって朝食を食べに行こうとロビーに集まる一行のもとへ、こざっぱりとしたザット・ラッドが降りてきた。
「見違えたわね」
アリーシェが感嘆をこぼす。
原始林のように伸び放題だった髪は、やや雑ながらも短く切りそろえられ。いかにも山賊然としていた毛皮の衣類も、今はありふれた布の服へと変わっている。
この彼が賊だったなどと誰が思うだろうか。それくらいの様変わりぶりであった。
「なんだか、自分じゃねぇみたいだ」
ザットは照れ笑いながら頭をかく。
「……似合うじゃん」
パルヴィーもそれは認めたようだった。

「おはようございます」
ハーニスのにこやかなアイサツに迎えられながら、アルムス・ドローズはダイニングキッチンへ足を踏み入れた。
「早いな……」
あくびまじりにアイサツを返す。
「普段通りですよ」
ハーニスとリュシールのふたりは、エプロンをつけてキッチンに立っていた。テーブルにはすでにパンやスープが並び、空腹を刺激する香りをかもし出している。

「おまけに気も利いてる」
「泊めていただいたお礼です。我々にはこういうことしかできませんので」
「充分すぎるよ」
ドローズがイスにつくと、リュシールがハーブティーを運んできた。相変わらずの無表情だったが、手つきや仕草に限って言えばとても愛想が良かった。
「ありがとう」
ドローズはそれを一口含んでから、再びふたりに視線を向ける。
「いつまでいられるんだ？」
「朝食をごちそうになったら出立するつもりです。あまり長居をしていると、気持ちが鈍りますから」
ハーニスが軽口を叩く調子で答える。ドローズは残念そうに、「そうか」とつぶやいた。
「久しぶりに家の中がにぎやかになって、楽しかったよ」

「次は『ブレード・ヴァン』ね」
食事を済ませて町並みを歩いているところで、アリーシェがそう切り出した。
時間的にもちょうど店の営業が始まる頃ではなかろうか。
「俺は宿屋に戻ります」
と、レクトが告げる。
「旅立つ準備をしておきます。昨日はいろいろと立て込んでましたから」
例の剣を手に入れたら、すぐにも旅立てるように。たしかに分担してそうするのも悪くないだろう。
「あ、わたしも手伝う」
パルヴィーが名乗りを上げ、彼女に続き、
「では私も付き合おう」

とラドニスも口を開いた。
「そう。それじゃあおねがいね」
彼ら三人とはそこで別れ、残る四人で例の武器屋へ向かうことにした。

その武器屋『ブレード・ヴァン』に着いた時。店主であるドローズが、店の前に立っていた。
そしてどうやら遠ざかる誰か――恐らくふたり組――を見送っている様子だった。
「よう！」
「おはようございます」
その背後から、エリスとその他が声をかける。
振り向いたドローズは、一同の顔を見て意外そうに目を見張った。
「あんたらか……」
「誰だ？」
とエリスが、ドローズが見送っていたらしい者たちへ視線を向ける。
すでに道の先へ行ってしまっているため判別がむずかしいが、男女のふたり組であろうか。女のほうの長い黒髪になにかを思い出しそうなエリスだったが……
「賊共を捕まえに行ったんじゃなかったのか？」
とドローズが店の中へ戻ってしまったので、自然と意識もそちらへ引き戻された。
「もうひっ捕まえてきたよ、全員」
老店主を追うようにエリスも店の中に入る。
ザット、アリーシェもそれに続いた。
最後尾にいたリフィクだけが、最後にもう一度、去りゆくふたりの背中を瞳の中に収めた。

「ほう、たった一日でか」
ドローズは適当な相槌を打ちながら、カウンター向こうの定位置へと腰を下ろした。
様々な剣の並ぶ狭い店内へ四人の客も入ってくる。初めてその内装を目にしたザットは、少々圧倒されていた。
「あたしにかかりゃぁこんなもんよ」
エリスはカウンターを挟んでドローズに正対する。
「あたしの強さをまのあたりにして、奴ら早々に白旗上げたからな。抵抗しようっていうバカがいなくて楽なもんだったよ」
本人の前でよくも言うものである。その当のザットは、空気を読んで黙っていた。
「本当の話か？」
ドローズがアリーシェを見る。
「本当です」
アリーシェはほがらかに答えた。
「『全員そろって』、今は役場の地下に入れられているはずです」
それを聞いて、ようやくドローズは納得したようにうなずいてみせた。
「ほう……そりゃあ、ご苦労だったな」
「なんであたしの言うことで信じねーんだよっ！」
「決まっとろう」
何度あっても噛み合わせの悪いふたりである。
前置きもこれくらいにして、エリスはさっさと本題に入ることにした。
「まぁいい。捕まえてきたんだから、ほら、例のモンよこせよ」
右手を出す。
ドローズはその手を眺めながら、
「なんのことだ？」
と白々しくうそぶいた。
「ボケるんなら明日からボケろよ、ジジィ。山賊共とっ捕まえてき

たらあの剣くれるって言っただろうが」
「くれるとは言っとらん。考えてやると言ったんだ」
「覚えてんじゃねーか」
「そして考えた結果、やっぱりアレはやらんことにした」
ドローズは、まるで子供のような言い分を堂々と言ってのけた。
こうも堂々と言われると逆に清々しく思えてくる。
「つまんねー茶目っけ出しやがって、ジジィ」
エリスはカウンターをバチンと叩き、悪びれもしない老人に詰め寄った。
「根性ねじ曲がってんのかよっ！　くれる流れだろ、こういうパターンは！」
「脅迫には屈せんぞ」
「あの剣だって、ホコリかぶってジジィと隠居するよりは、あたしに使ってもらいたいに決まってる！」
肝心の剣のことに触れられたためか、ドローズの態度が少し変化した。
「わかったふうな口を聞きおって」
とぼけて受け流していたのが、声に熱が含まれ出す。
「魂を込めて作り上げた作品は、言ってみれば我が娘も同然。一際輝く傑作ともなれば、目に入れても痛くない愛娘も同じなのだ」
剣を目に入れても痛くないならよほどのことである。『子』ではなく『娘』と表現するあたりに、彼のこだわりさが垣間見える。
「かわいいかわいい娘を、どこの誰とも知らぬ馬の骨にホイホイとくれてやるわけがなかろうが」
偏愛ぶりはさておき、作品に愛着を抱く気持ちはわからなくもない。
わからなくもないが、今日は引き下がらないエリスであった。
「知らないなら教えてやる。よく聞いとけよ」
エリスは人差し指を頭上へ掲げる。
「天に輝くひとつ星！　空も雲をも従えて、光をさえぎるものは無

し！　世界を照らすスターオブスター、それがこのエリス・エーツェルだっ！」

そしてその人差し指を、ドローズの眼前へズビシと突きつけた。

自己紹介にもなっていないが、まぁすごい人物ということでいいのだろうか。

周囲の全員にポカンとした表情が浮かぶ。

が本人の中では、きっとこの上なく決まったと思っていることであろう。

「この上なく決まった……」

というか実際、口にした。

「そういうのって、いつ考えてるんですか？」

リフィクの疑問は、しかしあえなく無視されてしまった。

ドローズがフンと鼻を鳴らす。

「だからどうした」

まったくである。

「これで知っただろ、あたしのことを。だからよこせよ。幸せにしてやるから」

「お前みたいなもんには無理だ。帰った帰った」

正直、どっちもどっちな感は否めない。このままでは水かけ論が続くだけだろう。

「頑固なジジィだなー」

「姉御、ここは俺が」

それを打ち破らんと、ザットが名乗り出た。

「おう？」

狭い店内で立ち位置を代え、今度は彼がドローズの真ん前に来る。

「誰に言われようが同じことだ」

ドローズの態度は変わらず、であった。それを見越していたように、ザットは腹筋に力を入れる。

「かわいい子には旅をさせろっ！！」

発した大声が、店中に響き渡った。

「大事な娘だからといって、甘やかされて育った箱入り娘は、たいてい性格が悪い！」
「ぐっ……」
なにやらドローズの表情が険しくなる。意外と、効いているようだ。
「娘のためを思うなら、一度苦労させてやるのも愛情のうちだ。いろんなことを見て知ったそういう娘こそ、本当の意味で美しくて魅力的なんじゃねぇか。そうだろ？　ジィさん」
剣を譲る譲らないという話でいきなり子育ての話をし始めたのだから、普通に考えればこれで説得できるはずはない。
……はずはないのだが。
「……たしかに、そうだ。お前さんの言うとおりかもしれん」
なぜかドローズは、痛く感銘を受けたかのように何度もうなずいた。
「かわいがるあまりに肝心なことが見えなくなっていた。……ちょっと待っととくれ」
そして席を立ち、店の奥へと入っていった。
ザットは皆に振り向く。
「事情はよくわかりませんが、言ってやりました！」
「事情がよくわからないくせに、でかした！」
エリスが賛辞を送った。
なんとなく釈然としない状況に、リフィクはアリーシェの顔を見る。
アリーシェは小さく肩をすくめた。

戻ってきたドローズは、以前と同じ、細長い木箱を抱いていた。
カウンターにそっと置き、やさしい手つきでそのフタを開ける。
中には例の、刃がライトグリーンに輝く剣が収められていた。
恐らく初見のアリーシェとザットが、その美術品めいた代物に感嘆の声をもらす。二度目のエリスとリフィクも、思わず息を呑んだ。

「やはり剣は使われてこそ価値があるということか、『ブレード・マリア』……」
ドローズは未練げな視線を剣へと注いでいる。
「……お前さんを信じてやろう、エリス・エーツェルとやら」
「任せろ」
エリスは剣を握り、木箱の上へ持ち上げた。その重量は、パルヴィーが愛用しているショートソードよりも軽いように思えた。
「こいつで『モンスター』の頂点をたたっ斬ってやるからな！」
「では二百万ルーツだ」
ドローズの意表を突いたひとことに、エリスの手がピタリと止まる。
「……なんだって？」
「山賊共を捕まえた報酬があるだろう？　それを置いてけ」
「金取んのかよっ！」
「誰がタダでやると言った！　イヤならいいのだぞ？　その手をそーっと下ろすがいい」
「足元見やがって……！」
してやられた感が強いのが気に入らないエリスだったが、ここまできたら金などささいな問題である。
「……ちょっと使っちまったから、残りでいいか？」
主にザット関連でいくらか出費があった。
「仕方ない。それで許してやろう」
ドローズは、片口角を上げて右手を差し出した。

第三章（14）

「これで全部ですか？」
宿屋へ戻って荷物をまとめていたレクトである。
玄関先につながれている馬（オルセーくん）には、すでに武具やテントなどが載せられていた。
「我々の分はな」
ラドニスが、皮の袋を地面に置いてひと息つく。
男性陣の荷物はまとめ終わっている。さすがに女性陣の荷物となると手伝いにくいので、そちらはパルヴィーひとりに一任した。
彼女が作業を済ましエリスたちが戻ってくれば、すぐにでも旅立てる。ザットのことがバレるかもしれない可能性を考えると、なるべく早く町を出たい心境であった。
レクトもひと息つき、町の通りをぼんやりと眺める。
行き交う人々の中には、まだ目当ての連中の姿は見つけられなかった。
「納得していないか？」
ふとラドニスが、独語するように口を開く。
振り向くレクト。ラドニスは馬のたてがみをなでていたが、声はたしかにレクトへと向けられていた。
「ザット・ラッドのことは」
レクトは言葉の意味を理解する。
「……納得していると言うと、ウソになります」
胸の中にしまっておこうと思っていたが、ふたりだけという状況のせいか、つい本音が口から出た。もしくはラドニスのことを信用しているからか。
「彼の腕前は認めます。戦力が増えるのも喜ばしい。しかしやはり……悪人は悪人です。過去形だったとしても」

正義感の強いレクトには、どうにもそこの折り合いがつかないのだ。頭で納得しようとしても、心がそれを受け入れない。

清濁を併せ呑むには、彼はまだ若すぎるということなのだろうか。

「到底、信用することはできません」

「ならば、私もか？」

ラドニスの言葉に、レクトは疑問符を浮かべる。

ラドニスは振り返り、レクトの顔を見た。

「若い頃、盗賊をしていた」

「……ウソでしょう？」

質実剛健といった雰囲気の彼からは、想像もできない過去である。

「ちょうど昨日の連中ほどの仲間がいた。家族もいた。だがある日、それらすべてを『モンスター』に奪われた」

ラドニスは淡々とした口調で言葉を続ける。

「そして私は、銀影騎士団に参加した」

抑揚のない声が、逆に説得力を高めていた。

レクトは戸惑う。真実、なのだろうか。

「その私も、ザット・ラッド同様、信用に足らないか？」

「それは……」

言葉に詰まる。

ラドニスのことは、年長者ということもその腕前のこともあり、知らず知らずのうちに頼りにしていた部分は大きい。

その頼りに思っていた気持ちは、彼の過去を知り、今この瞬間に消え失せてしまったのだろうか？　どこまでいっても悪人は悪人だという理屈に則って？

「……わかりません」

それがレクトの正直な気持ちだった。

しかしそれが答えでもある。人間とは多面的なのだ。一面的に評価できるものではない。

「結論は急がなくていい」

ラドニスは穏やかに言いながら、再び体を馬へと向けた。

「重要なことは、我々の敵は『モンスター』だということだ。人間同士で摩擦を生じさせていても仕方あるまい。我々は、力を合わせて初めて奴らに対抗できるのだから」

それが真理なのかもしれない。人間と『モンスター』という種族の違いからすれば、人間の過去の経歴などささいな問題である。

大事の前の小事、だ。

「それまでの考え方を変えるのは難しいことだが、不可能なことではない。戦うことを決意した、あの男のように」

「……」

レクトは考え込むように黙ったまま、町並みへと視線を戻す。

宿屋から大量の荷物を引きずったパルヴィーが出てきたのは、そんな時だった。

「あの姉御、それはそろそろしまったほうが……」

ザットが、恐縮した口調で忠告する。

合流先の宿屋へ向かうため、通りを歩いている四人である。

エリスは手に入れたばかりのライトグリーンの剣を、抜き身のまま、ずっと手に持ち眺めていた。

周りを行く人々からの視線が痛い。意味もなく真剣を抜いているのだから、暖かい目で見られることはないだろうが。

しかしそんなことはまったく気にしないエリスである。よほど嬉しいのか、飽きる様子もなく舐めまわすように熟視していた。

これが宝石やアクセサリーならば女の子らしいとも思えるところだが、剣というあたり、やはり彼女に普通という言葉は似合わない。

「『ブレード・マリア』……これが本当に『魔導鉱石』の塊だというのなら、あの技を使う時は細心の注意が必要ね」

アリーシェが、真剣な眼差しをエリスへ向ける。

「『魔術』の力が増幅されるということは、そのぶん体力の消耗も激しくなる。力加減を誤れば、一発放っただけでダウンしてしまう

ということもありうるわ」
「うーん……名前がイマイチだな」
が、エリスは聞いていなかった。
「そもそも誰だよ、マリアって」
誰もなにも、そういう剣の名前だろう。
アリーシェは苦笑いをこぼす。
「よーし、決めた。こいつは今から『エーツェルソード』だっ！」
エリスは宣言しながら、高らかに剣を振りかざした。
近くを歩いていた親子がなんとなく早足になる。
「そんな安易な……」
リフィクが、ストレートな感想を呟いた。
安易を通り越して、そのまんまである。発想レベルが子供並だ。
「……とにかく、これで差し当たっての問題は解決したわけね」
アリーシェは、ため息まじりに話題を変えた。
「あなたたちが山で出くわした『モンスター』というのが気がかりだけれど……『コープメンバー』の情報にはなかったのよね」
「この周辺に住んでいる種族ではないということですか？」
リフィクが質問する。
「そうなるわね。この町へやってくる可能性もある以上、住みかの場所さえわかれば叩いておきたいところなんだけど……」
「それなら、心当たりがある」
と告げたのは、ザットだった。
アリーシェとリフィクは「え？」と思わず立ち止まり、彼の顔を見る。
しかしエリスは止まらなかった。聞いているいない以前に、ちゃんと前を見ているかも怪しい。
「オレ自身、けじめをつけときたい奴らなんだ」
ザットは強い視線で、ふたりの瞳を見返した。

◆

エリスとレクトとリフィク。アリーシェとラドニスとパルヴィー。馬。そしてそれにザットを加えた七人組は、深い山の中を進んでいた。

先導するのはザット。道らしい道などないようにも思えるが、彼は迷わず歩いていく。

目指す先は、彼ら一味が以前アジトにしていたところだという。

「ちょっと前だ。奴らがアジトにやってきたのは」

例の『モンスター』に心当たりがあると言ったあと、彼はそう続けていた。

「当然、敵うわけもねぇ。オレたちは逃げたが、その途中で『おかしら』も、大勢の仲間も、奴らに殺されたんだ。住みかも奪われた。だからオレたちは、残った仲間を集めてこの町の近くにやってきたんだ」

山中で出くわした三体の『モンスター』と、そのアジトを襲撃した者たちとは同じ種族だったという。

因縁深い相手だ。

「頼もうと思ってたんだ。一緒に戦ってくれって。……戦うと決めた以上、やっぱりあいつらをそのまんまにしておくわけにはいかねぇからな」

今は奴らがそのアジトに住み着いているそうだ。場所は無論、わかっている。

「ならば、そこへ向かいましょう」

アリーシェが、よどみなくそう応じた。

「『モンスター』が存在している。それ以上の理由はいらないわ」

「あそこだ」

ザットは切り立った崖に立ち、眼下のアジトを指差した。

滝つぼにほど近い川沿いに、石造りの長方形な建造物がいくつも

並んでいる。小さな村にも見えるが、よく見ると、それらはすべてつながっていた。

ひとつの建造物がいくつも枝分かれして、それが形作られているのだ。

外観はかなり古い。風化しているところからも、なにかの遺跡と思われる。

いざそれを前にすると、ザットの心にある傷跡がうずき始めた。

在りし日の日常。敗走の記憶。亡き仲間たちの顔。当時の情景が鮮明なまでによみがえってくる。

「ホントにあそこにいんのか？」

エリスがザットに並ぶようにして、そのアジトを見下ろした。

わざわざ崖上へと回り込んだのは、様子見と奇襲のためだ。ちなみに馬は安全な場所で待たせてある。

あそこにいないとなると、この行動も単なる徒労に終わってしまうが。

遺跡のようなアジトは、しんとした静寂を保っていた。外に『モンスター』の姿は見えない。

「一度戻った時には、完全に住み着かれてましたから。いるはずですが……」

ザットは確認するように、まじまじと眼下を眺める。

「たしかに、いるようだ」

と硬い声を発したのは、ラドニスだった。

しかし彼は、崖下ではなく正反対の方向へと顔を向けていた。すなわち自分たちの後方。

「先手を取られた……！」

言葉が終わるかどうかというところで、振り向いた皆の目にもそれが映った。

木々のあいだを抜けて疾風のようにやってくる、黒い波。

「……！？」

エリスたちは逃げる暇もなく、あっというまに、『その者ら』に

半円状に包囲されてしまった。
黒い体毛をたなびかせた、狼を思わせる『モンスター』たち。その数ざっと二十強。少なく見てもこちらの三倍はいることになる。
奇襲を仕掛けるはずが、逆に奇襲を受けてしまったということだ。
周囲の空気が一瞬にして張り詰める。
「奴らだ……！」
ザットが絞り出すように独語した。たしかに、先日の『モンスター』と同種のようだ。
もともと戦闘態勢であったため戦う準備はできていたが、心の準備ができているかというと、そうではなかった。この虚を突いた包囲で崩されてしまっている。
奴らの中央に立つように、一際大きな『モンスター』が歩み出た。ボス格であると、その雰囲気が物語っている。
「答えろ」
その『ボス』が、エリスたちを睥睨しながら口を開いた。
「貴様らから、かすかに我が同胞たちの匂いがする」
「はー。何日か前だってのに、よくわかるもんだな」
まったくひるみもしないエリスが受け答える。
「けどな、人の匂いをくんくんと嗅ぎ立てんのは礼儀知らずってもんだろうが」
彼女に礼儀を語る資格があるのかはさておき。
その異常なまでの嗅覚をもってすれば、彼女らの接近を察知しなおかつ待ち伏せをすることも、なるほど容易かったであろう。
奇襲攻撃は最初から奴らに分があったということだ。
「……その同胞たちが、まだ戻っていない」
エリスの挑発じみた答えにも乗らず、『ボス』は言葉を続けた。
「貴様らの知っていることを話せ」
「知ってるもなにも」
エリスは得意そうな表情で、『エーツェルソード』の切っ先を奴へと向けた。

「そいつらなら倒したよ。あたしらが！」
『モンスター』たちのあいだに、ざわりとしたさざ波が立つ。
『ボス』はその答えで納得したのか、もしくは最初から期待をしていなかったのか、そこで問答を打ち切った。
「やれ」
わかりやすく命ずる。
周囲の『モンスター』たちが、じわりじわりと包囲網を狭めてきた。
彼らにしてみれば、これは戦いではないのだろう。自分たちより数の少ない人間を、取り囲んで、崖っぷちまで追い込んでいるのだ。
狩りと呼ぶのもわずらわしいほど一方的な状況である。
勝機があるとしたら、そんな部分を逆手に取る形になるのだろうか。
「パターンだけど」
アリーシェが、小声で素早くささやきかける。
「『ボス』だけを狙って、一気に突撃するわよ。全員で、一斉に。ひと息で仕留められなかった場合は覚悟を決めなきゃならないわ」
つとめて冷静な口調だが、あまりにも強引な作戦だ。とはいえ退路がない上に時間もない以上、そんなものでも上策といったところだろうか。
「だけどもし、この包囲を突破することができたら、今度は彼らが崖を背にすることになる」
崖の高さは中々のものだ。『モンスター』といえど、落ちたらタダでは済むまい。
形勢逆転とまではいかずとも、足場的には優位に立てる。勝算も増えるということだ。
『モンスター』たちの、眼光と凶器が光る。いつ飛びかかってきてもおかしくない。
一瞬の差が生死を決する瀬戸際。
「……仇を討つ」

ザットは強く、拳を握った。
「オレの道を、切り開く！」

第三章（15）

「フラッシュジャベリン！」
その電光石火の作戦は、まさに文字通り、レクトの放った閃光から開始された。
七人が一丸となって突撃する。その背後に、まばゆい光の槍が落下した。
そこから強烈な輝きが生まれ、『モンスター』たちは思わず目をすがめる。
逆光が、エリスたちの姿を覆い隠した。
値千金の隙に、七人は『ボス』への距離をグンと詰めていく。
だが視界は悪くとも、動きがあれば反応される。
『モンスター』たちは不意を突かれた動揺からすぐに立ち直り、七人へと一斉に攻めかかった。
しかしそれは想定内である。
「フローズンワールド！」
リフィクは『魔術』で、自分たちの両側面に細長い氷の壁を生み出した。
走りながらで集中が足らなかったのか、強度を皆無に近い。『モンスター』たちの持つ武器でガリガリと削り取られていく。
だが少しの時間が稼げれば良いのだ。
長く平行に伸びたふたつの壁が、まっすぐに道を形作っている。
さえぎるものなく『ボス』へとつながる、勝利への道だ。
しかしひとかたまりとなって直進しているぶん、敵からすれば、これほど狙いやすい相手もいない。
『ボス』は手に持つ大刀を頭上へ振り上げ、舌なめずりをして迎撃の準備を整えた。

意識と無意識の差は小さいようで大きい。
ザット・ラッドの無意識とは、根源的な恐怖だった。
『モンスター』の、しかもボス格に突撃しているのだから、その高まりは最たるものだ。
しかしザットは、その無意識を意識で押さえ込むことができていた。
それは、周囲の者たちのおかげである。『モンスター』相手にも臆せず気丈に、立ち向かっていける者たち。彼ら彼女らにおくれを取らないためにと強く決意をしたから、ザットは前へと走っていけるのだ。
一瞬はすくんだ足も、今はしっかりと地面を蹴っている。乱れた心も、今は冷静さを保っていられる。
お互いに助け合い、足りない部分を補え合えるのも仲間というものだ。新たな仲間たちの助けになるためにはと、ザットはさらに気概を高めた。
『ボス』は、もう目前にまで迫っている。

『ボス』の射程圏内に、まず先頭のアリーシェが飛び込んだ。
すでに構えていた『ボス』にぬかりはない。彼女めがけて、思い切り大刀を振り下ろす。
「リジェクションフィールド！」
しかしその大刀が叩いたのは、アリーシェでも地面でもなく、彼女が展開した防御用の『魔術』だった。
光の壁が、見えない力で大刀をがっしりと受け止める。同時に足の止まったアリーシェの両脇から、ラドニスとパルヴィーが飛び出した。
「スラッシュショットっ！」
パルヴィーが、ショートソードから衝撃波をうち飛ばす。それは『ボス』の眉間に直撃し、その視覚を一時的に奪った。
「ぬおおっ！」

そして右足めがけて、ラドニスが大斧を振り下ろす。紫色の血が勢いよく噴出し、『ボス』の体勢が崩れた。
間髪を入れずに、ザットが突っ込む。
躊躇なく『ボス』の左足にからみつき、
「でぇぇぇぇいっ！」
気合いを吐き出しながら、全身の力を一気に解き放った。
するとなんと。
バランスを失った『ボス』の体が、一瞬だけふわりと宙に浮いた。
ザットが、持ち上げたのだ。
その一瞬で充分だった。
「スローっ！　グラウンド！」
ザットは体はひねり、『ボス』の背中を地面へと痛烈に叩きつけた！
足元が揺れる。
目を見開いた『ボス』が見たのは、跳び上がったエリスの姿だった。
「燃えろっ！」
天高く振り上げたライトグリーンの剣から、激しい火柱が噴き上がる。
「……大きいっ……！」
と、リフィクが息を呑んだ。
剣から伸びるその炎の刃は、普段の二倍に近いほど巨大だったのだ。
「オーバーフレア！」
強い熱波が地面を焦がす。
驚愕と混乱に満ちた『ボス』の顔は、自分が置かれている状況を理解する前に、胴体から切り離された。
『モンスター』の『ボス』というのは、ほとんどの場合、その群れの中でもっとも強い者がそう呼ばれる。

なによりも力の強さがものを言う彼らの世界では、その存在は絶大なものなのだ。
その『ボス』がやられたことによる『モンスター』たちの衝撃と動揺は、人間が想像する以上のレベルであった。
戦意と敵意に満ちていた目は、すっかりとその光を失っている。
自分たちよりも強い『ボス』を、倒した者たち。そういう図式が、彼らの中でできあがってしまったのだ。
しかもそれが人間ともなれば、戸惑いは相当なものである。
そうなってしまったら、もはや正常な働きなどできはしない。そこから立ち直るのを待つほど、人間たちに余裕はなかった。
「油断しないで！」
自分にも言い聞かせるように、アリーシェが声を張る。
皆その声のおかげで、包囲網を突破することだけに向けていた意識を、すぐに広く周囲に向け直すことができた。
ほぼ作戦通りに『ボス』を倒せたことに祝杯でも上げたい気分ではあったが、喜ぶのはまだ早い。
七人は互いに背中を預け合う陣形を作り、自分たちの三倍近い数の『モンスター』と改めて向かい合った。

◆

太陽がかたむき始めた空の下。
ザット・ラッドはひとり、以前のアジトを真正面から眺めていた。
ツタが幾重にもからみつき、自然と一体となったかのような石造りの長方形群。近くで見るとやはり遺跡然としており、朽ち具合からも相当古い時代に作られたものだと想像できた。
ザット自身も、そのあたりのことはよく知らない。
薄れてはいるが、ところどころに見受けられる赤い血痕は、ここで生活していた時にはなかったものだ。
その生活が終わりを迎えた日に、流されたものである。

ザットは様々な思い出の残るそのアジトを見上げ、さらに強く自分に誓った。
繰り返させない。
絶対に、繰り返させないのだ。

「大丈夫ですか？　エーツェルさん」
そのアジトからほんの少しだけ離れた草むらに、ザット以外の六人は集まっていた。
リフィクが極端に疲労した様子のエリスへ心配そうな顔をかたむけるが、
「……なにがだよ」
当の彼女は逆に、不愉快そうにその顔をにらみ返した。
しかしぐったりと座り込んでいる彼女を見れば、リフィクでなくとも心配になるだろう。他の皆は戦いで消費した体力を取り戻しつつあるのだが、エリスだけはいまだにこの様子なのだ。
「きっと、力の使い勝手が変わったからね」
横からアリーシェが、そんな状態を分析する。
「見たところその剣……『エリスソード』は、とてつもない代物だもの」
「『エーツェルソード』だよ」
「……失礼。その『エーツェルソード』は、力を伝達しすぎるわ。技の威力も、普通の剣と比べてヒツジとヤギほどの違いがあるはず……慣れるまではそういう状態が頻発するかもしれないわね」
使う力が強くなれば一度に消費する体力も多くなる、とアリーシェは以前言っていた。
戦闘中に見せたエリスの炎は明らかに強力になっている。剣のおかげであれ、その反動がダイレクトに体に返ってきているということなのだろうか。
「あの、アリーシェさん。ささいなことなんですが……」
リフィクが、なにやら言いにくそう質問する。

「そのふたつの違いが、よくわからないんですが……」
ヒツジとヤギほど違う、と言われても、いまいちピンと来ないたとえである。
アリーシェは意外そうに彼の顔を見つめ返した。
「大違いじゃない。おいしさが」
「味！？」
エリスは、よっこらせと言わんばかりに重たい体を持ち上げる。
「すぐに慣れてやるよ」
立っただけで深い息を吐いてしまうあたり、その言葉にも不安が残るが。
「んなことより」
と、まるでごまかすように話題を変えた。
「いいのかよ？　あいつら、けっこう逃がしちまったけど」
それは、先ほど戦った『モンスター』たちのことだ。
おおよそ半分近い数が、戦闘中に逃亡してしまっていた。
そのおかげで助かったという部分もあるのだが、奴らの動向は気になるざるを得ない。
「むずかしいところね」
アリーシェは言葉と同じく、むずかしい顔をした。
足の速さを考えると追いつけないだろうし、そもそもどこへ行ってしまったかもわからない。普段であればそういった後処理も計算のうちで仕掛けるのだが、今回のような不意打ちではやりようがない。
歯がゆいばかりだった。
「余計な被害が出ないことを祈るしかないわ」
「神頼みかよ」
エリスも悔しそうにぼやく。
アジトをバックにザットが戻ってきたのは、そんな時だった。
「時間取らせちまってすまねぇ」
「気持ちの整理はついたか？」

ラドニスが訊ねる。ザットは強く、うなずいてみせた。
「ああ、もう心残りはない。改めて、これからよろしく頼む！」

◆

そのエリスたちに敗走した『モンスター』たちは、アジトからはるか離れたところまで来て、ようやくその足を止めていた。
「くそ！　なんなんだ、あいつら！」
動揺が収まり、次第に冷静さを取り戻していく。そこで生まれるのは、怒りと復讐心であった。
「人間どもめ……！」
その感情は、当のエリスたちではなく、『人間』という全体へと向けられる。
彼らにしてみれば個人の違いなどないのだ。人間は人間。そういう認識しかないのである。
もっともそれは、人間側にも言えることではあるのだが。
「……おい、人間がいるぞ」
メラメラと怒りの炎が燃え始めた時、彼らのうちの誰かがそう口走った。
ふもとに近い山道。そこを歩いてくるふたつの人影があった。
思ったことは、言わずとも全員一致だった。皆で攻撃的な笑みを浮かべる。
人間ならば誰でもいい。このウサを晴らすのだ。今すぐそうしなければ、気が済まない。
『モンスター』たちは迷わず、やって来るそのふたり組めがけて――。
若い男と、長い黒髪の女めがけて、一斉に飛びかかっていった。
翌朝。

山道に散らばる十数体もの『モンスター』の死体を発見した行商人は、驚きのあまり腰を抜かした。

断章「ありがとうと彼女は言った」

僕はひとりだった。

理由はひとつ。『モンスター・リゼンブル』だからだ。『モンスター』と人間との混血という呪いを受けて、この世に産み落とされたからだ。

もし彼女に出会わなかったら、きっと今頃はその呪いにとり殺されていたかもしれない。

まだ少年……子供と呼べる年齢だったが、僕はひとりで生きていた。

大きな町の片隅で、まるで人とは思えない、野良犬に毛が生えたような生活だった。

喜びも楽しみもない、ただ生きることに必死な日々。

もう少し年齢を重ねていたら、自ら死を選ぶという考えも浮かんでいただろう。それをしなかったのは、単にそれを知らなかっただけのことだ。

知らなかった故に、苦しみも大きかった。

光などどこにもない、闇に包まれた世界。

たとえて言うなら、僕の心はそれだった。

その生活に変化が起きたのは、ある日のことだった。

町の人間が、なにやら道端に集まっていた。

僕は少し離れたところから、その人だかりの中心をのぞき見る。

一両の馬車。

荷車に載った木製の檻。皆の視線は、その檻の中に注ぎ込まれていた。

僕の目にもそれが映る。
少女だった。
僕と同じほどの年齢の、黒い髪をしたひとりの少女が、檻の中に入れられていた。
それが彼女との出会いだった。
彼女の姿を見た時、僕の中に得体の知れない感覚が走った。
その感覚の正体を知ったのはずいぶんあとのことだった。『モンスター・リゼンブル』には、皆、第六感的に同胞を見分けられる能力が備わっているのだ。
彼女も混血種であった。
恐らくそれがバレて、どこかで捕まえられたのだろう。
馬車を取り囲む人々が放っているのは、敵意と嫌悪の眼差し。そして罵声。
僕は知っていた。人間は『モンスター』にひどく苦しめられている。彼らを憎んでいる。故に、その『モンスター』との混血など、人間は決して認めない。
消される。まるで腹いせのように、皆の前で、殺される。
かすかに記憶に残っている、兄と同じように。
彼女を乗せた馬車は、この町の町長の敷地内へと入っていった。
決行されるのは、明日か明後日か。そう遠くないうちだろう。
僕はその未来を想像し、恐怖した。
血にまみれた兄の顔がよみがえる。自分もいつかそうなるのではという不安がわきあがる。
しかし恐怖と同時に、僕の中にはある感情が芽生えていた。
彼女を助けたい。
理由もなにもなく、ただそうとだけ思った。

その日の夜。住人が皆寝静まった頃。僕は町長の敷地に忍び込んだ。
すぐに、裏庭で馬車を発見する。荷車も昼間のままだった。

僕は檻に駆け寄る。彼女がいた。
近くで見ると、彼女の体は傷だらけだった。髪も服もボロボロで、いたるところに乾いた血がこべりついていた。
僕は少しだけ息を呑んでから、彼女に声をかけた。
「逃げよう」
しかし反応はなかった。
彼女は座ったまま、まるで人形のように表情も変えず、ただ一点を見つめているだけだった。
「……ここにいちゃダメだ」
僕は構わず、木製の檻に手をかける。人間の子供には無理でも、『モンスター』の力を継ぐ子供には、そんな檻など造作もない。
彼女の手をひっつかみ、僕はすぐさまその場から逃げ出した。

敷地から出て。町からも出て。森に入っても。夢中で逃げる。
彼女は僕に引っ張られるまま一応走っていたが、やはり表情は変わらなかった。
町の明かりも見えなくなり、月明かりも消えた、真っ暗な森の中。
そこでようやく、僕は走るのをやめた。
荒くなった息を整える。
ふと、気付いてしまったのだ。

太い樹の根元に、並んで座る。周囲は完全に近い暗闇に包まれ、すぐ隣の彼女の顔がかろうじて見える程度であった。
その彼女は、いまだ仮面のように表情を変えない。言葉も発さず、必要以上に体も動かさず、ただそこに存在しているだけだった。
僕は深くため息をつく。
気付いてしまった。これから、どうすればいいのかわからない……ということに。
どこまで逃げる？　どこに逃げる？　逃げた先でどうする？　どう、生きる？

すべてがわからなかった。考えていなかった。途端に、底知れない不安が襲いかかってきた。

「……ごめん」

僕は彼女に、正直な気持ちを告げた。面と向かう勇気はなかったので、うつむいたままで。

「このあと、どうしていいのかわからない。どこに行くとか、どうするかとか、ぜんぜん考えてなくて……」

風で草葉が揺れる音。どこからか響く獣の遠吠え。ささやかな虫の鳴き声。

取り巻くすべてが自分の脅威に思えた。

「でも、君を放っておけなかった。あのまま殺されるかと思ったら、いてもたってもいられなくて……君の気持ちも聞かずに」

自分の思いはどうあれ、彼女の意志は違うのかもしれない。こんなこと望んでいなかったのかもしれない。

そのことにも、気付いてしまったのだ。

「だから……ごめん」

震えた声で伝える。声だけでなく、体も震えていた。

――その時。

震える手に、そっと温もりが覆いかぶさった。

僕はハッとして顔を上げる。

僕の手に置かれていたのは、彼女の手。そして彼女は、僕の顔を見つめていた。

目と目が合う。

唇が動く。

ありがとうと彼女は言った。

そのささやきを聞いた時、僕は泣き出していた。

僕の中のなにかが決壊した瞬間だった。

ずっと闇の中にいた。誰もいない、なにも与えられない、支えになるものすらない、暗闇に包まれた孤独な世界。

そこに、一筋の光が射した気がした。
手に伝わる温もり。かけられた言葉。
底知れなかった不安が嘘のように消えていく。夜の森も、もう怖くはなくなっていた。
誰かが隣にいてくれる。存在していてくれる。それだけのことが、なによりも嬉しかった。
誰かと触れ合える。見つめ合える。言葉を交わせる。その喜びを、彼女が与えてくれた。
光で心が満たされていく。
この光があれば。この光さえあれば。不可能なことなどないように思えた。
この光のためならば、他のなにをも犠牲にできる。
他にはなにもいらない。君だけでいい。
それがその時から僕の中にある、たったひとつの変わらない思いだった。

そして夜闇が去り、太陽がうっすらと顔をのぞかせる。
「生きよう」
僕は彼女と向き合って、再び率直な気持ちを口にした。
「まだなにもわからないけど……でも、ふたり一緒なら、なんとかなりそうな気がするんだ」
夜の時とは違って、陽光が彼女の姿を鮮明に照らし出す。
あまりキレイな格好とは言えなかった。しかしそんなことは、どうでもよかった。
「だから生きよう。僕と一緒に」
僕は言葉と共に片手を差し出した。
幼い手に、もうひとつの幼い手が重なった。
そして再び。
ありがとうと彼女は言った。

第四章「討て！　ヴォルトールランス」（1）

「だぁぁぁっ！」

という叫び声を上げながら、エリス・エーツェルはふっ飛ばされ、山の斜面を転がるように落ちていた。

「エリスっ！」

ちょうど真下にいたレクト・レイドが走り込み、弓を片手に彼女をキャッチする。

勢いでもろとも倒れそうになったが、背後にあった木が、それをなんとか持ちこたえさせた。

「無茶をするな！　力押しじゃ通用しない！　戦い方を考えるんだ！」

腕の中でほとんど逆立ち状態のエリスへ、早口でまくしたてる。

「それをすんのはお前らの役目だよ」

しかしエリスはろくに聞きもせず、地面へと飛び降りた。そして自分がまだ剣を握っていることを確かめると、

「そんでもって」

斜面の上へ向かって走り出す。

「無茶をするのがあたしの役目っ！」

決してそんな役目などない。とはいえ、無茶という自覚があるのは意外であった。

「ということはっ！」

と、斜面の上からエリスの様子をうかがいにきたザット・ラッドが、その言葉に呼応した。

「その無茶に付き合うのがオレの役目か！」

果たしてそれもどうだろうかと思うレクトであったが、今は構わず、木々の上を飛び回る巨大な『モンスター』へと視線を戻した。

個体差はあれど、たいてい『モンスター』というのは、人間よりひと回りほど大きい体躯をしている。その中で『ボス』と呼ばれる者は、さらにそのひと回りふた回り大きいという傾向がある。体の大きさがそのまま力の強さに直結しているためだろう。

だが今、上空を駆けるその者は。

エリスがこれまで見たどの『ボス』よりも、さらにひと回り以上も巨大であった。

まっすぐ立てば家をも越すだろうか。

赤茶色の、爬虫類を思わせる硬質な皮膚に、長く尖った口元。腕は体に比べて細く、脚と尾はそのぶん太くて大きい。背中から生えるコウモリに似た翼も巨大で、低空を飛ぶと空一面を覆ってしまうほどであった。

「ボス、左に！」

「見えている！」

肩口から聞こえるその声に応えるように、『ボス』はギラリとした目を左方へ向けた。

そして群生する木々の隙間から一瞬だけ見えた人影めがけて、その巨大な尾を叩きつけた。

危ういところで攻撃から逃れたアリーシェ・ステイシーは、やはり散開したのは正解だったと、自分の采配を肯定した。

木の陰に駆け込み、『魔術』の力を集中させながら上空をのぞき見る。

飛行する『ボス』の左肩に、通常サイズの『モンスター』が、一体だけちょこんと乗っていた。同じ種族らしく、その『ボス』を縮小したような外見だ。

『ボス』ももちろん厄介なのだが、肩にいるその手下の存在も、別の意味で厄介であった。

まずはそちらを討っておかないと勝ち目がないだろう。

アリーシェは木陰から飛び出しざま、『魔術』の力を解放した。

「ロックブレイド！」

「ぐっ！」

何本もの岩石の刃が脚部を貫き、『ボス』が苦悶の声を上げる。

それに気付いた手下は、すぐに対処の行動に出た。意識を集中し、体をほのかに発光させる。

「ヒーリングシェア！」

その光が『ボス』の体に移ると、脚部の負傷がみるみるうちに元通りに治っていった。

『治癒術』である。

その時手下めがけて矢が飛んできたが、手下は冷静に、片手に持った大きな盾でそれを弾き返した。

調子を取り戻した『ボス』が、攻撃がやってきた方向を鋭い瞳でねめつける。

自らが放った矢の行方を見届け、レクトは強く奥歯を噛んだ。

いくら『ボス』に攻撃を与えても、ああして即座に治療をされてしまう。

まずその回復経路を断つことが最優先とはわかっているのだが、幾度となく矢を射っても、ことごとくあの盾によって防がれてしまうのだ。

どうにかスキを突こうとするも、結果は同じであった。

恐るべき反射神経で反応されてしまう。

攻撃が弾かれるたびに、レクトの中で言いようのない焦りが高まっていた。

その正体は無力感である。

こうも攻撃が効かないと、知らず知らずのうちにクローク・ディールと戦った時のことがよみがえってくる。

あの時の悔しさを二度と味あわぬようにと己を磨いてきたつもりだったのだが、これではなにも変わっていないではないか。

ただあの時とは違って対抗手段の『魔術』もあるにはあるのだが、まだ力の制御が完璧ではなかった。いざという時以外に使うわけにはいかない。

そのことも、レクトの焦燥感をあおっていた。

レクトは理性で、その感情を抑えようとする。

奴らの集中力を乱すだけでもいいのだと自分に言い聞かせ、さらに矢筒から矢を引き抜いた。

「ちょこまかと！」

周囲を動き回る人間たちに対する苛立ちを、『ボス』は短く吐き出した。

眼下の山肌にはみっしりと木が並んでおり、緑の葉のせいで地面すらもまともに見えない。その隙間隙間からちょこちょこと攻撃が飛んでくるのだから、『ボス』のもどかしさはかなりのものだった。

その精神的な攻撃もアリーシェの作戦のうちであったが、次の行動は、彼女の予想にはないものだった。

「……領地をあまり乱したくはないのだがな」

そんな状況にシビレを切らし、『ボス』は強攻策に打って出る。

「致し方ありませぬ」

手下は足を踏ん張り、肩につかまる腕の力をより一層強めた。

『ボス』は上空から、地表近くまで一気に急降下する。そしてその尾で、周囲の木々を手当たり次第になぎ払い始めた。

障害物をなくすと同時に、隠れている人間たちをいぶり出そうと考えたのだ。

大嵐もかくやという勢いで、軽々と木々が吹き飛ばされていく。

しかしどんなに軽く見えようが、木は木なのである。人間からすれば、その光景は脅威以外のなにものでもない。

「なんてこと……！」

アリーシェは光り輝く防御用の『魔術』を前面に展開し、飛来す

る木々から自分の身を守っていた。
端でも当たってしまえば重傷は免れられないだろう。
彼女はその衝撃に耐えながら、他の皆の無事を祈った。

その『ボス』の行動に動揺するリフィク・セントランであったが、なんとか恐怖心を抑え込み、『魔術』の力を集中させることに専念した。
彼こそが、アリーシェが立てたこの作戦の鍵を握っている。
他の皆が分散し敵の目を引きつけているあいだに、リフィクが全力を込めた『魔術』で攻撃をするという手はずになっているのだ。
そのために、懸命に力を溜めているところなのである。
その時。そんな彼を狙うように、一本の木がうなりを上げて飛んできた。
細い幹ではあったが、長さがある。軌道は直撃コース。勢いもあいまり、当たったらひとたまりもないだろう。
しかしこういう時こそ、そばに控えていた彼の出番なのである。
リフィクの前方に、大斧を構えたゼーテン・ラドニスが躍り出た。
もともとは敵に気付かれた時に、リフィクを守る役目を請け負っていた彼である。まさか飛んでくる木から守る羽目になるとは思ってもみなかったろう。
ラドニスは武器を振り上げ、高速で飛来する木の側面を、なでるように叩きつけた。
絶妙のタイミングで加わった衝撃に、木の軌道がわずかにズレる。
木はまるでリフィクを避けるように地面に落ち、周囲の木々を巻き込みながら、大量の土と砂ぼこりを巻き上げた。

『ボス』が木々をなぎ払っているあいだは人間たちも攻撃してこないだろうと、肩に乗る手下『モンスター』は少し息をついていた。
首を回し、山頂――自分たちの住みか――に視線を向ける。
小賢しい人間たちの突然の襲撃によって、倒された多くの仲間が

あそこにいる。まだ息のある者が残っているのなら、治癒をして戦力に戻したいところではあるが……この人間たちの狡猾さは油断ならない。

それに『ボス』さえいれば、手こずりこそすれ、負けることなどありはしないのだ。

なにも焦る必要はない。

手下は意識を周囲に戻し、目を凝らした。

そろそろ慌てた人間たちが飛び出してくる頃だろうか。

その『モンスター』の考えは、半分ほど当たっていた。

当たっていないのは、慌てたという部分である。

「ムチャクチャやりやがって！」

エリスとザットのふたりは、猛然とその台風の目へと直進していた。

近くに木や岩が降ってこようがお構いなしである。

もっともザットは、脅威をものともせず疾走するエリスについていきながら、内心ひそかに戦々恐々としているのだが。

巨大な『モンスター』は木をなぎ払うため、ごく低空にまで下りてきている。それはすなわち、攻撃のチャンスでもあるということだ。

また上空へ昇られる前に、とことん攻めるしかない。

とはいえ、空中は空中だ。ちゃんとした『魔術』も弓矢も持たないエリスでは、攻撃したところでせいぜい足ぐらいにしか届かない。

まず攻撃を届かせる必要がある。そしてなにより、狙うべきはあの『治癒術』を多用するうっとうしい奴なのだ。

肩まではいかなくてはならない。

先ほどはそれに失敗して吹き飛ばされてしまったが、今は相手の意識も他へと向いているはずだ。

そういう意味でも好機なのである。

「ザーットっ！」

『ボス』の背後ほぼ至近距離にまで迫ったところで、エリスが後ろを呼んだ。
「あいさ！」
その声に応えて、ザットは足を止める。
エリスは数歩ほど走ってからターンをし、そのザットめがけて再び走り出した。
まるで体当たりでもするように、彼に飛びかかる。
ザットはしなやかに体をひねり、飛びかかってくるエリスの腕をつかんだかと思うと、その勢いを殺すことなく回転し出した。
「でぇぇぇぃっ！」
そしてその遠心力は上乗せして、彼女を『ボス』めがけて投げ飛ばす。
小石のように軽やかに飛んだエリスは、ゆうに『ボス』の背中の位置にまで到達した。
アクロバティックに姿勢を制御すると、ぶつかるように背中へとへばりつく。
そしてそのゴツゴツと隆起した肌を、ロッククライミングさながら、猛烈な勢いで駆け登っていった。
『ボス』の肩に乗っていた『モンスター』が、驚愕の顔で彼女を見た。
両者の目が合う。
『モンスター』がなにかを叫んだ、その瞬間。彼の横っつらに、矢が鋭く命中した。
苦痛の声が上がる。
それに気付いた『ボス』が、自分の肩口に視線を向ける。その時にはすでに、手下『モンスター』の足もとにエリスの左手がかかっていた。
彼女は素早くもう片方の手で、腰元のサヤから愛剣を引き抜く。
「オーバーフレアぁっ！」
ライトグリーンの切っ先から伸びた炎の刃が、手下『モンスター』

の胸部を深々と貫いた。

第四章（2）

手下『モンスター』は立つ力を失い、倒れるように『ボス』の肩から落下する。

「ガイス！？」

『ボス』は目を見張って、とっさに彼を受け止めた。

手の上に落ちたその者は、傷口に炎を宿しながら、滝のように紫色の血を流していた。顔にももはや生気はない。

『ボス』はその手をそっと握ると、代わって肩に立った人間へと横目を向けた。

「ぜぇぇいっ！」

エリスをさらに炎の刃で、『ボス』の首筋へ斬りかかろうとしていた。

しかし樹齢何百年という幹にも迫る、太くてたくましい首だ。たやすくは斬れないだろう。

刃が皮を斬り、肉へと到達しようとした時、『ボス』の反対側の手がエリスへと伸びた。

彼女をつかみ取らんばかりに大きく広げられる。

エリスはすぐさま炎の刃を消失させ、ひょいと背中側へ飛び下りた。

そしてその羽ばたく翼へ狙いを移す。

切っ先を真下に向け、肩甲骨のあたり――翼の付け根へと、体重を乗せて突き立てた。

噴水のように血が飛び出る。

「！？」

しかしその返り血をまともに顔面に浴び、エリスは思わずバランスを崩してしまった。

彼女を振り払おうと『ボス』が体をゆすったのもあいまって、そ

のまま真っ逆さまに落ちてしまう。
しかし、ただで落ちるような潔い彼女ではなかった。
「おぉおーにゃぁっ！」
落下しながらも、しがみつくように、『ボス』の脚部へ剣を突き立てる。
「フレアぁっ！」
そして再び炎の刃を発生させ、片足の内部を焼き斬り裂いた。
さいわいなことに、その往生際の悪い一撃が彼女の落下速度を大幅に殺す。
真下に控えていたザットが、無事にエリスを受け止めることに成功した。
「……ナイスキャッチ」
と、しばらくぶりに地面に足をつけたのもつかの間。ふたりの上に、大きな影が覆いかぶさった。
『ボス』も地面に降り、ふたりの前にそびえ立ったのだ。
「でかい……！」
圧倒されたからか、ザットは改めて外見的な感想を口にした。
巨大であるということは、それだけで根源的な恐怖を伴うものだ。
この至近距離では逃げるスキもないだろう。『ボス』は彼女らの命を手中にしたと確信しながら、目で圧殺するようにふたりを見下ろした。
「……よもやな」
息をつく間もなく、エリスは剣を構え直す。
「我らをこうも追い詰める人間がいようとは」
「だろうな。まぁてめぇも、そこそこは強かったけど」
言ってみれば、ノド元に刃を突きつけられているのも同じ状況なのである。だというのに悠然と言葉を交わしてみせる彼女を、ザットは困惑にも似た目でチラリと見た。
「だが、詰めが甘かったな」
「そう言うなって」

エリスは目線を、『ボス』のさらに上へと持っていく。
「……お互い様ってやつなんだから」
『ボス』のはるか頭上で、とても自然現象とは思えないような光が、まばゆいばかりに渦巻いていた。

リフィクの体が、夜空に浮かぶ星のように輝いていた。
それは表にあふれ出してしまうほど、彼の『魔術』の力が高まっている証である。
エリスが『ボス』の上から離れたという報告をラドニスから受けると、リフィクはすぐさまその力を解き放った。
「フラッシュジャベリン！」
彼を取り巻く輝きが消え、直後、上空に光の渦が現れる。
それに気付いたらしい『ボス』が振り向くが、すでにその時には遅かった。
渦巻く空から伸びた槍が『ボス』に落ちた瞬間、周囲に地震のような衝撃と激しい風がかけめぐる。
その余波が収まる頃には、戦いは幕を閉じていた。

胴体に大穴を開けられた『ボス』が、焼けた大地に倒れて絶命している。
その片手に包まれていた通常サイズの『モンスター』も、共に動かず息絶えていた。
そんな光景を少し離れてエリスとザットが眺めている。その表情は、達成感と疲労感がほどよく混ざっていた。
「無事？」
駆け寄ったアリーシェが、ふたりへと問いかける。
「近くにいたんでしょう？」
それは『ボス』の近くという意味でもあり、『魔術』が炸裂した近くという意味でもあるのだろう。

エリスは軽く両腕を広げ、「この通り」と短く答えた。
返り血まみれではあるものの、負傷と呼べるほどのものはない。
ザットも同じだ。
『ボス』が『魔術』に気付いたあのスキを突いて、ふたりは素早く退避していたのだ。恐らくギリギリのタイミングであったため、あと一秒でも長く留まっていたら今頃どうなっていたかはわからない。
とはいえ至近距離にいたおかげで『ボス』の注意を引き、『魔術』を直撃させられたのだから、結果的には最善の手を尽くしたと言えるだろうが。
「ご苦労様」
アリーシェはそんなふたりの行動を、微笑みをもってねぎらった。
そこへ、レクトとパルヴィー・ジルヴィアもやってくる。
レクトはエリスにひとことかけたあと、深刻そうな眼差しをアリーシェへ向けた。
「あの『モンスター』の使っていた『治癒術』……恐ろしく素早く、効果の高いものでしたね」
「体の基礎が違うもの。人間が使うよりも強力にはなるでしょうね」
アリーシェは苦笑いながら小さく肩をすくめる。
「灰のトュループが良い例よ」
その名を聞き、レクトの脳裏にあの時の光景がまざまざとよみがえってきた。
たしかに、町ひとつを消し去ろうという威力を人間が出せるとは到底思えない。
今さっきのリフィクの『魔術』も相当の威力ではあったが、それでも奴には遠く及ばないのだ。
人間と『モンスター』の力の差というのは、それほどまでに大きいものなのだろうか。
こうして、対抗できているのも事実であるのだが。
「……」

「で、またしてもお前は遊んでたわけか」
熟考しかけるレクトの背後で、エリスが茶化すような視線をパルヴィーに向けていた。
「またしてもってなによぅ」
パルヴィーは心外とばかりに口を尖らせる。
「ちゃんと役目果たしてたもん」
「どういう役目だよ？」
「その……囮とか。誰かがケガした時にすぐに治せるように、体力を温存しとくこととか」
「あやしいもんだな」
「むむむ……」
表面上は口ゲンカのようなやり取りではあるが、単にじゃれ合っているだけである。当初は戸惑ったザットも、それを理解してからは特に止めるようなこともしなかった。
その場へ最後に、リフィクに肩を貸したラドニスが歩いてくる。
リフィクは文字通りに全力を尽くしたためか、ぐったりと疲労しきっている様子だった。
「期待以上の結果だったわ」
そんな彼へ、アリーシェが弾んだ声で感嘆を送った。
「騎士団の中でも、あの規模の『魔術』を放てる者はそうはいないはずよ。すばらしいわ」
「まっ、今回はお手柄だったな」
割って入るようにエリスも言う。
「いっ、いや別に……そんなほどでも……」
リフィクは背負われたまま、困ったように照れ笑った。

◆

ログハウスのように丸太で組まれた建物が大半を占める景色が、

窓の外に広がっていた。
看板に記された村の名は『リンツァー』。エリスら七人はその一角にある食堂で、しばしの羽休めを堪能している。
時間的に朝食と昼食のあいだのせいか、他のテーブルにはまったく客がいなかった。時間帯に関係なくもともと繁盛していない店という可能性もあるが、そういう詮索は無粋というものだろう。
「私たちは『コープメンバー』に会ってくるわ」
食事も終わりかけた頃、アリーシェがそう切り出した。
「こんなとこにもいんのか？」　エリスが訊ねる。
「そのはずだけど」
彼女ら銀影騎士団の協力者は、どうやら思う以上に至るところにいるらしい。団員たちがバラバラに活動できるのも、そういう存在があればこそなのだろう。
「あたしは何しよっかなー」
エリスは頬杖をついて、視線を宙に泳がせた。
「旅支度は急がなくてもいいわよ。少なくとも、出発は明日以降と考えているから」
アリーシェが皆にも目を向けながら、ざっくりとした予定を口にしていく。
「地図を見るに、この先は大きな森が広がっているみたいなの。しばらくは村もないはずだから、ここでたっぷりと休息をしておくつもりよ」
年齢のせいか人柄のせいか、この一派の主導権は自然とアリーシェが握る形になっていた。そつなくこなし手際も良いため、エリスを含めた全員からも特に異論は上がっていない。
エリスらと出会う前も、恐らくこういう形であったのだろう。
「……散歩でもするかな」
彼女の話を聞いていたのかいないのか、エリスは視線を窓の外へとかたむけた。

エリスはその宣言通り、子分ふたりを引き連れてぶらぶらと村の中を闊歩していた。

丸太組みの家が多いのは大きな森が近いからだろうか。緑や花もそこそこあり、一見はのどかな雰囲気をかもし出している。

しかしよくよく見てみると、包帯を巻いている村人が目についたり、庭の花壇代わりのように真新しい墓石があったり、そこここの建物に修復のあとが見られたりと、やはり凶者の爪痕が残されているようだった。

そういう諸々をひっくるめて、ここはごく平凡な村だと言えるのかもしれない。

「あの『ボス』が目の前にまで来た時、正直オレは固まってただけだけど、姉御は一歩も引かずにやり合ってた」

ザットは隣を歩くリフィクへ、先の戦いの話を熱弁していた。

「やっぱり姉御はすげぇ……！」

「はぁ」

生返事をするリフィク。

すごいかどうかはともかく、である。リフィクはその光景を簡単に思い浮かべることができた。

そして、想像だけでハラハラする。またそんな寿命の縮むようなことをやっていたのか、と。

エリスを先頭に、練り歩いているのは三人だけである。

アリーシェとラドニスとは前言のように『コープメンバー』のところへ行くため別れ、残るレクトとパルヴィーとは、あの食堂を出たところで別れたきりだった。

彼らも散歩に誘ったものの、やんわりと断られてしまったのだ。

リフィクはその原因がザットにあるのではないかと思っている。

表面上はそうでもないが、あのふたりは彼のことをまだ完全には受け入れていないようなのだ。

彼がこの集団に加わった直後に比べればある程度は距離が縮まっ

ているはずだが、それでもまだ壁を感じざるを得ない。
とはいえそれは時間が解決してくれる問題であろうと、リフィクは特に仲立ちのようなことは行わなかった。
「あの、ラッドさん」
今度はリフィクから話しかける。
リフィクのほうが年上であるのだが、敬語を使うのは彼の性質というやつだろう。
「ザットでいいって」
ザットは快活に笑って、冗談めかしてリフィクの肩を抱いた。ちなみに身長は彼のほうが高い。
「子分同士、遠慮はナシだ。喋り方も普通でいいぜ」
同士とは言っても自ら望んでなった者と、うっかりなってしまった者という違いはあるのだが。
「僕にとっては、これが普通なので……。では、ザットさん」
リフィクは真面目じみた口調で二の句を継ぐ。
「なんだ？」
「『モンスター』と戦うのは……怖いですよね？」
「そりゃ、こえーよ」
ザットは、逆に意外そうな顔をして答えた。
「決まってんだろ」
「ならどうして、『彼ら』と戦おうと思ったんですか？」
「ん……それはな、あのまんま生きてくほうが怖くなっちまったからだよ」
ザットは少しだけ考えたあと、それを口にする。
「……っていうのは、なんつーか、あとから出てきた理由で」
「はぁ……？」
「本音の本音を言うと、オレの前にあの背中があったからだ」
声のボリュームがやや下がる。視線はまっすぐ、先を歩くエリスへと注がれていた。
「背中……」

リフィクも同じものを見る。性格とは裏腹に少女らしい小さな背中が、そこにあった。
「あの背中が、オレの脳裏に焼き付いてる。あの背中に追いつきたいと思った」
ザットは清々しいまでの表情で言い切る。
「だからだよ。だから、怖いのだって我慢する」
年下の、しかも少女を目標としているというのは、男として情けなく思う部分もあるだろう。だからこそそれは本音なのかもしれないとリフィクは思った。
「お前はどうなんだ？」
今度はザットが聞き返す。予期していなかった質問に、リフィクは「えっ？」と目を丸くした。
「あるだろ？　理由」
「それは……」
……ある。最初こそ状況に流されていたが、最近は、少なからず戦う理由を胸に抱くようになっていた。
しかしリフィクは言葉を詰まらせる。
本音をさらけ出してくれた彼に対して、こちらも本音で返したかった。
だができなかった。
「それは……単に、エーツェルさんに言われたからで……」
ノド元まで出かかった言葉は、再び胸の奥まで飲み込まれてしまう。
「ふーん、そんなもんか。まぁ姉御に言われりゃぁ子分としては聞くしかねぇわな」
ザットはその答えで納得したのか、からかい気味に笑ってその話を締めくくった。

第四章（3）

広場にそびえる大きな樹の根元に、数人の子供が集まっていた。
一様に困り顔で、樹を見上げたまま立ち尽くしている。
「よう、どうした？」
それを見かねたエリスが、まるで仲間のようにずかずかと割り込んだ。
初対面のくせに馴れ馴れしいことこの上ない人間に若干の警戒心をうかがわせる子供たちだったが、その中のひとりが、すっと樹の上を指差す。
「……はは－ん」
指の先に目をやり、エリスはすぐさま状況を理解した。
「ボールですか？」
同じように見上げていたリフィクが、誰にでもなく呟く。
その樹の枝に、布のボールが引っかかっていたのだ。
おおかた遊んでいるうちに引っかかってしまい、取ろうにも取れずに困り果てていたところだろうか。
子供どころか、大人でも届かないような高さである。幹はあまりに太く、手掛かりも見つからない。登るというわけにもいかないだろう。
エリスは、
「よし、あたしが取ってやるよ」
と軽く引き受けてから、どうしたものかと首をひねった。
順番が逆なような気がしなくもないが。
辺りを見回したエリスは、この中で一番背の高いザットに目をつける。
「ザーット！」
「へい！」

最初からそのつもりだったのか、ザットはすぐさまボールが引っかかっている真下へ歩み寄る。
そして勢いよくジャンプをするが……何度挑戦しても、もう少しというところで手が届かなかった。
子供たちから露骨なため息が上がる。エリスからも上がった。
「すまねぇ、力不足で……」
ザットはこの世の終わりのように、がっくりと肩を落とす。
たかがそんなことくらいで……と思うリフィクだったが、それは言わなかった。
代わりに提案を口にする。
「肩車とかすれば届くんじゃないでしょうか？」
「それだっ！」
と、エリスはひらめき顔をした。
下になれ、とザットをしゃがませて、その首のうしろにまたがる。
役目がまだあったことで元気を取り戻したザットは、彼女を乗せたまま軽々と立ち上がった。
さすがに高い。
今度は届きそうだという気配に、子供たちはわっと盛り上がった。
「……もうちょっと前だ、もうちょっと前」
頭上からの指示に、ザットはしっかりとした足取りで細かく位置調整をしていく。
ボールが取れるのも時間の問題だろうと、誰もが思った。
しかしである。
はたから見れば順調に行われていたそれだが、水面下では、とある問題が勃発していた。
「……」
ザットは、自分の胸が異様に高鳴っていることに困惑していた。
ひそかに落ち着かせようとするが、到底できるはずもない。
その原因は明白だ。
肩車をしているということは、彼の顔を、エリスのむき出しの太

ももが両側から挟んでいるということなのである。恐るべき無防備さで。そして後頭部には、だ。

彼も彼とて若さがほとばしる年頃である。そんな状態で平常心を保てというのも無理な相談だろう。

できればやる前に気付きたかったところだ。

「行きすぎだ、ちょっと下がれ」

真下で荒波がうねりまくっていることも知らず、エリスは真上だけを見つめている。

「もう少し左……そこだ」

ベストポジションにたどりつき、枝に引っかかっているボールめがけて、エリスはグッと腕を伸ばした。

すると無意識に全身に力が入ったからか、一緒に足も閉じてしまう。

「……！」

その甘美な締めつけが、ついにザットの沸点を超えさせてしまった。

「ぬおりゃぁぁっ！」

ザットはほとんど無意識に、エリスの体を投げ飛ばしていた。

地面に打ちつけられたエリスは、「ぐえっ！」とカエルのような声を上げた。

「……？」

リフィクも子供たちも、わけがわからずぽかんとする。

ザットは、ぜーはーぜーはーと息を荒くしながら、ヒタイの汗を腕で拭った。

「なにすんだよっ！？」

エリスは強打した腰を押さえながら、彼に激しい剣幕を浴びせかける。

「もう少しで取れるところだったってのに！」

「危ないところでしたっ！」

ザットはそれ以上の勢いで言い返した。

「もう少しで、オレの野生が目覚めるところだったんでした！」
「はぁ？」
「……申し訳ねぇ、姉御。とにかくこの方法は危険です」
いろいろな意味で。
ザットは言いながら、リフィクへと視線を移した。
「おいリフィク、お前が上に乗れよ」
「えぇっ！？」
予想していなかった展開に、リフィクは目を丸くする。
「なっ、なんでですか？」
「それが一番安全だからだよ」
いろいろな意味で。
「い、いや、でも、僕は……重いですし……」
まるで乙女のような言い分で辞退しようとするリフィクである。
しかし子供たちの期待の込められた眼差しを裏切ることはできず、しぶしぶ承諾する運びとなった。
エリスとリフィクとでは身長も体重もかなり違うはずだが、ザットは大差ないように軽々と持ち上げてみせた。
ボールは簡単に取れた。

「最初からああすりゃよかったんだよな、ったく」
エリスはまだ腰をさすりながら、村の散策を再開した。
とはいえこれといった面白いものがあるわけでもないので、なだらかに時間が流れていく。
途中『モンスター』のことを聞くと、森の中に住んでいて、この村へもたまにやってくるという情報を得ることができた。
さいわい作物の育ちが良い土地のため、蓄えている食物を差し出すことで大きな争いを避けているという。
そろそろグルリと回ったかなという頃、ばったりとアリーシェとラドニスに出くわした。
用事はもう済んだらしい。

「目的地ができたわ」
出会い頭に、アリーシェがそう告げる。表情は普段と比べても何段も明るかった。
「森を北に抜けた先にある港町『レタヴァルフィー』。そこに、私たちの仲間が集まるの」

宿屋とひとくちに言っても、やはり多種多様な営業方針がある。豪華な食事を提供するところや、部屋の居心地を最重視するところ。中には併設された酒場で、無料でショーを鑑賞できるところもある。
旅人の多い時世で、宿屋同士の競争も激しいのだろう。
一行が寝床と決めたその宿屋は、そんな競争とはまったくの無縁にあるようだった。
受付を通った先、大部屋に二十個弱のベッドがぎゅうぎゅうに並んでいる。
ただ、それだけなのだ。
ひとことで言うなら雑。
サービスもなにもあったものではないが、その雑さに見合う料金設定がなされているため、一定の需要はあるのかもしれない。
その一角の隣り合うベッドに、アリーシェ、パルヴィー、レクト、リフィクの四人が腰をかけていた。
エリスとラドニスは外で、いつものようにウッドブレードをぶつけ合っている。最近はその鍛錬にザットも付き添っているようだった。
「私たちの目的に、他の皆も賛同してくれているみたいなの」
アリーシェは、周囲に宿泊客の姿もなかったため遠慮なくレクトとパルヴィーに『コープメンバー』から得られた情報を話していた。
ちなみにこのふたり以外にはもう報告済みである。
『モンスターキング』を打倒しようとしていること。そのための

協力をしてほしいこと。アリーシェはそれを、『コープメンバー』を通じて銀影騎士団の仲間たちへと伝達していた。

その返答を、この村で受け取ったのである。

「さすがに全員とまではいかないけれど、それなりに賛同者が現れてくれたわ。共に、『キング』を討とうという者たちが」

アリーシェの表情は、いきいきと輝いていた。

普通の『モンスター』と戦うよりもはるかに危険な行動のため、批判こそされ賛同は少ないだろうと覚悟していたのだ。

だというのに、名乗りを上げる者が続々と出てくれたのである。

中でも騎士団の重鎮、豪傑オーランド・ターナーが支持してくれたことが大きかった。

バカげたことをと一笑されてもおかしくないことを、事実上のトップにも認められたのだ。

それが嬉しいのだろう。

「すごーい」

「仲間が増えるということですか」

報告を聞いたパルヴィーとレクトも、驚きと嬉しさとをミックスさせた表情で喜んだ。

「えぇ、そうよ。そして、その合流場所がここ――」

ベッドの上に広げた地図の一点を、アリーシェが指差す。

「『レタヴァルフィー』。『イーゼロッテ』にも負けないくらい大きな町よ」

その町は、現在地の『リンツァー』からはるか北の海岸線に位置していた。その距離を見て、レクトは小さく息を吐く。

「遠いですね……」

あいだに広大な森があることも計算に入れると、十五日で着ければ御の字といったところだろうか。

さらに途中の道のりに村を示すマークがほとんど記されていないため、実際は考えるよりももっと厳しい旅路になるだろう。

「だけど、合流できればこれほど心強いものはないわ。強行軍をす

る価値もあるはずよ」
それはレクトも同意であった。
アリーシェやラドニスに匹敵する戦力が増えるとなれば、それだけで戦闘にもグッと余裕が生まれるだろう。大勢であればあるほど、精神的にも楽になる。
「そうですね」
レクトは強く、うなずいてみせた。

◆

目の前に広がっていたのは、樹の海とも呼ぶべき光景であった。
「おーー」
エリスはその感動を、ひどく端的に表した。
村を発ってからおよそ一日。
充分の休息が功を奏したのか、足取りはかなり順調であった。
深い森をひたすら歩き、見通しの良い場所に出たところで、一行は休憩のため足を止めた。
どうやらそこは高台になっているらしく、切り立った崖のようなところから森を一望できた。
その崖の先端に立っているエリスである。
地図でわかってはいたものの、その森はとてつもなく巨大であった。
一望しても、全景が見えないのだ。前はおろか右を向いても左を向いても、その終わりがないのである。
ただ延々と、どこまでも緑の絨毯が続いているだけ。
故郷にいた自分には想像もできないような景色だろうなと、エリスは思った。
「遊んでるのはどっちなんだか」
そんなエリスのもとへ、パルヴィーが皮肉的な声を引っ下げてや

ってきた。
彼女の背後では、すでに他の面々が食事の準備に取りかかっている。
リフィクは『魔術』で水を発生させて野菜を洗い。アリーシェとレクトは馬に積んだ荷物から調理道具や食器を出し。ラドニスとザットは、道中で捕まえた子鹿を慣れた手つきでさばいていた。
文句を言いにきたパルヴィーも、薪で使う手頃な枝をいくつも胸に抱えている。
「……めんどくせーな」
エリスはもう少しその大自然を眺めていたかったが、仕方なくその輪の中に入っていった。
面倒ではあるが、食事に一刻も早くありつくためである。

第四章（4）

毎回の食事は当番制である。

といっても準備をするのは全員で、食材と相談して「なにを作るのか」を決めるのが、栄えある当番の役目なのだが。

今回の当番であるアリーシェが選んだのは、オーソドックスなカレーであった。

グルリと石で囲んだ焚き火、その上にかけられた寸胴鍋から、白い湯気と刺激的な香りが立ち上っている。具材は一口大に切ったニンジン、タマネギ、ジャガイモ、子鹿の肉といったところだ。

それを別の鍋で炊いたライスと一緒に、適量それぞれの皿に取り分ける。

テーブルなどはないので、適当な岩や切り株、あるいは地べたに座って、思い思いに空腹を満たし始めた。

「食いたくねぇっつってんのに、なんで入れやがるかなぁ」

エリスはしっかり食べながらも、ぶつぶつと文句をこぼしていた。味に文句はない。あるのは、入っている具材にである。

エリスは皿の中にニンジンを発見するたび、それを隣りに座るレクトの皿へとせっせと運び出していた。

すでに慣れているのかあきらめているのか、彼からは特に反応はない。

「ちょっと！」

代わりと言ってはなんだが、向こう隣りに座るパルヴィーから非難が飛んできた。

「その……直接口につけるスプーンで、口に入れるものを、移したりしないでよ」

「なんでお前が言うんだよ」

「とにかく、好き嫌いしないで食べなさいよねってこと」

「別に嫌いなわけじゃねーよ。食べたくねーだけだ」
それを世間的には嫌いと言うが。
「いや、俺はかまわないよ。嫌いでもないし」
レクトは仲を取り持つように、そのニンジンを食べてみせた。
しかしパルヴィーが気になるのは、そういうことではなかった。
「そうじゃなくて……あの、間接的なアレが……。間接アレ的なアレが……」
「はぁ？」
パルヴィーの言い方が要領を得ていないために、エリスもレクトもなにを言っているのかわからない顔をする。
しかしそもそも、幼なじみというやつはそういう意識までなくなってしまうものなのだろうかと、パルヴィーは思った。
「……ところでふたりはさ、昔から仲良かったんでしょ」
ひとりで勝手に意識していたのがバカらしくなったからか、話題を変える。
「どのくらい？」
「なんだよ、どのくらいって」
エリスは聞き返しながら、またひとかけらニンジンをレクトの皿に移した。
パルヴィーはその手をひっぱたいてやりたくなったが、それは想像だけに留めておいた。
「だから、他にも友達はいたわけでしょ？　そういう他の人と比べて、ふたりはどれくらい仲良かったのってこと。どのくらい会ったり、話したり、遊んだりしてたかって、そういう」
「……『どのくらい』っつわれてもな」
人と人との関係の深さを言葉で表せというのは、なかなかに難題だ。特にこのふたりに関しては、それは顕著だった。
「一緒に暮らしていたからな。他の友達よりは、もちろんそういう機会は多かったけど……」
レクトがさらりと、爆弾を投下する。

それはパルヴィーの直上で盛大に爆発した。
「えええぇぇぇーっ！？」
パルヴィーは思わず立ち上がって声を張り上げた。皿からカレーが落ちなかったのは奇跡だろう。
「えっ、い、一緒に暮らしてたって、ど、どどういうことっ！？」
「そのままの意味だけど……」
レクトもエリスも、きょとんとして彼女を見上げている。なにをそんなに驚いているのだろうと言わんばりに。
そんな視線をもどかしい心境で受けるパルヴィーである。
「……い、いつから？」
立ち尽くしたままで訊ねた。
「いつからかな？　だいぶ子供の頃だったと思うけど」
「ど、どうしてそうなったの？」
「たしか……俺の両親と、エリスの亡くなったご両親が仲が良かったからだとは聞いたことがある。それで自然と引き取る形になって」
「へー、そうだったのか」
と横で、むしろエリスが初耳といった顔をした。
「……い、いつまで暮らしてたの？」
パルヴィーとしては、それが最も気になるところであった。
子供の頃だけというのなら、まぁいい。気にするほどでもない。幼き日のささいな思い出だ。
だがそれ以上ということになれば、彼女の中では大問題になる。
「村を出るまでだよ」
結果は後者であった。
「さ、最近ってこと……？」
「ああ」
「それまでずっと？」
「ああ」
「ひとつ屋根の下で？」
「ああ……」

「毎日寝食を共に？」
「ああ……」
「うぅっ……」
パルヴィーは立ちくらみを起こしたかのように、へなへなと元の位置に座り込んだ。皿からカレーが落ちなかったのは、奇跡だろう。
このふたりのあいだに流れる、やけに親密で自然体な空気。その正体がわかった気がした。
親交の深さに時間は関係ないなどと言われることもあるが、いくらなんでも限度というものがある。
それはパルヴィーにとって、あまりにも高い壁であった。
「一番仲が良かったのは、セルスかな」
「んー、あたしはリンだな」
打ちひしがれている彼女をよそに、ふたりは自然と旧友談義に花を咲かせていた。
小さな村故、男女を問わず同年代の子は皆幼なじみなのだ。
レクトは、エリスに負けず劣らず活発な少女を思い出し、ふっと口元をゆるませた。
「たしかに。そんな感じはした」
しかしそんな微笑ましいやり取りを、穏やかには聞いていられないパルヴィーである。
スプーンを握りしめ、だだをこねるように割り込んだ。
「思い出話禁止ぃっ！」
「お前が言い出したんじゃねーか」
エリスから当然の答えが返ってくる。が、それをものともしないほどのエネルギーが、今の彼女にはあった。
「と、に、か、く！　き、ん、し、な、の！！」

元気な若者組とは対照的に、年長組は優雅なものだった。
「ごちそうさまでした。おいしかったです」

食べ終わったリフィクが、味付けを担当したアリーシェへ笑いかける。

今のところ、彼女の作る料理に外れはなかった。なんとも欠点のない女性である。

「お粗末様」

アリーシェはにこやかに答えた。

「この辺りがトウフを作っていないのが残念だったわね。調味料はそろっているから、あとはトウフがあれば『マーボーカレー』ができたのに」

「なんだ？　それ」

とエリスが、耳ざとく料理名を聞きつけた。

「知らない？　簡単に言うと、カレーとマーボードウフを合わせたようなものよ」

「ふーん。うまいのか？」

「そうね。絶品よ。ふたつの料理のおいしさが、二倍ならぬ二乗になったってところかしら」

「はー……」

彼女を反応を見ていたザットが、意外そうに質問した。

「姉御は食べたことないんですか？」

「ねぇよ」

「えぇっ？」

ザットの驚きに、逆にエリスのほうが驚く。

「なんだよ？」

「もったいないわね」

「もったいないです」

「もったいないな」

アリーシェ、リフィク、ラドニスが口々に言った。

それほどまでにポピュラーな料理なのだろうか。

「みんなして言いやがって……！」

なんとなく悔しさを感じるエリスである。これまでも何度となく

あったが、周囲が当然のように知っていることを自分が知らないというのは嫌なものなのだ。
「たしかに、あれは食べたほうがいいな」
ついにはレクトまでもがそんなこと言い出した。エリスはキッと彼をにらむ。
「お前だって食ったことないだろ！」
故郷の村には、そんなこじゃれた料理などなかったはずだ。
しかしレクトは、「いや」と首を横に振った。
「少し前に寄った町で食べたよ。彼女に誘われて」
言いながら、隣に座るパルヴィーへと目を向ける。
自然とエリスの目も彼女に向けられた。
「あたしも誘えよっ！」
「バカじゃないの？」
パルヴィーは口を尖らせたまま、そっけなく言い捨てた。
エリスを一方的にライバル視している彼女からすれば、たしかに誘うわけがない。
「……けっ！　なんだよなんだよっ！」
レクトにも裏切られ（曲解だが）、自分ひとりだけが知らないというこの状況に、エリスのヘソは完全にねじれ曲がってしまったようだった。
「いいさいいさ、そうやってめぇらは、トウフで朝まで語り明かしてろよっ！」
よくわからない捨て台詞を残して、エリスはその場を立つ。
愛剣だけをひっつかむと、つかつかと歩き出した。
「どこ行くんですか？」
リフィクが訊ねる。エリスは、
「散歩！」
とだけ背中で答えた。そのまま草木の密集するところへ入っていく。
食べ物の恨みは恐ろしい、などという言葉はよく聞くが、たかだ

か一品を食べたことがないだけでここまですねる奴もめずらしい。
アリーシェはほんのり苦笑して、ザットに振り向いた。
「ザット君。片付けはいいから、エリスさんに付き合ってあげてきて。大丈夫だとは思うけど、もし遭難したら大変だから」
いくら日中とはいえ、この深い森の中をひとりで歩かせるのは不安が伴う。そう遠くまでは行かないとしてもだ。
「わかりやした」
ザットはすぐに、空になった皿を足元に置いて立ち上がった。

◆

薄暗闇を、激しい息づかいが流れていく。
その少女は、懸命に逃げていた。
草木をかきわけ、肌が傷つくのにも構わず、ただひたすらに足を動かしていた。
背後から迫る脅威から逃れるために。
自身を取り巻く恐怖から逃れるために。
森の中を必死に走っていた。

◆

「姉御、そろそろ戻りましょうや」
ザットの気遣う声も、ずんずんと進む背中はまったく聞く気がないようだった。
広く枝を伸ばした高い木が、ところ狭しと並んでいる。そのため深いところへ行くと、日中だというのに不気味に薄暗かった。
そして高く長い草も多いため、視界が悪く歩きにくい。
すでに一日近くはそんな森の中にいるので、慣れたといえば慣れたのだが、やはり人数が少なくなると心細さが増してくる。
精神的なものだろう。

とはいえ彼の前にいるこの傍若無人少女は、たったひとりでも森を踏破しそうな勢いであったが。

「迷ったら命取りですぜ」

半分はなだめようと言っているザットだが、半分は本気である。それほど歩いていないはずだが、すでに皆がいる場所は見えなくなっていた。振り返っても木があるだけである。

長らく山に慣れ親しんでいたザットなだけに、自然の脅威というものも熟知している。こういうところは、用心深いくらいで丁度いいのだ。

「……なんであたしの村には『マーボーカレー』がなかったんだよ……」

失望気味に呟くエリス。口調は深刻にも聞こえるが、内容はこの上なくくだらない。

「そんなうまいもんがさ……」

「ま、まぁ、地域によって文化の違いってのがありますからね。たまたまじゃないすか」

一応なぐさめるザットである。

それだけ田舎だったってだけでしょう、と言えれば早いのだが。

「はぁーーー……」

エリスは深く、長いため息をついた。

ため息をつきたいのはこちらだ、という心境のザットだ。いまだかつて遭遇したことのない落ち込み方に、どう言葉をかけていいのかわからない。

ザットは助け舟を求めるように、ふとあさっての方向に顔を向けた。

自分よりもはるかに長生きをしているこの木なら、こういう時にふさわしい言葉を知っているのだろうか。

そんなことを思った時である。

「だっ……！」

という短い声を聞いて、ザットは視線を元に戻した。

一瞬、なにが起きたかわからなかった。

「……！？」

すぐ前方にあったはずのエリスの姿が、視界から跡形もなく消えていたのだ。

第四章（5）

「姉御ーっ！」
と叫ぶ声が、エリスの意識を現実に引き戻す。
目を開けた彼女が見たのは、高く続く青空だった。
「……」
「姉御ーっ！！」
ザットの声がより鮮明に聞こえ出す。
仰向けに倒れていたエリスは、むっくりと起き上がった。
「いたた……」
体中がピリピリと痛かったが、とりあえず周囲を見回してみる。
相変わらずの森だ。
ただ先ほどまでと違うのは、エリスのすぐ横に、崖と呼んでも差し支えないほどの急斜面が高くそびえ立っていることだった。
「大丈夫ですかっ、姉御っ！」
声ははるか上方から聞こえている。
見上げてみると、その斜面の頂上にザットの顔がうかがえた。
しかし見えるのは顔だけで、体がある部分は高い草でびっしりと覆われている。彼であれということは、エリスなどは頭が出るかも怪しいところだろう。
そこでエリスは、ようやく自分の置かれている状況を思い出した。
「……落ちたのか」
いくら草が多くて視界が悪かったとしても、あまりにマヌケすぎる。
「ケガはないですかっ！？」
その言葉にエリスは、改めて自分の体を見下ろしてみた。
全身すり傷や切り傷だらけで、恐らく打撲もあり、血も出ていたが、ケガと呼ぶほど大きな負傷はなかった。不幸中の幸いというや

つだろうか。
「大丈夫だーっ！」
叫び返すエリス。
それに安心したのか、ザットの声から緊迫感が消えていった。
「今ロープかなにか持ってきますっ！　待っててくだせぇっ！」
この高さとこの急角度。たしかに自力で登るのは困難だろう。右にも左にも、そんな崖じみたものが続いている。
「おーっ、頼むっ！」
ザットの顔が引っ込む。
「……」
エリスはとりあえず、大きく息をついた。
「なんか落っこちてばっかだな」

ガサガサと、草をかきわける足音が聞こえてきた。
エリスはすぐに腰の愛剣に手をかける。
それが崖の上から聞こえたならよかったのだが、あいにくその反対側から聞こえてきたのだ。
音のリズムは早い。その、何者かは走っているのだろう。そして近づいてくる。
エリスは野生動物の姿を想像して、即座に動けるように身構えた。
次の瞬間、草むらから小さな影が飛び出す。
「……！？」
しかしそれは、エリスの想像の選択肢にもないようなものだった。
ひとりの人間……少女だ。
年の頃はエリスの少し下といったところだろうか。体も服も、薄汚れたりしてボロボロだった。
なにやら息を荒くしている少女は、驚いたような目でエリスは見る。
驚いたのはエリスも同じだ。まさかこんな森の中で、人間と出く

わすとは思わなかった。
すっと体の力が抜ける。
「おどかすなよ」
と声をかけた瞬間、その少女は再び走り出してしまった。
エリスの前を横切り、また別の草むらの中に入っていく。
姿がなくなるまで、振り返りもしなかった。
「……なんだ？」
その反応に、エリスは首をかしげる。アイサツくらいしていってもよさそうなものを。
とはいえ明らかに、普通の様子ではなかった。
格好もそうだが、なにやらひどく必死な様子だったのだ。
あの表情も、もしかしたら驚いていたのではなく、怯えていたとも取れる。
たとえば……なにかから逃げていたとかで。
……もしそうだとしたら、なにからだろうか。
それほどまでに恐怖するものから？
ピンと、エリスの脳裏にひとつの存在が浮かんできた。
そしてそれは、当たっていた。

再び聞こえてくる、草葉を揺らす音。
先ほどのがかきわける音ならば、それは踏みわける音といったところだろう。
大きく、激しく、そしていくつも重なり合っている。
「！」
やがて少女が飛び出してきたのと同じ草むらから、予想通りのものが現れた。
『モンスター』……！
全身を白い、ふさふさとした羽毛が覆っている。口は尖ったくちばし。目は小さいが鋭い。そして頭頂部には、赤いトサカのようなものが見て取れる。

あえて言うなら、『ニワトリ』に似た外見の種族であろうか。
それが五体。それぞれ刀剣類を手にしている。
彼らの姿を見た瞬間、エリスは迷わず剣を抜き放っていた。
ライトグリーンの刃が、木漏れ日を反射して宝石のように輝く。
「おい」
と『モンスター』のうちの一体が、エリスを目に入れて口を（くちばしを）開いた。
「ガキを見なかったか？」
そして訊ねる。質問ではなく尋問のような口調だった。
意外な対応に一瞬だけ面を食らうエリスだったが、すぐにその答えに思い至る。
彼らが言っているのは、まず間違いなく先ほどの少女のことだろう。
それを追いかけていると。
ならば素直に答えるわけがない。
「さっきカレーを食ったってことですら、てめぇらには言いたかねぇな」
その反応に『モンスター』は「ちっ」とツバを吐き出し、それきりエリスを視界から除外した。
「ハインとターススラーはあっちを探せ！　オレたちはこっちを探す！　絶対に逃がすなよ！」
そして『モンスター』たちは二手に別れて、それぞれ左右に走り出した。
不幸なことに三体の組が向かったのが、例の少女の消えていった方向だった。
「……」
あっさりと素通りされてしまったエリスは、拍子抜けしたように剣を下ろした。
「あいつら……！」
詳しいことはよくわからない。わからない……が、『モンスター』

に追われている少女がいる、ということだけはわかった。
つかまったらどうなるのかは想像に難くない。
「……しょうがねぇな」
これがもしレクト辺りであったなら、まず皆と合流してから事態に当たるだろう。しかしそこまで待っていられないのがエリスである。
崖上に一度だけ視線をやってから、エリスは迷わず駆け出した。
例の少女が入っていった草むらへと。

あるいは彼女がもう少しだけ辛抱強い性格であったなら。もう少しだけ優柔不断な性格であったなら。状況は変わっていたかもしれない。
その場にザットが戻ってきたのは、そのすぐあとのことだった。

◆

「本当にここで間違いないの？」　アリーシェは、誰もいない崖下をのぞき込みながら問いかけた。
「間違いねぇです」
ザットはきっぱりと断言してみせる。
その場には、彼を含む全員が集まっていた。いないのは、他ならぬエリスだけである。
彼女が崖から落ちたとザットから聞いた時、アリーシェはひどく肝を潰した。同時に「言わんこっちゃない」という思いにもなったのだが、ケガがないと知りホッとした。
そしてその後戻ってきた彼が、彼女がいなくなったと言った時には、状況が飲み込めずに「どういうこと？」と聞き返した。
恐らく皆もそうだったのだろう。まず「なぜ？」という言葉が飛び交った。
かくして居ても立ってもいられず、急いで現場までやってきたの

である。
　ここへ来てしばらく経ったが、やはり彼女の姿はどこにも見えなかった。
　名前を叫んでも、反応らしい反応はない。
　ただよう静寂の中で、ようやく事の重大さが実感できてくる。
　この広大な森の中で、エリス・エーツェルは行方不明になってしまったのだ。
「どうしちゃったんでしょう……？」
　リフィクが不安げな声をもらす。彼のみならず、全員の顔が心配そうな色に染まっていた。
「もう、勝手なんだから」
　パルヴィーが、責めるように呟く。
　たしかに勝手で、奔放な彼女ではあるが、こんな状況で無意味に遠くへ行くほど愚かではないだろう。
　無意味ということはありえない。この場を離れたということは、必ずそれなりの理由があるはずだ。
「……ケガはしていなかったのよね？」
「へい。大丈夫だ、と……」
　遭難するかもしれない危険の中で、あえて動くほどの理由。
　それはなんだろうか。
　アリーシェは冷静に、エリスの気持ちになって考えてみた。
　だが簡単にわかるはずもない。可能性など、それこそ無限に存在しているのだ。
「……もし」
　と、ひとつの予測を立ててみる。
「どこか別に、ここへ上がってこられるところを見つけたのだとしたら……」
　気休め的な予測だと、自分でも思う。だがじっと指をくわえてもいられなかった。
「彼女はまず、さっきの食事をした場所へ戻るはずよね？」

皆からの答えはない。当然といえば当然だろう。動揺も抜けきらない今、誰もちゃんとした結論を持っていないのだ。

「私は一旦戻ってみるわ。荷物もそのままだし……。みんなも、もししばらくしても変化がなかったら、一旦戻ってきて」

無言の了承を得て、アリーシェはクルリと踵を返した。

歩き出してから、深くため息を吐く。そしてエリスへ、心の中でささやきかけた。

せめて『モンスター』と戦っていない時くらいは心配をかけさせないでちょうだい、と。

そうして皆にどっぷり心配されているとはつゆ知らず、エリスは森の中を疾走していた。

「どこ行きやがった……」

草むらを出たり入ったり、辺りを見回しながらのため速度は抑えめだが、かなりの距離を走ってきたはずだ。

だというのに、例の少女の姿も『モンスター』らの姿も一向に見えてこなかった。

草が邪魔をしているとはいえ、そろそろ追いついてもよさそうな頃である。

「こっちじゃねぇのか？」

すると自然と、そんな疑問にも駆られ始める。

よくよく考えてみれば、だ。彼女が、最初の方向からまっすぐ進んだとは限らないのだ。

むしろ逃げているのだとしたら、逆に不規則なルートを描いている可能性が高い。

そうなったらお手上げだ。手掛かりがまったくなくなってしまう。

そもそも『モンスター』ですら見つけられずにいたのだから、エリスがそう簡単に見つけられるはずはないのだが……。

「……？」

と、そんな時だった。
エリスは不意に、自分の腰元から今まで経験したことのないような違和感が発生しているのに気が付いた。
足を止め、その発生源に目を落とす。
それは剣だった。エリスが『エーツェルソード』と名付けた、アルムス・ドローズ謹製の愛剣。それが、異様な気配を放っていたのだ。
「……なんだ？」
エリスは、その柄に触れてみる。静電気にも似たわずかな刺激が手に伝わってきた。
「……」
こんなことは初めてだ。
なにが起こったのだろうか？
エリスは反射的に、周囲へ視線を走らせる。
左右に広くめぐらせていた視界の端に、一瞬、木や草ではないなにかが映り込んだ。
「！」
エリスはそれを見逃さず、凝視する。
木々のあいだ。その先に、白い背中が見て取れた。
あのふんわりとした羽毛は、さっきの『モンスター』と同じのものだ！
「あいつらか！？」
それは第一目標ではなかったが、第二目標には違いない。
エリスはすぐさま、そちらめがけて地面を蹴った。
近付くにつれ、あちらの状況が見えてくる。
奴らは三体いた。エリスに背を向けるように、武器を構えて立っている。
立ち止まっているということは、『彼女』が追いつかれてしまったのだろうか。
走るエリスはまだ届かない。

『モンスター』たちが、一斉に動き出した。
武器を振るい、前方へと叩きつける。
最悪の結果が頭をよぎった――次の瞬間。
『モンスター』たちのあいだに、黒い風が吹きあれた。
「!?」
またたくまに『モンスター』たちが斬られ、うめき、血を噴き、そして倒れていく。
三体すべてが地に伏すまで、ものの数秒もかからなかった。
鮮やかすぎる手並み。その光景は、エリスの脳裏にとある記憶を強烈に浮かび上がらせた。
「あいつ……！」
倒れた『モンスター』たちの中心にあったもの。それは、そんな記憶と寸分たがわぬ立ち姿であった。

黒く長い髪をした黒衣の女が、黒い刃をサヤにおさめる。
日の光があまり入らない森とはいえ、その女の周囲は、特にぞっとするほどの冷気を含んでいる気がした。
「見事だよ、リュシール」
かたわらに立つ若い男が、つやっぽくささやく。
するとまるで、それが合図となったかのように冷気は霧散していった。
間近で見ていたユーニア・キュリスは、そこでようやく安堵の息を吐くことができた。
男がユーニアに振り向く。
「まずはその傷を治しましょう」
周囲に『モンスター』の死体と鮮血が飛散しているとは思えないほど穏やかな口調で、男はユーニアの前にヒザをついた。
「……ありがとう」
その時、である。

「おいおいおいおいっ！」
その場に、なにやら無駄に堂々と人間の少女が歩いてきた。
ユーニアは無意識的に、ビクリと身を固くする。
「おや？」
男は、驚いたというよりも楽しむような表情で、その少女へと振り向いた。

第四章（6）

「奇遇ですね、『ブレイジング・ガール』」
「なんでお前らがこんなとこにいんだよ？」
エリスは、久しぶりに顔を合わせたふたり――ハーニスとリュシールに、早速そんな言葉を投げつけた。
ついつい言い方にトゲが立ってしまうのも、彼女の性格だからというだけではない。
彼らと最後に会ったのは、クローク・ディールという『モンスター』が根城にしていたところだ。
そこで共闘（と言っていいのかは微妙だが）をしたのち、エリスは彼らに一方的に私闘をふっかけたのである。そして返り討ちにあって以来の、再会であった。
とはいえそれを根に持っているわけではない。
ほんのわずかに残っていた『しこり』を、彼女の悪い意味で素直な性格が露骨に表わしてしまったのだ。
「我々も旅をしている身ですから」
流れる水のような優雅さでハーニスが受け答える。
「そして最終的な目的地はあなたと同じ。ならば、行く道を同じくすることもありましょう」
わかりやすいほどの正論を返されて、エリスとしては黙るしかなかった。
「……まぁそんなことはどうでもいいとして」
大雑把にその話をなかったことにして、彼らの脇に立つ例の少女へと目を向ける。
「よう、無事だったんだな」
「……そうでした」
ハーニスはすっかり忘れていたという顔をして、再び少女の前に

ヒザをつく。
エリスを見つめる少女の瞳は、明らかな怯えを含んでいた。
「大丈夫」
それを見て取ったハーニスが、やわらかく言葉をかける。
「彼女は、どうやら品性というものを置き忘れたまま生まれてきてしまったようですが、敵ではありませんよ」
「いちいちひとこと多いんだよ、てめーはっ！」
という野次も気にせず、ハーニスは少女の体に片手をかざした。
彼の手がほのかに光を帯びる。
「……！？」
その瞬間。エリスは、なにかに気付いて大きく目を見開いた。
「おいっ！」
と彼まで駆け寄って、『治癒術』をかけようとしていたその手をパッとつかみ上げる。
「……どうなってんだ……？」
少女の体をまじまじと眺めて、疑問のニュアンスを声にした。
その視線が、さらに少女を怯えさせる。
少女は、体中にいくつも小さな生傷を作っていた。転んだり、葉で切ったりしてできたものだろう。もしくは『モンスター』にやられたか。
崖を豪快に転がり落ちたエリスほどではないが、やはり至るところから出血している。
しかし、だ。
その血が、紫色をしているのだ！
周囲に飛び散る『モンスター』の血と、同じ色。
エリスは、それは返り血でも浴びたのだろうと無意識のうちに処理していて、今の今まで見過ごしていた。
「……」
だがこうして気付き、じっくりと見てしまえば明白。
その紫の血は、少女の傷口から流れ出ている。

「……なんでだよ……？」
エリスは再び、呆然とつぶやいた。
少女の外見は、完全に人間だ。これで『モンスター』ということはないはずである。
「ヒーリングシェア」
エリスが頭を混乱させているスキに、ハーニスはもう片方の手で『治癒術』を使う。やわらかな光に包まれ、少女の傷は見る間に癒えていった。
「ご存じありませんでしたか。お仲間から聞いていませんか？」
それが終わると、ハーニスは立ち上がってエリスの顔を見下ろした。
交代するように今度はリュシールがヒザをつき、キレイな布で少女の肌に残った血を拭き取り出す。
「これこそが、我々と人間とを隔てる壁。その証です」
ハーニスの『我々』という言葉が意味するところを、エリスは知っていた。
人間と『モンスター』の血を引く混血種。『モンスター・リゼンブル』と呼ばれる者のことだ。
「じゃあ、こいつもか……？」
エリスは改めて、その少女に目を向けた。
ハーニスとリュシールがその『リゼンブル』であることは、以前の出来事で知っている。
ということはこの少女同様、彼らの体にも『モンスター』と同じ色の血が流れているということなのだろうか。比喩などではなく、実際に。
「正確に言うならば、体内にあるうちは人間と同じように赤く、体外に出ることでこの色に変わるわけですが……それはこの際ささいなことでしょう」
ハーニスは少し声を硬くして、言葉を続けた。
「あなたは前に、我々の素性を知った時に、『どうとも思わない』

と言いましたよね。それは、これを知った今もですか？」

試練をぶつけるように問いかける。

「外見は人間とほぼ同じですが、こうして血の色が違うのです。あなたとは、目で見てわかるほどに異質な存在。悪しき『モンスター』を彷彿とさせる特徴。それでも『どうとも思わない』と？」

彼の脇にいるリュシールと少女も、エリスの顔を見つめていた。

「そりゃ、驚きはしたけど……」

エリスは無意識に、傷だらけな自分の体を見下ろす。自分から流れているのは、やはり赤い血だ。

「血の色が違うっても……髪の色とか、目の色とか、肌の色とか、そういうのだって人によって違うじゃねぇか。……そういうのと同じことだろ」

それがエリスの、今のところの本音であった。

たしかに自分とは違っている。そしてそれは『モンスター』と同じだ。……だからなんなのだ、である。

それが不気味さや、気味の悪さにつながる者もいるだろう。結果として忌み嫌われるというのもわかる話ではある。

しかしエリスの中では、そうはならなかった。

「違ってたらどう、ってこともねぇよ。聞かれたって答えようがねぇ」

彼女の中で重要なのは、なにを考え、なにをする、どういう者であるか、ということなのだ。

過去や素性などはさほど重要ではない。だからこそ、賊であったザット・ラッドもをあっさり受け入れることができたのだろう。

それを器が大きいと見るか思慮が浅いと見るかは、意見が分かれそうなところであるが。

「……まっ、あいつはどう思うかわかんねーけどな」

あいつ、とはレクトのことだろう。以前彼は、ハーニスたちに対して露骨に嫌悪感を表わしていたのだ。

「……そうですか。わかりました。試すようなことを聞いて申し訳

ありません」
　ハーニスは声に穏やかさを戻して、柔和に微笑んだ。
「しかしさすが、私が見込んだあなたです。以前の出来事は水に流しましょう」
「申し訳なく思ってんなら、そのお詫びにあたしの子分になれよ」
「そのジョークはあまり面白くないので、新しいネタを考えてみては？」
　エリスを見つめる少女の目から、わずかに怯えの色が消えていた。

「とりあえず自己紹介でもしとくか」
　エリスは改めてその少女と向かい合う。
　並んでみると、エリスのほうが頭ひとつぶん身長が高かった。顔立ちや体つきから見ても、やはり年齢は少し下といったところだろうか。
「あたしはエリス・エーツェル。エレガントのエに、リーダーシップのリに、スーパースターのスで、エリスだ。覚えやすいだろ？」
　自己紹介がしたかったというよりは、ただそれが言いたかっただけ、という気がしないでもない。
「エゴイスティックのエにリーズンレスのリにスクラッピリーのス、の間違いでは？」
　ハーニスが口を挟んだが、それは完全に無視を決め込む。
「お前は？」
「……ユーニア」
　少女はおずおずと、自分の名前を答える。
　もっかの脅威はなくなったというのに、どことなく怯えているような様子だった。今さっきまで『モンスター』に追いかけ回されていたのだから、仕方ないといえば仕方ないことではあるのだが。
「ふたりは面識があったのですか？」
　と、ハーニスが訊ねる。
　今度はさっきのようなからかいまじりの口調ではなかったので、

エリスは素直に応じた。
「こいつが『奴ら』に追いかけられてんのを見たから、あたしも追ってきたんだよ。お前らこそ知り合いか？」
エリスも聞き返す。
この少女、ユーニアに関して気になるところが少しあった。事情を知っているのなら、達弁な彼から聞くのが早いだろう。
「ふむ。そうですね、あれは……」
ハーニスは思い起こすように、アゴに指を乗せた。
「そう……少し前。我々が普段通り、愛の語らいに興じていた時でした」
「どんな普段だよ」
訊ねておきながら口を入れるエリスである。少なくともエリスには縁遠い『普段』であろう。
「嗚呼リュシール、なぜ君はそんなに美しいんだ。君の輝きは、すべての星々を集めても及ばない。僕には君だけでいい。君さえいれば、他にはなにもいらない。……と」
「愛は聞いてねーよっ！　いいからこいつのことを早く話せよ」
「そして私はリュシールの手を取り、そこに私の……」
「行為もいらねーよっ！　それが一番いらねーよっ！　いつ出てくんだよ、こいつはっ！！」
エリスは片足でドシドシと地面を踏み叩く。
というか話が迂回しすぎだろう。
「失礼」
ハーニスは含み笑いながら謝罪した。
「……と、そんなところに、割って入る者が現れたのです。それが彼女でした。他ならない同胞に、『モンスター』に追われていると助けを求められたら、その甘美な時間を中断することもやむなしでしょう」
もし同じ『モンスター・リゼンブル』でなかったら、構わず続けていたのだろうか。気になるところである。

「そして詳しい事情を聞くヒマもなく『奴ら』がやってきたため、リュシールがそれを美しく倒し……その直後にあなたが現れて、今に至るというわけです」
……つまり。
「……お前らもさっき会ったばっかかよ？」
「ええ」
しれっと答えるハーニスである。
「じゃあさっと言えよっ！　そうやって！」
無駄、この上ない。なにやら疲労感だけを得たエリスであった。
ハーニスは、予想通りの反応が得られたと言わんばかりに、意地悪くほくそ笑んだ。
「さて」
そして、本題に入るようにユーニアに振り向く。
「なにか事情があるのでしょう？　聞かせていただければ力にもなれますが」
ただ単に『モンスター』に追われていた、というだけではないのだろう。それは様子から察せられる。
「……」
ユーニアは、ためらいがちに目を伏せた。言うか言うまいか迷っている、そんなところだろうか。
「……とはいえ、それは場所を変えてからにしましょうか」
彼女の心境を感じ取ったからかは不明だが、ハーニスがそう提案した。
たしかに、『モンスター』の死体が転がる横で腹を割った話はしにくいだろう。
まだ近くに奴らの仲間がいるかもしれない可能性も含めて、さっさとこの場を離れたほうがよさそうである。
「そうだな」
と当然のように話に加わるエリスに、ハーニスは怪訝な表情で振り向けた。

「あなたはお仲間のもとに戻られては？」
「あっ、そういえば」
言われてから、エリスはそのことを思い出した。
ふっと後方を振り返る。
しかし、だ。目印もなく走ってきたため、あの場所まで戻れるかは相当に怪しい。
それに加えて、ユーニアをこのふたりに任せて、はいさよならというわけにもいかなかった。
一度首を突っ込んでしまったのである。こんな中途半端なままでは気が済まないのだ。
「うーん……まっ、いいや、あっちは。あたしがいなくてもなんとかやってけるだろ」
そしてそういう、微妙にズレた結論を出すエリスであった。
心配している皆が聞いたらどんな顔をするだろうか。
「そんなことより、黙って見てないで早くあたしの傷も治してくれよ。気が利かねーなー」
そしてハーニスへ、あつかましく言うのであった。
傍若無人ここに極まれりである。
エリスを見るユーニアの目に、なにやら呆れがただよい始めていた。

そんなやり取りをする四人を、遠巻きに見つめる瞳があった。

第四章（7）

エリスに「まっ、いいや」で済まされたとはつゆ知らず、彼女の安否を気遣う面々は、時が経つたびに不安を募らせていた。

中でも、一番心配を表わしているのはザットである。

「一旦戻ろう」

というレクトの言葉にも、首を横に振るばかりだった。

近くの樹に巻き付けたロープの先が、エリスが落ちた崖下へと垂れている。上に誰かがいなくても、戻ってきたら登れるようにだ。

なので待っていたい気持ちはわかるが、その意味は薄いのである。

可能性は低いが、アリーシェの言った通り別の場所から登ってきたとしたら、なおさらここへは来ないだろう。

とにかくアリーシェのもとに一度戻り、それから対策を考えるなりなんなりしたほうが、明らかに建設的なのだ。

ザット以外の、レクト、リフィク、パルヴィー、ラドニスは、すでにそういう意向にかたむいていた。彼だけが、ここを動こうとしないのである。

「みんなは戻っててくれ。オレはもう少しここにいる」

と言うばかりで。

エリスと最後に顔を合わせていたのは彼だ。責任を感じているのもわかるが、さすがにレクトの口調にも熱が含まれ始める。

「これ以上、ひとりでいてなにかあったら困る。本当はアリーシェさんもそうなんだが……だから、早く合流するべきだ」

「お前は心配じゃねぇのかよ？　姉御のことが」

ザットの声には、いくらかのトゲが含まれていた。不安で気が立っているせいだろう。

もしエリスの「まっ、いいや」を聞いたら、脱力して倒れてしまうかもしれない。

「心配はしている。だが、エリスのことだ。心配はない」
一見、矛盾しているようなレクトの言葉である。
しかし、なんとなくわかる気がするリフィクだった。たとえ危機に瀕していたとしても、なんとかして挽回してしまう。そう思わせるのがエリス・エーツェルなのだ。
「今はひとりでいるアリーシェさんのほうが心配だ。……それにザット・ラッドをここに残していったら、今度はそっちが心配になる」
そうでなければ、ひとりだろうと残していけばいい。レクトはレクトなりに、ザットの身を案じているということなのだ。
「……わかったよ」
その気持ちが伝わったからか、ザットはようやく首を縦に振ってみせた。

◆

「あのガキを追ってたはずが、なぜやられて帰ってくる？」
ニコラウス・ルドルドゥーは、たっぷりと苛立ちは含んだ声を手下へぶつけていた。
「いや『ボス』、やられたのはベックたちで……オレはただ見てただけです」
「このチキン野郎がっ！」
言い訳じみたことをこぼす手下に、チキンに似たルドルドゥーが罵声を浴びせかけた。
深い森の、薄暗い一角。巨大な樹の根元をまるで玉座とするように、大きな『モンスター』が腰を下ろしている。それがルドルドゥーだ。
全身を覆う白い羽毛に、赤いトサカ。くちばし。そして上質そうな布のローブとマントを身につけている。
その足元には、なにやら真新しい、人間のもののような骨が転がっていた。

彼の周囲には、彼をひと回り小さくしたような手下が、五体ほど控えている。群れ全体としてはもっといるのだが、残りの仲間はすべて森の中に散っているのだ。

誰あろう、あの『モンスター・リゼンブル』の少女を捕らえるために。

「け、けど、あの三人をあっというまにやっつけちまうような奴ですよ!?　しかも人間のくせに。『ボス』に知らせるべきだと思って……！」

報告する彼は、一部始終を目撃していたのだ。リュシールが三体を瞬殺する、あの場面を。そして慌てて戻ってきた。

その彼の真に迫った口調は、ルドルドゥーもさすがに気にならざるを得なかった。

「『リゼンブル』をかばう、腕利きの人間か……。疑わしくはあるが」

まったくのウソを言っているようにも見えない。

ならば、だ。

「……いいだろう。その真偽、オレ自らが確かめてやる」

百聞は一見にしかずとも言う。

どの道、あのガキは自分の目の前で八つ裂きにするのだ。こちらから出迎えに行くのも悪くなかろう。

「飛ぶ鳥を落とす勢いと名高い、このルドルドゥーが自らな！」

飛べない鳥に似たルドルドゥーは、威風堂々と立ち上がってみせた。

「野郎共を呼び戻せ！」

◆

「そこであたしは言ってやったわけだよ。勝機はいつでもあたしの中にある！　それを捨てない限り、エリス・エーツェルに負けはない！　ってな。そん時のアリーシェの顔ったらなかったぜ。すっか

りあたしの魅力に溺れちまいやがってさ。まぁそれでも遅いくらいなんだけど」

森を歩きながらペラペラペラペラと喋るエリスへ、ハーニスは苦笑うような表情をかたむけた。

「……ブレイジング・ガール。その話はいつまで続くので？」

女三人寄れば……などという言葉があるが、どうやらそれは、そのうちのふたりが喋らなくても適応されるらしい。

「これからボスを倒すところだよ」

「ではそれは、のちの楽しみにとっておきましょう」

やんわりと切り上げさせる。そもそも、敵から逃げているという認識が彼女にはあるのだろうか。

先ほど悪ノリしたハーニスも、どっちもどっちであるが。

「なんだよ、ここからが面白いってのに」

打ち切られて、エリスはつまらなそうにそっぽを向いた。

アリーシェに言われてから、『モンスター』と戦ったということを大々的には話していない。その反動からか、誰かに武勇伝を話したくてしょうがなかったのだ。

さいわいハーニスたちは、数少ない『そういうこと』を話せる相手だ。ここぞとばかりにエリスの舌もうずいてしまうのである。

「……」

エリスはふと思い出したように、腰元の愛剣に触れてみた。

あの感覚は、いつのまにか消え去っている。結局原因はわからないままであった。

「……じゃああの話にするか。この前さぁ、灰のトゥループとかってムカつく野郎に会ったんだけど、そいつがマジにムカつく野郎でさ」

エリスはなにか勘違いをしているのか。話の内容を変えればいい、という問題ではないのである。

内容に興味がなくはないハーニスだったが、悠長に聞いていられるほど呑気でもなかった。

「……ひとまず、あそこで落ち着きましょうか」
エリスの話をさえぎるように、前方を指差す。
その先で、洞窟がぽっかりと口を開けていた。

その洞窟は、ちょうどエリスが転げ落ちたような岩肌に面していた。
入り口部分は広く、ちょっとした小屋ならすっぽり入ってしまうだろうか。
さすがに中はひんやりとしていて、奥のほうから運ばれてくる風は肌寒いものがある。
「どこまで続いてんだ？」
好奇心が顔を出したか、エリスは洞窟の奥へと足を踏み出した。
暗くて先のほうまで見えないが、かなり続いていそうである。
「風を感じますから、どこかに出口はあるのでしょう。奥までは行きませんよ」
ハーニスは一応言いながら、入り口にほど近い、それでも外からは見えにくいところへ腰を下ろした。
同じように座ったリュシールが、途中で拾った何本かの枝を地面に置く。ハーニスがその前で指を鳴らすと、それはたちまち、たき火となった。
「さぁ、どうぞ」
ハーニスが、立ったままだったユーニアを座るよう促す。
「……」
ユーニアは隣り合って座るふたりの正面へ、たき火を挟んで腰を下ろした。
ひんやりとしていた空気が、じわじわと暖まっていく。
「まずはなにから……。どうして、このようなところにひとりでいたのですか？」
ハーニスが話を切り出したのと、戻ってきたエリスが火の前であ

ぐらをかいたのは、ほとんど同時だった。
　ユーニアはヒザを抱えて、じっと火を見つめている。少しの沈黙のあと、彼女は絞り出すように口を開いた。
「わたしが『モンスター・リゼンブル』だっていうことが、みんなにバレて……村を追い出されたから……」
「こんな森の中に放り出したってのか？　ひでー奴らだな」
「追い出されたくらいで済んだのは、さいわいでしたね」
　エリスとハーニスが、対照的な感想をもらす。エリスは、そんな彼へ怪訝な表情を向けた。
「どういう意味だよ？」
「言葉通りの意味ですよ」
　それがわからないから訊ねたのだが。どうやら彼は、それ以上説明する気はないようだった。
「あの『モンスター』たちとは、なにか因縁が？」
　質問に戻る。ユーニアが積極的に話そうとしないため、自然とひとつひとつ訊ねていく形になる。
「そうだ、それだよ」
　エリスも、それが気になっていた。
『モンスター』から見れば人間は食料の一種でもあるため、それだけでも追いかける理由にはなるだろう。
　だが、彼女を追っていた者たちは、単にそういう風には見えなかったのだ。
　ただメシの調達がしたかっただけなら、あの時、エリスに狙いを移せばいいはずなのである。
　エリスを素通りしてまで彼女を追いかけたということは、それなりの理由があるのではないかと思わざるを得ない。
「……どうしていいかわからずに、森の中を歩いてた時に、たまたま遭遇しただけです」
「……そんだけか？」
　肩すかしを食らったように、エリスは首をかしげる。

「あの者たちは、あなたの素性を知っていたのですか？」
つまり『リゼンブル』であるということを。
「はい……」
その答えを聞き、ハーニスは納得したようにうなずいた。
「だからなんだよ？」
しかしエリスは釈然としない。
「我々は、人間にとっても『モンスター』にとっても、うとましい存在であるということですよ。そして『モンスター』は、それがより直接的なのです」
ハーニスの説明は、必要最低限のものだ。あまり言明したくないのか、エリスとしてはそこから読み取るしかない。
それにしても、『モンスター・リゼンブル』に対する世間の風当たりは、エリスが思う以上に強いもののようだった。
少なくともふたりの言葉を聞くにそういう印象を受ける。
「家族とかはいなかったのか？」
今度はエリスから、ユーニアに質問した。
「……お母さんと暮らしてました。一緒に村を追い出されて……」
「一緒に？　じゃあ今は、どこにいんだよ？」
「……」
今まではとつとつと答えていたユーニアの言葉が、そこで完全に途絶えてしまった。
もしやまずいところに足を踏み入れてしまったのかと、エリスはハーニスの顔を見る。彼も、無理にそこに踏み込もうとしなかった。
ややあってから、ユーニアが再び口を開いた。
「……あの『モンスター』に追いかけられてる時に……わたしを逃がすために……」
消えてしまいそうなほど、小さな声だった。
会った時から異様なまでに怯えているように見えたのは、もしかしたらそれが原因だったのだろうか。
エリスは跳ねるように立ち上がり、そして、怒気を含ませながら

訴えた。
「だったらこんなとこでジッとしてねぇで、仇取りに行こうぜ！」
しかし、誰からの反応も薄い。
「それを決めるのは我々ではありません」
ハーニスはさらに口調を丸くして、ユーニアへと視線を注いだ。
「ユーニア。あなたは、これからどうしたいのですか？」
「……」
「その仇を討ちたいと言うのなら、手を貸します。ここから逃げたいと言うのなら、共に行きます。新たに生きる場所を探すと言うのなら、付き合います」
親身な、言葉だった。
彼がこうも義理堅い性格だったとは、エリスとしては意外であった。やはり同胞なだけに、いろいろと思うところがあるのだろうか。
ユーニアは、
「わかりません……。……わからない」
ひざに顔をうずめて、涙ぐむように呟いた。
「もう、どうしていいかわからない……。……みんなからも嫌われて……お母さんもいなくなって……もう、なにも……」
嗚咽まじりの声は、最後には聞き取れなくなってしまう。
洞窟の中に、すすり泣く息遣いだけが残響した。
エリスはそんな少女を見つめながら、なんとかしてやりたいと、漠然と思った。

第四章（8）

「オルセーくんが犬だったら、匂いで捜せるのに」
仲間の一員だと言っても過言ではない馬をなでながら、パルヴィーは呑気に呟いた。
そもそも犬なら旅には連れてこないだろう、と律儀に指摘する者は、あいにく誰もいない。
彼女以外の面々は、少し離れたところで難しい顔を突き合わせていた。
話の内容は、やはりエリスのことだ。どうするのか検討中なのである。
パルヴィーがそれに参加しないのは、どうせそのうちひょっこり戻ってくるだろう、とあまり真剣には考えていないからだ。加えて、自分がアリーシェたちよりも良い提案が出せるはずがない、と思っているからでもある。
なにかしらの決定が出たなら、それに従う。それまでは待つしかない。

待つしかないと思っているのは、他の皆も同様であった。
「捜索に出たとしても、今度はそちらが行方不明になったら、ますます事が大きくなるわ」
エリスを捜しに出るべきだと主張するザットに、アリーシェは苦い顔でそう答えた。
現にひとりが行方不明になっているため、普段以上に慎重にならざるを得ないのだろう。
メンバーをふたつに分けるのは避けたい。しかしだからといって、全員で捜しに行くというのも避けたいところだった。

もしエリスが自力でこの場所まで戻ってきた場合、行き違いになってしまう。
少なくともそういう可能性が残っている以上、この場を動くのはためらわれた。
つまり、待つしかないのである。
歯がゆいところだが。
「とりあえず、今日いっぱいはここで待ちましょう」
アリーシェが、しのびなくといった様子で提案する。
待つにしても、やはり期限は決めておかなくてはならない。それが唯一の指針となるのだ。
「もし、だけど。明日の朝になっても彼女が戻ってこなかったら……その時は……」
言いよどむアリーシェ。
しかし言わずとも、その先は明白であった。

◆

ユーニアは、顔をヒザにうずめたまますすり泣いている。
リュシールは、そんな彼女の横に座り、肩を抱いている。
そしてエリスは、入り口付近の壁にもたれかかり、外の森林を眺めていた。
「……」
それは『モンスター』たちが来ないかという見張りのためでもある。ユーニアにかけてやる言葉がわからず、そばに居づらかったというのもある。
しかしなにより、少し考え事がしたかったのだ。
ユーニアのように、村を追い出されるほど皆から拒絶されるという経験は、エリスにはなかった。
故郷の村は、それこそ住人全員が家族のように親しかったため、想像すらつかない。

かなり怒られることもやってきたエリスだったが、たいてい最後には笑って許してもらえたものだ。さして反省せずに同じことを繰り返した時も、である。

甘やかされていたとは違う、情愛に満ちた環境だったのだ。

ユーニアは、話を聞くに、特に問題を起こしたというわけではないようだった。

普通に、平穏に暮らしてきたある日。『モンスター・リゼンブル』だということがバレた途端、周囲の見る目がガラリと変わってしまった。そして追放された。

だからこそ、エリスにはその辺りのことがよく理解できないのだ。

彼女自身はなにも悪いことをしていないのだから。

そしてエリスは、「ということは」とも考える。

彼女の他にも、同じような扱いを受けている『リゼンブル』はいるのだろうか？

……恐らく、いるのだろう。思うよりもはるかに。多くは語らなかったが、ハーニスからもそんな気配が感じ取れた。

エリスはそれを、ひどく理不尽だと思う。

混血種だからというだけで忌み嫌われる……。それは、人間だからというだけで『モンスター』に襲われる、という日頃から感じていた理不尽さに近いものがあるような気がした。

「……」

あまり働くことのない頭がめずらしく労働意欲を出しているせいか、エリスの思考は、さらにその一歩先まで踏み込んでいく。

ならば。……ならば自分はどうなのか、と。

『モンスター』だからというだけで剣を向け、戦う。それは果たして理不尽ではないのだろうかと。

「……ガラにもねぇ」

エリスは、熟考している自分に自分らしくないものを感じて呟いた。

昔の自分ならこんなことなど考えなかったろうにな、と。

それは恐らく、旅の中で様々なものに触れ、視野が広がったということなのだろう。そういう自身の変化――成長とも言える――が、まだ自覚できていないのだ。

エリスの表情は暗く曇っている。皆の前では決して見せないような表情だ。

それをしてしまうのは、やはりひとりでいるせいなのだろうか。どちらかというと、こちらのほうがガラではない。

「ブレイジング・ガール」

そこへ、洞窟の奥からハーニスが歩み寄ってきた。

並ぶように立つ彼へ、エリスはニュートラルに戻した顔をかたむける。

「……なんだよ？」

「あの方々とは、どうして一緒にいたのですか？」

世間話を持ちかけるような口調。エリスは「あの方々？」と聞き返した。

「銀影騎士団の方々と」

「ああ……あいつらか。どうしてってこともねぇけど、なりゆきでだな。あいつらも『モンスター・キング』とやらを倒すっていうから一緒に旅してるんだよ」

答えてから、エリスは少し妙なことに気がついた。

「なんでお前がそのこと知ってんだ？」

彼と出会った時は、まだアリーシェらとは会ってもいなかった。そして彼と再会したのも、ついさっき、ひとりになってからなのだ。知っているはずないのである。

「……先ほど言っていたではありませんか。あなた自身で」

「そうだっけ？　うーん……そうだっけ？」

エリスは首をひねる。たしかにその辺りの話をした記憶はあるが、『銀影騎士団』ということまで話したかは記憶になかった。

「そうですよ。ところで、あなたのお友達も彼らとはうまくやっているのですか？」

「友達……」
聞き返しかけたところで、今度はその意味を理解することができた。レクトとリフィクのことだろう。
なぜそんなことを聞きたいのかはわからないが。
「まぁ、そこそこうまくやってんじゃねぇか？」
ザットはともかく、あのふたりはうまく馴染んでいるようである。
エリスから見ても特にぎくしゃくしている様子はない。
片方は、約一名から熱烈に好かれているくらいだ。
「……なるほど」
ハーニスは、それを聞いて満足したかのようにうなずいてみせた。

――そんな時。
話をしていたハーニスの顔が、不意に洞窟の外へと向けられた。
柔和な瞳が一転、研ぎ澄まされた刃のように鋭くなる。
つられるように、エリスも外へ目を向けた。しかしざっと見ても、特に変哲はない。
「……どうやら、少しゆっくりとしすぎてしまったようですね」
ハーニスの口調は普段通りに穏やかだったが、声にわずかな硬い芯が含まれていた。
洞窟の奥から、リュシールが足早にやってくる。
それと同時に、エリスが知覚できるくらいの気配が、わらわらと近づいてきた。
ざわざわと草木が揺れる。
「……！」
それらを踏み荒らすように、『モンスター』の集団が現れた。
ニワトリにも似た容姿。先ほど出くわした者の仲間だろう。
しかし正面だけではなく、右の草むらからも、左の木陰からも、彼らはぞろぞろと姿を見せる。
一気に二十体以上もの巨体が、洞窟を半円状に包囲した。
それぞれ手に握られた剣、槍、弓矢などの武器が、ギラリと凶悪

に牙をむく。
リュシールと同じように奥から出てきたユーニアが、その光景を見て息を呑んだ。
「よかったな、仇がむこうからやってきてくれて」
エリスはそんな数の暴力にも臆することなく、逆に嬉々とした態度で愛剣を引き抜く。
「どれか一体くらい、トドメはお前に刺させてやるよ。だからちょっと下がってろよ」
背中でユーニアにそう告げ、並ぶ『モンスター』たちをズラリとにらみ渡した。
ハーニスが、エリスの持つライトグリーンの刃に一度だけ視線を落とす。その彼を守るように前へ出たリュシールも、すぐさま剣を抜いて襲撃者たちと対峙した。
彼女の周囲に、凍てつくような冷気がただよい始める。
「……！」
その瞬間、エリスの剣を持つ手に、ピリピリとした刺激が伝わってきた。
先ほど感じたのと、まったく同じあの感覚だ。
エリスは、引き寄せられるようにリュシールを横目に見た。
「……」
……たしか。
この『エーツェルソード』を指して、『魔術』の力を伝達しすぎるとアリーシェが言ったことがある。それはつまり、エリスの力をより発揮できるという意味なのだが、もしかしたらその逆もありえるのではないだろうか。
内側からだけではなく、外側からの力も伝達してしまう。
リュシールの発する力が刃を伝わり、エリスのもとへと逆流している……ということも考えられるのではないだろうか。
しかし今まで、仲間たちと共に戦ってきた時は、こんな感覚などはなかったはずだ。

それだけリュシールの力が強い……と考えれば、理屈としては納得できるが。

「どうやら、貴様らのことのようだな」

と、『モンスター』たちのあいだから、威厳のありそうな声が投げかけられた。

包囲したまま動きを見せなかったのは、もしかしたら『それ』を待っていたのかもしれない。

視線を戻したエリスは、奴らを割って出てくる、ひと回り大きな『モンスター』の姿を瞳の中に入れた。

恐らく『ボス』だろう。気配からそれがわかるようになってきた。

「その『リゼンブル』をかばいだてしている人間というのは」

ボスの視線がエリスたちをすり抜け、その奥のユーニアをとらえる。ニヤッと、くちばしの片側が上がった気がした。

「どんな者かと思えば、ただの女子供ではないか」

どうやらハーニスたちの素性には気付いていないらしい。

「ただで済むほど安い女じゃねぇよ。ほら、お前も言い返してやれ」

リュシールに水を向けるエリス。

しかし、と言うのか相変わらずと言うのか、彼女はなにも答えなかった。冷淡で冷徹な表情で、剣を片手に構えているだけである。

普段なら代わりに言い返すはずのハーニスも、なぜか今は沈黙に徹していた。

「腕に自信があるようだが、悪いことは言わない。大人しくそのガキを差し出せ。そうすれば、命だけは見逃してやってもいいぞ？」

慈悲深く、しかし高圧的に、ボスがささやきかける。

そんな誘いになど、乗るわけがない。

「ふざけんな、このから揚げ野郎ーっ！　てめぇらなんかには、手羽先一本触れさせねぇからなっ！」

「交渉決裂か。キジも鳴かずば射たれまい、と言うのにな」

ボスの口調が冷たく落ちる。それに反比例するように、周囲の闘争への熱は高まっていった。

取り囲む者たちの目が、獲物を狩る時のそれに変わる。
いつ口火が切られてもおかしくない状況だ。

ハーニスは、この局面を好ましくない思いで分析していた。
敵の数は二十から三十。さらにボス格もいる。倒すだけならなんてことはないが、それはユーニアがいない場合の話だ。
奴らとしても彼女を狙ってくるだろう。
あの数を武器に一挙に攻められたら、とても彼女を守りきれそうにない。さしものリュシールをもってしても、体はひとつしかないのだ。無い袖は振れぬ、である。
ならばと、ハーニスの決断は早かった。
「リュシール！」
身をひるがえし、洞窟の奥へ走り出す。
そしてユーニアを抱きかかえると、そのままさらに奥へと入っていった。その背にリュシールも続く。
「って逃げんのかよ！」
取り残された形になったエリスも、仕方なく、彼らを追うように駆け出した。

第四章（9）

「逃がすか！」
「まぁ待て」
エリスたちを追い洞窟の中へと入ろうとする手下たちを、ルドルドゥーは落ち着いた声で引き止めた。
「わざわざ薄汚いところに入ることもあるまい。……下がっていろ」
全員が洞窟のそばから離れるのを待ってから、ルドルドゥーは自分の体に『魔術』の力を集中させた。
「ぬん！」
突き出した手から、岩石のような火球がうち出される。それは洞窟の入り口の、やや上の岩壁へと命中した。
次の瞬間――『魔術』が炸裂した地点を中心に、岩壁が崩れ始める。
地響きが轟き、激しい岩なだれが大量の砂ぼこりを巻き上げた。
それが治まった頃には、落石によって洞窟の入り口は完全に塞がってしまっていた。
「今ので生き埋めになったのならよし……」
それを眺めながら、ルドルドゥーが得意げに笑う。
「仮に生き延びたとしても……知っているだろう？　この洞窟は一本道。我らは、もうひとつの出口で待ち伏せをしていればいいだけなのだ」
出来ることなら、後者のほうがいい。あのガキの死体まで埋まったら、それはそれで残念である。
「さすがボス！」
手下たちから、わっと喝采が上がった。わざわざ追いかけるよりも、待ち伏せをしたほうが楽に良い結果が得られるのは明白だ。
「一石二鳥ですね！」

その石を投げるほうが鳥に似ているというのも、なんだかおかしな状況であるが。

「ふふふ……つまり奴らは、カゴの中の鳥も同然というわけよ」

ルドルドゥーは、崩れた洞窟を見据えながらこれ以上ないというほどほくそ笑んだ。

「なるほど……そういう手できましたか」

真っ暗な闇の中に、ハーニスのやけにゆったりとした声が残響した。

「あるいは追ってくればとも思ったのですがね。どうやら、見かけほど鳥頭でもなかったようです」

「落ち着いてる場合かよ！」

相手がどこにいるのかわからないので、とりあえず適当な方向に向かって叫ぶエリスだった。

さっきの地震のような衝撃で、入り口が塞がれたのは見なくてもわかる。ほんのわずかに差していた光もなくなり、そこは完全なる暗闇と化していた。

声や音もあちらこちらから跳ね返って響き、自分がちゃんと立っているのかも怪しく感じてくる。

「とにかく……みんないるのか！？」

視界はゼロなので、確認するにはまず声を出さなくてはならない。すぐにハーニスの声が返ってきた。

「ユーニアは私が抱いてます。リュシールもここに」

そういえば彼は、ユーニアを抱えたまま走っていた。その彼女は別として、この期に及んでも喋らないリュシールの無事がどうやってわかったのかはエリスとしては謎だった。

しかしそんな疑問は後回しでいいだろう。

なにはともあれ光が欲しい……と思ったエリスは、自分が剣を握っていることを思い出した。

そしてひらめく。次に、ひらめきを実行に移す。
『いつもの要領』で剣に炎をまとわせると、その光に照らされてようやく辺りの様子が見えるようになってきた。
あとはその激しく猛る炎を徐々に弱めていく。すると、たいまつに早変わりというわけだ。
「力を使いすぎて、肝心な時に息切れ、ということはないようお願いしますよ」
光源を目印に、ハーニスたちが歩み寄ってきた。
ハーニスは片腕にユーニアを抱き、もう片方の手をリュシールの手と結んでいる。場所が場所なら、仲の良い親子にでも見えただろうか。若すぎる親ではあるが。
「大丈夫だよ、いつもこういう練習してるから」
エリスは剣を振って、なんでもないよとアピールする。
もっとも力の加減を練習し出したのは、この剣を使うようになったからだ。
今までの調子で技を出していると、強力にもなったがすぐにバテてしまうため、ある程度は手加減しなくてはならないのである。
「それなら結構」
ハーニスは言いながら、そこでようやくユーニアを地面に下ろした。
やはり暗闇の中で放すのは危険と思っていたのだろう。しかし、リュシールと結んだ手は放さなかった。
「それで、これからどうすんだ？」
「まずは、ここから脱出します」
「んなこたわかってるよ。そのあとの話だよ」
そもそもこの洞窟から無事に抜け出せる保証はないのだが、エリスの頭にはどうやらそういう懸念はないようだった。
「こっから出て、あいつらぶっ倒して、それからどうすんだよ？」
おまけに、『モンスター』らを撃退するところまで勘定に入っているらしい。

エリスの「どうするか」は、つまりユーニアのことをである。先ほどは結局そこまで話を進められなかったのだ。

「……やはりそれは、彼女次第ですね」

ハーニスはささやくように言って、ユーニアに顔を向けた。

ハーニスたちにしても、無論エリスにしても、本来の目的がある。しかしそれをひとまず隅に置いてでも、彼女のことをなんとかしたいと思っていた。

すべては彼女の選択に、行動が委ねられている。

「……もういい」

しかし彼女が答えた言葉は、そんな三人の厚意を真っ向から払いのけるものだった。

「あの『モンスター』たちの目的はわたしでしょ……？　だったらわたしを差し出して、みんなはもうどこかに行っていいよ……」

ユーニアの心の中は、まるでこの洞窟のように、暗く冷たいもので満たされていた。

さっきまでは、必死だったからよかった。『モンスター』に追われ、その途中で母と別れても、本能的に生きようと必死だったから、余計なことを考えずに済んでいた。

しかしハーニスらに助けられ、安心して落ち着いてくると、もう駄目だった。途端にその暗く冷たいものが心を埋め尽くしていく。

夜の海に、投げ込まれたような気分だった。

つかむものも、支えるものも、なにもない。なにも見えずなにも聞こえず、ただ苦しさだけが身を包んでいる。

そこを泳ぐ力は、ユーニアには残っていなかった。

「なに言ってんだよ。んなことできるわけないだろ」

エリスの言葉にも、彼女の心は動かない。

「あいつらにつかまったら、どうなるかわかってんのか？　みすみす死ぬって言ってんのと同じなんだぞ」

「……じゃあ、どうすればいいの……？」

ユーニアの絞り出すような声が、岩壁に響く。
「どうしたいって聞かれても……わかんなくなっちゃったの。なにをすればいいのかも、なにをしたいのかも……なんのために生きてるのかも……！」
声に含まれる熱が高まるにつれ、目に溜まった涙がこぼれ落ちていく。
「教えてよ……。わたしの生きてる意味って、なに……？　あの『モンスター』から逃げられたとしても、それからどうすればいいの……？　誰からも望まれてないのに、誰からも嫌われてるのに……それで生きてる意味ってあるの……？」
痛ましい吐露だった。
『モンスター・リゼンブル』だということが発覚してから、彼女は多くのものを失った。そして、多くの傷を負った。
喪失感は、次第に胸の底まで冷え切る絶望へと変わっていく。
傷つき荒廃した心では、前向きな考えなど出せようもないのだ。
「……もしあるなら、教えてよ……」
しゃくりあげる姿は、そのまま暗闇の中に溶け込んでしまいそうなほどに弱々しかった。
ハーニスは、具合の悪そうな表情でユーニアを見つめている。
意を決したように片ヒザをつき、彼女と目線を合わせようとした。
「ただ、生きればいい。生きてさえいれば、いつかは、必ずその意味は見つかります。今はわからずとも」
しかし真摯なその言葉も、ユーニアには届かないようだった。
むせび泣き、流れ落ちる涙は、失われていく彼女の生気のようにも見えた。
「……まっ、ただ単に生きてくだけってのは、そりゃつまんねーよな」
黙って聞いていたエリスが、口を挟む。
「あたしだってやりたかねーもん」
「……それは、あなたが人間だから言える『贅沢』です」

ハーニスは立ち上がって、少し硬い声をエリスに向けた。
「我々は、自由に生き方を選ぶことさえ困難なのです。そういう、世界なのですよ」
「お前はどうだか知らねぇけど、こいつはまだなにもやってねぇだろうが。できるできないを決めつけてやるなよ」
「……同じ『混血種』です」
「聞き分けのねぇ」
エリスはそう言い捨てると、ユーニアの目の前まで歩み寄った。
そしてまっすぐにその顔を見る。
「あたしの子分になれよ」
放たれた言葉が意外すぎたからか、ユーニアは、驚いたようにエリスの顔を見た。
「そんで、あたしにいっぱい尽くす。そうすりゃあたしも嬉しいし、そうしてくれんのならそう望む」
エリスの口調は、決して冗談のようなものではなかった。真剣に、本心からそう言っている。
「それにあたしも、こいつらも、別にお前のこと嫌ってねーよ。だから誰からもってのは間違いだな」
それはエリスなりの、ユーニアの先ほどの吐露に対する答えでもあった。
「ユーニア」
改めて名前を呼ぶ。
彼女に向けて、まっすぐ右手を差し出した。
「あたしのために生きろ。それすら嫌だってんなら、もうお前とはこれっきりだ。あとは勝手にしろ」
差し伸ばされた手と、突き放すような言葉。その二択は、ユーニアの胸を激しく突き動かした。
ユーニアは、まだエリスのことを信用してはいなかった。
人間だからだ。

共に暮らし、育ち、笑い合っていた隣人たちと、同じ人間。そして自分の素性が発覚した途端、目の色を変え態度を変え、一切を拒絶した隣人たちと同じ、人間だからだ。

たしかにエリスは、ユーニアが『リゼンブル』だということを知っても、接し方を変えなかった。だが、腹の中ではなにを考えているかわからない、いつか裏切られるかもしれないという不安は、どうしようもなく胸にわだかまっている。

それはハーニスたちに対しても同じであった。

『リゼンブル』同士だということで助けは求めたが、完全には信用していない。まだ心のどこかで、疑っている自分がいるのだ。

信用していた友人知人から向けられた拒絶の目は、ユーニアの心を引き裂くのに充分な殺傷力を持っていた。

その傷は、まだ癒えていないのだ。

差し伸べられたエリスの手は、その傷をひどく痛ませる。

しかしその手こそ、ユーニアが求めていたものでもあった。

あふれる涙の種類が、別のものへと変わっていく。

他人の冷たさによって生まれた傷を癒やすのは、他人のあたたかさでしかあり得ない。遠ざけようとしていたものを、心の奥底ではなによりも欲していたのだ。

誰かに必要とされること。必要だと言ってもらえること。その輝きは不思議な魔力を伴って、胸の中に染み渡っていく。

暗い洞窟の中で、エリスが炎を灯した。それと同じことが、ユーニアの心の中でも起こっていた。

夜の海の中からでも見える、こうこうと輝く満月が現れた。渇望していた光明。そこを目指していけば、海面に出られる。この苦しさから抜け出せる。

それに気付いてしまった瞬間、ユーニアの手は、しがらみから解き放たれていた。

エリスの手に、そっと重ねられる。

「……少し、考えさせて」

「少しだぞ？　こう見えて、あんまり気の長いほうじゃないからな」
エリスはギュッと、その手を握り返した。
それを見つめていたハーニスとリュシールは、互いに結んだ手の力を、少しだけ強くした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3880v/

ブレイズソード・レックレス

2012年1月13日01時46分発行